

妖精魔界戦記デイス・アヴァロン

サンダーボルト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔界より来訪した人間の魔王によって連れ去られ、今度こそ自分のブリテンを創ろうとするモルガンと愉快な仲間達の奮闘記

頑張れモルガン、負けるなモルガン

※妖精円卓領域アヴァロン・ル・フェのネタバレに注意してお読みください

目次

はじまりのおはなし	1
魔王と女王	7
誤算、胸に抱えて	13
魔王の強さ	21
妖精騎士が堕ちるまで (前編)	26
妖精騎士が堕ちるまで (後編)	39
みにくい予言の子	50
がんばれモルガン	63
トネリコの夢	69
帰還	86
アルトリア・キャスターの冒険	105
アルトリア・キャスターの冒険 (II)	117
アルトリア・キャスターの冒険 (III)	126
アルトリア・キャスターの冒険 (IV)	138
アルトリア・キャスターの冒険 (V)	149
アルトリア・キャスターの冒険 (VI)	157
アルトリア・キャスターの冒険 (VII)	172
【幕間】 悪逆非道のバーヴァン・シー	179
アルトリア・キャスターの冒険 (VIII)	192
【幕間】 バーゲストのたわわ	225
【幕間】 はたらくモルガン (前)	237
【幕間】 はたらくモルガン (後)	248
アルトリア・キャスターの冒険 (IX)	262
アルトリア・キャスターの冒険 (X)	286

アルトリア・キャスターの冒険（終）	307
初めてのキスはカレー味	326
ブリテン対策会議	340
苦勞の道を選ぶ理由（ワケ）	349
魔女の輝き	361
カルデア来る（きたる）	380
カルデア、落ちる	392
【幕間】妖精たちの短編集	410

はじまりのおはなし

むかしむかし、ある魔界に一人の人間がおりました。

人間はある魔王たちに召喚され、仲間としてこき使われていました。

やがてその人間も魔王とまで呼ばれる程に成長し、これまでの戦いのご褒美として自分だけの小さな魔界を手に入れました。

人間は武器の収集癖があつたので、色んな魔界に珍しい武器を求めて突撃して自分の魔界をちよつとずつ育てていきました。

ある日、人間は少し不思議な世界を見つけました。

魔王のいない、神様の怨念が巡っている小さな世界。

魔王とは違うけれども、見た事の無い珍しい武器をいくつも持っていた王様に人間は興味を持ちました。

珍しかったのでちよつかいかけに行こう、という軽い気持ちで人間のミニ魔界は小さな世界に突撃していきました。

その世界の名は異聞帯ブリテン。

滅びを宿命付けられた、とても悲しい世界でした。

ブリテンの女王、モルガンはミニ魔界の襲来を察知しました。一つの世界そのものが殴り込んでくる非常事態にも、モルガンは冷静さを欠かずに対応しました。

真っ直ぐ自分のキャメロットに向かってくる敵を迎え撃つため、モルガンは妖精騎士達に招集をかけて防衛体制を整えました。

魔界から降り立った人間を見た妖精騎士や兵士達はまず驚き、そして怒りのままに襲いかかりました。ブリテンでは人間の扱いは奴隷のようなものだからです。

もちろん人間にはそんな事情など関係ありません。襲ってくる敵を片っ端から返り討ちにしながらキャメロットへ進みました。

要塞の高い壁を靴を三重に履いて飛び越える人間。止まらない人間の侵略者に戸惑う、女王の間に集まった上級妖精達。モルガンは虎の子の妖精騎士達にも出撃を命じました。

人間の前に立ち塞がった妖精騎士ガウエイン。彼女は人間の渾身のデコピンで鎧ごと粉碎され倒れました。

魔術を扱う妖精騎士トリスタン。人間が魔法を使った事に驚愕し、

炎に包まれて倒れました。

妖精國最強と名高い妖精騎士ランスロット。得意とする空中戦で捕まり、高度二万メートルからのパイルドライバーで大地に埋まりました。

名だたる妖精騎士達が次々と倒されて、女王の間は大混乱。そんな中で遂にモルガンが動きました。

モルガンは自分と同じ強さの分身を魔術でたくさん作りだし、人間へ攻撃を仕掛けます。

数百人からの魔術による爆撃でも、人間は止まりませんでした。

爆炎の中で人間は剣を握り、次元ごとモルガンの分身をぶった斬りました。

静寂に包まれるキャメロット。弱さを見せる事を良しとしないモルガンは焦りを見せ始めます。

邪魔者がいなくなったので、人間は女王の間へとひとつ飛び。ついに両者は対面しました。

悲鳴を上げて逃げ出す妖精達、追い詰められてもなお人間を睨んで戦おうとするモルガン。

武器である杖を振るおうとした時、いつの間にか手元から消えている事に気付きます。

人間は不思議な道具でモルガンから装備を盗んでいました。珍しい装備に人間は興味津々の様子です。

人間によりすべての装備を剥ぎ取られ、モルガンの心が折れかけます。

そして人間はモルガンに究極の魔法を見せました。

モルガンという存在が世界から切り取られ、宇宙へ放り出されま

す。
モルガンの前にとても大きな人のような何かが現れ、周りの星々がモルガンに光を放ちます。

自身でも抗えない強大な力を前に、モルガンは遂に恐怖すら投げ出してしまいました。

玉座は消滅し、ボロボロの状態で倒れているモルガン。

妖精達はどうすればこの人間から助かる事ができるかをずっと考えていました。

そして一人の妖精が言いました。

“ 負けた奴等に責任を取ってもらおう ”

妖精はモルガンを人間へ差し出しました。

“ そうだ、偉そうにしてるのに負けたのが悪い ” “ 相手は男だ、女を出せば助かるだろう ” “ そうだそうだ、それがいい ”

同調した妖精達は、敗北した女の妖精騎士達を人間の前に連れてきました。

こうして女王モルガンと、妖精騎士のガウエイン、トリスタン、ランスロットは男の所有物となったのでした。

男は四人の女を抱えてホクホク顔で城から去っていきます。妖精達は安心しました。これで自分達は大丈夫だろう。既に彼女等の事は頭ありませんでした。

ミニ魔界へ帰る途中、男が轟音に気付いて振り返るとキヤメロットが崩れていました。

大次元斬と究極魔法の影響で、キヤメロットは既に致命的なダメージ

ジを負っていました。

崩落を食い止めていたのはモルガンの魔術だったのです。

モルガンがキャメロットから去る事で、加護が無くなっていたのでした。

男は特に気にする事無く、女達を抱いて魔界へ帰っていきます。

モルガン達は自分の所有物なので大事にしますが、アレらは違うのでどうだろうと男の知った事ではありません。

果たしてキャメロットにいた妖精達はどうなったのか？

それは誰にも分からないのでした。

魔王と女王

「……………う……………(っ)は……………」

悪魔的な力を受けて吹き飛んだモルガンの意識が戻り、ゆつくりと目と頭を覚ましていく。あれほどの熱量をこの身に受けて未だに自分が生きているのは、何かしらの意図があつて生かされたのだろうとモルガンは推測した。

どうやら、自分はベッドに寝かされていたようだ。隣にはバーヴァン・シーが寝かされている。他の2人も一緒に、自分と同じように生きたまま連れてこられたようだ。

「お目覚めになられましたか」

穏やかな雰囲気を纏った女が、モルガンへと声をかける。

——弱い

自分と戦ったあの男とは比べるまでもない。モルガンにとって脅威になり得ない強さだ。

この女を倒すべきか一瞬迷ったが、それは悪手だと結論づける。上を見れば暗黒の空がこちらを見下ろしていた。どう考えても自分の知っている世界ではない。

「お体の具合はいかがでしょう？どこか痛い所などはありませんか？」

モルガンは自分の体を調べて、傷一つ残っていない事に驚愕した。体が蒸発しかねない魔法を受けたのだから、傷跡の一つくらいは残っていてもおかしくないくらいだ。それに戦った時に消費した魔力も体に充填されている。

「……問題ない。むしろ調子が良いくらいだ」

「それは良かった」

「ここはどこだ。それと私達を連れてきた男はどこにいる」

「ここは魔王コバヤシ様が所有しているミニ魔界です。コバヤシ様にお会いになりたいのでしたら、ここが一番高いところにある展望台にいらつしやるかと。それほど広い魔界ではありませんので、迷う事は無いと思います」

いまだ目を覚まさない騎士たちを置いていくのは気が引けたが、何かされる心配も無いだろうと考えて空へ飛びあがる。

女の言っていた通り、ある程度の高度から全てを見渡せる程度の広さだ。展望台に座って空を眺めている男を見つけたモルガンはゆっくりと近くへ降り立った。

「おー、起きたか。まずは自己紹介でもしておこうか。我が名は魔王コバヤシ。見ての通り人間だ」

「……モルガン。モルガン・ル・フェ。私の真名です」

少しわざとらしいポーズで自己紹介を始めた魔王は、確かに人間だった。モルガンの妖精眼がコバヤシの言葉の真偽を見抜く。そして同時に恐怖がぶり返してくる。コバヤシに秘められている魔力量がモルガンを遥かに凌駕しているからだ。

だが、恐怖に屈するわけにはいかない。モルガンは自分を律して口を開く。

「魔王コバヤシ。何故我々をここに連れてきたのです。我々に何を望むのですか」

「元々はお前たちまで連れて来る気は無かったんだがなあ。俺がモルガンを倒した後、周りに居た連中がお前とあの騎士達を差し出してきたのさ。これ以上暴れるな、帰ってくれって。ま、俺としてはお前の

持ってた武器目当てであの世界にやってきたわけで、あれ以上暴れる気も無かったからありがたく頂戴して帰ってきたけど」

「……そうでしたか」

自分達が生贄として捧げられた事に対して、モルガンは落胆も失望もしない。遠い昔からアレらに期待などしていない。

「と、いう訳で既にお前達四人は俺の所有物になったから、この魔界に連れて帰ってきたんだ。お分かりかい？」

「私達は敗者です。正面から戦い、負けたのなら納得するしかありません」

「お、話が分かるのは高ポイントだ」

「とは言え、私達の待遇がどうなるのかは教えていただきたいですね」
「そりゃそうだ。まあ暫らくは魔界の生活に慣れてもらう事になるな。魔界暮らしは自由だけれど、力が無ければ全てを奪われる厳しい世界だ。今のお前達だと、そこらの下級悪魔に負けることはないにしても、上級悪魔に勝つのは難しそうだ」

その言葉にモルガンは少し安堵する。少なくとも、コバヤシのようなデタラメな存在がうようよしている世界ではないようだ。

「ま、連れて帰ってきた以上、面倒は見るさ。少なくとも修羅悪魔から身を守るようになるくらいには鍛えてやろう」

「……その、修羅悪魔というものの強さはどれ程なのでしょう？」
「ステータスだけなら俺と同じくらいだな。修羅次元に行くとうようよいあるなあ」

モルガンの心の安寧は砕け散った。

「……魔王コバヤシ。私はもう、ブリテンには帰れないのですか？」
「うん？ブリテンってお前のいたあの世界？帰りたいならたまになら

帰っても構わないが……帰りたいのか？自分を売った連中がいるのに？」

心底理解できない、といった表情でコバヤシは聞き返す。確かに、忠誠心のない連中の元に帰るのは度し難い事なのだろう。

「それは……はい。貴方には分かり得ないでしょうが、私は自分だけのブリテンを追い求めてきたのです。それを、手放したくはないのです」

「そうか……。でも、あの世界はもう死にかけてる。それは分かってる？」

「………ええ。承知の上です。ブリテンは、滅びゆく事を定められている。それでも、私にとってブリテンは、そう簡単に諦められるものではないのです」

「ふうん……」

興味があるのかないのか、顎をさすりながらモルガンの瞳を覗き続ける魔王コバヤシは、良い事思いついた！とばかりに手を叩いた。

「じゃ、モルガン。お前があの世界の魔王になってしまえばいい」

「………からかっているのですか？」

「まさか。どうもあの世界は、行く末を他の大きな力に握られてるらしい。だったらモルガンが力づくで奪って造り変えれば、滅びの道を変えられるだろう」

「………そ、そんな事が本当に？」

モルガンの心が大きく揺らいでいた。元より支配欲が大きい彼女にとって、今の提案は非常に魅力的だ。目の前の魔王の力の強さも、この話の信憑性を大きく上げていた。

「教えてください、魔王コバヤシ。ブリテンを我が物にするにはどう

すれば……!?!」

「まあ、兎にも角にもお前が魔王級の力を手に入れないと話にならないな。あのブリテンを魔界にするのは、こっちの世界の法則に引きずり込むって事だ。俺がブリテンに目を付けたのは偶然だけど、本格的に魔界として機能すれば、他の魔王にも確実に目を付けられるだろうね」

「そうですね……自らが治める國を自らで守れぬなど言語道断です」

「よし、そうと決まれば早速行動するか。モルガンは一旦魔界病院に戻って、他の三人が起きたら説明しておいてくれ。俺はお前達を受け入れる準備をしておくよ」

「分かりました」

「起きなさい」

「はぶぅっ!?!」

戻るや否や、気付きの魔術で妖精騎士二人を叩き起こしたモルガン・ル・フェ。

「へ、陛下!?!ここは一体!?!わ、私達は一体どうなったのですか!?!」

「落ち着きなさいガウエイン。混乱するのは分かります。とりあえず二人とも、体に異常はありませんか？」

「……失礼いたしました。自覚できる痛み等はありません」

「僕も同じです女王陛下。でもなんで？確か僕はあの人間に空で組み付かれて地上に落とされた筈なんだけれど……」

「それを言うなら私もだ。……今でも信じ難いが、指先一つで倒された」

「あの人間が何者なのか。今の私達の状況はどうなっているのか。これからどうするのか。全て説明します。トリスタンが起きてから」
「……」

モルガンはトリスタンの頭を膝に乗せて撫でていた。扱い違い過ぎない？と二人の妖精騎士は思ったが口には出さないのでおいた。

誤算、胸に抱えて

トリスタンが目を覚まし、モルガンは全員に事の顛末を話した。自分達は人間の魔王に敗北し所有物となった事。ブリテンに戻り全てを手中に収めるため、自分達も魔界の住人となる事を。

「私は……お母様が決めたならそれについていくわ」

最初に切り出したのはトリスタン。未だ迷いながらも、ガウエインも口を開く。

「異界からの侵略者とはいえ、負けたのは事実です。目的が破壊や殺戮でないのなら、私は弱肉強食の掟に従ってこの身を預けましょう」

最後はランスロットが話を締めた。

「僕は最強の騎士。それが打ち砕かれた今、おめおめと帰る事はできない。まあ、帰してももらえないだろうけど。この魔界という場所で更に強くなれるのなら、僕もお供します」

「話は纏まったな。魔王を待たせている。すぐに行こう」

妖精國一行が魔界病院を出ると、すぐ近くで魔王コバヤシが待ち構えていた。

「来たな。魔界の住人になる第一歩として、まずはこれを飲んでもらうかな」

プリニー、と呼ばれる珍妙なぬいぐるみのような悪魔が、ガラスの水差しに入った液体を運んできた。ランスロットはそのうちの一つを手に取って、目を細めて観察する。

「これは、ひよつとして、マナ？」

「え、知ってんの？」

まあ正解。これはマナポーシオンって言って、飲むだけで魔界のマナを得られるモンだ。これを体に宿して転生する事により、お前らは正式に魔界の住人として、俺の所有物として認められる」

「ふうん、便利なんだね」

そう言っつてランスロットはためらいなくポーシオンを飲み干した。ランスロットは暫く様子を見ていたものの、特に変わった事は感じ取れない。

「あまり、体が変わった気がしないね」

「マナそのものにそんな力は無いよ。これは単なる力の源だ。魔ビリティっていう、まあお前らの世界でいう所の魔術の加護みたいなモンを取得したり、自分の持つ技を強くしたりとか……色々出来るんだ」
「なるほど……」

「そんじや早速実践しましよ。トリスタンだっけか、お前から」

「わ、私？良いけど……どうすればいいのかしら？」

「転生は担当の悪魔がしてくれるから、特に何も。ほら、さっさとポーシオン飲んで」

「う、うん……」

言われるがままにポーシオンを飲んだトリスタンに悪魔が近づき、何やら呪文を唱えると共にトリスタンの体が眩い光を放ち始める。

モルガンはその姿に、僅かに不安を覗かせた。

「院長、治療頼める？」

許可を待たずに4人の女をベッドに寝かせる魔王コバヤシ。院長と呼ばれた女も文句を言うでもなく、テキパキと治療を始めていた。

「これは珍しいお土産を持ってきましたね」

「珍しい？」

「ええ。どうやら彼女等は妖精のようですが、魔界に存在するどれとも姿が一致しません。一番小さい子に至っては龍種も混じってますよ。死にかけてますが」

「まあぶっ飛ばしたからねえ。しかし思いもよらずレア物が手に入っただもんだ」

「いえ、そうではなく。女王の方を除いて存在が酷く不安定なんです。どうにも外付けの力で体を無理矢理、形作っているようで」

「ふうん」

魔王は彼女等を一瞥して、鼻を鳴らす。

「ま、問題無いけどね。ここで転生させりや嫌でも自分の形が強く固定される。魔界の汎用種族と違うなら尚更でしょ」

魔界における転生とは、リセットではなく強くてニューゲームである。強さの証であるレベルと一定のmanaを糧として、より強い自分へと昇格させる。レベルは1に戻り最初からのスタートとなるが、育ちきつたのならば前世より一回り強くなつた自分と再会できるだろう。

「一番ヤバいのはどれ？」

「この赤い髪の方ですね」

「ああコイツ……言動が明らかにヤバかつたから沢山殺してるだろうな。さぞ経験値も溜まつてるだろう。転生分は問題なさそうだ」

「では、目を覚まし次第、即転生させますか？」

「俺の物になつたつて分からせてからな」

「では、手配しておきますので」

「ああ。必要な物はプリニーにでも運ばせておいて」

良い子の良い子のバーヴァン・シー。皆に好かれるバーヴァン・シー。

皆が彼女に石を投げ、皆は嗤う。彼女は笑う。

“…あ、あああ……!!”

思い出した！思い出せた!!

どんどん大きくなっていったけど、いつも私の所に来てくれたあなた!!

「——トネリコ様!!お母様!!」

転生を終えたバーヴァン・シーから自分の加護が消えていた事も吹っ飛ばす衝撃だった。涙を流してモルガンへ抱き着くバーヴァン・シーから口に出された名前は、数千年前に自分が名乗り、既に捨てた名前だったのだから。

バーヴァン・シーがそれを覚えている訳がない。あれだけ皆の慰み者にされ、今にも消えそうだった彼女の記憶に残っている訳がない。

「……トネリコって誰さ」

「わ、私達の國における、大昔の救世主の名です……が……」

「え、陛下がトネリコ……？ええ……？」

「トリスタン。何を言っている、私は……」

「もうトリスタンじゃないわ！私はバーヴァン・シー！全部、全部思い出したの！いつもお母様が来てくれてたのね！覚えていなくてごめんなさい！来てくれてありがとう！」

紛れもない、バーヴァン・シーだ。迫害され続けたトネリコにずっと感謝してくれていたあの子だ。妖精國で善の心を生まれ持った奇跡の子。今世で終わると半ば諦めていたあの子が、ギフト無しでもしっかりと存在出来ている。

娘と呼べるほどに愛を向けた子を、胸の中に包み込む。暖かい鼓動を感じる。消えかけていた妖精はもういない。

「ああ、良かった……。バーヴァン・シー……私の愛しい娘……」

「ああ……ようやくお母様が笑ってくれたわ……。ずっと気がかりだったの。お母様は私といるとき、辛そうなお顔をよくしていたから……」

「そんな事は無い……。バーヴァン・シー、お前が笑っていてくれるなら、私はそれで幸せなんだ……」

静かに涙を流し、絶対に放さないと抱きしめ合う親子の姿がそこにあった。

「……えっと、次の転生どうしますか？こんな展開予想外ですけど……？」

「こいつら過去に何抱えてんの……？まく暫く戻ってきそうにない」

し、モルガンは後回しにして残りはこっちで勝手にやっちゃおうか」

「……ああ、騎士としての私がここにいる……！縛られずとも、獣を抑えこめる私がここにいる……！！ここなら私はもう……！！」

「……僕の、体。僕だけの体……。私だけの体だ……。う、ううつ、腐った肉の体じゃない、龍の、妖精の……！！」

「……………」

「この人達、転生した時に通常より大量にマナを食いましたね」

「マナなんていくらでも稼げるから良いけどさ、揃いも揃って悪魔よりのやべえ闇抱えてんのな」

「魔王コバヤシ……お待たせして申し訳ありません。私もお願いできませんか？」

「あー、うん。好きにして……」

「？」

泣きじゃくるバーゲストとメリユジーヌ、首を傾げるモルガンを他所に魔王コバヤシは宙を仰ぐ。おお、神よ。と思わず頭に言葉を浮かべたが、ブリテンは神の怨念が巡っていたのを思い出した。

救われない世界の救われない妖精を抱え込んだ魔王は、ブリテン統治をモルガンに勧めてしまった事を早くも後悔するのです。

魔王の強さ

「ねーコバヤシ。実際のところ、コバヤシってどれくらい強いのか?」

バーヴァン・シーが疑問に思っただけでコバヤシに問いを飛ばす。馴れ馴れしい態度にバーゲストが内心冷や汗を流すが、コバヤシは気にした風も無い。

「そうだな、魔界では強さはステータスに反映されるモンだ。体力のHP、お前から言う所の魔力のSP、攻撃力のATK、防御力のDEF、魔法攻撃力のINT、魔法防御力のRES、命中率のHIT、回避力のSPD、つてのがある」

「へー、分かりやすくして良いわね」

「お前らに当てはめると、モルガンはSP、INT高め魔法職で総合で80万程度。メリユジーヌはATK、SPD重視の総合70万の機動型ランサー。バーゲストはHP、DEF、RESが飛びぬけてる総合50万のタンク。バーヴァン・シーはHITが高い総合5万のクソザコだな」

「うそ、私のステータス、ザコすぎ……!?!」

転生前のステータスで例えられ、結果に憂うバーヴァン・シー。それでもどこか態度が芝居がかっているのは、未来があるための余裕だろうか。

「クソザコバーヴァン・シーは置いといて、コバヤシのステータスが気になるな」

「ああ。俺の場合はまず、素の状態でも各能力2000万あるだろ——」
「ちよつと待て」

思わず止めたバーヴァン・シー。微笑ましい目で見ていたモルガンも、目を見開いてこれでもかと驚愕を表している。

「え、2000万って嘘だろ……しかも各能力って言った？じゃあ、コバヤシの総合能力は……」

「一億超えてるな」

「……」

言葉も出ないとはこの事だ。しかも、わざわざ素の状態と言ったのだ。仮にフル武装した四人が装備も何もしていないコバヤシに襲い掛かって、纏めて返り討ちにあうのは簡単に想像できる。

「それから、魔ビリティの組み合わせでステータス上げたら、それぞれ倍くらいになる」

「まだ増えるの!?!」

「あとは武器と秘宝とか装備すれば……でも育てた装備は置いてきて、今あるのは育成途中だからなく。それがあれば全部9999万いけたんだが」

「あ、悪夢だ……」

気軽にコバヤシは言うが、相対した経験のあるメリユジーヌからすれば考えたくもない。あの時は秘宝ではなく何故か靴を履いていたが、その状態でさえ空で圧倒されたのだ。

「は、はははは……こんなの、勝てるわけなかったな……私が何百人いようとゴミではないですか……もう笑うしかない……ははははは……」

「お母様!?!どうしようコバヤシ!お母様が壊れちゃったわ!!」

「ステータス2000万足すなんてお前らでも簡単だぞ。てか、今からやめるし」

「……」

!?!?!?!

現実逃避を始めたモルガンが一気に現世へ引き戻される。コバヤ

シは四人分の巻物を懐から取り出した。

「これにはジオブラストっていう魔法が封じられてて、読めば誰でも覚えられる。この魔法でアイテム界っていうダンジョンに潜ってジオシンボルっていう置物をひたすらぶっ壊してこい。それが今、お前らを強くする近道だ」

「まるで意味が分からんぞ」

バーゲストの言葉にそりやそうだと補足する。魔界では今の種族ともう一つ、魔ビリティィを取得するために他の種族をサブクラスとして設定できる。その熟練度が上がれば魔ビリティィが取得できるのだが、他にも全能力に対してのボーナスが付くのだ。

熟練度を上げる手っ取り早い方法が、ジオブラストという魔法で一撃で壊せるオブジェクトのジオシンボルを破壊して回る事、という事情だ。

「俺の悪魔どもにもフォローさせるから、簡単な作業だ。全部終わらせるのにそんなに時間はかからんさ」

「話だけ聞けば、そう思えるけど……」

「ダンジョンだから敵も出てくるが、間違っても戦おうなんて思うなよ。装備や魔ビリティィが無けりゃ俺だって捻り潰される強さだ」

「……泣いていいかな？」

「全部終わってからな。おら、さっさと行ってこい」

「うええええええええええん!!!」

宣言通り、メリユジーヌは全て終わらせてから泣いた。生態系の頂点であり最強の称号を持つ龍種が、あの魔窟の中ではカス同然の扱いなのだから泣いてもしょうがない。戦おうとする気すら秒で失せるおどろおどろしい魔力渦巻くダンジョンに、何度も何度も突っ込む羽目になった彼女の心の擦り減り具合は本人にしか分からない。

だがしかし、彼女はまだ泣ける程度に心が残っている分マシなのかもしれない。他の三人は虚空を虚ろな目で見上げて微動だにしないのだから。

「終わったみたいだな。仕上げはこれだ」

こんなもの試練の内にも入らないと言うように、特に労いもなくコバヤシは次なる試練を持ってきた。テーブルに置かれた小瓶から漂う魔力量にぎよつとして、思わず全員がガン見した。

「これは魔力のエキスって言ってな、とっ捕まえた悪魔から抽出した魔力の塊だ。これ一本で残りの1000万のステータスが手に入るぞ」

「……魔王コバヤシ。一本しかないようですが」

「うちのメイドに使わせれば五人まで効果がある。そういう魔ビリテイを持ってるからな」

「……なんにせよ、これで終わりですか。いつまでも休んではいられませんね」

「何言ってるんだ、こんなモン入り口にすぎないぞ。魔界で得られる強さに限界なんか無いんだからな」

立ち上がろうとしたモルガンの動きが止まり、少し瞳を潤ませてコバヤシを見た。

コバヤシは早く行けと急かした。無慈悲である。

魔界のメイドはゾンビであるが、そのゾンビの後に続く死人の如きオーラの妖精四人。プリニーはゾンビが増えたと騒いでいた。

「……これで、ステータス上はあなたと同じになったという事ですか」
「そうだよ。なんなら全員で俺の首でも獲りに来るか？」

「いいえ。ただ、実感が湧かないというだけです」

「コバヤシ、次はどうすればいいかな？」

「あとはお前らの好きにすればいい。装備を鍛えるのも良い。魔ビリティを取るのも良い。自分がどれくらい強いかわりたいなら、レベルに見合った敵のいる場所に送ってやる。」

「ただし、お前らは俺の物だつていうのを忘れるなよ。それを理解してんなら好きな事やっていいぞ」

「私、コバヤシが集めたコレクションが見たいなー。ヒールとかある？」

「ヒール？あるけど見に行くか？」

「うっそ、マジ!?行く行く！魔界のヒールとかすげー興味ある!!」

妖精騎士が堕ちるまで（前編）

どうも最近、バーゲストが俺を自分の領地に連れて行きたがっている。残してきた恋人に会いたいってのが半分、規律を守って人間達と暮らしている妖精を俺に見せたいのが半分の理由ってところか。

バーゲストのいう弱肉強食ってのは俺も理解はできる。レベルが高ければ高いほど良い経験値になるし、弱い奴なんか延々と狩ってもしょうがないからな。

って話したら、「そういう話ではありませんわ……」とむくれてしまった。何か間違っていたらどうか？

ま〜こいつらがここに来てからそこそこ時間も経ったし、ぶつちやけ行きたくもないが好意を受け取らないのも持ち主として気が引ける。俺はバーゲストに付き添い、こいつの領地マンチエスターに行くのを決めた。

マンチエスターに着くまでの僅かな旅路の中で、バーゲストは自分の話を俺に聞かせた。

自分より強い、愛したものを食らい続ける中で出会ったアドニスという弱い人間。弱いから守る対象であるアドニスは、自分の捕食衝動に引っぱられないと嬉しそうに語っていた。特殊性癖過ぎて俺は引いたがな。アドニスは相当、懐の深い人間だったに違いない。

マンチエスターはそんな自分がルールを敷いて、暴力の無い街にしたのだという。妖精が人間を隣人として扱う街。どこか誇らしげに語るバーゲストだが、俺が顔を顰めているのに気付いたらしい。

「どうしてお前は妖精の在り方を理解していて、そんな街作ったんだ？」

そう問いかけても、バーゲストは困惑して答えを返さない。こいつは分かってないんだ。

善悪の区別が出来ない連中に、ルールなんて作っても意味がない。バーゲストみたいなのは例外中の例外。衝動を理性で抑え込めるのなら問題ないが、大半の妖精はそれが出来ないって事に考えついてない。

マンチエスターが見えるくらいに近づいてきて、最初は表情の明るいバーゲストだったが、徐々に怪訝、険しくなっていて最後は思いつき走り出した。

領地の異変を察知したんだろう。住んでる連中からすれば、別に変でもなんでもないんだろうけどな。

「……………なに、これ？」

呆然と呟くバーゲスト。広間にあるのは大勢の人間の死体。綺麗な街だったろうマンチエスターは鮮やかな赤色に飾られていた。

ああ、趣味の悪い見世物だ。だから嫌だったんだ、こんなところ来的の。今更人間の死体見て吐くようなメンタルしちやいないが、好き好んで見たいとも思わねえ。

「胸を一突き。その後もひい、ふう、みい……こりやそうとう嬲られたな。ああ、嫌だ嫌だ」

近くに転がっている人間の死体を観察するに、完全に遊び目的で殺されたのは明らかだ。一発で死んだのなら寧ろ幸福だろうが、急所を突かれた死体は少ない。

どこを刺したら死ぬのか学習したんだろうよ。殺すのだけが目的なら、何十カ所も刺す必要はない。

「……………どうして。一体、誰が、こんな惨い……………!!」

「そんなの、マンチエスターの住人に決まってるんだろ。その納屋からも酷い臭いが漂ってるぜ」

「……………っ!!」

バーゲストが俺の指差した納屋の扉を、ぶつ壊しかねない勢いで開けた。腐臭が更に強くなる。バーゲストは口元を押さえて後退った。

山のように積み重なる、腐りかけて蠅のたかる人間の死骸の山。外の連中が殺されるずっと前に殺されたんだろう。

哀れなバーゲストは目の前の光景が信じられないようだった。この虐殺のきっかけはバーゲストが魔界へ消えた事だろうが、その前からこの妖精は裏で人間どもを殺して遊んでたんだろう。納屋に残った血肉のこびりついた檻がそれを物語ってる。

「コバ、ヤシ、違うんです……………。私、私は……………こんな事、望んでは——」
「分かってるよ。お前は本気で人間と共生を目指してた。この街でお前だけが目指してた」

モルガンといいバーゲストといい、統治しようとしてる割にやり方が手緩いんだよな。あの妖精達にこんなルール定めて本気で守ると思ってたんだろうか？

自分のしてる事が良い事か悪い事か考えない。自分のやった事が良い方向に向かうのか悪い方向に向かうのかすら理解しない。狭い自分の世界で自分の楽しい事を優先する連中がこの世界の妖精どもだ。

自らが起こした行動がどんな未来へ繋がるのか、それを考えないよ
うな奴等をどう信用しろというんだ？

世界を回す歯車にすらならない害悪だ。こいつらに比べたらプリ
ニーの方がまだマシだ。

「此の分じや、お前の恋人もどうなってるか分からんな」

「……そうだ、アドニス……。せめてアドニスだけでも……」

失意のどん底にいたバーゲストの目に僅かな光が戻る。どうやら
バーゲストの屋敷は妖精には荒らされていないようだ。

「流石に、私の屋敷までは踏み込まれていないようですね……良かった……」

安心した様子を見せるバーゲストだが、俺には別の疑問が残っている。

体の弱い人間のアドニスが、世話もされずに放っておかれて果たして無事であるものなのか？

「魔王コバヤシ……不躰な願いで申し訳ないのですが、貴方の魔界にアドニスを連れて行ってもよろしいでしょうか？もうここに置いていく事はできませんし、彼も転生すれば丈夫な体を手に入れますよね？」

「あ？それはまあ……構わないけど」

「ありがとうございます……彼の部屋はこっちです。早く連れていってあげないと……！」

焦った様子のバーゲストに特に考えずに返事してしまったが……
まあ、気が利くこいつの事だし備え付けの食い物とか水くらいあるん
だろう。

屋敷の奥、庭に花が植えてある部屋にたどり着いたバーゲストは扉
を開ける。

そこは――

「――え？」

白・い・寝・床・が・赤・く・染・め・ら・れ・て・い・る・誰・も・い・な・い・部・屋・だ・つ・た

「……」

流石にこれは予想外だ。

部屋を見渡してみても、荒らされた様子も争った形跡もない。

……穏やかな日常の中、忽然と消えてしまったように。

どこまでも救われない女だ、バーゲスト。お前、とつくの昔に食っ
ちまってたんだな。

「あ――あ、あ――」

目の前の非情な現実が私の脳裏を犯していく。偽りの幸福が消え、真の記憶が戻ってくる。

どんなに泣いていても、どんなに情けなくても。いつも優しく慰めて、話を聞いてくれたベッドの上の少年。

彼は違うと信じていた。自分は強い者だけを食べる。弱い彼は守るべき存在だからきつと大丈夫。

ベッドの上から動けない彼の為に、窓から見える場所に花を植えた。あらん限りの愛を彼へ注いだ。

「あ——ああああ——」

楽しい円卓の騎士の話をした。その在り方に憧れて、自分もそうになりたいと願っていた。

騎士になりたい。弱きを守る、物語の中の勇ましい彼等のようになりたかった。

愛する者を食べてしまう自分を変えたかったんだ。

……………でも

「あ——あああああああああああああああああああ！」

すべては無駄だった。

私が定めた秩序など守られていなかった。ただ私の目に見える場所だけ綺麗なだけだった。

弱いアドニスを食べた。守りたかった筈のアドニスを、自分で、食べた。

私は。

わたし、は――

酷く取り乱したバーゲストが部屋を飛び出し、花が植えてある庭の前で蹲って泣きじゃくっている。ここからだど部屋の窓からベッドまでしっかりと見えるな。その逆も然りか。そのアドニスとやらに向けた愛は間違いなく本物のようだ。

だがそれは、部屋の中が外から丸見えだという訳で……だから何だと言う気も無いが。

原因までは分からないが、バーゲストから自分がアドニスを食った記憶が消えていた。いや、生きてるような話をしてたから、幻でも見ていると言うべきか……。

「魔王、コバヤシ。私に、慈悲を下さい」

「ああ？」

泣いているバーゲストが剣を置き、俺に対して首を垂れた。

「私は、ただの獣でしかなかった。愛しいものを食べたいだけの、卑しい獣でしかなかった」

私は、死のうとした。でも、どういう訳かできなかつた

………どうか、貴方の手で終わらせてほしい」

「甘えるな、バーゲスト」

地面の剣を蹴り飛ばし、地を見るままの顔を上げさせる。

酷い顔だ。絶望しきつた、終わったような顔だ。

「お前は俺の物だつて言っただろうが。俺が許してないのに、勝手に死ぬような選択するな」

「………そん、な」

「そもそもお前に自分から死ぬなんて選択権無いんだよ。他者を食らって自分の糧にしたんなら、何があろうが生き続けるのが食った強者の責任だろうが」

自決なんてのは責任を取る行為じゃない。責任からの逃避だ。自分の為に他の命を食い物にしたならば、しぶとく生き続ける。

魔界では命の価値なんてずっと安い。でもその理由は、この考えが悪魔全体に染みついているからではないかと俺は思う。

だから魔界でも、自分の為に破壊や殺戮を楽しむ悪魔は疎まれる。踏みにじった者の責任を自覚しない無責任な野郎には、死の制裁が待っている。

「バーゲスト。どんなに苦しくたって生きるしかねえんだ。食ったのが強者だろうと弱者だろうと。愛した者なら尚更だ。俺達は生き続けるしか道は無いんだ」

バーゲストが俺の話の完全には飲み込めなくとも、俺にはこいつを

獲物を求めて獣の姿を現した黒い厄災は、バーゲストの体から――

「おい」

――飛び出す事は叶わなかった。

黒い厄災、何するものぞ――

世界を壊し、神すら殺す。

魔王の座まで成り上がった人間が、それが解き放たれるのを許さない。

恨み妬みを押し潰す”圧”をかけ、むき出しの牙を素手で掴む。

――逆らえない。逆らってはいけない。

食おうとすれば潰される――!!

皮肉な事に獣となってしまう黒い厄災は、目の前の者がどういう存在か本気で理解してしまった。

「立場を勘違いしてんじゃねえ

お前は所詮飼いだ、バーゲストはお前の主だ

そもそも、誰の目の前で出てこようとしてんだ、テメエ？」

黒い厄災を押さえたまま、魔王は獣の瞳にギリギリまで顔を近づけた。

自分の姿しか映さないように。

自分の立場を骨の髄まで分からせるように。

「自分がどういう物か分かったんなら引っ込んでろ。バーゲストに呼ばれるまで出て来るな

——でないと、今まで食ったモン、全部吐くような目に遭わすぞ、この犬ツコロが」

——汗腺の無い体から、全ての水分が吐き出されるような錯覚に襲われた。

血も凍る恐怖に身も呪いも萎んでいく。

覚醒した黒い厄災は、逃げ帰るようにバーゲストの中へ戻っていった。

「帰るぞ、バーゲスト」

「……は、はは」

最早、乾いた笑いしか出てこない。呪いを力づくでどうにかしてしまいう人間なんているものか。

いや、いるのだ。目の前にいるのだ

食物連鎖の最上級の位にいるのではないか？誰だ？人間を弱いなんて言ったのは？

あつ、私自身だった。

「コバヤシ……貴方は、私が卑しい獣に過ぎないと知っても、まだ……」

「腹に何飼ってようが関係ねーよ。お前もいい加減分かれよな」

この魔王からは逃げられそうにない。自分が犯した罪からも……。心身ともに疲弊した状態では、己の欲求に抗う事も出来ない。

私は私の感情に正直になり、彼に抱き着いて首筋に噛みついた。……少ししよっぱい。そして血の味を僅かに感じるだけだった。

「……う……グスツ……私に食べられない人……私が愛する人……」

「分かったから。お前の性癖は十分わかったから。離れろ」

「ご、ごめんなさい」

離れた首筋に残った傷痕。愛おしくてたまらなくて、優しく舐める。

「…………おい?」

「ひうっ」

僅かにドスを効かせた声に思わず飛びのく。……調子に乗り過ぎたかしら……?」

「おら、とつとと帰るぞ。ホントろくでもない世界だ……」

「待ってください。領主として、最後の仕事をさせてもらえませんか?」

「……ああ、いいよ」

郊外に出て、自分の街を見渡す。

……あの頃の、綺麗だった景観は見る影もない。少なくとも私はもう、この街を綺麗だとは思えなくなってしまった。

「……そういえば、ここに住んでいた妖精はどこに行ったのでしょうか……？」

「お前がいなくなったから出て行ったんじゃない？他の街にでもいるとか。何にせよ、もうお前が気にする事でもないだろ」

「まあ、そうですね」

流石に自分から出て行った妖精に対してまで気に掛ける必要はありませんね。

——覚悟を決め、魔力を炎として噴出した私の体は街の遥か上空まで飛んでいく。

「(ごめんなさい、マンチエスターの人間達。さようなら、アドニス)」

心の中で謝罪と別れを済ませ、私の体はマンチエスターへと向かっていく。

その身に暴力的な熱と力を宿しながら。

「——飛天無双斬ツツツ!!!」

大地を削り、街を焼く炎の轟音。

私は、私の創った街にその幕を下ろした——

「——帰りましょうっ、コバヤシ。今夜の食事は私が腕を振りますわっ！」

「お、おー……」

妖精騎士が堕ちるまで（後編）

俺のコレクションルームに新しい品が入った。あのバーヴァン・シーが作ったというヒールだ。

ヒールと言っても回復魔法のヒールではなく、靴の方のヒールだ。いやあ、俺は収集癖はあっても自分で何かアイテムを作るって発想は無かったからな。これは目から鱗だ。

性能としては無いに等しいものの、そんなのは問題じゃない。バーヴァン・シーが俺の為に作った。俺への捧げ物にオリジナリティ溢れるアイテムを選ぶとは、中々分かってやがるぜ。

防護と清潔の魔法を三重にかけたガラスケースにバーヴァン・シー作のヒールをしまい、ライトアップする。アイツのイメージカラーの赤色が映えるぜ。マンチェスターの赤色とは雲泥の差だ。

モルガンの成長具合も半端ない。ブリテン解説の時に分かった事だが、アイツの年齢は6000歳以上。とんでもない婆さんだった。それでそれだけの年数、ブリテンを手に入れる為だけに注いでいるんだから俺もドン引きだ。

それだけ長く生きてる魔王なんて、少なくとも俺は知らない。それを思えば魔王になる素質はあったわけだ。

ひよつとしたら、俺も無意識にそれを感じ取って魔王の道を示したのかもな。

バーゲストは何かもう、遠慮しなくなった。夜会のドレス姿とかいうのになって抱き着いたり噛みついていたりして、明らかにサイズの合っていないメイドの服を着ようとして、破裂させて怒られたり…。まあ良く気が利く女だし、乳もデカイし尻もデカイ。それにアイツの作る飯は美味いから、それはそれで構わないんだけどな。

ただモルガンがバーゲストの作った飯を一口食ったら、ショックだったのか敗北者の顔をしていた。その次の日からミニ魔界にあるカレー屋へ出入りが増えたのは偶然じゃないんだろう。

「コバヤシ、少しいいかな？」

俺の至福の時間を邪魔しに来たメリュジーヌ。一体何の用なんだ。

「ソールズベリーに一度戻りたいんだ。オーロラに今の僕達の現状を説明しなければならぬし、僕は君の所有物になったから、これからあまり顔を見せに行けない事も伝えたくてね」

「アレの所？別にい行かなくていいんじゃないの？」

俺の物言いが気に食わないのか、メリュジーヌの顔が少し歪む。

「……コバヤシはオーロラの事が嫌いなの？氏族長の名前だって知ってるのに、オーロラだけ呼ばないじゃないか」

「別に。ただ名前も呼びたくないし、可能な限り視界にも入れたくないと思ってるだけ」

「十分嫌ってるじゃないか!!」

メリュジーヌは吠える。どんなに吠えたって俺の中のアレに対する嫌悪感が変わらん。

「出来れば君にも付いてきて欲しかったけど、この分じゃ無理そうかな……」

「何だその悪辣な嫌がらせ」

「……なんでそう執拗に彼女を嫌うんだ。オーロラの事なんて殆ど知らない癖に」

「俺よりアレの事知ってるお前が、なんだってそうアレに尽くせるのか俺は不思議なんだが」

「——つもういいよ！君なんて嫌いだ！」

「そうかい。俺はアレは嫌いだがお前は嫌ってねーからな」

「ばか——っ!!」

メリュジーヌは部屋から飛び出して飛んでいった。アイツはアイ

ツで、このミニ魔界からブリテンへ単独で飛んでいける力を身に付けてんだよな。

「コバヤシー……♪ティータイムしようぜ！バーゲストが凶体に似合わねーちつきくて可愛いクツキー焼いたから一緒に……あれ？メリュジーヌもいたの？」

「おー。もう飛んでいったけどな」

「ふーん。もしかしてオーロラの所行ったの？」

「そだね」

それを聞いたバーヴァン・シーが、うげえ、と舌を出して嫌な顔をする。ハハツ、アレの本性バレバレでやんの。

「理解できねー……メリュジーヌの奴、まだあの女に入れ込んでるのかよ。ていうかコバヤシは止めなくていいの？」

「自分でも薄々分かってて行ってんだから止めやしねえさ。言ったら、俺の物だって分かってるなら好きな事やれって」

「そっか。私はあの二人の終わってる関係好きだから良いけどさ」

「お前も分かかってるか。にしたって、メリュジーヌもわざわざ自分から傷付きに行かなくてもいいのにねー」

「ねー。最高に終わってるよねー。私達もメリュジーヌなんかほっといてティータイムと洒落込もうぜ☆」

「いやあ、どーせすぐ戻ってくるし待つてようぜ」

「えー？まあコバヤシが言うなら待つケド。でもその間、私を退屈させたら承知しないわよ？」

「なら、俺が昔、罰ゲームで馬のチンチンって名前付けられてた頃の話でもするか」

「乙女とする話題じゃねー！でも面白そうだから続行な！」

あの頃に比べたら、俺も愛のある名前を付けてもらえたモンだな。

魔界からブリテンのソールズベリーまでひとつ飛び。境界を司る
霊基アルビオンなら、これくらいの芸当は簡単だ。

ソールズベリーは相変わらず活気に満ちていて、変わっていない事
に安堵する。

オーロラに会う為に大聖堂に赴くと、彼女の側近のコーラルに出
会った。

「メリュジーヌ……!? ああ、無事だったのですね!」

「うん。ただいま、コーラル。色々あったけれど、一応無事かな。オー
ロラはいる?」

「ええ、オーロラ様ならお部屋に」

「そうか。オーロラに話があるから、人払いをしておいて欲しい」

「分かりました。何があったのか、私にも聞かせてくださいね、メリユ
ジーヌ」

人払いをコーラルに任せて、大聖堂の一番上……オーロラの部屋へ向
かう。

ノックをして部屋に入ると、そこには何も変わらず美しいままの
オーロラがいた。

「メリュジーヌ? ——メリュジーヌなのね! お久しぶり、私の大切な
騎士! 急にいなくなったから、とても心配していたのよ」

「うん、ごめんね。オーロラ、君の美しさも変わっていなくて良かった」

久方ぶりに、僕を抱きしめてくれるオーロラの心地よさをもう少し

感じていたかったけど、本題は他にある。

「オーロラ、どうか聞いてほしい。キャメロットで何が起きたか。今の僕達がどういった状況にあるのかを」

——オーロラに包み隠さず全てを話した。キャメロットに現れた装備目当てのおかしな魔王。

敗北して、戦利品として持ち帰られ、転生して強くなった僕達。

キャメロットは崩壊、マンチエスターもバークエストが自分で滅ぼしてしまった。

マンチエスターの妖精達がソールズベリーにいるのは、その、驚いたけれど。

「そうだったの……とても恐ろしい目に遭っていたのね、メリユジーヌ」

「そうだね……だけど、結果的に僕は新しい体も手に入れたし、強くもなれた」

「ええ、貴女はとっても勇敢な騎士よ。私も嬉しいわ」

「オーロラ——」

「だって、貴女の体一つで、私とブリテン中の皆が助かったのだもの！」

「——え」

思わず、息が詰まった。

「どうしたの？自分を犠牲にして誰かを助ける。それが騎士の本懐でしょう？ああ、でも犠牲になったのは貴女だけではなかったのよね。女王陛下と騎士三人で、ブリテンが助かったのです」

「……そう、だね」

「世界を渡り、時には世界を破壊してしまう、とても恐ろしい魔王様……そのような存在から守ってくれるなんて。貴女と、攫われた人達には感謝してもしきれません」

「……………うん」

そうだ、僕達がコバヤシの元に売られたから、コバヤシは一度ミニ魔界へ帰ったんだった。

……………でも。

装備にしか興味の無いコバヤシが、陛下を倒した後にブリテンをどうこうするとか、あるのかな。

「でも、そうだとしたら困ったわ。貴女はもう魔王様の物なのでしよう？」

「え？…そう、だけど？」

「だったら、貴女がここに居座っていること自体、魔王様にとって面白くないのではないかしら」

「——」

「きつと魔王様は、少しでも長く貴女を手元に置いておきたいはずだわ。だって、そうでもなければ持つて帰ったりしない筈ですもの」
「——だ、大丈夫だよ。コバヤシにはちゃんと、ソールズベリーに行くって言うてあるから」

「——いいえ、貴女は戻るべきよ。こんなつまらない事で魔王様のご機嫌を損ねては、貴女達の犠牲が無駄になってしまうわ」

オーロラの綺麗な顔が引き締められた。確かに、オーロラからすればコバヤシは、とてつもない脅威にしか見えていないだろうけど……。

「メリュジーヌ。貴女が無事だったのは喜ばしい事よ。でも、もしこのソールズベリーが魔王様に目を付けられてしまったら…私の翅はきつと、不安で曇ってしまうの。」

大丈夫、何があっても私だけは貴女の味方。だから時々、魔王様のご機嫌を損ねないように帰ってきて、魔界でのお話を私に聞かせてね？」

「……………ああ。オーロラ、君の為なら僕は何だってする」
「分かってくれたのね！嬉しいわ、メリュジーヌ！」

最後にハグをして帰ろうとすると、コーラルが入ってきた。

「失礼します。オーロラ様、メリュジーヌ。お茶を持ってきま……した？」

「あら、コーラル。その心遣いはとっても嬉しいのだけれど、メリュジーヌは今すぐ戻らないといけないの」

「え？でも、さつき来たばかり、ですよ？」

「ごめん、コーラル。僕はもう行くよ」

「で、でも久しぶりに帰ってきたのに。お茶くらい——」

「いけないわ。コーラル、メリュジーヌが困っているでしょう。聞き分けの無い事を言っっては駄目よ」

「も、申し訳ありません……」

困惑して道を譲るコーラルに申し訳なく思いながら、僕は扉をくぐる。

「メリユジーヌ、今日はありがとう。次に会える日を待っているわね」

「——さよなら、オーロラ」

どうして僕は、オーロラの顔を見れないんだろう。

オーロラはとても綺麗なのに、見たくないって、思ってしまったんだろう。

ミニ魔界に響く着陸音……てかコレもう、爆撃だろ。

『ギヤーツス!!』『しゅーげきツスー!!』なんて騒ぐプリニーの悲鳴が煩わしい。

荒々しく扉を開けて、俺の背中にメリユジーヌが突撃してきた。痛え……。

「お帰りメリユジーヌ。久々の再会にしては早かったな」

「なーんだ、もう帰ってきた訳？あのクソ女どうしてた？アンタを見て泣いてた？」

「……………」

「——プツ、ギャハハハハ!!そんな訳無えよなあ！あの最高で最低のクソ女が！アンタを心配して！泣くなんてあり得ないんだもんなあ!!」

「う……………ううー……!!」

「アレ、お前が帰るの渋ってた？ちよつとでも引き止めた？どうせさつさと帰れとか言われたんじゃないの？」

「うううううう……!!!」

「そろそろよな。王都襲ったヤバい奴に連れ去られたお前の事、ずっと手元に置いてるとか恐くて仕方ねえよな。それで自分まで目を付けられるなんて冗談じゃないよな」

「うー……!!うううー……!うー……!」

何を言われても言い返さず、うーうー言うだけのマシンと化したメリュジーヌ。爪が背中に食い込んで痛え……。

「言っただろコバヤシ！こいつらの関係終わってるって！」

「いや全くだな。あんなだけ愛を捧げられておいて、一欠片すら返さないとか終わってるわ。お前もお前でそのままズルズル引きずってるし」

「……オーロラは、僕を拾ってくれたんだ。ただの汚い肉塊でしかなかった僕を。ああなりたいて思ってたから、僕はここにいます」

「それだけで全て捧げるってか」

「僕は、オーロラを守りたい。オーロラの輝きを守りたい。そのためなら——」

「お前、本当はどうしてもらいたかった？」

メリュジーヌの手に更に力がこもる。だから痛いって。

「………引き止めて、欲しかった」

「なんて？」

「引き止めて欲しかった!!行くなって、私の傍にいてって!!」

僕は騎士だ、オーロラを守る騎士だ!……騎士、だけど!!

少しでも、長く一緒にいたいんだって!そう言って欲しかった!!

……それだけで、良かったのに:!!」

背中からメリュジーヌを引きはがし、その頭に手を置いた。

「俺がアレの事嫌いな理由、それなんだよね。拾ったモンを大切にしない」

「拾ったもの……」

「拾われたお前があんだけ尽くしてるのに、拾ったアレは知らん顔。この魔界で最底辺のプリニーにだって、働けばイワシくらいは与えられるのになあ。お前は拾われたから、見返り無しでアレに全てを捧げんの？ いい加減、アレの事見限れよ」

「そんなの……」

「うっぎ。本当は愛されたいクセに、我慢して忠義の騎士気取りかよ。見てる分にはおもしろいけど、いい加減見苦しいっつーの」

「ほら、バーヴァン・シーも心配してるだろ」

「だ、誰がこいつの心配なんかしてんだよ!？」

「お前」

自分の髪みたいに顔を赤くしたバーヴァン・シーがぼかぼか殴ってくる。こいつ正直者だから、思わず口に出しちゃうんだよね。

「……」

「踏ん切りつかないなら、もう全部俺のせいにしちまえ」

「えっ……」

「アレの所に行つて俺に目を付けられたくないから、ずっとここにいてるって事にすればいい」

「……マジ？ コバヤシ、こいつの為にそこまですんの？」

「別にアレに何言われようと関係無いしなあ。これで解決するならそれでいいよ」

「……………」

「コバヤシ……」

「んー？」

「……………甘えても、良い？」
「いっよ」

少しはマシになった顔のメリユジーンを抱えて立つ。

「さて、バーゲストも待つてるだろうし、ティータイムと洒落込もうぜ」

「やっとかよ……………というかメリユジーン！そこから降りろ！私と代われ！」

「やだ。今日からここは僕の特等席になったから、そのつもりで」

「ふざけんじゃねーよ！」

「そのつもりでって、もしかして俺にも言い聞かせてんの…………？」

尚、せっかく言い訳を用意してやったのに、メリユジーンは暫くの間アレの元に行く事は無かった。

みにくい予言の子

——ここは潮騒のティンタジェル。ここに流れ着いた私は物心ついた時から予言の子として、みんなから大切に育てられていました。物覚えが悪い私は寝る時間も惜しんで勉強に勤しみました。

魔力の少ない私は皆から厳しく鍛えられました。

私と一緒に流れ着いた選定の杖から聞こえた声のマーリンから魔術を学んで、ちよつとした事ならできるようになったり。

まあ、その杖も私が16歳になるまで取られちゃったんだけど。

そうして予言の子として今まで育てられてた訳だけど、私にとってその役目は重いというか、やっつけられないというか。

使命、みたいなものがあるっていうのはぼんやり分かってたから、受け入れてたけど。

毎日毎日、私の周りの妖精達の本音が見えるたびに嫌になっちゃって。

結局みんなにとって、私が本当の予言の子であるよりも、予言の子だっという価値があれば良いんだもんね。

そんなある日、風の噂で女王様が倒された、なんて話が村に入ってきて。

ただの噂だから、村の殆どの妖精は本気にしてなかったんだけど。時間が経っていくと共に、その噂話にも信憑性が出てきて。

氏族長達がそれを認めちゃったから、村の皆は大騒ぎ。

どういう事だ、お前は予言の子じゃなかったのかって詰め寄られたけど、勘弁してほしいなあ。

私だって何が何だか分かんないよ。

そうやって言い合ってるうちに、段々と雰囲気が悪くなっていて。

——あ、まずい。

そう思つて広場から逃げ出したけど、力も魔力も私は村で一番弱くて。

魔術を使つても逃げきれなくて、すぐに捕まっちゃった。

「この嘘つきめ！皆お前が予言の子だと思つていたから、大事に育てていたのに！」

「お前は予言の子じゃなかった！ただの弱つちい妖精だった！」

「裏切者！裏切者！お前は皆の希望を裏切った！」

逃げようとする私を捕まえて、怒りのままにみんなが叫ぶ。

「私見たわ！この子が棒切れを振り回して訓練してるのを！」

「危ない奴だ！大した魔術が使えないから、棒なんて使うのか」

「危ないから、腕を折ろう！そうすれば暴れないし、安心だ！」

——え。

——ちよつと、待って。

「腕だけじゃ駄目だ！逃げられないように足も折ろう！」

「この子は馬小屋で暮らしてたんだ！ボク達が予言の子を育ててたつてバレないように、これからは本当の馬にしちやおう！」

「絶対に外へ出さんじゃないぞ！予言の子を育ててたのがバレたら、この村はおしまいだ！」

——待って。お願い、待って!!

私の体は押さえつけられ、利き手が曲がらない方向に力を入れられる。

「い——痛い痛い痛いいたいいたい!!? やめて!! やめて!!! やめ——」

木の枝が折れたような乾いた音。次いで私の腕に走る激痛に叫んだ。

「あああああああああああああああああああ
!?!?!?!」

ぷらん、と垂れる私の腕。押さえつけられてるから、折れた腕を押さえる事も、痛さにもんどりうつ事も出来ない生き地獄を味わった。皆はもう片方の腕を掴んで力を込めた。涙で歪む視界でも、それはハッキリ分かってて……。

「やめてください!!お願いします許してください!!嘘ついてごめんなさい!!予言の子だって騙しててごめんなさ——」

必死で謝ってたけど、おかしい話だよね。

私、自分から予言の子だって言った事、あつたっけ?

ほんの僅かに浮かんだ疑問も、二度目の激痛でかき消されて。

「あああああああうううううううううう……!!!」

両腕があつさり使い物にならなくなって、私は地面に投げ出された。

支える事もできないので、顔を地面に打ちつけて、ちよつと鼻血が出ちやったみたい。

今度は、皆が私の足に群がり始めて。

——ああ……足も折るなんて言ってたっけ。

「や……やだあ!!やだやだやだやだ!!お願いみんな!!もうやめて!!もうやだよお!!!」

この時の私、よっぽど酷い顔してたのかなあ。

私を見下すみんなが、笑っていたような気がして。

とつてもとつても、恐かった。
結局、両足折られて二回叫んで。
力尽きた私は、気を失っちゃった――

目が覚めていつものように起きようとしたら、両手両足が酷く痛くて思わず泣いちゃった。

何とか魔術で痛みを誤魔化して、応急処置したから少しなら動けるようになったけど。

私の首には頑丈な金属の鎖付きの首輪がはめられてた。

――昨日、言ってたなあ…私、馬になっちゃったんだ…。

誰かに説明されなくて分かってしまう。

馬小屋には藁が敷いてあるから、何とか寝る事はできそう。

なんて、早々にこの状況を受け入れちゃってる自分がいて。

私の友達だった妖精が鎖を持って私を外へ連れ出す。

お散歩の時間…なんて言われても。私にとっては余計な事でしかなくて。

でも、嫌がったら何をされるか分からなくて怖いから、言われるままに外に出た。

「ほらっ、もっと早く歩くんだよ！お前は馬なんだから！」

「ひっ、まっ、ずあっ!?!そ、そん、ふぐう!!あぐっ、ぐすっ、無理イ!?!無理だからあ!!」

「ははは、見ろよ。？つきのアルトリアが鳴いてるぞ」

「ふん、ボクは最初っから信じてなかったよ。今だって無理なんて言ってるけど、それだって嘘っぱちに決まってる！」

「ひ、ひぐっ、やめて、お願い、やめてえ…?!?」

そのお散歩だって別に私の為じゃない。
皆が楽しく遊ぶための行為に過ぎないんだよね。
四つん這いで、碌に進めない私を力づくで引っ張って。

「がっ!?!ぐう…!?!う、うえっ…!!」

何度、喉が潰れそうになった事か。

それで気が済むまで引きずり回されて、馬小屋に戻ったらもうボロボロ。

妖精だから、食べなくても飲まなくても何とかなるけど。

せめて水くらいは欲しいなあ。

そしたら雨が降ってきたから、すかさず被ってた帽子をひっくり返して外に置いておいた。

「……水だけなら、どうにかなるかな」

一応、魔術の勉強の一環でこの近くの薬草なら分かるし、次のお散歩で何とか拾ってこよう。

「……痛いのは嫌だけど。我慢するしかないよね」

もう、この生活が何日、何ヶ月続いたんだらう。

印でも付けておけばよかったかな。

でも、小屋を傷つけたら何か言われるかもしれないからいいや。

「うー、やっぱり夜は寒い……」

お日様があるうちは誰かが来るかもしれないから、何かするなら夜しかない。

薬草を石ですり潰しながら、食べられる草を口に入れる。

「うええ……につが……」

これも一応、薬みたいなものだ。

そのまま食べて効果あるのか分からないけど……。

すり潰した薬草に水を混ぜて塗り薬にして、怪我に塗るために服を脱いだ。

——変な色。

折られた場所は、最初は赤くなってて。

段々紫色になって。今は何か、黒っぽい気持ち悪い色になっちゃった。

村の皆も気味悪がって、私も隠したいから布切れを服に縫い合わせて見えないようにした。

魔術で痛みを誤魔化してるし、薬もずっと塗ってるんだけどなあ……。

帽子に貯めた水で体を綺麗に拭いて。

所々に傷があるから沁みるけど、汚いままだとヤだもんね。

水を鏡にして覗く自分の顔は、言っちゃなんだけど酷くやつれてる。

「……………」

いつか、ここから逃げ出して色んな所を旅するんだ。

そう思って、ずっと耐えてきてたけど。

いつか、ここから逃げた後。

——私の手と足、動くのかな。

「あ……」

自分の目から浮かんだ雫を見つけてしまい。
慌てて両手で顔を隠したけど。

きっと私は、とつくの昔に気付いちやってる。
私の明日は、私のものじゃないんだ。

「……ひっ……く……う……うああ……やだ……やだあ……やだ
よお……」

もう何日も雨が降ってなくて、体も拭けなくて汚れたまま。
自分の臭いが鼻について嫌になっちゃう……。
おまけにお散歩も続いてて、体とお尻が痛くてたまらない。
なんて考えてたら、村の中がちよつと騒がしくなってきた。

「へえ、これがこの村唯一の馬——うわきったねえ」

やってきたのは一人の男の人間……なんだけど。

コイツヤバイってオーラが滅茶苦茶漂ってて、思わず身を固くした。

値踏みするような視線を私に向けて、じっと立っている。

「オツケー、即金で買うわ。金はさつき渡した袋そのままやるから」
「な、なんと！ よろしいのですか？」

「中身はこの村全員に行き渡る分あるから、勝手に分けてくれ」
「それはありがたい！ これでこの村は救われます！ 皆で大切に世話し

てきた甲斐があったというもの……是非お名前を」

「さーて持つて帰るか」

私の首に手をかけると、金属の首輪があっさり外れた。

近くの帽子を私に被せて、私の体は軽々と持ち上げられた。

「ひゃあ……」

「これでこの村とはオサラバだけど、何か持つていくモンあるか？」

そう聞かれて、家の壁に立てかけられていた選定の杖に指を差した。

「あの杖を……」

「あれはお前の持ち物か？まあ違っても持つていくが」

足早に杖を回収した男の人は体から魔力を噴出させた。

「ふあ!?なに、なに!？」

「騒ぐなよ。魔界に帰るだけだ」

お金に夢中になっている妖精達を後目にして。

こうして私は魔界に連れ去られたのでした。

抱っこされたまま魔界つて場所に連れてこられて。

あまりの非現実さにぼかーんとしてたら。

謎のぬいぐるみに囲まれた。

「おかえりなさいッスコバヤシ様！」

「おー」

「それなんすか？汚い人形ツスね？」

「そんなちんちくりんな人形、どこから盗んできたんすか？」

「誰が貧相な人形だ!？」

「どひゃー喋ったツスー!？」

「窃盗じゃなくて誘拐だったツスー!!」

「ハッハッハ、お前ら日当タラコにするぞ」

うがー、って怒ってたら、今度は私より小さい妖精がやってきた。

「お帰りコバヤシ……!?!誰だ、その子供は！ちっちゃい子ならこの僕がいるのにー!」

「子供じゃない！少なくともあなたよりおっきいし!」

みんなして明け透けに馬鹿にしてくるから、ついバタバタ暴れちゃって。

「おい、動くな」

コバヤシ、って呼ばれてた人が私の腕を掴んだ。

「いつ……ぎいいいいいいいい!?!?!」

丁度怪我してた場所だから、思いつきり叫んじゃった。
周りの皆が驚いて、騒ぎが治まった。

「コ……コバヤシ!?!いくら君でも、小さい女の子に乱暴するのは見逃せな——」

「こいつ腕と足が腐ってる」

「——な!?!」

小さい子が私の服の袖をめくってきた。

「や、やだ!!見ないで!汚いから見ないで!!」

「……………!!」

なんか力が凄く強かったから抵抗できなかつたけど。

私の怪我を見た小さい子が、男の人から私を奪い取った。

「この子、魔界病院に放り込んでくる!!」

「頼むわ」

とても早いのに、とても優しく丁寧に私はベッドに寝かされた。

そしてひと眠りしたら、怪我が全部治ってた。

「……………いや、何で?」

怪我が治ったのは嬉しいけど、それよりどうして怪我が治ったかの方が気になるんだけど…………。

「お前を金で買ったのは俺だから、お前はもう俺の所有物だからな。心しておけよウマトリア」

「誰がウマトリアだ!!アルトリア!アルトリア・キャスターだから!」

「分かった分かった馬糞の子」

「予言の子!!!……………あ、もう違ったんだっただけ……………」

私を買ったのは魔王コバヤシ。何を隠そう、この人が女王陛下を倒して攫っていった張本人だった。

「ほー。お前が予言の子じゃなくなったのは俺のせいって事だな」

「……………コバヤシは、もしかして私を助けに来てくれたの?」

「まさか。モルガンが予言の子とかいう珍しい存在を見つけて俺に売りつけてきただけだ」

「女王陛下も売られた身なんだっけ……。なんだろう、凄い複雑」

聞けば陛下もこのミニ魔界でそれなりに楽しく暮らしながら、ブリテン征服を目指してるんだって。

私もまあ、行くところも無いしここにいるのを決めた。

「ブリテンにお前の居場所とかもう無いし、帰ろうと思っても帰れんだろ」

「悪かったなー!!」

割とズケズケ遠慮なく物を言ってくるな、コバヤシは!!

でも、嘘が無い相手との会話は私にとっては寧ろ楽しいから許すけど!

「アルトリアちゃん、これ運んでおいて欲しいッス!魔王様からの命令ッス! (ホントは俺達の仕事だけど、言わなきゃバレないッス)」

「はーい、分かりましたー!」

まあ、欲望に正直な人が多いって言っても?くらいはある訳で。

「(しめしめ……。これで今日の日当、イワシ二尾は固いッス!)」

「(給料、イワシなんだ……)」

でも私とは別ベクトルでひもじい本音を見ちゃったら、別にいつかかって思っちゃおう。

「……………」

「なんだお前、それ欲しいのか」

「えっ……。べ、べつにー?」

アイテム整理を手伝ってて、ちょっと綺麗なアクセサリを見てたらコバヤシに気付かれて。

「欲しいなら働け。レベル9999の捕虜1000体捕まえてこい。今日中な」

「……………」

「バゲ子オ!!捕虜1000体捕まえるの手伝って!!!」

「何があった!?!」

女王陛下と同じくこっちに来てた、あの色々でつかいバゲ子に手伝ってもらったり。

「ぜえ……ぜえ……つ……捕まえてきたぞコバヤシ!!」

「捕まえたのは私ですけどね」

「ちゃんとバフ掛けたでしょー!」

「まあ努力は認めてやる。もってけ」

「あ……」

コバヤシから手渡される、綺麗なアクセサリ。
初めて貰った、自分の物。

「コバヤシ、私には?私には何かないんですの?」

「宇宙筋肉でも持ってく?」

「……くすん」

どうしよう、嬉しい。

嬉しくて、顔がニヤけちゃう。

「えへへ」

「それ、ただの安物アクセなんだがな。そんなに嬉しいのか」

「うん！今まで自分の物なんて持たせてもらえなかったから！持っても取り上げられちゃうもん！」

「……」

「うーーーーーわ……」

何か、二人が凄い変な顔してる。

私、何か変な事言ったかな？

「アルトリア、何か食べたい物ありますか？作ってあげます」

「む、そうやって私に女子力マウント取るの？」

「いいから頼んどけドカ食い娘。お前の事だから、普段から10個くらいい頭の中にメニューあんだろ」

「私の事なんだと思ってるんだコバヤシイ!？」

「すんんんんんげえ可哀想な子」

「よーしその喧嘩買うからな!!」

がんばれモルガン

「コバヤシ。私と貴方が共同でブリテンを統治するプランを考えたのですが」

「バーゲスト、コーヒーおかわり」

爽やかな魔界の朝、朝食をペロリと平らげたコバヤシはモルガンの話を聞かなかった事にした。もし考えてしまえば、折角のバーゲスト特製の美味しい朝食を全て戻してしまいそうになる。リスク回避は当然だった。

「コバヤシ、せめて話だけでも聞いてください。きっと貴方にもメリットがありますから」

「へえ。ブリテンの面倒見るのに値するメリットねえ。ま、言うだけ言ってみろ」

「まず、貴方を私の夫として迎え入れます」

ドタバタと、キッチンからバーゲストがコーヒー片手に慌てて戻ってきた。

「へへへ陛下!!何をどさくさに紛れて求婚しているのですか!!コバヤシも言わせておいて良いのですか!?!」

「どうせ仮定の話なんだし好きに言わせておけばいいじゃん。で、続きはっ..」

「私と夫婦になった貴方は、私の体を好きにする権利を得ます。コバヤシ、私の体では不足ですか?」

「お前の体じゃ全く釣り合い取れませんけど?」

モルガンの口がへの字に曲がった。分かりやすく不機嫌になっておられます。

「例えば、お前の体を好き勝手にできた俺の幸せポイントが10だとしてよう。これにブリテン統治という不幸せポイントがマイナス一万足されるわけだから、俺は9990ポイント分の不幸に見舞われる訳。お分かり？」

「なるほど。私の体を1000回好き勝手にすれば釣り合いが取れるのですね。安い出費です」

「どうしようコイツ引く気ねえ」

1000回!?と絶句するバーゲストを他所に、モルガンは勝手に計算して勝手に納得していた。

「改めて伝えた事はありませんでしたが、私は貴方に深く感謝しているのです、魔王コバヤシ」

「ほー」

「最初こそ、貴方を利用しようという気持ちも少し……いえ、むしろそちらの方が大きかった。

ですが、貴方はバーヴァン・シーを救ってくれました。今世で終わりを迎えるはずだった、我が娘の辿る道を覆してくれた。

私はあの子の為なら、私の夢……ブリテンを捧げても良いとすら考えていたのです」

「重いわ」

重い。想いが重い。ギャグでなく本当に重い。想われているバーヴァン・シーがプチッと潰れてしまうくらい重い。

4000年もの間、救世主トネリコとしてブリテンを救おうとし、裏切られ続けて救うのを諦め、それでも更に2000年もブリテンに君臨し続けた彼女がブリテンを捧げても良いという。

仮に個人の想いの重量が計れたとして、彼女のブリテンへの想いを表す重さの単位など存在しないのではないだろうか。

「貴方は私に様々な可能性の扉がある事を教えてくれた。汎人類史、

異聞帯の更に外の世界。知識では知っていましたが、私自身が足を踏み入れるだろうとは夢にも思いませんでした。

……未だ問題は残っているとはいえ、今の生活は楽しい。かつて仲間達と共に歩んだ、割と気に入っていた冒険と挑戦の日々を思い出しました。

私は貴方になら、身も心も全て捧げられます」

「自分丸ごと俺にくれてもいいとは、殊勝な心掛けだな」

「ええ。ですから私の夢であるブリテンも貴方へ捧げます」

「いらないんだけど」

理性が残っているとはいえ、今の彼女はバーサーカー。多少の齟齬を無視してブリテンをゴリ押してくるモルガンに、コバヤシも飄々と躲し続けるのも限界だと感じ始めていた。

しかし今更モルガンを放り出すのは彼の理念に反する。持ち主としての責任を放棄するなど彼自身が許すわけも無し。何よりそんな事をすればバーヴアン・シーが泣く。わんわん泣く。それだけは避けなければならぬ。

そして一方で、この提案を受けるしかないかもしれないと考えるようにもなっていた。

なんせ相手はモルガンである。あのモルガンである。6000年もの間ブリテンに固執し続けていたモルガンである。大半の魔王が裸足で逃げ出す程の執着心を持つ彼女に狙われ、果たして自分に逃げ切る術があるのだろうか？コバヤシは訝しんだ。

魔王化により人間の寿命を克服してはいるが、精々百代後半のコバヤシではモルガンの人生の十分の一すら生きていない。策謀に関しては圧倒的な経験不足だった。

それに打算込みとはいえ、彼女の提案は自分に対する好意の表れでもある。自分に全てを捧げてもいいと言われるのは魔王冥利に尽きるものだ。相手が有能で美女ならばなおの事。故に頭を悩ませる。

「そもそも俺に国を任せるとか正気の沙汰じゃねえよ。今の住人百人

ちよつとのミニ魔界くらいがちようどいいんだ。億単位の住人の面倒なんて、それこそ魔界大統領クラスの仕事だろうよ。俺には向かん」

「ほう……そちらには魔界大統領なる役職が存在するのですね。では妖精國にも同じような席を用意しましょう」

「やべ、墓穴掘ったわ」

一を聞いて十を知る。聞いたばかりの知識を使ってプランを練り直すモルガンにコバヤシは戦慄した。

汎人類史において冠位の肩書を持つマーリンに比肩する魔術師。天才という言葉すら生温い才能の塊。コバヤシが拾ってきた者の中でも、モルガンの成長はすば抜けていた。

元より魔術を極めた頭脳の持ち主であるのも相まって、魔界で得た魔法と自身の魔術を掛け合わせての魔界での貢献度は計り知れない。その最たる例が分身である。

コバヤシとの戦いでも見せた、自身と同じ存在を魔力で作りに出す分身術。ドーピングで自身の魔力保有量の絶対値が増えたモルガンが、魔界で更に強力になった自分を増やす。モルガンは多数のアイテムのアイテム界に自分の分身を十数体送り込み、装備強化のローラー作戦を実行していた。

魔術と魔法と宝具でアイテム界の住人を焼き尽くし、各階層の宝箱やボーナスを根こそぎ回収しながら進んでいくモルガン達の大行進。魔翔族（巨大な蛾の魔物）の群れに遭遇すると、対処を押し付け合った拳句自滅するという欠点を差し引いても、リソース回収において有効なのは誰の目から見ても明らかだった。

コバヤシの知り合いのゼロツケンという格闘家は魔奥義で五人に分身できるが、モルガンのそれはただの魔術なのでどちらが有用かは比べるまでもない。

更に言えば、モルガンの分身は本体と変わらないスペックを持つ――つまり、分身が分身を生み出す事もまた可能なのだ。

バイバインを振りかけた栗饅頭の如く増えるという、敵からすれば

地獄絵図である。

幸いにも分身は本体の意思で消えるので、増えすぎて魔界がモルガンで溢れかえるという危機は発生しない。モルガン魔術は安全にも配慮されています。

「(甘く見ていたというか、なんとというか。ここまでヤベー奴だとは思ってなかった。あの時はステータス差でゴリ押ししてたから何とも思わなかったが、コイツ元から凄い優秀だわ。

……というか、確かブリテンには女王の座を狙ってる奴等もいるんだったな……え? どうやってコイツを倒す気での?」

もし本気で打倒モルガンを掲げてるなら、モルガンの実力を正しく測れているのだろうか。

魔界に来る前から既に魔術師としては理想形。いかに軍隊を集めようとも、このスペックの分身が可能なら正面からぶつかった所で勝ち目は無い。

生き物や厄災を水鏡の術で過去に送る力も有しているので、厄介なものは妖精歴の終わりにでも飛ばしてしまえば消える。

加えて城にはモルガンがギフトを与えた妖精騎士が鎮座し、果てに妖精國の最強生物の忠臣のウッドワスが控えている。仮にその場になくても水鏡で呼ばばいい。

「(円卓軍や王の氏族に勝ち目無いだろこれ……。もしモルガンの命を狙うなら、信用を勝ち取って懐に入って暗殺……。あ、無理だわ。コイツ妖精眼持ってる)」

真偽を見抜く妖精眼持ちのモルガン相手におべっかは通じない。唯一の泣き所と言えるバーヴァン・シーを人質にでも取れば動揺は誘えるだろう。

まあそれも昔の話。今のバーヴァン・シーをどうこう出来る相手はそういない。いればモルガンの警戒網に引っ掛かる。

「既に新しいキヤメロット城の構図も考えています。凄く硬く、凄く広く、凄く強いのを建てます。今の私の魔力なら、ロンゴミニアドを更に増設しても問題ありません」

「モルガンは偉いな〜……」

ブリテンをめぐるコバヤシとモルガンの応酬は、もう暫く続く事となる。

トネリコの夢

毎日毎日、モルガンからの勧誘を避け続ける日々。アイツとブリテンの事が頭のどこかにこびりついたまま、いつものように寢床に就く。

——微睡んだ思考が急に覚醒し、俺の視界に見た事のない景色が飛び込んできた。

「……………夢か」

何の事もない、単なる夢。だが、起きているのと大差ない体の状態を見て、これが人為的に引き起こされたモノだと確信した。

「そーいや、モルガンは夜魔もコンプしてたっけか…………」

夜魔族。男の望む姿で現れるという淫魔。確か、寝ている相手に自由に見せる能力もあった。

ステータスの引き上げの為にサブクラスをマスターさせていたが、その中には職業だけでなく魔族も含まれている。

夢の中にまで干渉し始めたのか、あの魔女は？

「……………意図的に見せてるのか、それとも…………」

だが、いくらモルガンといえども魔族の力まで自由に操れるとは思えない。サブクラスをマスターしていたとしても、あくまでも力の一部が手に入るだけだ。

俺だって、夜魔族に襲われた事も一度や二度じゃない。頭の中こそう易々と侵入されはしない。

悶々と悩む俺の前を、最近見慣れた金髪が通り過ぎた。

「…………アルトリア？…………いや」

あのみずぼらしい田舎者の服装ではない、シャンとした服を着ているアルトリアに似た何者か。

その眼前には、夥しい数の呪いの化け物が蠢いていた。

「……………まさか」

ブリテンの大厄災を何度も祓った救世主。楽園の妖精トネリコ。モルガンの過去が、そこにいた。

どういう事だ…………？トネリコ時代のモルガンを夢に見るとかどうなってやがる。しかもなんだ、今とは全然性格違うぞ。何か表情豊かだし、見た目だけじゃなく性格までアルトリアに似てたのか？トネリコの事はモルガンからしか聞いていないから、こんなんだとは知らなかったな。

傷つきながらも厄災を祓い除けたトネリコは、妖精達に囲まれて歓迎されていた。

やれ自分たちの救世主だ、自分たちの希望だと…………。

トネリコも満更でもない表情で揉みくちやにされていた。

「……………」

見てるだけなら微笑ましい、後々英雄記として語られそうなページ。
ジ。

だが俺は知っている。

トネリコの歩む道を。トネリコの運命を。

『どうして…………!?私じゃない！私のせいじゃないのに！私は皆の為に』

戦ったのに！どうして!?!』

救世主として扱われていたのもつかの間の事。トネリコは助けた妖精達から追われる身になっていた。

大厄災は退けたが、呪いの怪物モースは変わらず湧き続けている。誰かがそれを、大厄災を祓ったトネリコがここにいるせいだと言いついた。

石を投げられ拳を振るわれ、泣く泣くトネリコは逃げ出した。歓声は罵声に変わり、感謝の気持ちも消え失せた妖精に追われたトネリコは意気消沈していた。

『……きつと、皆不安なんだよね。うん、次はもつと上手くやろう。皆が笑えるように。皆が救われるように』

妖精眼で妖精の本音なんぞ見えていただろうに。トネリコは気丈に振舞っていた。

けれど、いくらトネリコが優しくあっても妖精は変わらない。災害が起きたならその力を頼られ、災害を治めたならその力は疎まれる。楽園から遣わされたトネリコは大厄災からブリテンを守る使命があり、いくら酷い目に遭おうとそれを放棄するような真似はしなかった。

トネリコには僅かだが仲間もいた。彼女の苦悩を理解し、苦楽を共に出来る本物の仲間が。

「アルトリアよか、多少はマシ……なのか?」

いや、どっちもどっちだろう。どちらも悲惨だ。

そもそも、こいつらにブリテンでの居場所なんて無いのだから。

『くそー！みんな寄ってたかってトネリコをいじめやがって！』

『いい加減、ウンザリしてくるな』

『うん。でも逃げるわけにはいかないよ』

「……いや、逃げていいだろ」

思わず口から出た言葉に、夢の中のトネリコは何も返さない。

その背中が、あまりにも小さい。

モルガンが語った歴史と相違なく、トネリコはそれからも迫害され続けた。どれだけ努力しようとトネリコの周囲を渦巻く運命は変わらない。何も変わらない。

トネリコは年々消耗していく。心も体も、傍から見えないが擦り減っていく。

当たり前だ。誰が耐えられるんだこんなの。

「なあ、トネリコ。もうやめようぜ」

『……………』

「いくら頑張ったって、妖精共がお前を本当に称える訳無いだろ？使命なんて捨ててしまえばいい」

一人歩くトネリコに、悪魔のように囁いてみた。返事が無いのは分かり切っているが、あんなモンずっと見せられて、正直こっちも参ってんだ。

「救世主なんて止めよう。こんな世界勝手に滅べばいい。自分達の工ゴで滅んで泣き叫ぶ様を、遠くから眺めてればいいのさ」

『うるさい』

「おうっ……………!?!」

一瞬返事が返ってきたかと驚いたが、どうやらそうでもなさそう
だ。

トネリコはしゃがみこんで耳を塞ぎながら、自分に暗示をかけるか
のように呟き続ける。

『うるさい、うるさい……！皆がなんて言おうと、なんて思っよう
構うもんか。』

私は諦めない。私はブリテンを救うんだ！

もうブリテンを、失わなくて済むように……！』

「」

これは、無理だ。

無理だと悟ってしまった。

トネリコは止まらない。誰が止めようと止められない。

「お前が頑張るのって、案外普通の理由だったんだなあ」

勿論、これはただの夢なのだが。どうにも俺は、モルガンが頑張り
続ける理由が間違っていないように思えるのだ。

仲間達と焚火を囲み、珍しく上機嫌のトネリコ。
明日に控えるのはロンディニウムでの戴冠式だ。

『これで旅も終わりか』

『ああ！トネリコの頑張りが報われる時が来たんだ！もうすぐ平和な
国が出来るんだぞ！』

『ええ。これで私の使命ももう終わり。ようやく楽園に帰れます』

妖精の氏族達を少しずつまとめ上げ、円卓軍のウーサーを王としたブリテン国の誕生する日。

トネリコのこれまでの集大成とも言える、先の先まで見据えた最大級の試みだ。

だがあのウーサー坊や、確実にトネリコにホの字だったんだけど。お前、放置して帰る気？

焚火から離れたトネリコが、夜空を見上げてひとりごちる。

『ようやくここまでこれたんだ……。皆が笑える国。妖精達も協力してくれるし、大丈夫だよね』

『……あはは。ホント、大変だったなあ。次こそ上手くやってみせるって、二倍頑張れば、二倍石を投げられる。』

幽閉。磔刑。斬首。水牢。火刑……』

「うげえ……」

やめろや、嫌な事思い出させるの。

閉じ込められて衰弱しきったトネリコ、磔のまま放置されていたトネリコ、ギロチンで首がパツと飛んでいったトネリコ、酸素を求めてもがき苦しむトネリコ、体を焼かれて悲鳴をあげるトネリコ……。全部見ちまってるんだぞ、俺。

『あとされてないのは、毒殺くらい……』

「お前——！」

ぼそつと呟いた一言を聞いてしまい、軽い目眩がした。

なんてこった。トネリコは気づけたんだ。催事の前に浮かれてしまい、対策するのを忘れてしまっていた。

もしも、その一言で気づけたのなら。トネリコの未来はまた違った

のだろう。

……だが、気づけなかったとしても、一体誰がトネリコを責められるというのか。

明日はブリテンで一番めでたい日。そう信じて疑わないトネリコに、そこまで考えろというのは酷ではないのか。

明日を、未来を明るいものにするために全てを捧げたトネリコが、明日を楽しみに出来ないなんて、そんなのあんまりではないだろうか？

「……」

でも、まあ。これは所詮、夢だしな。

もしかしたら、トネリコに都合の良い展開になるかもしれない。何事も無く戴冠式が終わり、トネリコは楽園へ帰るのかもな。

『嫌あああああああああ!?!?なんで、なんでえっ?!?』

血溜まりの広間に響き渡るトネリコの悲痛な絶叫。

分かっていた。分かっていたさ、こうなるなんて。モルガンに聞いた通りの展開だ。

トネリコが面倒を見ていたウーサー坊やは死んだ。

トネリコが集めた円卓が死んだ。

人間の杯に毒酒が盛られ、皆一斉に殺された。

人間に支配されるのを嫌がった、少数の妖精の蛮行だ。

トネリコの反応が遅れたのは、彼女の酒には毒は仕込まれていなかったからだ。これが偶然なのか、それとも計略の内なのかは判断つかないが……。

『ウーサー!!ウーサー、ウーサー、ウーサー……!!お願い、もう一度、もう一度何か言って!みんな、これまで頑張ってきたのに!!』

錯乱したトネリコは何も言わないウーサー坊やを揺すり続ける。トネリコの服に血が染み付いていく。

お前はウーサー達の事を優秀な道具だとか言っていたが、それでもそれなりの愛情を持って接していたんだろう。それが無惨に殺されて、何も思わない女じゃない。

人間の断末魔が聞こえる。妖精兵士の怒号が聞こえる。円卓軍はここで皆殺しにされる。

トネリコはこれを仕組んだ黒幕として、また妖精達に追われる。

これまで散々ウーサーやトネリコを頼り、讃えていた妖精達も掌を返し、この虐殺に嬉々として参加するだろう。

トネリコは逃げた。燃え盛るロンディニウムから必死に逃げた。妖精とは名ばかりの畜生から逃げ続けた。

『はあ、はあ……あ、は。あはは……あははははははははははははは
!!』

トネリコは狂った。狂って笑った。泣きながら笑った。

狂って当たり前だ。むしろ今まで良く保ったほうだと思うぞ。

トネリコは自分達を氏族達に売った妖精の記憶を消し、トネリコ的身代わりとして奴等に殺させた。

トネリコは死んだ。この世界の救世主はもういない。

妖精達が引き上げて、全てが燃え尽きたロンディニウム。新たな城になるはずの場所は、瓦礫と灰だらけの墓所になっていた。

『私は妖精を許さない。私は妖精を救わない』

ロンディニウムの真ん中にトネリコは立つ。より良い世界を目指した街の成れの果て。風に吹かれて舞う灰が、トネリコの体に纏わりつく。

『私は魔女。モルガン・ル・フェ。救世は止める。私がブリテンを支配する』

煌めく黄金のような髪の毛の輝きは、仄暗い灰色の下に埋もれた。

俺のよく知る、モルガン・ル・フェの誕生だ。

「……………ん、な?」

一瞬、視界にノイズが走り、次の瞬間に別の場所になっていた。

「……………ここは確か、モルガンがいた広間か」

俺がモルガンと対峙したキャメロットの大広間。今、俺の目の前には、多数の兵士に囲まれたモルガンがいた。

玉座を離れ、何故か手負いのモルガンに対峙するのは土の氏族長のスプリガンという男。

『モルガン陛下。ブリテンはあなたの庭ではない。少女らしい夢からは、そろそろ卒業して頂こう』

『……………舐められたものだ。例え首だけになろうと、雑兵に討たれ

る私では——』

杖に魔力が迸る。目の前の反逆者共を焼き尽くさんと、女王モルガンは杖を、振るおうとした。

』

振るえなかった。奴の近くには手足が腐り落ちたバーヴァン・シーがいた。

「……野郎」

モルガンの唯一の泣き所。どうやって手に入れたかは知らないが、最も効果的なカードを最高のタイミングで切ってきた。

動きが止まった隙を見逃さず、兵士の凶刃がモルガンを襲う。

四方八方から斬りつけられ、倒れ伏すモルガ——

『なんとお!?!』

——モルガンは倒れない。咄嗟に左手だけを庇い、魔力の刃を纏った杖で周囲の兵士を斬り殺した。

『は——、ア——……。舐めるな、と言った』

「——見事」

思わず身震いする程の圧倒的な王者の風格。死に体であろうと僅かにも薄れない執念がモルガンを立ち上がらせていた。

ボロボロの状態でゆっくりと玉座へ戻ろうとするモルガンを、妖精達は遠巻きに眺めていた。

『カメラロットで戦う皆様、どうかお聞きください——』

聞きたくもない声が聞こえてきた。風の氏族長の力でキャメロット中に言葉を流している。

——モルガンの正体は救世主トネリコ。

——トネリコは厄災を引き起こし、氏族の絆を乱していた。

——トネリコはウーサー王を殺した。

——そのせいで大厄災は過去最高の規模になった。

——ブリテンは一度滅び、モルガンによって蘇った。

——モルガンは世界樹を枯らし、その魔力でブリテンと妖精達を蘇らせた。

——妖精達はモルガンの私利私欲の為に苦しめられてきた。

聞きたくないから聞き流したが、ざつとこんな感じの事を言っていたと思う。静寂の後、一人の妖精が声を上げた。

『……ひどくない?』

『ひどい』

『ひどいよね。女王が聞いて呆れるよね』

「酷いのはお前らの頭の出来だよ……」

ここに居るなら、お前らどつちかと言うと搾取る側だったんじゃないのか?何をいまさら被害者ぶってるんだか……。

そもそもこんな話鵜呑みにするのか。トネリコが厄災を引き起こした話、どつちから出てきた?

あー……。でもウーサーが殺された後、偽物とは言えトネリコが処刑されたのか。否定するの難しいかこれ……。

『はあ……はあ……っ』

またこの繰り返しだ。妖精共は寄つてたかつて、死に体のモルガンに物をぶつけ始めた。

……ただ、今度のモルガンは逃げなかった。止まらずに玉座へと向かう。

『——ぐっ。貴様たち、なにを——』

『うるさい！もう騙されないぞ、悪辣な魔女め！』

『お前のせいでこんな酷い世界になったんだ！』

妖精共は落ちていた剣を拾つてモルガンへ突き立てる。あらん限りの罵詈雑言を投げつけながら。

『怠慢だ！もつといい世界なんていくらでも作れたのに！』

『役立たず！役立たず！お前なんかもういらぬ！』

剣を突き刺す。踏みにじる。不快な音が聞こえてくる。

血みどろのモルガンは地に倒れ伏して尚、玉座へと手を伸ばす。

『やめろ、やめろ——。誰か、私を、玉座に——』

不快感のままに魔法を放つ。

炎。風。氷。星。

その全てが通り抜ける。

『やめて、誰か、お願い、私を、玉座へ——』

この場に仲間はいない。モルガンの願いは叶わない。どうしてお前は一人なんだ。

一人で出来る事なんて、たかが知れているだろう。

『玉座に、戻せ——！もう、ブリテンを、失いたくない——！』

」

モルガンが動かなくなると、今度は捨てられていたバーヴァン・シーに目を付けた。

バーヴァン・シーはぐちやぐちにされ、大穴へ捨てられた。

俺は動かなくなったモルガンの傍へ行く。

俺はモルガンの頭に触れた。

まあ、触れないからフリなんだがな。

「お前はよく頑張ったよ。逃げずによくやってきた」

もしかしたら、俺がブリテンに来なかつたら。モルガンやバーヴァン・シーの末路はこうなっていたのかもしれない。

結局は夢の中の出来事。現実でモルガンやバーヴァン・シーはこうはならない。

外から耳障りな歓声が聞こえてくる。モルガンが倒されたのを喜んでる。

こうして悪逆非道の女王は倒されました。めでたし、めでたし。と
いった所か。

「――冗談じゃない」

「おはようございます。良い朝ですね。……少し顔色が悪いようですが？」

「ああ、昨夜の夢見が悪くてね。思い出したくも無いから聞かないでくれ」

「それは災難でしたね。もし続くようであれば相談してください。悪い夢を追い出す手段はいくらでもあります」

反応から察するに、モルガンが意図してあの夢を見せたわけではなさそうだ。

「おはよーコバヤシ！ねえねえ、アルトリアに新しい服着せたいんだけどさー、嫌がって着たがらねーの。説得して？」

「そんなお腹丸出しの色々際どい服なんか恥ずかしくて着れるかー！！」

バーヴァン・シーとアルトリアはいつの間にも仲良くなったのか…。波長が合うのだろうか。

「服かー。僕も新しい服が欲しいな。コバヤシ、一緒に買いに行こうよ。恋人の君に似合うのを選んでほしいな」

「眠いならもう一度寝たらどうですメリュジーヌ。起きながら寝言を言うなんて淑女として恥ずかしいですわ」

「え？僕はちゃんと起きてるけど？」

バーゲストはメリュジーヌと仲があまりよろしくないらしい。と
いうかいつの間にか恋人扱いになってんだ……。

やいのやいの言いながら、結局みんなが同じ食卓を囲むんだよな。

「なあ、モルガンよ」

「はい、なんですか？」

「もうさ、ブリテンなんかぶっ壊しちゃおうぜ」

「——え？」

そんな和やかな食卓をぶち壊す俺の発言。モルガンは明らかにうろたえて俺を見つめる。

「そんな、何、を——」

「気に入らない妖精共を皆殺しにして、くだらないしがらみも全部ぶち壊して、更地にしてやってさ。妖精共の亡骸で新しい島を作ろうぜ。」

お前が気に入ってる奴だけ連れて行って、小さな島で暮らせばいい。統治だって簡単だ。皆が仲良く幸せに暮らせる、お前だけのブリテン島を作ればいい。

資材が足りないなら、こっちで融通してやっても構わないぞ。こう見えて、お前の働きは評価してるからな」

モルガンはこちらを見て動揺している。妖精眼で分かるだろう？
これは俺の本心だ。

あんな面倒くさい場所、一旦全部掃除してしまえば楽になる。今のお前ならそれが可能だ。

「ま、待って、ください。どうか、それだけは——」

「嫌なのか？」

「……はい。嫌、です」

モルガンは俺の目を真っ直ぐ見返しながら、ハッキリ嫌だと答えた。

「確かに私はブリテンを支配したい。でも、壊したいわけではないんです。

——私はただ、ブリテンを失いたくないだけなんです」

——そうか。今も昔も、お前の願いは変わっていないのか。

故郷を守りたいという、誰にでもある、ありふれたシンプルな理由。それは単純で。単純だからこそ、強くて折れない。

「ふーん。言ってみただけだ。お前が嫌だって言うならやらない」

ホツとして、胸を撫で下ろすモルガン。緊張した空気が緩んでいくようだ。

「俺はな、ミニ魔界を運営するにあたって自分でルールを決めてる」

「ルール、ですか？」

「ああ。働いた奴には報酬を必ず与える」

何を当たり前の事を、と思われるかもしれない。だが、その当たり前が力の差で消えるのが魔界だ。

「そりゃあ、仕事の出来でイワシが煮干しやシラスに変わったりもする。でも報酬そのものを出し渋った事はない」

それが俺が自分に課したルール。無償の奉仕なんて馬鹿馬鹿しい。俺はそんなのやらないし、させない。

「お前は、俺になら身も心も捧げると言ったな。その言葉に嘘は無いな？」

「——はい。貴方が望むなら。未来永劫、貴方に私の全てを委ねます」
「そうか」

俺はお前に同情しない。お前を哀れとは思わない。

どれだけ酷い最期を迎えようとも、どれだけ厳しい旅路だったとしても。

お前自身が選んだ道だ。困難を承知で進むと決めた道だ。

……………

だがまあ、それはそれとして。

本当は嫌だが。死ぬほど嫌だが。

お前の献身の見返りに、お前が一番欲しいものを用意しよう。

「——モルガン・ル・フェ」

「——はい。我が夫」

「——お前にブリテンをくれてやる」

帰還

魔王と女王、両者が初めて相まみえた最初の地。今はただの瓦礫の山と化したカメラロットの前にモルガンとコバヤシは転移した。

「まずは我が城を建て直しましょう」

「おう。と言つても暫くかかりそうだな。先にお前が戻ってきたのを妖精國全部に知らせるか？」

「問題ありません。投影魔術を用いてすぐに建てられます」

「……………なんて？」

何言つてんだコイツ。コバヤシは信じられないという目でモルガンを見やる。

「投影魔術というのは、魔力を用いて物質を——」

「いやそれは分かっている。だが城だぞ？設計図とか見取り図とか無いだろ」

「？すべて頭にありますよ。我が城カメラロットは住居であると同時に、私専用の巨大な魔道兵器でもあるのです」

ロンゴミニアドを効率的に使用するために城や周囲の住居全てに術式が埋め込んであるのです。私の今の魔力ならば、更に改良したカメラロットを即座に投影可能です」

「お前、何当たり前みたいなの顔して……………いやもういいや」

一つの都市を瞬時に作り上げられるというモルガン。当然ながら魔王だつてそうそう出来やしない芸当を前に、コバヤシは追及を止めた。

「んで、改良つて言つてたけど具体的には？」

「まずはロンゴミニアドの増設ですね。前は12基ありましたが、私の魔力の強化に合わせて100倍にします」

「全部で1200基……どう配置する」

「大穴を囲むように配置して、それと他の外敵にも対応できるように仰角も広くしましょう」

「外側の城壁にも付けたらどうだ？」

「必要の際には、砲台ごと建物を動かして城壁側に再配置できます。置くのは大穴だけでよろしいかと」

「あー……そうか」

正に要塞都市だ。やり過ぎだと思わなくもないものの、魔王級の相手を想定しているならこれも致し方ないと改造を認める。

「それより、私達の部屋はどうしましょうか」

「部屋？」

「ええ。やはり夫婦なのでから寝室は一緒にするべきかと思いましたが」

「ここに泊まる気は無いぞ」

「恥ずかしがらずとも。私達の部屋は誰にも邪魔されないよう、他の部屋とは距離をとった場所に配置します」

モルガンは距離を詰め、コバヤシの腕を取って自分の体で抱くように絡めてくる。

「わざわざ気を遣ってくれてありがとうよ。でもミニ魔界あるし要らんから」

「そうですか……。でもいずれ、凄い部屋を作りましょう」

あつさり引き下がったと見せかけて、諦める気ゼロである。流石モルガン。さすモル。

『妖精國に住まう全ての者。この私、モルガン・ル・フェの言葉を聞か
がよい』

世界の端から端まで届く声。妖精國に君臨する女王の帰還が、他な
らぬ彼女自身から告げられる。

『私は魔界へと赴き、再びこのブリテンを支配する為に帰ってきた。
崩壊したキャメロットは既に復活している。いや、更なる強化を施
して生まれ変わったと言っていていいだろう。』

明日、我が城にて新たなブリテンの誕生を宣言する。氏族長、三十
の大使、百の官司の出席を命ずる。

これに背く愚者はいないだろうが、もしこの命令に背く者がいるの
なら、その者の命は明日までだと知れ。

尚、氏族長については妖精騎士の迎えを出す。以上だ』

それは一方的な宣告だった。

ある者は我等の女王が帰ってきたと歓喜した。

ある者は新たなブリテンの誕生に困惑した。

ある者は残忍な支配者が帰ってきたと悲観した。

ある者は予言が覆ったと混乱した。

あらゆる感情が妖精國を駆け巡るが、女王の命令とあらば従う他無
い。それが妖精國の定めなのだから。

翌日。玉座の間へ続く通路を多数の妖精が歩いていく。先導する
妖精騎士の三人。五人の氏族長に急遽選ばれた大使と官司が後へ続

く。

「ああ、陛下……私は信じておりました。魔王、などという輩にあの方が負ける筈がない。必ずや我々の元へお戻り下さると……！」

「一人でブツブツ言ってるんじゃないやねーよクソイヌ」

「黙れ!!これが喜ばずにいられるか!!やはり我々の王はモルガン陛下をおいて他にはいないのだ!!」

「ウツドワスったら、モルガン陛下がお戻りになられたのが本当に嬉しいのね」

やたら興奮気味の牙の氏族長ウツドワスと、それを微笑ましそうに見つめる風の氏族長オーロラ。

「仕方ありませんまい。陛下や妖精騎士のお三方が姿を晦ました後、妖精國を取り仕切っていたのはウツドワス殿なのですからな

その後もマンチェスターの消失、騎士ランスロットの一時帰還等々、我らのブリテンは荒れておりましたから」

「フン。この程度、陛下が受けた苦痛に比べる程でもない」

「しかし、普段滅多に顔を出されないお二方がここにいるというのは、陛下のお話に余程興味がおありのようですね？」

土の氏族長スプリガンの視線の先に映るのは、モルガンと覇権を争う王の氏族長ノクナレア。そして流行と娯楽の町グロスターを治める翅の氏族長ムリアンの二人だった。

「ええ。わざわざ私の領地まで使いを出して下さったのだもの。それを断るとするのは失礼でしょう？」

「妖精騎士を護衛に付けてまで来いというのですから、その重要性を尊重したままです」

涼しい顔で答える二人だが、その心中は穏やかな物ではなかった。

「冗談じゃないわ……私の衛士達や近衛兵の全てを振り切って、私の目に前にランスロットが飛び込んでくるだなんて。そんなの断る選択肢なんて用意されてないじゃない！」

「……グロスターの町の外から私の部屋の中への狙撃。これも脅迫ですよね……。妖精騎士トリスタン……下級妖精と侮っていましたが、ここまでの腕前とは思ってもみませんでした」

戦いに来た訳ではないので、エディンバラの兵士達が見えない速さで飛び込んで行って『来るよね?』と笑顔で告げたメリユジーヌの手を取ったノクナレア。自室で直接行くのを拒否したら、一本の光の矢で机の上のペン立てを撃ち抜かれ、『出てこい』というバーヴァン・シーの圧に負けたムリアン。今日の会議は一筋縄ではいかない二人が腹を括った所で、一行が玉座の間へ到着する。

喜色満面のウッドワス。微笑みを絶やさないとオーロラ。冷静なスプリガン。覚悟を決めるノクナレアとムリアン。

重厚な扉がゆっくりと開かれ、玉座に座る王者の姿が彼等彼女等の目に入る。

そこにいたのは――

「遠路はるばるお疲れさん」

頬杖をついて座る一人の人間だった。

『はっ。』

妖精達の総意が口から抜け出す。妖精の女王の席に人間が座る。不敬どころの話ではない。そもそもどうやってここに入ったのか。近くにいる女王の近衛兵は何をしている？

疑問が大量に押し寄せてフリーズ状態になる妖精達の中で、一番早く再起動を果たしたのはウッドワスだった。

「キ……キサマツ!!!何処の輩か知らんが今すぐ退けッ!!!その玉座はモルガン陛下以外に座る事は許されん!!玉座を汚すな、人間風情が!!!」

八つ裂きにしてやると言わんばかりの剣幕で詰め寄るウッドワス。理性で抑えようにも治まらない激情を見せる彼を、コバヤシは無感情にじっと見て呟いた。

「真っ先に噛みついてきて、出てくる言葉がそれか。成程、妖精にしてはマシだな。モルガンが忠臣だと自慢してくるワケだ」

「——な、なに?」

戦闘力に長けた牙の氏族長であるウッドワスの怒声を浴びて、屁とも思わぬ豪胆さに怒りをぶつけた本人が困惑する。それ以外にもモルガンが自分を忠臣だと自慢していたという部分が大いに気になるが、他に問いたたださなければならぬ事がある。

「コバヤシ、段取りが違うじゃねーか。お母様はどこ行ったんだよ?」
「会議用の化粧の仕方忘れたとかで、化粧直しに行ってるよ。城の構造を丸暗記してる癖して、なーんで化粧を忘れるかね……」

「マジか、お母様可愛すぎだろ。それでコバヤシは代わりに玉座に座ってたんだ」

「まー、ここにずっと座ってたモルガンの気分を一度味わってみたくてな」

「ふーん。どう?気分良かった?」

「いやあ、最悪の一言だわ」

よっこらせ、と玉座から降りたコバヤシは顔を顰めて伸びをした。

「顔を上げれば見たくもない妖精共の顔がうじゃうじゃウジャウジャ……それで後ろからは洒落にならないモンが漂ってくるし。よくもまあ、2000年も座り続けられたと思うよ」

玉座の後ろの窓から大穴を覗くコバヤシ。隣にバーヴァン・シーがひよっこり顔を出した。

「え、何？あの穴の中にそんなにヤバイもんあるの？つて、キャツ!？」
「はいはい、良い子のトリスタンは離れてましようねー」

バーヴァン・シーを抱えてコバヤシは窓から距離を取る。万が一、億が一を考えて当然のリスク回避である。

「コバヤシ、僕は今日お仕事頑張ったよ。僕にもご褒美があつてしかるべきじゃないかな」

「うるさい引つ込めよランスロット。今は私の番だ。大体お前、オーロラの騎士だつて自分で言つてたじゃねーか」

「そうだね、僕はオーロラの騎士だ。でもそれはそれとして抱っこを所望するよ」

「高い高いしてやるから機嫌直せ」

「わーーーーーい!!」

不機嫌顔で飛び込んできたメリュジーヌが、コバヤシによつて高い高いされて喜んでいる。

それでいいのかメリュジーヌ。

お前は自力でもっと高いところまで飛べるだろメリュジーヌ。

「な…何をやっているんだ奴等は!?!特にランスロット…貴様はオーロラの騎士だというのに、人間に媚びを売りおって……!」

「まったくだ…なんと羨まsじゃない、けしからん」

「……今なにか言いかけなかったか、ガウエイン」

「言つてない」

ウッドワスの追求から逃れるように、顔を背けるバーゲスト。

「どうやら侵入者ではなさそうですね。しかし、妖精騎士が人間に絆され、狼藉を働くのを見逃すなど、他の妖精達にも示しつかないのではないですか?」

「お前の心配は杞憂だ。陛下からも伝えられる事だが、このコバヤシは我々妖精騎士を退け陛下すら倒したお方だ。それにコバヤシは今後、陛下の夫として迎えられる」

「……………今、なんと?」

バーゲストの発言にスプリガンが呆気にとられる。爆弾発言の数々に、計略を得意とする彼の頭も限界にきているらしい。

「——まあ、貴方。もしかして、騎士ランスロットが言っていた魔王様なのね!」

虹色の翅をはためかせながら、オーロラが前に出てきた。

「初めまして、魔王様。私は風の氏族——」

「オーロラ。こっちに来ようか」

コバヤシの手から飛んできたメリュジーヌが、オーロラの手を取って早足で離れていく。

「あ、あら?…どうしたの私の騎士様?」

「うん。僕はオーロラの騎士ランスロット。君の命を全力で守っているんだ。だからここにいてくれ頼むから」

集団の一番端へオーロラを移動させ、固く手を繋いで離さないメリュジーヌのファインプレーに続き、コバヤシの視界にオーロラが入らないようにバーゲストが恵まれた体躯を活かして視界を塞ぐ。

注意深くコバヤシを観察していたムリアンが、オーロラが出てきた時のコバヤシの目を見て小さな悲鳴を上げていた。

「コバヤシ、コバヤシ？落ち着きましたか？」

「————。おお。平気だ、平気。大丈夫。気を遣わせたな」

「いえ、お気になさらず」

コバヤシの気性を確認するバーゲスト。よく見ると、額には汗が浮かんでいた。

よく分からないが、何かしらの爆発は避けられたのだろうとムリアンは結論付けた。

「……待て。夫？夫と言ったか!?どういう事だ！陛下の夫となる人間の名はベリル・ガットだったはずだ！奴はどうした!?!」

「ああ、離婚したよ」

ウッドワスの問いにコバヤシは簡潔に答えた。あまりにもあつさりとした答えだった。

「離婚って言っても、元々形だけの関係だったみたいだし、そもそも相手の許可も貰ってないけどな。まあ、もう死ぬまで夢の中だろうから許可なんか要らんだろ」

「可哀想なレッドベリル……。私、彼とは仲良しだったからあんまりだと思っわ」

「そう言うなよ。自由にさせたら邪魔にしかならんし、死ぬまでは夢

の中でたっぷり楽しんでるんだからこれでも情けはかけてるんだ。一応、モルガンを呼んだ功労者でもあるからな。

あのニュー・ダーリントンとかいう趣味の悪い見世物小屋はぶっ壊したがな。あー胸糞ワリイ……」

ニュー・ダーリントンが潰されたというのは、氏族長達にとっても朗報と呼べるものだった。毎日殺戮が行われていたあの場所とモルガンの元夫は、全員から嫌われていたのだから。唯一の例外はバーヴァン・シーだけだ。

しかし、代わりに出てきたのもまた人間。三人の妖精騎士がその存在を認めているのだから、夫というのも狂言でもないのだろう。

「ニュー・ダーリントンを消した、というのならば。同じ夫でありながら、あなたはベリル・ガットとは違う立ち位置なのですか？」

「そうなるな。なんか、モルガンと同じような立場になるんだと」

場がざわめいた。モルガンと同じ立場という事は、妖精國が妖精と人間に支配されるという事だ。

「ば、馬鹿な!?女王陛下は何をお考えなのだ!?!」

「よりにもよって人間に、この妖精國を任せるというのか!?!」

「ベリル・ガットは一つの町だったからまだ良かった!それがいきなり頂点に人間を置くなど!?!」

喧々諤々。玉座の間は妖精達が騒ぎ立てる場に早変わり。ウッドワスやノクナレアは降って湧いた人間の魔王を睨みつけるが、彼は隣のバーヴァン・シーと共に騒ぎ立てる妖精達を眺めて顔を顰めさせていた。

氏族長である自分達を意に介さない態度に腹も立ったが、有象無象の妖精とは違うという自負も持っていた為に騒ぐような真似はしなかった。

やがて矛先がコバヤシへと向かい、一人の牙の氏族が詰め寄った。

「おい人間!! いかにか女王陛下より任命されたとはいえ、自分の立場を弁える事だ!」

「は……」

「人間など所詮下等生物! 我らに飼われているに過ぎぬ存在! 貴様の全てを我らに捧げ」

「やかましい」

目の前のうるさい存在の口を片手で鷲掴み、黙らせる。牙の氏族は驚き、次いで怒りで口から手を外させようと藻掻くも外れない。その鋭利な爪も、逞しい足から繰り出される蹴りも、衣服に傷一つ付けられず、魔王の体を僅かに揺らす事すら叶わない。

「自分らがそんな大層な存在だと思ってるのか、歯車にもなりやしない世界のゴミの分際でおお。」

誰が好き好んで、お前らみたいなの面倒見るかよ。モルガンが欲しげらなけりや、ブリテンなんざ妖精諸共、塵にしてやれるのに……」

相手にするのも面倒くさい。倦怠感すら滲ませながら、魔王はゆっくり歩を進めた。押さえられた哀れな牙は拮抗すらできずに後退し、騒ぎ立てていた妖精達は関わり合うのを恐れるように道を開ける。

「立場を弁えろ、カスみたいな力しか能の無い雑魚が。弱者は強者に従うだけ。だったら黙ってモルガンに従ってりゃいいんだよ。」

ブリテンを良い方向に回せない癖に、反抗心だけ持ちやがってクソ妖精共が……」

激しい音を立てて、魔王は手に持った妖精を壁に押し付けた。ガツチリと塞がれ、空気の通り道の無い口からは悲鳴すら漏れない。肉に指が食い込んでいく。魔王の力は一層強まっている。

助けを求めて妖精騎士を見るも、誰も動こうとはしていない。メリュジーヌはオーロラのお守り。バーゲストとバーヴァン・シーは呆れた表情。女王の側近の妖精騎士にも既に事情は説明済みなので、コバヤシの邪魔はしない。

「……………まあ、お前らにそういうの考える頭が無いのも分かった事か」

コバヤシが手を放し、牙の氏族は地面に崩れ落ちた。振り返ったコバヤシに広間に居る者の視線が集中する。

それを受けて笑う。コバヤシは笑う。貴様らなぞ道に落ちている小石も同然だと魔王は嗤う。

「今日から新しいブリテンが始まる。今まで自由に生きられて良かったな。モルガンがいらないちよつとの間、良い夢は見れたか？」

支配者面で無能がのさばる世界は終わる。妖精なんてもう、大した事の無い存在になる。

氏族長の奴等もそうでない奴等も、頭の中で何か企んでる奴等も頭空っぽの奴等もご愁傷様。

俺とモルガンが戻ってきた時点で、一部を除いてお前らの企みはゼーんぶご破算だ。

これからは精々、擦り切れて消えるまでブリテンを回す駒になって生きててくれ」

魔王の口が弧を描く。それだけで妖精達は恐怖し、氏族長は汗を吹き出し顔面蒼白となる。

ブリテンの外より飛来した、暗黒の世界を渡り戦乱を生き抜いた人間の超越者。

ブリテンという狭い島の中で、罪にも過ちにも気づかないぬるま湯に浸りきった脆弱な生命体に、抗う術など無かったのだ。

「モルガン陛下がご到着されました」

使いの妖精騎士の言葉で我に返る。コバヤシは転がっている妖精を妖精の群れの中へ蹴り飛ばすと、バーヴァン・シーの所に戻った。

「これ、俺も平伏した方がいいのかね？」

「そうしたらお母様の反応が面白そうね！」

「モルガン陛下の心労を増やすような真似は止めなさい」

「ちえっ、お堅い所は変わんねーな」

バーゲストに止められ、バーヴァン・シーは面白くなさそうに鼻を鳴らす。妖精達が頭を垂れる中、水鏡より女王モルガンが玉座へ姿を現した。

「我が夫、お待たせして申し訳ありません」

「構わんよ。それよりさっさと済ませてくれ」

「そうですね。では、この場にいる貴様らに、今後のブリテンの方針を伝える……その前に。ウッドワス、前へ」

「!?ハ、ハッ!!」

我が夫呼びに戦慄していたウッドワスが、モルガンに呼ばれて玉座の前へ移動する。もしや、自分が代わりを務めていたのを不満に思い、叱責されるのだろうか。そんなウッドワスの内心など知らずに、モルガンはウッドワスの顔に手を添えた。

「排熱大公ウッドワス。私が不在の間、このブリテンを良く纏め上げていたな。手助けこそ出来なかったが、お前の仕事ぶりは魔界から見えていたぞ」

「い、いえ私など、モルガン陛下の足元にも及びませんでした。現状維持に努めるばかりで、陛下の行方を捜す事すらできず……」

「そんな事は無い。他の者なら投げ出しても不思議ではない現状を、

お前は投げ出さずに代表として務め続けた。あまり言葉にしていなかったが、お前の忠誠心と過去から学ぼうとする姿勢は評価している。凡百の妖精とお前は違う」

「——」
声が出なかった。夢かと錯覚さえした。あのモルガンが自分を褒めちぎっている現実に、ウッドワスの心は天にも昇る思いだった。

「本能のまま動く事の危険性を理解し、肉食主義を掲げて理性を身に付けようとしていたお前の気苦労は知っていた。だからこそ私も、お前の本能を刺激する戦場にはあまり送りたくなかったのだがな」

「そ、そのようなお考えであつたとは!?!申し訳ございません。このウッドワス、陛下のお心遣いを理解できておりませんでした……!!」「構わんさ。我が夫からも、『お前は言葉足らずの上に行動的だからいらん誤解を生む』と指摘されてな。こうして内心をさらけ出したに過ぎない」

「……………さ、左様で」

コバヤシは天を仰いだ。確かに言ったが、今ここで言わんでもいいだろう。きつとウッドワスは幸福な気持ちに水を差されたに違いない。言葉足らずを治そうとしたら、今度は一言多くなった。

「思えば、こうしてお前を労ってやる機会も少なかった。何か褒章を用意してやるが、何がいい?」

「そのようなものは!!私には今のお言葉でもう充分でございます!!これほど我が心が満たされた経験はございません!!」

「……………そうか?お前は無欲なのだな。働き者には褒美を取らせる。お前の忠誠に期待しているぞ」

「ハッ!!」

実は久々の毛並みを堪能していたモルガンはウッドワスを下から

せる。再び妖精達を見下ろすモルガンに、先程までの温かい表情は無い。

「貴様らの知つての通り、私と三人の妖精騎士は我が夫、魔王コバヤシに敗北し魔界へと連れ去られた。その折に私達四人は魔王コバヤシの所有物となった。それは今でも変わらない」

妖精達に動揺が広がる。

「魔界とは、汎人類史の更に外に存在する魔境。この私ですら少し強いただけの生き物に過ぎない、文字通りの地獄だろう。

だが、幸運にも我が夫の庇護の下で私は力を蓄えた。妖精騎士も同様だ。

よつてまずは、妖精騎士の加護を取り除き、改めて任命しなおす。

騎士ガウエインは騎士バーゲストへ。

騎士ランスロットは騎士メリュジーヌへ。

騎士トリスタンは騎士バーヴァン・シーへ。

この三名は、私と同様にコバヤシに仕える騎士でもある。各々それを忘れぬように」

名を呼ばれた妖精騎士は頭を上げ、モルガンとコバヤシに視線を向けた。二人が頷いて返すと、モルガンは更に続ける。

「そして新たな役職、妖精國大統領を任命する。これは魔王コバヤシにのみ与えられる役職であり、他の何者も就くのを許さない唯一無二の存在として扱う。尚、立ち位置は妖精國の女王である私と同等だ。今後のブリテンは、私と我が夫による共同作業で統治する」

モルガンはコバヤシに視線を向け微笑んだ。コバヤシは曖昧な笑みを返した。

「バーヴァン・シーだつて……!?その名前、知っているぞ!」

「俺もだ!ダーリントンの屋敷にいた、吸血鬼バーヴァン・シー!」

「女王陛下は吸血鬼なんかを娘にしていたというのか!」

「人間の血を吸って生きるケダモノ!ああ、汚らわしい!」

「……………コバヤシ、このゴミ共全員殺していい?」

「よせよせ。ただでさえゴミみたいな連中が動かなくなったら、本当のゴミになるじゃないか」

騒ぎ立てる妖精に対し、殺意マシマシで睨みつけるバーヴァン・シー。すぐに殺しにいかない辺り、彼女もまた体と共に心も育っているのだろう。

「貴様らが我が娘に何を思おうと構わん。好きな事を考えられるのは、この瞬間だけなのだからな」

モルガンが杖を手に玉座から立ち上がる。

「認めよう、私は愚かだった。お前たちの幸福がどういふものか、考えもしなかった。お前たちに生きる楽しみを与えてやるべきだった」

妖精達は困惑してモルガンを見る。だが、その口ぶりから自分達に楽しい事を提供してくれるようだ。

あの邪悪な支配者が、魔界へ行って大人しくなった。

そんな事を考えている者もいた。

「そして気づいた。私自らが教えてやればいいのだ。私が与えてやればいいのだ。——チャーム魅了」

妖精達に向けて放たれたのは、魔界で身に付けた魅了の魔法。魔法をかけた相手を自分に夢中にさせる状態異常にする。ただ、モルガン

が使ったものは少し改造されていた。

「モ……モルガン陛下バンザイ!!」

「モルガン陛下バンザイ！モルガン陛下バンザイ！モルガン陛下バンザイ！」

「「ブリテンバンザイ！ブリテンバンザイ！ブリテンバンザイ！！」」

モルガンを、ブリテンを賛美し始める妖精達。目を剥く氏族長達を後目に、モルガンは指示を出す。

「監視員、あれらを労働施設に連れて行け」

「御意」

列を成し、監視員に連れて行かれる妖精達。歩いていても賛美は続いている。やがて声が聞こえなくなると、ウッドワスは震える声を絞り出した。

「へ、陛下……今のは一体……？」

「あれらに魔法で洗脳を施した。私に尽くす事があれらの楽しみになるように。ブリテンに骨を埋めるまで働くのがあれらの幸せであるように」

「――」

氏族長達は恐れた。洗脳を施したモルガンに。多くの妖精を自らの傀儡にしたモルガンに。

「無論、最低限の生活は保障してある。食事も三食、睡眠も十分に摂らせる。休憩もやろう。それ以外の時間はただひたすら働いてもらうがな」

「それが、何の慰めになるというのです？陛下、貴方はブリテンを自分

の庭にでもするおつもりか？」

「私欲で動く貴様が言うか、スプリガン。その人間のような本性、私はとっくに気付いているぞ」

「——!？」

スプリガンの表情が青ざめる。今の言葉の意味を察せない程、鈍い頭ではない。

「どういうつもり、モルガン陛下。これは王の氏族……いえ、全ての氏族に対する宣戦布告も同然の所業よ」

「ノクナレア……正気か？私とお前達で戦争になると本気で思っているのか？お前達全員が徒党を組んだとしても、勝ち目など無い。私はブリテンの大地を焦土にはしたくない。馬鹿な真似をしてくれるな」

「——っ!!」

齒を食いしばり、モルガンを睨みつけるノクナレアだが、勝ち目が無いのは彼女も分かっていた。いくら軍隊を集めようと無駄だ。数を揃えたところで意味がない。脳内でいくら自分の兵士をけしかけても、魔王コバヤシを倒すビジョンが浮かばない。圧倒的な力の差は、数の不利すら覆す。

「私達だけ見逃されたという事は、まだ私達にはチャンスがあると考えていいのですか？」

「そうだ、ムリアン。お前達は町を発展させ、妖精國を豊かにしてきた実績がある。今後もブリテンに益になるなら、お前達とお前達の町の住人はそのままの生活を保障しよう。」

期限は設けない。時間がかかっても益に繋がると判断したなら許す。そうでないなら、明日にでも労働者になってもらうかな」

「……分かりました」

聡明なムリアンは置かれた状況をいち早く理解して頭を働かせる。

自分の町を奪われないために必死で考える。

「これで会議を終わる。バーヴァン・シー、バーゲスト、メリユジーヌの三名は氏族長を町まで送り届けてやれ。我が夫、今後の予定について私の部屋で話し合いましよう」

「おー……」

腕を組み、コバヤシを水鏡で自室に連れて行くモルガン。任務を与えられた三人は少し恨めしそうに見送った後に仕事に戻る。

救世主のいないブリテンは、女王の手の中に納まったのだ。

アルトリア・キャスターの冒険

私がコバヤシに買い取られてから随分と時間が経った。魔界の生活に慣れた頃に、変な魔法を覚えさせられてアイテム界とかいう地獄に何度も突っ込まされたり、エグい魔力が濃縮されたエキスを飲まされたりしたけど私は元気です。

私以外に連れてこられた人も、魔界で凄いイキイキした生活を送っているとと思う。

特にバゲ子。前に鍛冶場に来た時のバゲ子は、何とかお嬢様の上級妖精でクツソ〜って感じだったけど、今だとよく暴走しているのを見る。

「れろれろれろれろれろれろ……」

「!?おい、ちよ、バーゲスト……ひ、ひひひ……こそばゆい……!放せてー!」

「これはただの挨拶ですので……れろろー」

椅子に座ってたコバヤシを後ろから羽交い絞めにして、首筋をレロレロしてるバゲ子。牙の氏族の挨拶らしいけど、人間のコバヤシにやらなくてもいいだろ。

「放せつつつてんだろうがア!!!」

「きやあああああああ!!!」

遂にコバヤシがキレて、バゲ子が投げ飛ばされた。あのでつかいバゲ子が、下級妖精にマウントを取るマウンテンな妖精のバゲ子が宙を舞う。魔界っていうのはつくづく魔境だ。山が空を飛ぶなんて空前絶後の出来事が起こるのだから。

「あう……ああつ、壁に穴が開いてしまいました。急いで直さないと」

投げられて壁にぶつかったバゲ子は壁を壊したが、本人はケロツとしている。アイツの体は何で出来ているんだろうか。

……まあ、バゲ子の事は置いといて。とにかく私は新天地でそれなりに楽しくやっているのだ。魔術も魔法もいっぱい覚えて、新しい戦い方も身についた。

これからここで頑張ろうって、そう思っていたのだ。

ある日、暗黒議会の議長から呼び出されたコバヤシは、ある相談を受けていた。

「何、アルトリアのレベルが上がらない？」

「正確にはレベル1000から上に上がらないんです。彼女も何度も転生しているのに、思ったほど強さが振るわなかったのでおかしいと思います、調べてみたくんです」

「それで、レベルが1000で打ち止めになると気付いたのか……」
「私達にも原因が分からないので、モルガンさんへ調べてもらおうよう頼んだんです」

意気消沈したアルトリアに、少し気の毒そうな視線を送るモルガンは、コバヤシに調べた結果を報告する。

「我が夫よ、アルトリアは恐らく得られる強さに制限がかかっています。アルトリアも私と同じ、楽園から使命を持たされてブリテンに送られた妖精です。楽園の妖精はブリテン各地にある巡礼の鐘を鳴らし、力を取り戻して成長していきます」

「まさか魔界で転生しても特性が引き継がれるとはなあ……」

「私は既に数え切れぬ程に巡礼を終わらせてきましたから、魔界でも

十分なレベル上げが行えたのでしよう。アルトリアを魔界に順応させる為には、彼女にも巡礼を行わせる必要があります」

「ふーーーーーん……」

明らかに面白くなさそうな表情と声。コバヤシの反応にモルガンの顔色も少し悪くなる。

嫌な沈黙の中で、アルトリアがおずおずと手を挙げた。

「べ、別に私はこのままでも良いかなー、なんて。ほら、正面切って戦えなくても、仕事なんて沢山あるでしょ?」

「いや、しかし、1000レベルで打ち止めならステータスだって大したものになりませんか? 私達だって強さが必要ない仕事だから大してレベル上げもしておりませんが、やろうと思えば一瞬で9999までいけますし。」

強い方が出来る仕事も増えます。この状態のままなのはオススメできませんよ」

「……うう」

まだ魔界で過ごした時間が短いアルトリアでさえ、強くなる事の重要性は理解している。強者ひしめく魔界で自衛すらできないのであれば、どうあれお荷物になってしまうのだから。

どうしたものかと各々が頭を悩ませる中、魔王コバヤシが動いた。

「なあ、アルトリアよ……」

「な、なに?」

「……俺と聖地巡礼デート、行く?」

「——行く!!」

思ってもみない提案に条件反射で返事をしたアルトリア。未だデートもよく知らない田舎娘であるものの、楽しい事なのは彼女も何となく分かっていた。

アルトリアは金で買われた身であるので仕事は厳しいが、変に迫害されもせずに生活出来ている。コバヤシは基本、正直に物を言うのでアルトリアからの好感度はそれなりに高かった。

あのバーゲストがお熱の彼を自分が独り占め、という妙な対抗心も合わさって、アルトリアは二つ返事で巡礼を引き受けたのだった。

「どうだ、この格好。これなら俺が魔王だってバレる心配もないだろう」

「顔がしつかり隠れるローブに、魔術師っぽいダサイ木の杖……どこから見ても怪しい魔術師ね、コバヤシ」

「転生でレベルも1に戻したし、これ以上の正体の隠し方なんて無いよな」

「レベルでも妖精國の連中より上とか、やっぱ魔界ってイカレてるぜ……」

アルトリアに付き添うコバヤシは、正体がバレないように只の魔術師を装っていた。

「にしても、態々アルトリアの為に一緒に行くなんてコバヤシも優しいよねー」

「んー、まあ、買ったの俺だからな。さっさと鐘鳴らして帰ってくるさ」

「なるべく早く済ませてこいよな。コバヤシがいないと退屈で仕方ねーから」

「はいはい」

ぽんぽんとバーヴァン・シーの頭に手を乗せる。

旅の支度を終えたアルトリアが、モルガンに連れられてやってきた。が、その顔は赤く染まっている。

「アルトリア、その服どうしたの？アハッ、服に着られてる感ハンパねー！」

「うるせー!!着ていけってモルガンに渡されただけだよ！」

「私が昔、巡礼の時に着ていたおさがりです。あのみすぼらしい服では予言の子だと信じてもらえませんか」

「着てても怪しいけどなあ」

「一番怪しいのはお前だコバヤシイ!!」

吠えるアルトリアを宥め、コバヤシはモルガンに言葉をかける。

「俺がいない間、魔界はお前に任せたぞ」

「ええ。夫がいない家を守るのは妻の役目ですから。ええ、妻の役目ですから」

「妻強調すんな。手に負えないトラブルが起きたらちゃんと呼べよ」

「勿論です。そちらこそ気を付けて。私が世界中に釘を刺しておきました、それでも馬鹿な事を考える輩がいなくても限りませんから」
「心配いらさないさ。俺達を通る道を邪魔するなら全部踏み潰すだけよ」

「……ふふ」

モルガンは目を細めて優しく微笑み、コバヤシとの距離を詰めた――

零距离まで。

「!」

「……んっ……」

見送りに来ていた者達が驚きで固まる中、モルガンの接吻をコバヤシは受け入れた。

「…………お前…………」

「…………おまじないをかけました。我が夫が無事に帰って来られるように」

「アルトリアにはしないのか？」

「我が夫が帰ってきたなら、きつとアルトリアも一緒ですから」

「そうかい…………」

短い接吻の後、見つめ合う二人。そしてモルガンの魔法陣が迫りくる二つの影を押しとどめた。

「陛下!! 抜け駆けはズルいですわ!! コバヤシ、私とも是非、キ、キキキ、キスをしましょう!?! きつとご利益がある筈です!」

「コバヤシ!! 僕という恋人がいながらなんて事を! 帰ってきたら僕とちゅーしようね! 約束だよ!!」

「な、で、では私も! 無事に帰還した後にキスを所望しますわ!!」

「分かったから少し落ち着け」

魔法陣に張り付くバーゲストとメリユジーヌに少し引きつつ、真顔で硬直しているアルトリアを引っ張ってコバヤシは妖精國へ飛んだ。

目の前に広がるのは、緑の絨毯が目届くずっと向こうまで敷き詰められた平原。まるで世界が私達だけのものになったと錯覚してしまいそうな、広大な景色。

肌を撫でる風も暖かいお日様の光も優しく、このまま横になったらすぐに眠っちゃいそう。

「最初はソールズベリーから行くか。一番近いし、嫌な事は初めに済ませてしまおう」

「あ、うん」

そう言うとコバヤシは道なりに歩いていく……あれ？

「いつもみたいに空飛んだり、モルガン陛下の魔術でショートカットしないの?」

「たまには、地に足付けた冒険も悪くないと思ってな」

「でも、歩きだと時間かからない?」

「……なら走るか」

「えっ」

そう言うと、コバヤシは凄まじい速さで道を疾走していった。意地でも歩きで行きたいのかあ……。

「って、待てー!!私を置いて行くなー!!」

まあ今の私ならコバヤシにだって余裕で追いつけるけどね!!

ソールズベリーまで走っていった私達は、途中でモースに襲われる事もなく無事に辿り着く事が出来た。

町には普通に入れたけど、問題は巡礼の鐘をどうやって鳴らすかだよね……。

って思ってたら――

「な、なんだその魔力量は!」

「こんな質の高い魔力を持った妖精、初めて見るぞ!」

「きつと予言の子だ!女王を倒すために予言の子が来てくれたに違いない!!」

「予言の子!!予言の子だ!!予言の子がソールズベリーにやってきた!!」

私はあれよあれよと祭り上げられて、鐘のある大聖堂まで案内され

ちゃった。

「よかったなアルトリア。今ならお前、立派な予言の子として認められてるぞ」

「……っていうか、どうして私だけ？魔力ならコバヤシだって凄いよね？」

「俺はしっかり隠蔽工作してるからな。アルトリアの魔力の質が高ければスムーズに事が運ぶと考えてたが、狙い通りだ」

「先に教えておいてくれないかな!？」

妖精眼だからって何でも分かる訳じゃないんだぞ!!

私の抗議を気にも留めないで、コバヤシは大聖堂へ躊躇なく入っていく。私も慌てて後に続いた。

「……凄い……綺麗だね……」

大聖堂の中はとても広くて、空間が虹色に輝いていた。私が見とれていると、奥から一人の妖精が騎士を連れてやってきた。

「……町の騒ぎは存じています。貴女が予言の子……なのですな」

「あ、はい。初めまして。私はアルトリア・キャスターと申します」

「私はコーラル。オーロラ様に仕えている妖精です。……この魔力、皆が興奮するのも分かります」

「えーと、私達はここにある巡礼の鐘を鳴らしにきました。通して頂け……ますか?」

「なりません。この大聖堂は2000年前、モルガン女王陛下の戴冠式を行った特別な場所です。」

そこに従者とはいえ、人間ごとき下等生物を入れるなど。いかにオーロラ様が通せと仰られても、許容できるものではありません」

「む……」

コーラルさんの表情が険しくなって、私達を睨みつけるように見てくる。そして後ろから、ソールズベリーの騎士たちがぞろぞろやってきた。

「予言の子と汚らわしい人間を捕えなさい。大人しく投降するのならよし。逃亡するのなら人間は処理しても構いません」

気づけば私達は武器を構えた騎士達に、すっかり囲まれてしまっていた。

「おい、抜かるなよ。人間の方はどうでもいいが、予言の子はオーロラ様が欲しがっているのだからな」

「ああ、今の女王陛下を倒すには予言の子の力が必要だ。予言の子がオーロラ様の物になれば、ブリテン中にオーロラ様の素晴らしさが広まるだろう」

「やるぞ、オーロラ様の為に！」

「…………お前達、何を…………？」

やたら士気の高い騎士達に、コーラルさんも困惑しているようだった。まあ、なんにせよ…………。

「私達、喧嘩売られてる？」

「みたいだなー」

杖を持つてる手に自然と力がこもる。コバヤシを汚いもの扱いしたり、私を都合の良い道具扱いしたり…………。

「俺の助け、いるか？」

「ううん、いない」

「そうかい。なら…………死なない程度に蹴散らしてやれ」

その言葉を皮切りに、私は兵士達の前に躍り出た。

「うりゃあああああああ!!!」

大きくジャンプしたアルトリアから繰り出される、杖による振り下ろしが炸裂する。大聖堂の床が割れ、周囲の騎士たちは纏めて吹き飛ばされた。

余りにも現実離れした光景に、コーラルも騎士達も啞然とする中、アルトリアは棒立ちの騎士に次々と襲い掛かる。

「グフツ!？」

「ぐわあ!？」

「があっ!？」

頑丈なミスリル製の鎧もなんのその。突き、殴り、ブン投げての大暴れ。小柄な体に似つかわしくないパワーでアルトリアは暴れまわる。

「こ、こいつっ!？」

騎士から放たれた矢を片手で杖を回して防ぐアルトリア。

剣や槍を持った騎士が襲い掛かるが、杖を構えたアルトリアが突進して人数差を物ともせず押し返す。

「な、なんだこの力は!？」

「甘く見るなあ!!お前達なんか何百人相手にしようと負けるかー!!」

「う、うわあああああ!？」

何十人もの騎士がアルトリアに力負けして倒れ込む。倒れた騎士の一人に近づき、両足を掴んでグルグル振り回した。

「うおおおおおー!!!」

「ウワアアアアアア!」

ジャイアントスイングで近くの騎士を巻き込んで吹き飛ばし、十分に勢いを付けたアルトリアは、掴んだ騎士を空の彼方へ投げ飛ばした。

「飛んでけえええええええ!!!」

「ぎゃああああああああ!!!」

聖堂の窓を突き破って騎士は外へ飛んでいく。乱れた息を整えながら、アルトリアの碧眼が騎士達を射抜く。

「ひ、ひいつ……に、逃げろおおお!!」

アルトリアに恐れをなした騎士の一人が逃げ出し、恐怖が伝染した他の騎士達も阿鼻叫喚の様子で我先にと駆けだした。

勿論、それを逃がす魔界育ちのアルトリアではない。

「勝手な理由で襲い掛かっておいて逃げるなあ!!メガスター!!!」

掲げた杖から星の力を宿した光による範囲攻撃を繰り出した。アルトリアの魔法は逃げようとした騎士全員を飲み込んだ。

「二二ぐわああああああ!!!」

騎士の悲鳴を最後に聖堂の中は静寂に包まれる。ズタボロの騎士

と滅茶苦茶になった聖堂の広間を目の当たりにしたコーラルは青ざめた。

「あ……あああ……ソールズベリーの騎士たちが……聖堂の修繕費が………きゆう………」

心労がたたり、コーラルは意識を手放して倒れた。その様子にアルトリアとコバヤシは顔を見交わした。

「ど、どうしよう……私、やり過ぎた？」

「んー……コイツ、割とまともな部類の妖精だったのかねえ………」

やってしまったものはしょうがないので、気を失っているコーラルの傍に金の延べ棒を多めに置いて、二人は巡礼の鐘の場所へ向かう事にした。

尚、オーロラへの謁見はスルーした模様。

アルトリア・キャスターの冒険（Ⅱ）

ソールズベリーの鐘つき堂で、アルトリアとコバヤシは巡礼の鐘を鳴らそうとしていた。

「ねえ、コバヤシ。私、考えたんだけどさ」

「なんだ？」

神妙な顔つきのアルトリアが、自身の考えを口に出す。

「モルガン陛下は、この鐘を鳴らす巡礼を何度も何度も繰り返してきたんだよね？」

「そうだな」

「じゃあ、一度に沢山つけば、その分いっぱい強くなれるんじゃないかな……？」

「……………」

「お前天才だな。いいぞ、やっちなえ」

「よ……………し！やるぞ……………!!」

気合いを入れなおしたアルトリアは、巡礼の鐘を連打する態勢に入った。

—————
ゴーン、ゴーン、ゴーン

ロンディニウムに滞在する円卓軍は、突如響き渡る鐘の音に耳を傾

けた。

「団長！これはまさか……！」

「……この場所まで届く鐘の音か。間違いない、巡礼の鐘が鳴らされたんだ」

「ならば、予言の子が遂に現れたのですね！」

救世主の登場を知らせる鐘の音に円卓軍は沸き立った。

「（遂にこの時が来た。我々円卓軍も立ち上がる時だ。人間と妖精が互いに手を取り合える世界の為に……）」

——ゴーン、ゴゴーン、ゴゴゴーン

「……あれ？」

おかしな鐘の鳴り方にパーシヴァルは疑問符を浮かべる。騒いでいた円卓軍達も、我に返って静かになっていく。

——ゴンゴーン、ゴゴゴーン、ゴンゴンゴンゴーン

「……ど、どうなっているんだ……？」

「わーーーーーい！！」

巡礼の鐘を鳴らす度、力が漲るのを感じるアルトリアはテンション高く鐘を連打していた。聞く者によっては胸が締め付けられたり

忌々しく感じたりしているとはつゆ知らず、それはもう楽しそうに鳴らしていた。

「アルトリア、もうその辺で良いんじゃないの？」

「ん……そうだね」

ようやく落ち着いたアルトリアは、高まった力を確かめるように手を握って開く。

大聖堂の外へ出た二人。不意に、コバヤシの頭の中に声が入り込んだ。

「……」

「どうかした？」

「おー……モルガンに呼び出された。もうすぐ夜だし、悪いがどっかの宿を見つけておいてくれ」

「え……うん、分かった。いつてらっしやい……」

水鏡の術でコバヤシはその場から消え去る。アルトリアは一人、宿を探して街を歩いて回る。

「……頭痛い」

ごうごう、ごうごう。

アルトリアの妖精眼に映る、悪意の嵐。自分に寄せられる勝手な期待にうんざりしながら、少しでもマシな場所を求めてアルトリアは動いた。

「……あっ」

「いや、あのさ……。俺、宿を見つけてくれって言ったんだけど。お前、これ……。酒場じゃん」

「大丈夫！一泊だけなら許してくれるって言ってたから！ね？」

「お、おう。上の部屋はどうせ使ってないから良いけどよう……」

「……まあいいや」

モルガンの呼び出しから戻ってきたコバヤシを迎えたのは、街の酒場の一室を一晩借りたアルトリアの満面の笑みだった。

「ああ、そつちの人間。お前さんに客が来てるぞ。部屋に通してあるから、早く行ったほうがいいぞ」

「俺に客？誰よ」

「ほら、コーラルさんだよ」

「へえ……。何しに来たのやら」

コバヤシは酒場の二階、自分達が泊まる予定の部屋にいるコーラルに会いに行く。扉をノックして中に入ると、部屋の中を見回していたコーラルが出迎えた。

「どーも、さつき振りですなあ」

「……こ、こんばんは、人間」

「人間が使う部屋が、そんなに珍しいか？」

「いえ、ただ……。私達の部屋と、そんなに変わらないな、と」

「そりゃ、人間の真似してるんだからそうなるだろうよ」

「そ、そうですね……」

どこかぎこちない様子 of コーラル。コバヤシはテーブルを挟んだ向かいの席に腰を落とす。

「それで、何の御用で？」

「……これをお返しに」

「……ん？」

コーラルが取り出した大きめの袋。その中には、コバヤシが大聖堂に置いてきた金の延べ棒が入っていた。

「これは……やり過ぎた分、詫びとして置いて行つたつもりだったんだけどねえ……」

「だと思いました。なのでありがたく使わせて貰った分の残りです」

「……わざわざ返しに来たのか」

「ええ。修繕費と治療費分は頂きましたので」

「……どーもね」

渡された袋を懐にしまいながら、コバヤシはコーラルを見定める。

「アンタは……妖精國じゃ稀に見る、良い妖精だな」

「……何です、いきなり？」

「この町……いや、この国じゃアンタみたいな妖精は、さぞ生き辛いだろうな」

「そんな事は……」

「俺の見立てじゃあ、ソールズベリーはアンタがいなけりや、もつと無秩序の町になるだろうよ」

「この町はオーロラ様がいてこそ成り立ちます。私の力など足元にも及びません」

僅かに眉間に皺を寄せるコーラルは、異邦の魔術師に食つて掛かる。

「予言の子の側近とはいえ、不用意な発言は控えなさい。オーロラ様は人間にもお優しいお方ですが、私は違います。人間など嫌いです

し、対等のものとは考えていません」

「そこだよ、俺が認めてるのは」

「なんですって?」

「アンタは嫌いな人間でも、爪弾きにせずには懐に抱えて仕事を与えてるだろう。誰にだって出来る事じゃない。ましてやアンタは妖精で、好きでもない相手だというのになあ」

「見当違いも甚だしい。人間に仕事を与えているのは、オーロラ様の慈悲に対する報いです」

「そうかい。拾った後の人間がどうなったか、アンタの主人が気にしてるとも思えんが」

「お黙りなさい。例え予言の子と共に旅する異邦の魔術師と言えども、オーロラ様への侮辱は許しませんよ。ましてや——私とオーロラ様を比べるなど、それこそ許されない」

「許されないって、誰からだ?ここには俺とアンタの二人しかいないし、それに俺は良い所を良いと言ったまでだ」

怒気を滲ませて睨むコーラルに対し、コバヤシは自分の主張は間違っていないと視線を受け止め、ただ見つめる。

「……………う」

先に音を上げたのはコーラルの方だった。視線を逸らした彼女は、少し気まずそうに席を立った。

「とにかく、貴方は発言に気を付けるようにしなさい。誰がどこで聞いているのかなんて、分かりませんから」

「分かったよ。もう戻るのか?」

「ええ。もう用事は済ませましたから」

そのまま部屋を出ようとするコーラルだったが、扉に手をかけた所でコバヤシの方へ振り返った。

「……その、次の目的地は決まっていますのですか？」

「んー……いいや」

「それならば、ノリツジに向かうといいでしょう。予言によると、次の厄災が起こる場所はノリツジで間違いないでしょうから。」

町を治めているスプリガンも、どういう訳か滅多に表に出てこなくなっているようですから、妨害される心配も少ないかと。予言の子の実力ならば、かの厄災を退ける事も可能でしょう。……くれぐれもお気をつけて」

一言を添えて、今度こそコーラルは部屋を出て行った。

部屋の窓から外を見て、大聖堂へ戻るコーラルを見送るコバヤシ。気付けば空は暗くなり、街灯の明かりがぼつぽつと街を照らすのが見えた。

「……飯にするかな」

一階に降りたコバヤシは、厨房で話している店主とアルトリアを見つけた。

「あ、コバヤシ。夜になったしご飯にしようよ。店主さんが料理に凝ってて、色んな食べ物や調味料が置いてあるよー」

「ま、まあそんな大層なものでもないけどな……」

「へー……カレーはあるのか？」

「カレー？……いや聞いた事ないな。どんな食い物なんだ？」

「……カレーが無い……だと……!？」

コバヤシは未だかつてない衝撃を受けた。何せカレーとは魔界で一番馴染みのある料理であり、艱難辛苦を共に乗り越えてきた戦友も同然の存在である。

そうか、妖精國がこんなにも地獄なのはカレーが無いせいか。コバ

ヤシはブリテンを哀れんだ。

このやたら顔面が濃い妖精にカレーを教えるために、コバヤシは自ら厨房へ立つ。一口大に切った肉と野菜を鍋で炒め、水を加えて灰汁を取りながらじつくり煮込んでいく。

「……コバヤシって料理出来たんだ」

「まあ、カレーは良く作ってたからなあ。具も煮えてきたし、後はルーを入れてまた煮込んでいくぞ」

「お、おお……！こんな料理があるんだな！中々いい香りがするな！」

「よし、最後はそこら辺の物を片っ端からぶち込んで……」

「待つて待つて待つて待つて待つて」

調理のメにかかろうとしたコバヤシを、アルトリアは全力で止めに入った。

魔界暮らしのアルトリアは知っている。魔界で作られるカレーには、入れた具材の種類により追加効果が得られる事を。

前線へ出ているバーゲストが、メガネが大量に入っているカレーを無表情でポリポリ食らっていた事を。

戦う時なら我慢するが、そうでない普通の食事なら遠慮してもらいたいアルトリアなのであった。

「ぐおっ……!?口の中が痛くなるぞ、この料理！だけどウマイ！スプーンが止まらねえ！」

……待つてよ？こんなに辛い食い物なら、甘い飲み物と一緒に食べれば良いんじゃないか？ミルクと果物を混ぜてみるか……」

「か、から、かりやい……!?ひええ……これ辛口だあ……」

「自分で飯作るのなんて久しぶりだな……。昔はウサリアにせがまれて作ってたんだったな。あー懐かし……」

その後、カレーに目覚めた店主にウサリア秘伝のカレーレシピとカレールーを分けてやり、妖精國にカレーを布教したコバヤシは満足気

に床へ就いた。

アルトリア・キャスターの冒険（Ⅲ）

ソールズベリーの妖精コーラルの助言を受け取り、鉄の街ノリツジへ足を運んだアルトリアとコバヤシは、上空に渦巻く黒雲を見上げていた。

「コーラルさんの話だと、この街にもうすぐ厄災が起こるんだよね」

「そうだな。町に入る前から嫌な気配がビンビン来やがる」

「……でも、あの雲はなんか、関係なさそう」

そう呟き、厄災溜まりと呼ばれている黒雲からアルトリアは視線を外す。コバヤシもそれに頷いて街へ足を踏み入れた。

アルトリアの推察は当たっている。

ノリツジを覆う黒雲は、厄災を過去へ飛ばすモルガンの大魔術。コバヤシは事前にモルガンから話を聞いていた為に知っていたが、アルトリアは自身の感覚でそれを見抜いてみせた。

アルトリアの成長に内心で感心したコバヤシは、アルトリアの頭をぐしゃぐしゃと無遠慮に撫でまわす。嬉しさ半分恥ずかしさ半分でアルトリアは、うがー!!と怒り出す。

そんな二人を迎えるノリツジの街は、滅亡に瀕しているとは思えない程に活気に溢れていた。

「鍛冶場だ！鍛冶場があちこちに沢山!!ねえ見に行っていない!?良いよね!?!」

「一気にご機嫌になったなお前……」

水を得た魚の如く、人の波に乗って流されながら鍛冶場を見て回るアルトリア。少々呆れていたコバヤシも、目を輝かせているアルトリアに水を差すことなく後をついていった。

「お前、鍛冶場そんなに好きなのか?」

「うん！前にマーリンが教えてくれたんだ。私が馬になっちゃう前ま

でも、村の近くの鍛冶場にお手伝いに行ってたし」

「へえ……その選定の杖も、もしかして鍛冶師に打ってもらったのか？」

「これは違うよ。私が乗せられてた船に宝物と一緒にあった物だったって」

「宝……？そんなモンあったのか」

「うん。どうなったのか私も知らないけど」

「……………そうかい……………」

こうして二人が街を回るうちに、ソールズベリーと同じように予言の子の話が広がっていく。露店の装飾品を無邪気に眺めていたアルトリアが、自分達を包囲するような人の気配を感じて振り返る。

「……………何ですか、貴方達は？」

背負っていた杖を手に持ちなおしてアルトリアは問う。それに対し、集団の中から一人の人間が代表として前へ出る。

「失礼、我々はノリッジ商会団の臨時警備隊の者です」

「警備隊……………？私達に何か御用ですか？」

「ええ。実は予言の子と異邦の魔術師を来賓として館に招待してほしいと、我々の出資者であるペペロン伯爵からお願いされました」

「……………誰？」

アルトリアもコバヤシも、ペペロンという名に聞き覚えは無い。なんでも引き籠もりがちになった領主のスプリガンに代わり、このノリッジを纏めている有力者の一人だそうだ。

客として扱われるならば、顔くらいは見ておこうかと二人は招待を受けて館へ向かった。

私がこの異聞帯を訪れて一ヶ月が過ぎたわ。

カリスマデザイナー『ペペロン』として地力を蓄え、ノリツジに拠点が出来上がった。キシシュタリアを殺したベリルを追いかけて、クリプターとしてのケジメをつけるのが私の目的。

けれども、この妖精國の勢力図はここ最近で塗り替えられてしまった。いっそ、侵略と言い換えても良いくらいね。

ブリテンの女王であり、異聞帯の王たるモルガンの敗北及び妖精騎士数名が拉致されたのが始まり。暫定の指導者になったウツドワス公の努力の甲斐あって、しばらくは何も変わらない生活が続いたのだけれど……それでも各地で怪しい動きが絶えなかったわ。

一番大きな問題は攫われた妖精騎士の一人、ガウエインが領主の街マンチェスターが跡形もなく消滅したこと。グロスターやソールズベリーにマンチェスターに住んでいた妖精達がやってきて明らかになったのよね。

……でもね……妖精達の移動と街の崩壊は無関係よね……。だってマンチェスターには人間もいたのに、逃げてきたのは妖精だけ。この國での人間の扱いを見れば、誰だって悪い予想はついちゃうでしょ？ムリアンもそれが分かって、別の街に避難民を送ったみたい。やっぱりあの子、賢いわ〜！

マンチェスターで何があったか調べようにも、肝心の街が消えちゃってたら調べようが無いもの。ウツドワス公もさぞ頭を抱えたでしょうね。

で、妖精國各地で思惑が飛び交う中、それをみーんな吹き飛ばすように女王モルガンが帰ってきたってワケ。しかも洗脳による統治を始めたのだからもう大変よ。ノリツジみたいな大都市はまだ無事だけれど、そうでない村なんかは妖精騎士がやってきて労働力として洗脳されていったわ。

更に衝撃だったのは、モルガンが新たな役職として妖精國大統領を

任命。そしてそれが自分を負かせて攫って行った人間だっていうから、天地がひっくり返るような大騒ぎよ!!

ま、騒ぎになったって言っても、表向きに何かしようなんて輩はいなかったけどね。何せ現女王に勝った人間だもの。力でどうこう出来る存在とは思えないわね。

それよりも私にとって痛手だったのは、ベリルの所在が掴めなくなった事。モルガンがベリルと離婚して、妖精國大統領を新たに夫として迎え入れたから付け入る隙はあると思っただけ……。彼が根城にしていたニュー・ダーリントンは潰されたって聞くと、肝心の本人もどうなったのか分からない。正に八方塞がりよ……。

……そして、最も気になるのは死期を悟る漏尽通が覆された事実。この異聞帯で終わる筈だった私の命が、どういう訳かまだ終われないと騒ぎ出した。タイミングとしては、異界の魔王が現れた二度目の時。新たなブリテンの始まりが宣言された日。大統領の座に就いた魔王が私に何かした、とはとても思えないけど……無関係とも言えないのよね……。

どうしようか、どうすべきか、悩んで動けないでいた所に、ノリツジに予言の子と異邦の魔術師がやってきたという情報が流れてきたわ。ヤダ、ひよつとしてカルデアのあの子達かしら!?!と、少しテンションがあがってしまったけれど、話で聞いた容姿から見るとどうもそれは違うみたい。

それでも、エインセルの予言に出てきた重要人物には違いない。選定の杖を持っているならまず確定でしょう。魔術師の方は分からないけれど……とにかく一度会ってみなきゃ。

恐らく、もうすぐカルデアもここにやって来る。ここで予言の子とコネクションを作っておくのも悪くないわ。カルデアがどう動くにしろ、妖精國の今後を左右する予言は、彼等にとっても重要でしょうからね。

「初対面なのにわざわざ呼び出してしまっでごめんなさいね。私はペロン伯爵。彗星のように現れた、稀代のカリスマデザイナー」

二人を館に招き入れ、自己紹介を始める。

「こ、こちらこそこんな立派なお城に招いていただけで光栄の至りと言うかごめんなさいというかなんというか……。あ、私はアルトリア・キャスターと申します」

あらヤダ!!この子反応が初々しくて可愛いわー!でもしつかり自己紹介を返してくれる辺り、テンパってはいてもやるべき事はやれちゃうタイプなのねー!

「……………」

そしてもう一人の来客の彼。フードを取った顔は中々好みね〜!何も言わないのもクールでポイント高いわー!!

……なーんて、ちよつとふざけてみたけれど。この二人、とんでもないわね。

アルトリアちゃんの秘めている魔力は、私が今まで見てきたどの存在と比べても桁外れ。本人が自覚しているかどうか知らないけれど、魔力量の差による圧が凄いわア……。

そしてこっちの彼は魔力は大したこと無いけど……きつと隠蔽されてるのね。というかこれは無理。挑みかかっても勝てる道筋が見えない。魔力どうこうの問題じゃなく、個の存在が遥か高みにあるように感じるわ……。

「……………はあ。俺はコバヤシだ」

「ちよ……………!?!それバラしていいの!?!」

「見抜かれてるわ、コレ。こいつそもそも妖精國の人間じゃないし。牧場から出荷された人間にしちや、特別すぎる」

「あら……………」

そして立場を察したのはお互い様ってワケね。私の持つてる神通力を見抜かれたみたい。

「どういう事情で魔王様が旅しているかは知らないけど、身分バレについては心配ご無用よ。事前に人払いを済ませてあるわ」

「そりや有難い……」

「どうか正直言ってラッキーだったわー!! 貴方に聞きたい事教えてほしい事が山ほどあるんだもの!」

「どいつもこいつも急にイキイキしやがってもう……」

意外な事に、愚痴をこぼしながらも彼は席に着いた。こんなにもあつさり話してくれるなんて思わなかったわー……。

「アルトリア。長丁場になりそうだから、お前は街に出て災厄を警戒しててくれ」

「え……でも……」

「今のお前なら災厄の十や二十纏めて出てきても楽勝だ。心配いらん」

「………分かった!じゃあ行ってくるね!ペペロン伯爵、コバヤシの事よろしくお願いします!」

「ええ、いつてらっしゃい」

アルトリアちゃんは元気に飛び出していったわね。

「じゃあ、始めに私の正体から明かすわね。本当の名前はスカンジナビア・ペペロンチーノ。既に剪定済みだけれど、インドの異聞帯を担当していたクリプターが私よ」

「なるほどね……。我が名は魔王コバヤシ。魔界からブリテンにやってきた真正正銘の魔王だ。人間種ではあるがな」

「………ひよつとして、汎人類史の?」

「さあな。なんせ昔、他の魔王に小間使いとして呼び出されて、その前

の記憶が無いモンでね。そこらへんはハッキリしない」
「そうなの……」

魔界……汎人類史とも異聞帯とも違う世界から来た人間……。未知との遭遇ってやつかしらね？

「さつき私が神通力を持っていると見抜いたけれど、それも貴方の力なのかしら？」

「どうだかな……。特別な何かがあるってくらいは他の奴等でも分かるだろうし、俺の固有の力とは言えんな」

「そうだったのね。それで、教えてほしい事があるのよ」

「何が知りたい？」

「この異聞帯にいる筈のクリプター、ベリル・ガットの居場所を知りたいの。彼が今どうしているか、ご存知ないかしら？」

「……………」

私の質問を聞いたコバヤシは暫し沈黙した。そして少し悩んだような表情でこう言ったわ。

「……お前、ベリルを殺しに来たのか？」

ウキヤー！私の目的があつという間にバレちゃったわー！？

「貴方が来てから驚く事ばかりで困っちゃうわー！それで正解よ、どうして分かったのかしら？」

「空想樹が伐採されてる異聞帯なんて、クリプターの目的からすれば価値なんて無いだろ。ならわざわざ来るのは個人的な理由だ。そんなで、ベリルの野郎はギリシャ異聞帯のクリプターを殺してる。お前達クリプターにとってそいつはリーダーだったんだろ？なら、メンバーが仇討ちに来たと考えるのはそう難しくない」

あらやだ、人に改めて言われると私の行動って割と単純ね。ある程度事情を知ってる、初見の相手に見破られちゃうんだもの。なんだか恥ずかしくなってきたわア!!

「ベリル・ガットは俺の魔界に捕えてある。夢魔……分かりやすく言えばサキュバスの檻に閉じ込めて、死ぬまで生気を吸わせてる状態だ。じきに死ぬだろうよ」

「――。彼の身柄、私に引き渡してもらえないかしら？」

「あん？ほつといても死ぬのにな？」

「ええ。これは同じクリプターとしてのケジメ。彼を殺す役は、私が担わないといけないのよ」

「……その感情、理解できなくもないがな。だが駄目だ。アレは自由にさせたなら面倒な手合いだ」

「……そう、残念だわ」

本気ね。コバヤシは本気でベリルを警戒しているわ。圧倒的な強者であるけれど、相手を力だけでなく性質を見て脅威と判断しているわ。

……これは説得は諦めるしかないわね。国の代表が脅威と見定めたのだもの。私個人の理由じゃ覆らないでしょうし。

「……あの野郎は、与えられた都市の地下で人間にモースの呪いを移す実験なんてしてやがった」

「！」

「どうしてだと思う？」

「……そうねえ。私が言えた義理でもないけれど、彼は悪趣味だから……それが理由じゃないかしら」

「だが、地下に送られた人間は100人を優に超えてる。個人で楽しむにしちゃ、多すぎると思わないか？」

「それは……確かにね」

コバヤシはどこか剣呑な雰囲気醸し出しながら、私に自身の考えを話し出した。

「はつきり言えば戦力としてもイマイチだ。呪い付きだが、いかんせん弱すぎる。この妖精國なら大した手駒にならない。そんなのを量産して何がしたいのか…」

「予想はついているのかしら?」

「俺は、今後、ここに来る奴等に向けて準備したモンじゃないかと睨んでる」

「……なるほどねえ。それなら納得できるわ」

——カルデア。藤丸ちゃんとマシユちゃんの心を腐らせる為に用意してたって訳かしら? 何の罪もない、無抵抗の人間を殺させる。確かにあの子達相手なら、これ以上無いくらいやり辛い相手になるわね……。

「……え、まさかアナタ、その子達をカルデアの子達にぶつける気?」
「誰がやるかふざけんな!! 悪魔にだって分別くらいあるわ!! ……それと同じくらいエグイ呪いかけた奴が今では仲間になってるが。どうにかこうにか全員祓ったわ!!」

あら、人並みに情はあるのねエ。そういうのポイント高いわよ。

小声で呟いた事は聞かなかつた事にしてア・ゲ・ル♪

「ああ…そうだ、カルデアだ。お前、カルデアについては詳しいか?」
「あら、知りたいの? そうねー、協力関係を築いた時もあったから、他のクリプターより詳しい自信はあるわね。」

でも一つ良いかしら? アナタ達はカルデアをどう見るのか、聞かせて頂戴な?」

「どう見るも何も、カルデアは敵だろう。クリプターというか、異聞帯にしてみりゃ。他に言いようがあるのか?」

「……彼等がブリテンにやって来たら、どうするのかしら？」
「殺すさ。来た瞬間に殺す。連中に時間は与えない」

……参っちゃうわア。彼、カルデアの強みと弱みを分かっちゃってる。油断も慢心も無い、本気で対処するべき敵だと判断しちやってるのね……。

カルデアを処理する為の最適解を躊躇わずに選べる程に、カルデアを脅威と認定しているなら……あの子達に勝ち目は無いわ。

「確認させて。アナタがカルデアを敵視するのは、ブリテンを守るためでしょうか？」

「……ああ、そうだよ。こんな國でも、欲しがってる物好きな奴がいるんでね」

「聞いて頂戴。カルデアはアナタ達の敵じゃない。彼等が来ても、その目的がブリテンの侵略や滅亡でないのは、私が保証するわ」

「……その台詞を聞いて確信したよ。今までの異聞帯だって、カルデアは悪意を持って動いてはいなかった。でも結果的には滅亡に近い結果に導かれた。そうだろう」

「う……」

……否定できないわね。異聞帯側の住民からすれば、カルデアがそういう見方をされても不思議じゃないから……。

「カルデアの連中が来るんなら、この國が終わりかけてるのは間違いないんだろう。だが、それをどうにかする為の策も考えてる。今は準備の真っ只中だ。そんな折、トラブルが終わったら消えちまう余所者に、この國を引っ掻き回されちゃ困るんだよ」

「――」

……そう。そうなのね。そこまでしてこの國を立て直す覚悟が、アナタにはある。

——だからこそ

「お願い、カルデアに一度だけチャンスをあげて」
「なに？」

「これまでの妖精國の歴史と、今の妖精國で起きている改革の両方を、余すことなくカルデアに伝えてあげて。それで彼等は大人しくなってくれる筈よ」

「……俺達にそこまでやれと？」

——深く、深く頭を下げる。

「約束してくれるなら、私の知る限りのカルデアの情報をアナタへ教えるわ。……メリットが薄すぎると自分でも思うけれど、今の私が提示できるのはこれしかない。」

——あの子達は、私にとって唯一の可愛い後輩たちなの」

「……………うー……む……」

正直、悩んでいる。不穏分子を消したいのは事実なのだが、無駄な殺生は望む所ではない。無駄な戦闘を避けられるのなら、そのほうがずっと良い。

俺の予想が正しければ、異聞帯に来たばかりのカルデアの戦力はたかが知れているだろう。魔界で鍛えた妖精騎士を一人送れば、余裕で壊滅させられる。それなのに、人手を割いてカルデアにこのブリテンの歴史を一から教えるなんて、手間がかかり過ぎる。

……だが、あの連中が敵にならないなら、それはそれで不安の種が一つ消える。弱い手合いは逃げの一手を隠し持つもの。自分の目の

届く範囲に収めておくというのも、ある意味安心できる。

頭を下げたままにいるペペロンは、その行為の他に誠意を示す方法が無いと物語っている。情報以外にこちらのメリットは無い。それが分かっている尚、ペペロンは交渉に踏み切ったのか。

……馬鹿な男だ。だが、男は時々、馬鹿になるモンだからなあ。

「……お前の覚悟に絆されてやるよ、ペペロン」

「……じゃあ、交渉は成立？」

「おう。とりあえず、カルデアは敵とみなさない」

後でモルガンに念話で伝えておかないとな。連中がいつ介入してくるか分からんし。

「……くれぐれも謀るなよ。お前が変な情報をこっちに流したなら、お前の目の前で連中を嬲る。その方が、お前にとっては耐えられないだろうからな」

「正に悪魔的発想ね……。しかも当たっちゃってるんだから」

「それに連中が勝手に動いても殺す。この國で自由にはさせない。良いなっ。」

「それなら、私からの伝言も伝えて下さらない？ 『絶対に動かないで』って。それで解決よ！」

「……まー、それくらい良いか……」

この選択が吉と出るか凶と出るか。カルデアが来るまで分からんな……。

アルトリア・キャスターの冒険（Ⅳ）

カルデアを一応は敵とみなさないという、コバヤシの言質を取ったペペロンはプレッシャーから解放されて胸を撫で下ろした。

そしてもう一つ、自身と深い関わりのある質問を口に出した。

「そうそう、実はまだ聞きたい事があったのよ。私の神通力の一つに漏尽通というのがあるんだけどね？」

「漏尽通……？」

「そう。自分の寿命、宿命を覚る力なのだけれど……女王モルガンが帰ってきたあの日、この漏尽通が示した死の宿命が覆されたのよ。何か心当たりないかしら？」

「……………いや、特には無いな……………」

コバヤシは額に手を当て、記憶を辿る。

「……………これは俺の体験した話じゃないんだが……………」

あくまでも噂話程度の信憑性であると前置きして、コバヤシは語る。

「魔界には様々な役割を与えられた悪魔がいるんだが……………その中に周回屋つてのがいるらしい」

「周回屋……？」

「俺は見た事が無いがな。その周回屋つていうのに頼むと、過去に飛ばしてもらえるんだと」

「……………それは例えば、レイシフトのような？」

「モルガンからも話には聞いているが、レイシフトつていうのはイマイチ分からんな……………」

コバヤシは片手で頭を掻きながら考えている。彼なりに考え

を纏めようとしているようだ。

「レイシフトってというのは、その、なんだ。魂をデータ化して過去に送ってるんだっただか。周回屋の場合はデータ化しないで送ってる……って言えば良いのか？つまり、レイシフトと違って元の時間に帰れない。一方通行だ。違いを言うなら……そうだな。俺の所のモルガンは元々は異聞帯のモルガンで、ベリルの野郎が召喚したのが汎人類史のモルガンだった。その汎人類史側のモルガンは消滅覚悟で過去へレイシフトして、異聞帯のモルガンに記憶を渡して消えたんだと。で、異聞帯のモルガンは記憶を受け継いだモンだから、元々更地になつてたブリテンを妖精國にするよう、歴史を自分で修正できた。

だが、この周回屋の場合はそれが出来ないらしい」

「……できない？つまり、過去に戻るまでの歴史を変えられないって事？」

「多分な……」

ペペロンに聞き返されたコバヤシも、自分の体験した話ではないからか自信なさげであった。

「強さもそのまま過去に持っていけるらしいんだが、どれだけ強くても変えられない道筋っていうのがあるらしい。他はちよくちよく変えられたりするみたいだが……なんでも、時を越えた人物が深く関わった出来事は変えられないんだとか」

「頭がこんがらがってきたわねエ……」

「同感だ……。まあ、この話を信じて結論を出すなら、お前が死ぬ歴史の道筋が、俺が来た事によって消えたんだろう。……何でかは全く分からないけどな……」

「……ま！答えが出ないならこの話はおしまいにしましょう！原因が何であれ、死なずに済むのは思いもよらずラッキーだったわー!!」

「お前がそれでいいならいいけどさ……」

魔王が呆れる程にポジティブなペロン伯爵は、原因解明よりも生きる事の喜びを受け入れた。

「……ふふ、まさかこんな形で縁が巡ってくるだなんて。夢にも思わなかったわ」

「……どういう意味だ？」

「私は神通力を持っていて言うたけど、そもそも私の宗派の始まりは魔王尊とパスを繋いだからなのよ。そこから墮落した天狗が至る、地獄へ辿り着くことを前提とした、天狗道が始まったの」

「……生きているうちから地獄を目指すとは。物好きな連中もいるもんだな」

「本場の魔王様から見れば、滑稽に見えるでしょうね」

伯爵の言葉通り、腕組みをして唸る魔王の心中を表す感情は呆れが大半を占めていた。多くの魔界で安い労働力として扱われているプリニーを輸出しているのが地獄であり、その目的は地獄に落ちた魂の浄化。

つまりは地獄に落ちる罪を犯した者に対し、労働を経て金銭を対価にして、魂を新しく生まれ変わらせるのが目的なのだ。

そんな中身が罪人のプリニーの立場は、魔界全体で見ても著しく低い。長時間労働、低賃金は当たり前。報酬を出し渋らないコバヤシの魔界でも、給料の額は新参者のアルトリア以下である。汎人類史で知りようの無い情報とはいえ、自ら超ブラック労働に勤しもうとする天狗道の行動は、コバヤシから見ればトチ狂っているとしか思えないものだ。

彼がそんな内心を吐き出すと、伯爵からは驚きの表情が返ってくる。地獄の沙汰も金次第という言葉が、そっくりそのまま当てはまった事例なので無理もないだろう。

緊張と驚愕の連続で口を付けるのを忘れていた紅茶を飲み、更に質問を投げかけようとした時だった。

ノリツジ警備隊の一人が血相を変え、屋敷へ乗り込んできた。

「緊急事態です！海から大量のモースが出現！その数、推定1000体以上！居住区を目指して進行中！」

「あら、もう？もつと猶予があると思っていたけれど」

「来たか。思ったより早かったな」

「現在、予言の子が単独で交戦中！信じられませんが、たった一人でモースの進行を食い止めています！」

常識的に考えるならば真偽を疑う情報だが、伯爵と異邦の魔術師はそれくらいは当然だと疑ってもいなかった。目深のフードを被りなおしたコバヤシは、指揮の為にこの場に残るペペロンに断りを入れ、アルトリアが戦う最前線へと向かっていった。

海岸線を埋め尽くす、呪いの怪物モースの大軍団。ソールズベリーののように肉弾戦を挑もうとは思わない。アルトリアの本能が、あれに近づくなど訴えかけている。ならばどうするか。腰のポーチから特殊な火薬を詰めた弾丸を取り出し、空中に投げて己の魔力を込める。

「いけえ!!」

青く光って飛ぶ、アルトリア特製の魔弾が黒い津波に大きな穴を穿った。次いで聖水が入った瓶を取り出し、蠢くモースの群れのだ真ん中に投げ込む。アルトリアが大地に魔力を流し込むと、それに聖水が反応して大爆発を引き起こした。呪いで蘇った怪物に対して強い効果を発揮する聖なる炎は、モースにとっても弱点である。それさえも逃れた個体には、ナイフや手裏剣といった魔界の投擲武器を用いて仕留めていく。

幼い頃、彼女がマーリンから教わっていた魔術は生活に関する物が殆どだ。攻撃の手段もどちらかと言えば、自衛に適した物が多い。アルトリアの望みかマーリンの方向性かはハッキリしないが、敵を排除する魔術はそんなに覚えていなかった。

ただ、幼い頃からの修行が功を奏し、アルトリアは道具を使う魔術を得意としていた。そこで攻撃アイテムを大量に死蔵していたコバヤシが、彼女にそれを与えて育成を進めていたのだ。

アイテムを使用した魔術は拡張性が高く、魔力消費も抑えられる。モルガンとは違う形の魔術師として、アルトリアもまた成長を果たしていた。

——尚、道具を扱う職業について回る問題である道具の所持数についても、アルトリアにはアイテムを2000個まで保有できる魔界ルールが適用されている。無尽蔵ではなくても、かなりの長期戦に耐えられるのは保障されていた。

「おお……なんと頼もしい！」

「すげえ、たった一人でモースを食い止めている！流石、予言の子だ！」

住民を避難所に誘導していた憲兵達も、彼女の戦いぶりを見て尊敬の念を抱いている。自分一人で対処すると言われて流石に引き止めたのだが、あれを見てしまえば口を挟む余地もない。

「おー、派手にやってるなあ」

「おお、異邦の魔術師殿！来てくださったのですね！」

「住民の避難は済んでるのか？」

「まだ全員は……しかし、予言の子がモースを引き付けてくれているおかげで、こちらは十分な人手を確保できております。まもなく完了するかと！」

「そうか。ならいい」

様子を見に来たコバヤシも、アルトリアの仕事ぶりに満足しているようだ。巡礼の鐘を一つ鳴らし、持ち得るパワーが上がったのも確認している。

やはり、魔界で生活させるには巡礼の旅は必要不可欠だと改めた所で、戦場は新たな局面を迎えた。

「——っ!!」

ちよつとやそつとの事では怯まない、強靱な筈の体に激しい悪寒が走った。楽園の妖精の使命にダイレクトに訴えかけてくる、未曾有の脅威。海を警戒していたアルトリアの視界に、モースとは比べ物にならない程の呪いの怪物が顔を出した。

避難していた住民達の正気が、あの怪物を目にした途端に失われ、恐慌状態に陥っている。人間の憲兵は辛うじて意識を残しているものの、アレを前にして戦う選択肢はとれないだろう。

アレが海から向かってくる。否、倒れてくると言い換えた方が正しいか。街を滅ぼす災厄を見据える予言の子の瞳に、一步たりとも引く気は感じられなかった。その様子を後ろから見守る異邦の魔術師にも、そこから動く気は微塵も無い。それを恐怖に身を竦ませたと勘違いした憲兵は、震えながら声を上げた。

「ま、魔術師殿！あれはもう、我々の手には負えません！後は予言の子に任せて、我々も避難しましょう！」

「あん？」

「住民の避難は完了したと報告が入りました！もうここに残る理由は……！」

「なーにを勘違いしてやがる」

「な、何を……」

異邦の魔術師は予言の子の勝利を確信して揺るがない。フードの部分に隠れていない口元が、笑みを浮かべているのに憲兵は気づいて

しまった。

「俺達の目的は防衛じゃない。俺達は呪いを殲滅しに来たんだ」

アレを目の前にしてそう告げる男に、憲兵は凍り付いたように動けなくなってしまう。あれは人を安心させるような笑いじゃない。異邦の魔術師は人間の筈なのに、自分達とは遠く離れた存在としか思えなかった。

「食らええええ!!ロケットパンチ!!」

アルトリアが取り出したのは頑強な鋼の剛腕。腕に取りつけて魔力を流せば、獲物を前にした猛獣のようにロケットエンジンが火を噴いて唸る。先の叫びと共に撃ち出された拳が何十倍にも巨大化し、襲い来る怪物の頭を真正面から殴り飛ばした。進行を止めて大きく仰け反った相手に対し、アルトリアは駄目押しの一手を投じる。

「死ねえ!!サテライトレーザー!!!」

妖精國の住民は知る由の無い、片手で持てる小型衛星が予言の子の魔力で起動する。手を離れて超音速で空へ飛び立ち、雲を突き抜けた先で標的を定めた衛星から極太レーザーが発射された。

ノリツジ上空で待機していたモルガンの魔術を引き裂いたレーザー砲が、巨大な怪物をてっぺんから飲み込んだ。ついでとばかりに周囲のモースごと焼き払う。目にした者に恐怖心を植え付ける漆黒の体は、やがて白い光の粒子に分解されていく。悲鳴のような声を出しながら悶えていた怪物は、レーザーが消える頃には跡形もなく消滅していた。

こうして災厄は予言の子の手によって退けられ、ノリツジは救われた。スプリガンの金庫城から鳴らされる、連打される巡礼の鐘の音に住民は沸き立った。大声で「死ねえ!!」とか叫んでいたが、街を救っ

た救世主には変わらないのだ。

キヤメロットで執務をこなしていたモルガンの元に、彼女の自慢の忠臣が陳情を願いに来たとの報告が上がる。何か願いが出来たのかと考え、数名の妖精騎士を残して大広間から妖精達を追い出したモルガンは、己の前に跪くウッドワスに言葉をかけた。

「面を上げよ、ウッドワス。お前の願いを口に出す事を許そう」

「ありがとうございます。陛下ならば既にご存知かと思われませんが、予言の子についてでございます」

「うむ」

全然、自分の願いじゃなかった。我が忠臣が予言の子の名を口に出したなら、続く言葉も予想がつく。モルガンの頭脳は、予想を外した事実を忘却の彼方に追いやった。

「何卒、何卒、予言の子と異邦の魔術師の討伐をお命じ下さい。奴等は既に、巡礼の鐘を二つ鳴らしております。不確かな予言に浮かれた者は、ブリテンを救う救世主が現れたと陛下に反意を示す可能性もございません」

「ああ。それに加えてノリツジでは、本当に厄災を退けたのだったな」「はっ。ノリツジの商会団より、そのような報告が届いております。これでは陛下の計画に不備が出るやもしれませぬ！」

憤怒の形相を浮かべる排熱大公に対し、ブリテンの女王は表情を崩さず答えた。

「お前の心配は不要だ。予言の子と異邦の魔術師は私の協力者だ。叛乱はあり得ない」

「なんと!?……いや、しかし。なぜ巡礼の旅を許したのです?今のブリテンで予言の子が巡礼の旅を行えば、陛下に対する反意も増えるかと愚考致しますが」

予言の子一行が味方と分かったとはいえ、ウッドワスの抱いた疑問ももつともだ。モルガンが圧倒的な力を持ったとはいえ、無駄に逆らうものを増やすのは得策とは言い難い。

「予言の子……アルトリアは私と同じ、楽園より遣わされた妖精でな。巡礼の旅を終わらせなければ、その強さは中途半端になってしまう。これから足手まといにならぬように配慮した結果だ」

「左様でしたか」

「……正直に言うとう、アルトリアは私にとって並々ならぬ因縁を持つ相手だ。仇敵と言い換えてもいい」

「そのような相手に慈悲を与えたのですか?」

「我が夫が望んだ、という理由もある。あるのだが……」

モルガンはその先を口に出すか悩んだ。自分に絶対的な忠義を尽くす騎士と視線が合う。本心を吐露するに相応しい相手と考え直し、モルガンは悩んだ末の自分の出した答えを口にした。

「ウッドワス。予言の通りならば、アルトリアが救世主として奮起する年齢を述べてみよ」

「齢にして、16かと」

「そうだ16歳だ。ウッドワス、たったの16歳だ。神秘が尽きぬ限り生き続ける妖精にとって、16年など瞬きの間だ。しかし、このブリテンを背負うには、あまりにも若すぎる」

「……同感です」

「王としての器も持たぬ、力も伴わぬ。使命を与えられはしたが、それ

を望まぬ。そのような娘が16年、片田舎の村で予言の子として必要な事だけを教えられ、救世主として祀り上げられるのだ」

「それは……残酷ですな」

「アルトリアを憎く思う自分はある。だが、このブリテン異聞帯の唯一の同郷として、哀れに思う自分もまたいる」

「致し方無き事かと」

「知啓と力を身に付け、そしてブリテンの過去を知った上で立ちふさがらなければ、それでもいい。私も杖を取り戦おう。」

「だがな、己が立ち上がる理由すらあやふやな村娘とは戦えない。己の足でブリテンを巡り、あの子の中でどのような答えを出すのか。私はそれを待っている」

「……」

脅威となる可能性があるならば、一刻も早く潰してしまえばいいとウッドワスは考える。しかし、モルガンと予言の子とでしか共有できない感情があるのなら、それを口に出すのは憚られた。

「私が命じる。予言の子一行にオックスフォードの鐘つき堂の門を開けよ。予言の子は厄災を退け、その力を示した。グロスターのムリアンにもこれを伝えよ」

「はっ、承知いたしました」

打って変わってミニ魔界。職務を終えたモルガンはふらふらと、引き寄せられるように魔王の寝室へと向かう。

「……………我が夫」

許可も無しに寝室に入れる程度には、モルガンは信頼されていた。もつとも、何を仕込んでも無駄という意味かもしれないが。

女王の呟きに言葉を返す者はいない。巡礼の旅が終わるまで、この部屋の主は帰ってこない予定なのだから。

「……わーがおつとー……」

不満などある筈がない。一人で座り続けていた玉座を離れ、隣に誰かがいる食卓に座る機会が増えたのだから。

愛しい娘との二人部屋を貰い、今まで交わせなかった親子の会話が出来るのだから。

気に食わないアルトリアとの二人旅を認めたのも、この心の余裕のお蔭かもしれないのだから。

しかし、不満は無くても溜まるものはある。ぽふん、とベッドに倒れ込んだモルガンは顔を枕に押し付けて、行儀悪く足をバタつかせた。

「我がおつとー……妻は寂しいですよー……我がおつとー……」

数百年、数千年生きてきた。だから巡礼の旅の間くらいは耐えられるだろう。出来る妻アピールしていたモルガンは、自分の甘い計算を早くも後悔していた。

鐘つき堂の門を開けさせた理由は寂しさなのかもしれない。

アルトリア・キャスターの冒険（V）

「聞いたわよくアルトリアちゃん。モースの軍団に加えて、厄災の怪物相手に獅子奮迅の大活躍だったらしいじゃない！住民も憲兵も皆、凄く凄くって褒めそやしていたわよっ！」

「あはは……どうもありがとうございます」

事後処理を終わらせた後、ペペロン伯爵の屋敷で歓待を受けていたアルトリア。厄災も祓い終ったし、もう用済みだと言わんばかりにさっさと出ていこうとした二人を、ペペロンは一旦引き止めた。『少しは休んでいきなさい。旅に必要な物の補充くらいは世話させなさいな』というノリツジの総意をペペロンから伝えられた二人は、つかの間の休息をとっていた。

「……はあ、美味し……」

今や渦中の人物であるアルトリアは、ここまで来る間に民衆に囲まれて賛美の言葉をかけられていた。正直慣れていなかったもので助けてもらいたかったものの、頼みの魔王はいつの間にか離れた場所に逃げている始末だった。それに怨嗟の念を送りつつ、笑顔を振りまいて逃げてきたアルトリアは、淹れてもらった暖かいお茶に舌鼓を打つ。

「ああいうのは苦手かしら？」

「ええと……まあ、はい」

疲れた様子を見て気遣う言葉をかけた伯爵に対し、予言の子は曖昧な笑みを返した。予言の子として動いている以上、ああなるのは避けられないと分かっていた事だ。

ただ、それに耐えられるかどうかは別の話。否が応でも、頭には思い出したくない記憶が浮かんでくる。

(あの時みたいになってくれたっていいじゃん……)

ティンタジエルでの生活を断ち切った自分の持ち主に、アルトリアは心の中で口を尖らせて抗議した。今は出発の準備が整うまで、ノリッジで掘り出し物を探しているらしい。本音を言うとうち自分も行きたかったが、また囲まれるのは御免だったので見送った。

「あら、ラブの気配がするわね」

「……はい？」

「好きなの？彼の事」

「――」

唐突な恋バナに硬直するアルトリア・キャスター。感情豊かな年頃の娘ならば、惚れた腫れたを人に指摘されれば赤面の一つもするだろう。

ただ一瞬、心臓の鼓動が早まったアルトリアだったが、思いの外反応は鈍かった。

「……どうなんでしよう」

はぐらかす風でもなく、自分の抱く気持ちは何なのかを理解できていない顔。好意的に見ているのは確かだが、それがモルガン達が彼に向けている感情と同じなのかと聞かれれば、自信が無い。

そもそも自分は彼の所有物であり、ここまで強く育てて貰った恩義もある。それとごっちゃにしていけないだろうか？アルトリアの抱く心情は複雑だった。

「好きか嫌いかで言えば、好きだって答えられます。でも、伯爵の言うラブかどうかっていうのは、私にはまだ早いかかって……」

「そうかしら？それはアルトリアちゃんが、尻込みしてるだけじゃなくって？」

「え……」

「貴女には貴女の立場があるんでしようし、思うように動けないのかもしれない。でも私が見る限り、彼は部下に束縛を強いるタイプではないと思うけど？」

「……はい」

それは彼女も知っている。バーゲストとのやり取りを見るに、徹底して上下関係を叩きこまれているとも思えない。

「部外者がいきなり突っ込んだことを言っでごめんなさいね。でも、アルトリアちゃんみたいなたいな女の子には、もつと自分に正直になって欲しいのよ」

「正直に……？」

「彼、貴女が思っているよりも良い人よ。少なくとも、自分を慕う相手は無碍にしたりしないわよ？ したい事とかやりたい事とか、言ってみたらどうかしら」

ペペロンの言葉を受けて、考え込むアルトリア。果たして自分のやりたい事とはなんだろうか？

……いや、そもそも。

所有物でしかない自分が、言っただけのなんだろうか？
彼は自分をどう思っているのだろうか？

「……ちよつと、考えてみます。お茶ご馳走様でした」

アルトリアは席を立ち、貸してもらっている部屋へと引っ込んだ。それと入れ替わりになるように、コバヤシが散策から戻ってくる。

「おかえりなさい。良い物は見つかった？」

「いいや……空振りだった」

「それは残念だったわね」

フードを脱ぎ、僅かに疲れた様子のコバヤシは椅子に座ってお茶に口を付けた。ふと見ると、ペペロンが神妙な面持ちでこちらを見ている。

「どうした、何かあったのか？」

「アルトリアちゃんがね……ちよつと心配なのよ」

「心配？今のブリテンにアイツをどうこう出来る存在なんていないだろう」

「違うわよ。あの子がこれまで、どんな生き方をしていたかは知らないけれど。私が思うに、あの子は我慢する事に慣れちゃってるんじゃないかしら」

「……んー……どうだか。周りが自分より強い連中ばかりだったし、自分を抑えこんでた面はあるかもしれないが……」

「そう……」

「ま、巡礼の旅で力が解放されていくって分かった事だし、そのうち解決するだろうよ」

「ごつそさん、と言葉を残してコバヤシも部屋へ戻っていく。

休憩を終えた二人の次の目的地はオックスフォード。モルガンからオックスフォードとグロスターの巡礼の鐘が解放されたと連絡があった。北の果てのオークニーへの道すがら、二つの街へ寄る予定だ。

伯爵が気を利かせて、見送りに来た人数は最小限になっている。握手を交わした予言の子はノリツジを背にして歩き出した。異邦の魔術師も後に続こうとしたところで、伯爵が最後に話し出す。

「あの子の事、しつかり見てあげないと駄目よ？」

「あん？そこまで過保護にならなくても良いだろうに。アルトリアの脅威になりそうな奴はそういないし」

「分かってないわねエ。どれだけ強くなってもね、女の子は頼りにな

る誰かに、傍にいて欲しいものなのよ。等身大の女の子のアルトリアちゃんの事、アナタはちゃんと見てあげて」

「……………まあ、心に留めてはおこう」

巡礼の旅について、私はモルガン陛下から必要以上の情報を教えてもらえなかった。旅が進むにつれて、楽園の妖精の使命がどういものなのか知識が与えられると。それだけは教えてもらえた。

……妖精國に戻ってから、嵐のような風が酷くなった。魔界の空は真っ暗だけど、他の魔界の輝きが星のように散りばめられて綺麗だった。

でも、ブリテンで目を瞑った時に見える光景は、真っ暗なだけで何も無い。前は見えていた一つの星の光すら、今は弱くなっていてギリギリ見えるかどうかだ。

（———帰りたい。魔界へ、帰りたい）

ソールズベリーで一人になった時、とても心細かった。

ノリツジで囲まれた時、とても苦しかった。

体は強くなつたし、前みたいに好き勝手される事は無いけれど、悪意に晒され続けるのはどうしたって慣れない。

悪魔たちのように悪意をむき出しにして襲ってくる方が、私にとっては楽なのだ。妖精はいつだって、言葉の裏に悪意が潜んでいる。私が楽園の妖精だから。私が楽園の妖精であり続ける限り、私はブリテンの妖精達にとって、潜在的な脅威になり続けるんだろう。

コバヤシも妖精眼がどういう物かは知っていても、ブリテンがどう見えているかまでは想像できていないんだろう。私も言うつもりは無い。

——だって、迷惑かけたくないもん。

本当はすぐにでも帰りたくなっただけ、レベルが打ち止めになって
いる現状じゃ、私はただの足手まとい。皆が強くなっていつてる中、
私だけ弱いままだといつか愛想を尽かされるかもしれない。

妖精眼は本当の心が見えるけれど、それで相手の全てが分かる訳で
はないのです。

……それに、もし。

自分を助けてくれた相手にまで、見捨てられたら。

私は、どうすればいいの？

オックスフォードに着いた私達は、鐘つき堂に向かったのだけ
ど。鐘を鳴らし終わった後に、領主の使者の方が私達をレストランへ
招待してくれた。

初めはワクワクしてた私だったけれど、お店に着いて店員さんが扉
を開けてくれて、中の光景を見たら固まってしまった。

白を基調とした店内は落ち着いた雰囲気纏っていて、とても上品
な香りがした。間違いなく、上級妖精が通うような格式高いレストラ
ンだった。

入店を促されても動けなかった私の背中を、コバヤシがそつと押し
てくれて、ようやく足が動いた。用意されていた私達の席に店員さん
が案内してくれたんだけど、やっぱり緊張して上手く動けなくて。

「そう強張るな」

「あつ……」

コバヤシが私の手を取って連れて行ってってくれて。その手がとても
優しくて。

「……ありがとう」

——胸の鼓動が早くなったのを自覚した。

その後のコバヤシは別人のようで。私に椅子を引いて座らせてくれて。立ち振る舞いが素人目から見ても洗練されていると分かる。

運ばれてきた料理を食べる時も、食器の擦れる音すら聞こえないまま、綺麗な姿勢で綺麗に食べ進めていた。

「美味しいね」

「そうだな。ここまでの料理が出て来るとは、予想外だった」

「コバヤシはこういう場所で食べるの、慣れてるの？」

「まあ……マナーなんかはしこたま叩き込まれてな。俺を魔界に召喚した魔王、セラお嬢……セラフィーヌっていうんだが、そいつにな」
「そうなんだ……」

気付けば私は、声を抑えて静かにお喋りしながら料理を楽しんでいた。場違いだと思っていたけれど、いつの間にか体の力みは抜けていた。

「えっと……」

「ナプキンは適当に置いておけ。綺麗に畳むと不味いつて意味になる」

「そ、そうなんだ」

時々フオローしてもらいながら食事を終えて、私達はお店を出た。

牙の氏族の妖精達が私達の事を目を丸くして見ていて、私は少しだけ誇らしくなった。私の持ち主は凄いなぞう。

「……また来たいな」

「ほう。この店気に入ったのか？」

「そうだけど、そうじゃないよーだ」
「はあ……っ？」

訳わからん、とコバヤシは頭を搔いて先に進んでいく。片方の手は空いたまま。

また握ってもらいたい。でも握りに行けない。

振り払われるのが、怖いんだ。

自分に正直になって、その結果が拒絶されるかもしれないなら。

私はずっと、このままで良い。

アルトリア・キャスターの冒険（VI）

グロスターの鐘を鳴らし、オークニーを目指して北部の大地を旅する予言の子一行。霧が立ち込める広大な湖水地方のその奥に、枯れ果てて燃え尽きた巨大な空想樹が横たわっていた。

「あれが空想樹なんだ……。なんか、こう、おっきいね！」

「あれだけデカけりや、世界の一つや二つ、作るエネルギーがあっても不思議じゃないな」

大樹に蓄えられた力はモルガンに利用され、ブリテンを作り出す糧となった空想樹。今は最早、単なる枯れ木に過ぎないそれを見ている彼と彼女の心中は如何なものだろうか。

大きいというのはそれだけで力を表すもの。軀となって尚、そこにあるだけで圧倒的な存在感を放ち続けている。

「デカイ上に燃えるか……レッドマグナスの野郎を思い出す」

「その人もコバヤシの知り合い？」

「そうだ。こんな異聞帯なんか片腕でぶっ壊せるくらい、デカイ男さ。全身筋肉、脳も筋肉、ついでに考え方も筋肉だ」

馬鹿にしているとしか思えない口調。だが、コバヤシの口元には確かに笑みが浮かんでいた。懐かしい相手を思い返しているような、穏やかな顔だった。

燃え尽きる事を知らない燃え盛る男を思い出し、コバヤシは少し感傷的な気分になっていた。

「しかしまあ……静かだな、ここ」

「そうだね、モースも出てこないし」

「僕はこういう静かな場所、嫌いじゃないよ。好きな人と一緒にいるなら、猶更ね」

「そうかい」

「そっかー……」

「うん」

「……」

「……」

「……」

「メリユジーヌ!?!」

「何でいるんだお前……」

「えへ♪」

「答えんかい」

唐突に現れたドラゴン娘、メリユジーヌ。

彼女が予言の子一行に合流したのは、自分の大元であるアルビオンの骸に異変を感じ取ったからであった。

「湖水地方にある龍骸の沼が荒らされてる?」

「うん……なんだか妙な胸騒ぎが治まらなくて。丁度、二人とも近くまで来ていたから一緒に行って欲しいな……」

「どうせ通り道だ。もう死んでるドラゴンに何の利用価値があるか知らんが、人の物に手を出した墓荒らしを仕留めに行くか」

「ありがとう、心強いよ」

妖精國で最も美しい妖精騎士は、躊躇いもなく異邦の魔術師の手を握った。それに軽い衝撃を受ける予言の子。

「沼までは僕が案内するよ」

「任せた」

「う、うん……」

ごく自然に手を取り、尚且つそのまま進んでいく。妖精騎士のスマートな動きに戦慄するアルトリア。自分もあれくらいできないと駄目なんだろうか？悶々とした気持ちを抱えつつ、森の中へと入っていったのだった。

「でも、何者なんだろう。骸の沼の水には呪いがしみ込んでいるから、誰も近づこうとはしない筈なんだけど……」

「ここにきて第三勢力とか勘弁してくれよ……。そのうちカルデアとかいうのだって来るってのに。どんどん面倒が増えてきやがる」

「ご、ごめん……面倒事を増やしちゃってごめん……」

「お前のはお前自身のせいじゃないから別にいい。……とはいえ、また呪いの類かよ。過去に負債を残し過ぎだ。どれだけ好き勝手やってりやそうなるんだ……」

ブリテンのあちこちに蔓延る呪いの山に、コバヤシは深い溜息を吐いた。知れば知るほど問題が増えていくブリテンの長い歴史は、魔王の精神に少なからずダメージを与えていた。

やられた分は倍返しだ。誰に対してなのか知らないが。怒りをチャージして解放の時を狙うコバヤシ。魔王が浮かべる不敵な怒りの笑いにビビる連れ二人。下手を打つと、巡礼の旅が終わるまでにブリテン島が半分くらい消し飛ぶかもしれない。

「まあ侵入者が誰にせよ、どうせ碌でもない目的なんだろうよ」

「コバヤシ、なんだかやさぐれてない？」

「まあまあ。僕もコバヤシと同じ意見だ。何をしてでも阻止しないとね」

「うんうん。私もそう思うなー。私達の大切な場所だから、できれば追い払ってくれると助かります」

びたり。

立ち止まる一行。

増えてた。明らかに知らない声が一人増えてた。

「——きゃあああああああああ!?!」

「今度は妖精亡主!?!」

「ゴースト……?」

ふよふよと浮かぶ靈魂。怯えたメリユジーヌは魔王の背にマツハで隠れ、残りの二人はまじまじと観察を始める。

「こりや珍しい。ゴーストの割に随分と澄んでるな、お前」

「うん。敵意とか悪意とか、そういうの全然感じない」

「そりやねー。私、未練とか恨みとか無いからねー」

「ふ、二人とも何をそんな冷静に……」

「私、妖精亡主のミラーっていいまーす!それできっきの話なだけでー。私達が守ってる骨々様に悪さしてる連中がいるの!お願い、何とかして!」

「そもそも、そのために来てるから良いですけど……」

「成仏したいとかじゃないんかい……」

底抜けに明るい亡霊ミラー。おっかなびつくり背中から出てきたメリユジーヌは、今度は酷く沈んだ表情になった。

「君、ここにいるって事は鏡の氏族の……?」

「うん。アナタとは久しぶりかなー?」

「……そう、だね」

「え?二人は知り合いなの?」

「そうだよー。6年前の事件は知ってる?」

「ええと、鏡の氏族が何者かに滅ぼされたっていう……?」

「そうそう。エインセルの予言通り、『炎』と『風』に皆殺しにされちゃってね」

「……………」

コバヤシは顔を手で覆った。

脳内で情報が整理され、答えが導き出されていく。

炎と風。殺しという事は何者かの意思。

風と聞いて思い浮かべるのは、風の氏族。氏族長オーロラ。

メリユジーヌのミラーに対する、後ろめたそうな態度。

炎と風。

メリユジーヌとオーロラ。

……………。

「あのド腐れクソ妖精!!!!!!」

コバヤシは叫んだ。絶対に名前を呼びたくない女が、またやらかした。妖精國はどうしてこう、自分の感情を逆撫でしてくるのか。

「そしてこの愛欠食のチビ!!!」

「ふぎやあつ?!?!」

コバヤシは殴った。自分はレベル1に戻ってるから死ぬ威力にはならないだろうと、思い切りメリユジーヌの脳天を殴った。

お前なにしてくれとんねん。悪魔も助走つけて殴るレベルの暴挙をやらかしてた。しかもこれ、ほんの一例に過ぎないんだろうなあ

……。コバヤシは無性にソールズベリーを焼きたくなった。自分が炎の災厄になる気マンマンだった。

「…………一族郎党皆殺しにされたなら、街一つ燃え尽きる呪いが起きても不思議じゃないよな」

「コバヤシは何を考えてるのかな!?!」

「あれー？ひよつとして私、とんでもない悪行の片棒を担がされようとしてるのかなー？」

邪な考えが脳裏をよぎる。だが自分に会いに来た桃色の妖精の顔を思い出し、ギリギリ堪えた。

「ふうふうううう……!!」

「ぐええつ、重いよコバヤシ……」

「うるせえつ、どいつもこいつも俺の堪忍袋の緒を引っ張りまわしやがって……!」

「ご、ごめんなさいい……」

地面に倒れているメリユジーヌの体の上に、コバヤシは腰を下ろした。涙目の妖精騎士の頭に、拳骨がグリグリと押し付けられる。その様子を気の毒そうに見つめるアルトリアだが、やらかした事件が事件なのでフオローの言葉も出てこない。

「ていうか、ミラーは平気なの？随分フランクに話してるけど……」

「さつきも言ったけど、恨みとかは無いんだー。鏡の氏族は未来が見えるから、自分がいつ、どう死ぬかも分かっちゃってるから」

「一応訊いてやる。どんな理由で殺した？」

「……その、エインセルの予言が広まって鏡の氏族が注目され始めて、オーロラがエインセルを危険な妖精だって……」

再びメリユジーヌの頭部に落とされる魔王の鉄槌。固い地面にめり込む、妖精國随一の美貌を誇る顔。ズシン、と彼等を中心にして陥没する大地。「うわー、いたそー」と呑気な感想を口にする被害者の亡霊。アルトリアは死んだ目で現実から逃避を始めた。

言いがかりじみた疑惑だけで、一つの氏族が減びる無法国家ブリテン。オーロラは当然だが、言われたままに動いてしまうメリユジーヌにも問題はある。しかも質の悪い事に、オーロラ自身が虐殺を命じて

はいない。あくまでも客観的な事柄を並べ立てただけであり、それを受け取ったメリュジーヌが自発的に動いただけなのだ。

手を汚したのはメリュジーヌ。オーロラは悪くない。

主君の望むものを察し、命じなくても用意する従者。

一見して理想の関係に思えても、そこには信頼も無ければ責任も無い。

魔王は二人の関係に吐き気を催した。最悪の方向に噛み合っている。こんなものが理想の主従などと言われたなら、自分の怒りはメリュジーヌの頭部を犠牲にしても治まらないだろう。

かつて、魔王セラフィーヌへ仕えていた自分。初めはプリニーよりちよつとマシな待遇でこき使われたり、名前を玩具にされた挙句に元の名前が分からなくなってしまうた事もあった。

自分勝手に我儘な女に呼び出された挙句、記憶も無くして帰る場所すら分からない。最早、惰性で生き続けていた自分にとって、名前の消失など特に悲しくも無かった。

だが、その時初めてセラフィーヌは狼狽した。部屋へ引きこもった彼女は、次の日に今の名前を彼に贈った。

その日から、彼の世界は色付き始めた。自分の執事にする為に、魔王の従者に相応しくなるようにと力と知識を蓄えさせた。

コバヤシはセラフィーヌをクソみたいな女だと思っている。今もクソだが昔はもつとクソ。

だが良い所も見えてきた。一握りくらいの良心は持ち合わせているし、意外と面倒見がいい所もあった。過去の仕打ちは決して忘れないし許さないが、自分の面倒を見てくれたことに対しては、感謝と敬意を抱いていた。

そんなセラフィーヌに比べれば、オーロラなど道端の石ころにすら値しない。そしてそんなのに愛を捧げ続けるメリュジーヌ。お前らいい加減にしろ。コバヤシは苛立ちを隠せなかった。

「殺しちゃったものはもう取返しもつかん。せめて罪滅ぼしくらいはするんだな」

「……分かってる」

「そんなに気にしなくてもいいのにー」

「気に病ませろ!!お前らは良くても俺は良くないんだよ!!」

「……そっかー」

「い、いい加減先に進もうよ……」

「……それもそうだな」

メリュジーヌの首根っこを引つ掴んで立たせたコバヤシ。一行は再び龍骸の沼へと進み始めた。

「モースの大群!?!このっ、邪魔するな!!」

行く手を塞ぐように現れたモースを確認するや否や、神速で突っ込んで切り捨てていくメリュジーヌ。

「どんどん集まってくる!メガスター!!」

「どげやア!!!」

星の魔法と炎の魔法がモースを焼き尽くす。沢山のモースを目の当たりにして、逃げようと言おうとしたミラーも思わず言葉を引つ込めた。

「凄いな、みんな強いねー!」

「……私は最強の騎士だからね。それにアルトリアは予言の子。コバヤシに至っては人間の魔王だ。この程度、どうって事無いよ」

「予言の子?そっか、アナタが……そっかー……」

大量のモースの妨害をなぎ倒して進む予言の子一行。

沼に辿り着いてその光景を目にしたメリユジーヌは、激情に駆られて声を荒げた。

「なんだ、この恥知らずな紐は!! 私達の湖によくもこんなものを!!」

沼の周辺に張り巡らされていたテープを引き千切り、メリユジーヌは上空に浮かぶ下手人を睨みつけた。

「おや、付近の警戒にあたらせていたモースが反応したと思ったら……とんだ大物、しかも本命がかかるとは幸運でしたわ」

スーツに身を包んだ人型の異形は、メリユジーヌを視界に収めると目の色を変えた。

「誰だお前。ここで何してやがる」

「あらあら、初対面の相手……ましてやレデイに対していきなり名前を尋ねます? 人の名前を尋ねる時は、まず自分から……というのが、礼儀というものではないでしょうか」

「墓荒らしが礼儀を語るな。この火事場泥棒が、服を着た程度で礼節が身につくと思うなよ」

「これは手厳しい。まあ、私もアナタの名前などに興味は無いのですが☆」

白々しく笑う眼鏡の美女に、魔王は敵愾心を露わにしていた。予言の子もまた、油断なく相手を見定める。

「私達は通りすがりの旅の者です。ここに眠るのは遙か昔にこの場所へ降り立った境界を司る龍、アルビオン。みだりに手を出していい物ではありません」

「知っていますとも。それが目的で来たのですから。まあ、ここにあったのはただのガラクタでしたが……本命を釣り出す餌としては十分でしたね」

「本命……？」

「ええ。妖精騎士ランスロット改め、妖精騎士メリユジーヌ。今を生きるアルビオンである、貴女の全てを頂きましょう」

「――」

沼より這い出でる、膨大な魔力量の怪物。ノリツジでの厄災すら上回る、濃密な呪い。

――タマモヴィツチ・コヤンスカヤ。

人間以外のあらゆる生物を蒐集する彼女は、呪いの怪物ですら自らの手足として使役していた。

腐り落ちたアルビオンの死肉と、過去の戦争で皆殺しにされた北の妖精達の怨念が煮詰まった沼の水から、コヤンスカヤが作り出した眷属が牙を剥く。

「営業トークはここまでと致しましょう。大人しくその身を差し出すならばそれで良し。抵抗はそちらの自由ですが――」

目を細め、獲物を狙いコヤンスカヤは笑う。

「――たとえばどのような体になっても、クレームは受け付けませんので☆」

その言葉を皮切りにして、厄災溜まりが襲い掛かる。

メリユジーヌが両腕からアロンダイトの牙を生み出して、真正面から迎撃の構えをとった。アルトリアは彼女に補助をかけたつも、空いている手の中に魔弾を仕込む。

一歩踏み込み、加速して最高速の剣技で葬ろうとしたメリユジーヌ。

しかし、そんな彼女の視界の端にあるものが飛び込んできた。

(……杖?)

後ろから前へ。まさか今、飛び込もうとしている方向に飛んできた杖を見て、メリユジーヌは押し止まる。

簡素な作りの杖は厄災溜まりへとすっ飛んでゆき――

――呪いが弾けた。

「……………えっ?」

弾けた。妖精國でも類を見ない厄災溜まりが、弾け飛んだ。

パチクリと、コヤンスカヤは瞬きを繰り返す。転移? 否、ただの力技で消滅させられたのだ。

厄災を突き破り、地面に刺さった杖は異邦の魔術師が持っていたものだ。まさか、人間如きに――?

「――この、尻尾も生え揃ってない九尾の餓鬼が。身の程を知れ。お前、誰のモノに手を出してやがる――」

フードを脱ぎ捨て、正体を露わにしたコバヤシの体から、赤黒い魔力のオーラが立ち昇る。

超常の力を目の当たりにして、尻尾の毛が総毛立つコヤンスカヤは、それに? まれまいと言葉を紡いだ。

「誰のモノとは不可解な言い回しですねえ。まさか、この沼一帯を貴

方が所有しているとしても仰りたいのですか？」

そう言って笑って見せるコヤンスカヤ。この國の人間にそんな権利など与えられっこないのを見通しての発言で、ペースを取り戻す腹積もりだった。

——だが、相手が悪かった。

「そうだと言ったら？」

「……………は？」

「この國は、俺とモルガンの國だ。そしてメリュジーヌも俺のモノだ。お前程度の畜生が手を出して、許されると思うなよ……………!!」

思い当たる節があった。

モルガンと同じ立場にあるという、妖精國大統領のポストに納まっている人間。

それが目の前の男だと、コヤンスカヤはようやく思い至った。

「メリュジーヌ、獲れ!!」

「——!!」

俺のモノ発言を聞いて、ちょっとポワポワしてたメリュジーヌ。

だが、魔王の号令を聞いて条件反射で体が動いた。展開していたアロンダイトを、殺人的な加速をもってコヤンスカヤの霊核へぶち込んだ。

「がああああああつ!？」

致命的な一撃を見舞われて、必死で距離を取ったコヤンスカヤは姿を消した。

「に、逃げちゃった!」

焦るアルトリアを他所に、コバヤシはメリユジーヌを呼び戻す。

「メリユジーヌ、追えるな？」

「……うん。匂いも痕跡もバツチリだ。すぐにでも追撃に移るよ」

「よし、行け。それでころ……いや、とっ捕まえて捕虜にして、情報も魔力も搾れるだけ搾り取れ。あの尻尾も全部筆り取ってやれと、捕虜説得部隊の連中に命じておいてくれ」

「了解だ。君にこれ以上無い戦果をプレゼントするよ」

腕の返り血の匂いを嗅いで、メリユジーヌは追撃できると判断した。アルビオンの力は止まるところを知らず、本来なら時空ゲートや魔界調査船でしか行き来できない魔界間の移動を、彼女は単独で可能としていた。

故に手がかりさえあれば、コヤンスカヤがどこに逃げようと追いかけられるのだ。

信頼に応えるため、メリユジーヌは笑顔を見せて飛んでいく。

「良かったー。あの子、ちゃんと笑えてる」

「あん……？」

空に消えたメリユジーヌを見送っていたミラーが、ふと呟いた。

「私達の所に来た時も、ずっと辛そうな顔してたからさー。ああ、この子はずつとこうやって生きてきたんだなーって思ったの」

「だろうな……」

「でも今は、とつても楽しそうだし。いけない事したら、ちゃんと怒って止めてくれる人がいる。あの子に必要なだったのは、きっとそういう人だったんだよ」

「……」

「ミラー……」

「へへー。ちよつとした心残りも消えた事だし、私の最後の仕事も終わらせなきやねー」

亡霊の体が忽然と光りだす。鏡の氏族としての、最後の仕事。

「予言の子への伝令が、私に課せられた役目。まあ、本当はエインセルの仕事だったんだけど、私が引き受けちゃった☆」

「良いのかそれ」

「だって、死んだ後もずっと謝り続けてるんじゃないかってくらい、責任感のある人だったからさー。そんなの辛いじゃない？

それでねー。一つ目は巡礼の鐘の在処なんだけど、ここには無いんだー。あれは氏族の長が持つ物だから」

「ふーむ……」

「それと、エインセルの最期の言葉も伝えておくねー。」

『やがて予言の子が二度、やって来る。一度目は生きるために。そして二度目は、死ぬために』だって！」

「……はい。大切な予言、確かに受け取りました」

「でも囚われ過ぎない方が良くもねー。私達、コバヤシ君みたいなの見逃してたくらいだし、もうあんまり役に立たないんじゃないかなー」

「えっ」

「コバヤシ君てお前……」

「いつその事、予言なんて当てにならないくらい、滅茶苦茶にかき回してくれた方が良くかなーって！」

「ミラー!？」

「あははー、冗談冗談。でもねー、私達の知らないコバヤシ君が、私達の知らない未来を持ってきてくれるの、ちよつとだけ期待しちゃうんだー」

「……そうか」

「お願い聞いてくれてありがとうね！さようなら！」

「……ありがとう、ミラー！あなたこそ達者で！」

「さよならだ、鏡の氏族のメツセンジャー」

こうして、役目を終えた亡霊は、光となって消えていった。

元の二人旅に戻った事で一抹の寂しさを感じながら、二人はオークニーを目指して歩を進めるのであった。

アルトリア・キャスターの冒険（VII）

深々と、肅々と。灰色の空から雪が降っているブリテンの最北端。南部ではあり得ない、吐いた息が白くなる程の寒さ。

モルガン陛下に着せられた服、ピカピカでかなり気後れしてたんだけど、今は温かくてとてもありがたかった。

……かつて、雨の氏族が暮らしていた場所。楽園の妖精を匿ったせいで、4つの氏族から攻め滅ぼされたという。

きっとこの雪は、雨の氏族達なんだろう。あまりにも冷たい境遇に、身も心も凍り付いてしまった、悲しい妖精達。

「アルトリア、掴まれ。オークニーまでは海を越えなきゃならん。一気に飛んでいく」

「うん、分かった」

身を寄せた私の腰と背中を、コバヤシの腕が力強く抱きかかえる。私も振り落とされないように、コバヤシの体にしっかりと抱き着いた。

独特な浮遊感の後に体全体に叩きつけられる冷たい風が痛くて、思わず顔をコバヤシの胸に埋めた。

（あったかいなあ……）

寒い筈なのに暖かい、不思議な感覚。もつと沢山感じていたかったけれど、オークニーにはあつという間に着いてしまった。

勢いをつけ過ぎたのか、着地の時の衝撃が凄かった。クレーターが出来ちやつてるし……。

「……あれ？」

「どうした」

「……ううん、何でもない」

誰かがいたような魔力を感じた気がしたんだけど……気のせいかな？まあ、こんな所に誰かがいるはずないよね。

鐘つき堂は目と鼻の先にあった。崩れたお城の階段を歩いて行けば、巡礼の鐘がある場所に着く。

……はず、なんだけど。

「霧、濃くなってきたね」

「……それだけじゃなさそうだ」

「うん、分かってる」

私達の前に立ちふさがる、亡霊のような何か。この先に進むには、彼等を倒していかなければならないらしい。

けれども、今の私とコバヤシならあつという間に倒してしまえる。力及ばず、無念の内に散っていった彼等の残滓を、私達は情け容赦なく蹂躪していった。

「……あれで最後か」

巡礼の鐘の前に立ちふさがる、最後の試練。そこにいたのは。

「」

潰えたブリテンの希望。皆の理想の王になる筈だった、最後の騎士。

その傍らには、杖を持った救世主。一人目のアヴァロン・ル・フェ。光の消えた瞳が私達を見据える。憎悪。未練。失意。悲壮。あらゆる負の感情を煮詰めたような、濁った目。

「……………ウーサー坊や……………トネリコ……………」

その名を呼んだコバヤシの表情は、これまで見た中で一番やるせない感情を浮かべていた。

でも、一度視線を落とした後は、フードを取って一步前に踏み出した。

その手には、杖ではなく剣が握られている。

「……やりたくないなら、やらなくても良いぞ」

コバヤシは強がつてそう言った。自分だつてやりたくない癖に。コバヤシだけ行かせるわけ無いじゃん。

「ううん、私も行く。一緒に戦おうよ」

「……そうか」

私だつて、本音を言えば戦いたくなんてないよ。

だつて、あの人達は、ブリテンで一番めでたい日に一番幸せになる筈だった人達。裏切られ続けて疲弊しきつて、それでも希望を持ち続けていたあの人の――

『あ——はは。あは、あはは。ははは。あははははははは……!』

「……………俺に、どんな顔してあの二人と戦えっていうんだ」

――。

「アイツは、トネリコは、ただ……畜生、ふざけるな、ふざけるなアアアアア!!!」

吠えて飛び出していったコバヤシに、私も慌てて後に続いた。今まで散々、文句や愚痴をこぼしていたのは見てたけれど。

——弱音を吐いたのは初めて見たなあ……。

私達とあの人達では地力が違う。普通に戦っていれば負ける理由の無い戦いだった。文字通りの瞬殺だって出来ただろう。

でも、私達の心の中にある躊躇いの気持ちがある。それを邪魔していた。目の前にいるのは、血の通っていないただの亡霊の筈なのに。救世主は騎士を助け、騎士は救世主を庇う戦い方をしていた。痛ましくて、眩しくて。なんでこの人たちが死ななければならなかったんだろう。

きっと、納得できる理由なんて無い。誰かの思い付きで誰かが死ぬ、そんな惨い世界を変えようとしていた。それが気に食わない誰かに、あの人達は殺されたんだ。

甲高い音と共に、騎士が弾き飛ばされた。それを庇うように救世主が前が出る。

——やめて。もうやめて。

そう願う想う資格も、それを口に出す勇気も私には無くて。

『あ——ああ——あああああああああ!!!』

必死の形相で、手にした杖で殴りかかってくる救世主を。

「——え」

』!!』

コバヤシは無防備なその身で受け止めた。予想外の行動に出た相手に、救世主は固まった。

そして彼は腕を伸ばして、救世主の頭を優しく撫でた。

「志半ばで倒れたお前達の居場所は、もうここには無い。

今のブリテンにはモルガンがいる。お前達の旅路は俺達が引き継ごう。

もう……いい。休んで良い、トネリコ。頑張るのは、生きてる奴等に任せればいい」

救世主の瞳が驚いたように見開かれ、そして寂しそうに笑った。立ち上がっていた騎士が、手にした剣を鞘に戻していた。

救世主は撫でられながら、彼のもう片方の手を両手で掴み、祈るように包み込んだ。

短い静寂の後に、救世主と騎士は灰色の雪になって消えていった。……誰よりも強い魔王は、包まれていた手をじっと見つめていた。

「……終わったよ。コバヤシ、終わったんだよ」

「……………ああ」

私の声に反応して、コバヤシは巡礼の鐘を見やる。

「これで、五つ目の鐘が鳴らせる」

「うん」

「でも、その前に少し休もう」

「……………うん」

「……………流石にあれは堪えたぜ」

崩れた石材を椅子の代わりにして、魔法で焚火を作り出したコバヤシは座った。私もすぐ隣に腰を下ろす。

……寒いなあ。

「あのさ……もっと近くに寄っても良い？」

コバヤシからの返事は無かった。

でも、羽織っていたローブを大きく開いて、私をすっぽりくるんでくれた。

温かい人のぬくもりを近くに感じる。

「コバヤシはあの二人の事知ってたの？」

「どうしてだ？」

「なんか、口調がそう感じたから」

「……………知ってたよ。一方的にだけだな」

モルガン陛下には内緒だと約束して、コバヤシは教えてくれた。夢の中で妖精歴のトネリコの記憶を追体験した事があるんだって。

「ていうかさ、夜魔族ってさ。い、いんま、淫魔の事だよね…………？」

「そこに反応するなよ…………」

そ、そりゃ反応するよ！だって、私も同じサブクラス取ってるんだぞ?!なんか、違う意味で体が熱くなってきたような!?

「分かっただけの事だが、知れば知るほど嫌になっていく國だ」

重い溜息と一緒に吐き出した言葉が、私の心を締め付ける。

「……後悔してない？巡礼の旅に出た事」

「後悔なんて、この國と関わり合った時からずっとだ」

「その割には、私や皆の面倒を見てるよね」

「俺が拾ったし、買ったからな」

「普通、それだけでここまで付き合ってくれないよ」

「言えてるな」

「……投げ出しても、誰も文句なんて言わないよ」

「……」

暗い感情が吹き出してきて、ついつい後ろ向きな言葉が出てきてしまう。

この人はどうして、嫌な気持ちになっても進めるんだろう。

「放り出さないのに大した理由なんて無い。まあ、面倒事は山ほどあるが——」

焚火に照らされる彼の横顔。その瞳には、一筋の力強い光が宿っていた。

「——それを背負う価値がお前達にあると、俺は感じてるんだろうよ」

「……………」

少し、焚火が強過ぎるんじゃないかな。

ちよつとだけ、顔が熱くなってきたやつだよ。

残る巡礼の鐘はあと一つ。

私達の旅は、もうすぐ終わる。

【幕間】 悪逆非道のバーヴァン・シー

カツ、カツ、とヒールを鳴らし、深紅の髪を靡かせて歩く一人の妖精。

妖精騎士バーヴァン・シー。赤い踵のバーヴァン・シー。

擦り切れた魂が補完され、生を噛み締め魔界で過ごしていた彼女には、ある悩みがあった。

「……なーんか、舐められてる気がするのよねー……」

ブリテンにいた頃は、自分の足音を響かせるだけで雑魚共は震え上がっていた。気に入らない奴は散々痛めつけて殺してやった。皆に恐れられ、皆に嫌われていた自分。

だが、ここではどうだ。

凄んでみても、脅し文句を吐いても、大抵の者からは流されている。ビビるのはペンギンみたいな皮を被った連中くらい。魔界の連中はコバヤシの配下だから、ブリテンみたいに殺したら怒られる。そうしたら、お母様も追い出されるかもしれない。

それは駄目。前よりもお母様と一緒にいられるようになったのに。前よりも少しだけ、お母様が笑うようになったのに。

悪逆に生きると教育された。でもそうしたら、今の生活が成り立たなくなる。そんなジレンマを抱えたバーヴァン・シーは、一人悶々と悩んでいた。

このままでは駄目だ。そう決めたバーヴァン・シーの行動は早かった。

「おい、ザコ」

「なんです、バーヴァン・シー？」

相手はそこそこ交流のある、暗黒議会の議長。雑魚呼びしても気にも留めない気に食わない奴。

だが、背に腹は代えられない。自分達の今後がかかっているのだ。

「誰でもいい、お前が知ってる中でとびきりの悪い奴を私に紹介しろ」
「……はあ。突然どうしました？紹介するのは良いですけど、せめて理由くらは教えて頂きたいですね」

「チツ……最近の私はどうも腑抜けてるんだよ。妖精國の私は道行く奴等みんなに嫌われてる、最っ高に尖った妖精だったのに。ここじゃ駄目だ、誰も私を嫌ってもないし、ビビってもいない」

「……成程」

——そりゃ、アナタちつとも悪い妖精じゃないですからね。

議長は言いかけた言葉を飲み込んだ。悪意渦巻く魔界で生きてきた彼女達からすれば、バーヴァン・シーの悪辣さは無理矢理取って付けたものだというのは丸わかりだ。

彼女の境遇は聞き及んでいる。元よりそういう存在の自分達と、そうしなければ生きていけなかった彼女では、違いが出て当然というもの。

ぶつちやけ、良い子が頑張つて悪ぶっているのを微笑ましく見ている、というのがバーヴァン・シーを取り巻いている環境だった。

「このままじゃ、私、駄目なんだよ。お母様に悪逆に生きろって言われているのに。ただでさえ何も出来てないのに。怒られてばかりなのに……！」

「……あの、落ち着きましよう？ね？」

怯えて瞳孔が閉じ始めたバーヴァン・シー。呼吸が荒くなった彼女を議長は必死に宥めていた。

——モルガンさん。貴女の愛情、半分も届いていませんよ。

議長はブリテンの女王の至らなさを嘆いた。モルガンと普通に話していても、そこそこの確率でこうなってしまうのだ。ウチの魔王様が気を利かせて二人部屋にしたのに、どうして誤解が解けてないんだ

ろうか。

「分かりました。私の知る限り、最高の不良をあなたに紹介しますよ」
「ほ、本当？不良って響きがチョットしよぼいけど、この際どうでもいいわ。お前、中々使えるじゃねーか！」

「それはどうも」

ほら、言葉遣いとは裏腹に、笑った顔には邪気の欠片も見当たらない。こんな女の子に悪の道など似合わないだろう。

——ブリテンに突如として、流星群でも降ってこないかなあ。
ここにはあの子達だけいれば良いのに。

自分達が手を出したら気に病むだろうが、自然に消滅したなら納得してくれるだろう。議長は善良な妖精に悪党の仮面を被せなければならぬ、悪魔よりも悪魔なナマモノが蔓延る國に、滅びが訪れるように祈っていた。

「ほほう、それでアタイの所で修行したいんだね？その心意気、気に入った！このラズベリルに任せな！アンタを立派な不良に育ててやるぜ!!」

その悪魔の名前を聞いて、バーヴァン・シーは運命を感じた。なんとってラズベリルである。今は亡きモルガンの別れた夫が、自分を更生させようと導いてくれているのだ。

そう信じて疑わなかったバーヴァン・シー。意気揚々と彼女の元へやってきたのだが。

「そ。よろしく頼むわ。……で、お前。何してるんだよ」

「何って、おいおい。見れば分かるだろう?」

小さな体で胸を張り、トングで掴んだ空き缶をこれ見よがしに見せつける。

「ゴミ拾いに決まってるぜ!!」

そうか。見たまんま。思っていた通りだった。

「……ゴミ、拾い?」

「そうー!これこそ不良になる第一歩だぜ!」

「なんでだよ!?!」

おかしい、自分は悪逆非道の道を進むために来たのに。その教えを乞いに来たのに。自分は決して、ボランティア精神を育みに来たわけではないのに。

「なあ、おい。私をからかっているのか?それとも馬鹿にしているのか?魔界では、ゴミ拾いなんてやっている奴が不良なんて呼ばれるのか?ええ、ラズベリル様よお?」

「そうだとも!アタイはいつだって真剣さ!もちろん、これは不良の道の始まりに過ぎないぜ?この後も献血活動、ヘルマーク集め、早朝のラジオ体操に魔界交通安全運動など、やる事はてんこ盛りだぜ!」

疑うバーヴァン・シーの視線を、混じりけの無い純粹なラズベリルのキラキラした瞳が見返した。嘘でも冗談でもない、熱意の感じるラズベリルの態度にバーヴァン・シーは気圧された。

バーヴァン・シーは知らないのだ。

遅刻、無断欠席は当たり前。宿題なんてわざと忘れる。それが悪魔の常識。それをラズベリルという不良は、毎日無遅刻無欠席、宿題は

必ずやってくる。悪魔の常識に捉われない生き方こそが、不良と呼ばれるのだと。

「さあ、アンタも始めな！一刻も早く不良になりたいなら、無駄にする時間なんて無いよ！」

「わ、分かったわよ……」

トングとゴミ袋を渡されて、文句を垂れながらもゴミ拾いに勤しむバーヴァン・シー。

自分もゴミ拾いをしながら仕事ぶりを観察していたラズベリルは、突如として目の色を変えた。

「バ、バーヴァン・シー……アンタ、一体、何やってんだい……？」

「はあ？何ってゴミ拾いだろろうが」

ラズベリルが言いたいのはそういう事ではなかった。

なんとバーヴァン・シーは複数のゴミ袋を持ち、それぞれに違うゴミを入れていたのだ。

「ゴ、ゴミを分別している、だとう……!？」

「そ、それが何よ。当たり前前の事だろろうが」

ラズベリルは戦慄した。

自分が指摘するまでもなく、それが当たり前であるかのように振舞っている。自分とて、それに気付くのは時間がかかったというのに。

——コイツはやべえ!!全魔界一の不良になれる逸材だ!!
ラズベリルは確信した。絶対にバーヴァン・シーを、どこに出しても恥ずかしくない程の不良にしてやろうと、固く決心した。

「ふっ、流石だぜバーヴァン・シー。アタイはアンタを見くびっていた

のかもしれないねえ……」

「ハッ、その使えない目ん玉えぐり取ってやろうか？ 私じゃなくて、お母様の教育の賜物だつての」

「そうなのかい。アンタのお袋さんも、不良って奴を分かっているじゃないか！ きつとアンタが将来、とんでもない不良になるって見越してたんだらうね！」

「……そ、そうなのかな？ 私、お母様に期待されてるのかな？」

「当たり前だろう？ でなきゃ、あんな高等技術を教えられたりしてないさ！」

ラズベリルの言葉にバーヴァン・シーは高揚した。他者から母の愛を肯定されるという体験は、周りに人がいなかったバーヴァン・シーには無かったものだ。

発奮したバーヴァン・シーはこの後も不良活動に勤しんだ。

毎日ヘトヘトになるまで働いて、それでも笑顔を忘れないバーヴァン・シー。元より根つこの部分が善良の彼女が、ボランティア活動に精力的になるのは当然の事だった。同じ志を持つ仲間がいたのも、彼女が打ち込むようになった理由の一つなのかもしれない。

一日の修行メニューも終わり、自室へと戻ったバーヴァン・シーは椅子に座る母親に出迎えられた。

「おかえりなさい、バーヴァン・シー。……ここ最近、別の場所へ出かけていると聞いた。お前が何をしようと制限するつもりは無いが、あまり帰りが遅くならないようにしなさい」

「あら、駄目よお母様。私はもう立派な不良になって帰ってきたんだもの。そんなお願いは聞けないわ」

「……………なん、だど？」

自分の知る娘からは絶対に出ない言葉を耳にして、モルガンの目が驚きで見開かれた。

——反抗期。そうか、反抗期か。

子供が成長するなら訪れるであろう、親への反抗心が顕著になる時期。遂に自分の娘にもその時が来たのだ。

嬉しいような、悲しいような、複雑怪奇な気持ちを押し殺して悟られないように、普段通りに振舞った。

悪逆に生きろと教育したのは、他でもない自分自身だ。その矛先が自分に向けられたとて、バーヴァン・シーを責める資格など自分には無い。

もしかしたら、魔界に生きる誰かに迷惑をかけてしまうかもしれない。その時は自分が罪を被ろう。

たとえそれで、己が魔界を去る事になろうとも、己の撒いた種なのだからしょうがない。娘の幸せは、己の夢よりも優先されるべきなのだから。

「バーヴァン・シー、私はお前の幸せを願っている。だから好きなように、自分のしたい事をするがいい」

「ふふ、覚悟しててねお母様。私の不良ぶりに皆が驚く顔が今から目に浮かぶようだよわ！

——じゃあ私、ゴミ拾いに行ってくるから!!」

「ああ、行ってきなさい」

ラズベリルから贈られたゴミ拾いセットを持って、部屋から出ていくバーヴァン・シー。

——待ってるよ、ミニ魔界に落ちてるゴミ共!! 一つも残さず拾いきってやるぜ!!

そんなやる気が背中から伝わってくるようだった。

「……………ゴミ拾い？なんで？」

奇しくも母親が抱いた感想は、娘と似たようなものだった。

アルトリア・キャスターはあり得ないものを目にした。いつも傲慢に振舞っているバーヴァン・シーが、床に落ちているゴミを見つけては拾っているのだ。気に入らない人物を指しているとか、そういう比喩表現ではない。紙屑だの食べかすだの、文字通りのゴミを拾っている。

いや、それだけならどれだけ良かったか。

汚れている場所を見つけると拭き掃除でピカピカに磨き上げ、ローゼンクイーン商会の商品の運び入れを手伝っているのを目撃した。めっちゃ良い子になってる。めっちゃ良い笑顔で良い事してる。

バーゲストが魔界病院へ担ぎ込み、異常無しの結果が出た。メリュジーヌが状態異常を回復させるアイテムを使った。何の効果も出なかった。

「急にどうしたのさ、バーヴァン・シー。ゴミ拾いなんて始めてさ……………」

「ハンツ、良い子ちゃんのアルトリアには分からないだろうから教えてやるよ。これは不良の証。私がこの魔界で一番の悪逆非道の妖精だって、分ならず屋共に知らしめてるんだよ」

「へ、へえ……………」

分からない。この子の悪性が分からない。

妖精眼の判定はシロ。嘘ついてないのに、心と行動が一致してない。不良ってなんだっけ？悪逆非道ってなんだっけ？アルトリアの脳内には宇宙が広がっていた。

「我が夫!!バーヴァン・シーが、我が娘がなんか、その、理解できない反抗期に!!」

「楽しんでやってるんだからほっとけよ」

「我が夫オ!!!」

モルガンがコバヤシに泣きつくものの、特にトラブルを起こしている訳でもないので、魔王的にはアリらしい。

まあ、良い子が良い事してるだけなので、問題無いと言えば無いのだが。

「コバヤシ、いつもお疲れ様♪肩揉んであげるね」

「おー……」

なにより、可愛らしさ全開で自分に奉仕するバーヴァン・シーを止める理由も無い。こいつクソカワ(いい)かよ。コバヤシは感心した。

「ふふっ、どうよ私の不良ぶり！悪魔から感謝とか労いなんてされた事無いでしょ？

でも私は不良のバーヴァン・シー。悪逆非道のバーヴァン・シーだからー」

「そうだなあ。俺もお前みたいな不良は見た事無いわ。本当に凄いよお前は」

「当然だぜ!!なんたってお母様の娘だもの!……ま、まあ、ここまでこれたのはコバヤシのお蔭だし、ラズベリルもいたからだけど」

「そう謙遜すんなよ。今のお前はお前自身の不断の努力あつてのモン

だ。ラズベリルも鼻が高いだろうよ」

「ほ、本当？……グスツ、私、お母様の期待に応えられてるの……？」
「期待に応えてるんじゃない、期待以上の成果を出してるんだ。自信持てよ」

嘘をつかず、かといって褒める事も忘れず。コバヤシはバーヴァン・シーを丁寧に扱っていた。

たとえ方向性が多少ずれていようとも、今までのバーヴァン・シーの苦勞の集大成を否定する気はさらさら無い。軌道修正は徐々にしていけばいい。何よりも認めてやる事が大事なのだ。

「……う、ううう……あ、ありがとう、ありがとう……！」

私を、こんな汚い私を、拾ってくれてありがとう……！私、なんでもします……！ここに在る為なら、何でもします……！

「……バーヴァン・シー、おいで」

椅子ごと向きを変え、バーヴァン・シーと向き合ったコバヤシは、腕を広げて泣きじゃくる妖精を迎え入れた。

綺麗な赤い髪を梳き、背中を優しく叩いてあやすように抱きしめる。

「お前が自分をどう思っているかは、もう何も言わん。だが、お前が綺麗だろうと汚かろうと、俺がお前を手放す気は無いつて事だけ覚えておけ。今はそれでいい」

「コバヤシっ、コバヤシい……!!」

この華奢な体に、今までどれだけの自覚無き悪意がぶつけられてきたのだろうか。魂が消えかかるまで消費され、弄ばれてきたバーヴァン・シーの境遇は、魔王ですら想像し得ない過去なのだろう。

これからゆっくり、じっくり向き合っていかなければならない。散々苦しんだ分を、僅かずつでも楽しんで取り戻せたら良いと、コバ

ヤシは密かに考えていた。

やがてバーヴァン・シーが泣き止んだ頃、彼女の母親が迎えに来た。

「お母様！」

無邪気な子供らしく駆け寄るバーヴァン・シーに、モルガンの口元も僅かに緩む。そのまま両手を取って言葉を投げかけた。

「バーヴァン・シー、お前が何をやっているかは聞いた。女王の後継者として、魔界の妖精として、自分で考えて行動を起こした積極性は素晴らしい。

—— 本当に、良い子に育ってくれましたね」

—— 周囲の空気が凍り付く。様子を見ていた悪魔達は、この女やりやがったと絶望した。

「……………いいこ？わたし、いいこなのか？」

火照っていた顔から熱が抜けて白くなる。完全に感情が抜け落ち、瞳孔が限界まで閉じた小さな黒目の焦点が定まらなくなっていく。豹変した愛娘の顔を見たモルガンは、まるで決壊したダムの水のように背中から冷や汗を吹き出させた。

「……………わがおっと」

「お前…………」

どうすればいいか分からないモルガンは、近くのコバヤシに助けを求めて掠れた声を出した。

「(バカ！アホ！自分は悪逆非道って触れ回ってんのに良い子呼ばわ

りしてどうすんだ!!こっちはその単語を避けて褒めたつてのに!!普段はこれっぽっちも伝わらないような言い方しかできねえ癖に、何でよりにもよってこういう時だけストレートに褒めるんだよ!!

このバツイチ魔女!歩くセクハラ!!テメエ宇宙中の不幸の泥を煮詰めて飲み干してんのか!!そんなんだからウツドワスもお前の事を信じられなくなるんだろうが!!)」

妖精眼を通じて叩きつけられる罵倒の嵐。モルガンは精神に100万のダメージを食らった。表情筋が死んでいなければ、彼女も泣き崩れていたかもしれない。

「バーヴァン・シー、モルガンもお前の親らしく不良として振舞ってるんだよ。だから、その、なんだ、普段とは違う褒め方をしたというかそんな感じだ」

コバヤシは自分でも苦しいと感じる、起死回生の言い訳を捻り出した。

「……………ほんとうに?」

素直なバーヴァン・シーには通じたようだ。細かな違和感に気が付いて突っ込まれる前に、勢いで流してしまおう。

「(おいお前もう余計な事言うなよ!!ひたすら相槌を打って頷いておけ!!本当にふざけんなよお前!!)」

「……………うむ」

事実上の戦力外通告を告げられたモルガンは、血を吐きそうになりながらも娘への愛情で頷いた。それで機嫌を直したバーヴァン・シーは、大好きな母の手を取って食事に向かうのだった。

「…………あの親子すつつつっつげえ面倒くせえ!!!」

もしかしたら、一番の問題は身内に潜んでいるのかもしれない。周囲の配下や妖精騎士、予言の子に機転を称えられながら、魔王は地獄の底より深い溜息を吐いたのだった。

アルトリア・キャスターの冒険（Ⅷ）

予言の内容で唯一、巡礼の鐘の居場所が記されている一文があった。

『丸い砦は燃え尽きる。水の鐘はあらわれる』

現在、円卓軍の活動拠点になっているロンディニウム。砦としても活用されているあの場所を指しているのだと予想して、二人は移動を開始した。ブリテン島の最北端からロンディニウムまでは距離が離れすぎているので、今回はかりは空を飛んで距離を稼ぐ。流石に空から現れれば住民達に驚かれるので、途中の平原で降りてそこからは徒歩で目的地を目指す。

予言の子と分かった時点で騒がれるのは確実なのだが、それを指摘するのは野暮だろう。

道中で散発的に現れるモースを蹴散らしながら進む予言の子一行。途中で休憩を挟んだ時に、アルトリアが話し出した。

「コバヤシはさ、前に仕えてたセラフィーンって女の人の事、どう思ってたの？」

「とんでもないクソ女って思ってるけど」

一片の迷いも無く即答した。妖精眼の判定もまっさら。今はもう辞めているとはいえ、側近だったくせにその評価は何なのだろうか。顔色一つ変えずにコーヒーに口を付けている男に対し、寧ろアルトリアの方が動揺していた。

「コバヤシはその人の事、嫌いなもの？」

「……嫌いというか何というかなあ……」

初めは嫌悪感を抱いていたものの、徐々に薄れていったとコバヤシは語る。

「セラお嬢に従う他に生きる術は無かったし、結果として俺はここま
で生きているからな」

「……それでもさ。コバヤシは元々住んでいた場所から攫われたんで
しょ？」

「まあ、そうなるな」

「恨んだりとかしてないの？」

「んー……」

意味も無く、ティースプーンでコーヒーをかき混ぜる。それを見つ
める女の子は、男が口を開くのをじっと待っていた。

「最初は恨みつらみもあつたんだろうが、今はもう感じないな。自分
で言つて薄情だとも思うが、もう100年以上前の話だ。俺が汎人
類史の普通の人間種だったとして、親やら知人やらがいたとしても、
全員死んでるしな」

「コバヤシはそれでいいの？」

「今更、セラお嬢に怒りなんて感じない。俺を攫ってきたのはあの人
だが、面倒見たのもあの人だしな。良い所よりも嫌な所の方が多い
が、それでも一緒にいるのに苦は感じなくなっていた。いつから
か、俺はセラお嬢を家族だつて思っていたんだろう」

「家族……」

「数十年も一緒にいればそうなるさ。今は昔よりも大人しくなってい
るしな」

「……私も、もつとティンタジュールの皆と一緒に過ごしてたら、本当の
家族みたいになれてたかな」

「……いや、まあ、うん。限りなく0%に近い絶望的な確率だ
と思うが、そうなつた可能性も奇跡的にあり得た事象かもしれな
い」

「つまり無理なんだね。うん、分かった。あ、お砂糖ちょうだい」

「……ほらよ」

アルトリアのコップに角砂糖を一つ投げ入れた。よーくかき混ぜて溶けきったタイミングで、甘いコーヒーを口に運ぶ。……飲んだ時の表情から察するに、まだちよつと苦かったようだ。

「……ごめん、まだ入れていい?」

「別にいいけどさ、素直にコーヒー以外の飲み物選んだ方が良かったろ」

「えへへ、そうかも」

ほんのり顔を赤らめたアルトリアに呆れるコバヤシは、砂糖のついでにミルクも注いで飲みやすくしてあげた。

——ただ同じ物を飲みたいからコーヒーを選んだ。

少女の心の奥底に隠された欲求は、少女自身にも自覚される事は無かった。

休憩を終えて旅を再開し、再びモースの群れと遭遇した予言の子一行。

そこには鎧を着て槍を振るう、一人の小さい女の騎士がいた。

「その人、助太刀します!」

「え!?!は、はい!ありがとうございます!私、ガレスと申します!あなたは!?!」

「アルトリア!アルトリア・キャスター!」

割って入ったアルトリアと、ガレスと名乗った騎士に異邦の魔術師が強化魔法をかけてやる。その質の高さに驚いたガレスは、アルトリアと共に勢いに乗ってモースの群れを殲滅した。

「ふう。怪我が無くて良かった」

「凄かったです！アルトリアさんの戦いぶりに、そちらの方がかけてくれた補助魔術！なんか、魔術とはちよつと違う気もしますが、兎に角感謝です！」

「どういたしまして」

「そ、それで、助けて頂いたばかりで大変恐縮なのですが……」

「は、はい？」

「その強さ！その身に宿る魔力！一目見て運命を感じました！アルトリアさん、私をあなたに任せさせてもらえませんかっ！」

「——え、ええっ!？」

興奮するガレスを宥めて話を聞いた。彼女は円卓軍に拾われて、騎士として働いているのだという。ロンディニウムに続く道の警備中、モースが現れたので戦っていたらしい。

これ幸いと、彼女にロンディニウムまで案内してもらおう事にした二人。ガレスも快く引き受けてくれて、アルトリアとは女の子同士すぐに仲良くなっていた。

「なんと、お二人が予言の子と異邦の魔術師でしたとは」

「実はそうなんだ。ロンディニウムに行くのも、巡礼の旅の一環なの」

「俺達は最後の巡礼の鐘を探してる。どうだ、ロンディニウムにあるか？」

「——。いえ、指令室として鐘つき堂を改造した場所がありますが、巡礼の鐘はありません」

「そっか……。でも他に手がかりも無いし、行くだけ行ってみよっか」
「そうだな」

「はい！案内はお任せ下さい！」

「ただいま戻りましたー!!」

元気なガレスの声を聞いて、ロンディニウムの関所にいた兵士が近寄ってきた。

「おお、ご苦労様だったなガレス。——と、そちらの二人は？ 円卓軍への入団希望者か？」

「いえいえ、違いますよマガレさん。こちらは私を助けてくれた予言の子であるアルトリアさん！ それと異邦の魔術師さんです！ 諸事情があるそうで名前は教えて頂けませんでした！」

「(いくらなんでも誤魔化し方が雑だよコバヤシ……)」

「(偽名考えるのめんどくせえ)」

「(コバヤシイイ!!!)」

怠惰、ここに極まれり。怪しさ満点であったものの、ガレスを助けてモースを蹴散らしたのは事実なので、二人はロンディニウムに入る事を許された。

人間と妖精が共存している都市。兵士を含めた人口は他の街に比べて少ないものの、人々の活気は負けていない程に賑やかだった。

崩れている壁を修復している職人に、買い付けの準備をしている商人。まだ幼い子供も武器の手入れを手伝っており、広い場所で兵士達が訓練を行っている。

(———すぐ、綺麗な場所だ。こんな綺麗な場所で、どうして———)

人々の営みを眺めて、思わず放心するアルトリア。こんな場所があったなんて、自分は知らなかった。

「……悪くないねえ」

コバヤシもまた、満更でもない感想を口に出した。

「貴女が予言の子、アルトリア様ですか！ノリツジでのご活躍は聞き及んでおります！」

「え、あ、ど、どうも。あとできれば、様付けは止めて欲しいかなーって……」

「巡礼の鐘を鳴らしてるのもアンタなんだって？それはいいが、何度も何度も鳴らすのは何とかならないもんかねえ！」

「ご、ごめんなさい！あと一回は我慢してください！」

「お姉ちゃん、お腹空いてない？クッキーあるよ！」

「——うん、ありがとうね。じゃあ、一枚だけ貰うね」

「しっかし綺麗な服だなあ。ひよつとして、シェフィールドの仕立て屋さんに頼んだのかい？」

「さあ、どうなのでしょう。尊敬できる人に譲ってもらった物なので……」

住民達に囲まれて、色々な話をしている予言の子。今までの旅では見せた事の無い、穏やかな表情で皆に答えていた。

「ああ、ごめんなさい。みんなアルトリアさんに会えたのがよっぽど嬉しいみたいで……」

「別に構いやしねえさ。アイツが、あんな顔で受け答えしてるのを見るのは初めてだ。好きにさせてやろう」

「そうですか？なら良いんですけど……」

離れた場所で見守っている異邦の魔術師と女騎士に、声をかける者が現れた。

「ガレス！無事だったかい？」

「あつ、パーシヴァルさん！」

白銀の鎧を身に纏う、見上げる程に大きい槍を持った偉丈夫パーシヴァル。彼はコバヤシの前に立つと、丁寧にお辞儀をした。

「初めまして、異邦の魔術師殿。私はパーシヴァルと申します。名前を教えるはならない事情があるとの事ですので、魔術師殿と呼ばせて頂きます」

「おう、好きにしてくれ」

「では改めて。仲間のガレスを助けて頂いてありがとうございます。ごさいます。円卓軍のまとめ役の代理として、お礼を申し上げます」

「それは良いんだが……代理？」

「ええ。実は自分も、ある人物に誘われたクチです。最近は滅多に姿を現さず、どこで何をしているのか……」

仲間の事を思わず憂うパーシヴァル。魔術師が怪訝な表情を浮かべているのに気付き、慌てて話を変えた。

「と、すみません。ガレスの話では、あなた方は最後の巡礼の鐘を探しているとか。我々はロンディニウムを拠点にしていますが、そのような物に心当たりはありませんね」

「だろうな。予言じゃ現れるって表現してるんだし、今は無いがその内現れるって事だろうよ」

「そういった事情でしたら、どうぞロンディニウムにご滞在ください。御覧の通り質素な作りですが、女王の魔術もここまで及びませんから、安全は保障されていますよ」

「……ありがとうございます」

パーシヴァルが住民達に声をかけ、中心にいたアルトリアがようやく戻ってきた。

「ロンディニウムの方々は、とても良い人ですね。嘘が少ないばかりか、他人に寄りかかっていない。」

人間と妖精が、お互いの為に自分の力で立ち上がり、支え合っている。

その立場に上も下も無い、対等に認め合っている仲間達……かつての円卓の騎士のような人たちです」

「……えへへ。皆で頑張つて、ちよつとずつ大きくなっていったんです。私も森でさまよっていた時に、パーシヴァルさんに拾われたんです」

「確かに私は君を助けたけれど、円卓軍に騎士として入団したのは、間違ひなく君の意思だろう、ガレス？まさか、ずっと付きまとわれるなんて思ってもみなかったよ」

「そ、その話はもう良いじゃないですか！」

この小さな騎士が円卓軍に入りたいききつは、余り人に話したい事ではないようだ。苦笑するアルトリアは、二人に円卓軍に入った理由を聞いてみた。

「そうですね……私に限った話ではないですが、ここに居る者は皆、反女王の意思を掲げています。我々は人間も妖精もない。共通の未来を目指しているのです。

女王を倒せば全てが良い方向に変わる訳ではない。人間の在り方も変えていかなければならないのですが、先ずはブリテンを変えていかなければなりません。

……実の所、私がこの槍を手にした理由は他にもありますが、個人的な理由ですのでご容赦願えればと……」

「い、いやいや！そんな根掘り葉掘り聞きたい訳じゃないですから！ええと、ガレスはどう？」

「私はパーシヴァルさんや円卓軍の皆みたいなの、ブリテンを変えたいとか大きな目標は無いんです。

私はただ、皆や皆の居場所を守りたいだけなんです」

言葉を切ったガレスは、身に付けている鎧を撫でた後、盾を掲げて

みせた。

「……私、自分が何の妖精かも分からない中途半端な妖精だったけれど、子供たちがお金を出し合ってこんな立派な鎧を作ってくれたんです」

「……そっか」

「自分達だって傷だらけなのに、私が傷つかないようにって。そんな優しい皆を守りたいって思えたから、私は戦えるんです！」

むん、と拳を握る小さな騎士に優しい目を向ける予言の子。

「……魔界という場所から戻ってきた女王モルガンは、今では大多数の妖精達をも洗脳して労働に従事させています。人間牧場に捕えられた人間達に加えて、その妖精達も助け出さなければならぬ。

私と円卓軍はこの後に救出作戦へ赴きます。戻るのは明日の正午を過ぎる頃になるかと。第三小隊とガレスは守備の為に残りますので、何かあれば彼等かガレスを頼ってください」

「そ、そうですか。頑張ってください」

「……健闘を祈る」

思いつきり女王派閥の予言の子と異邦の魔術師は、少しだけ申し訳ない気持ちを抱いた。

苦勞をかけてごめんなさい。でも、自由にさせておくと何するか分からないんです。円卓軍相手には穩便に済ませるよう、妖精國のトップには言っているので勘弁してください。

ガレスに寢床まで案内してもらっている道すがら、アルトリアは古い壁の壁画を見つけた。

「……六人の妖精と、角のある大きな獣……？ねえガレス、これって？」

「ええと、この壁画は元々はオークニーにいた雨の氏族の妖精の持ち

物だったそうですよ。ロンディニウムの騎士がここまで運んできた
と、口伝に記されていたようです」

「……描かれているものが、何だか分かるか？」

「すみません、そこまでは分かりません……。文字が書かれている部
分はボロボロですし、辛うじて残っている部分も、言葉が古すぎてこ
こにいる人では読めないんです。

……あ、でも。この大きな獣の下の生き物なら記録が残ってしまし
た。確か、奈落の虫と呼ばれていたそうです」

「ほう……」

新たな情報を得た二人。

ガレスは二人を寢床まで送り届けると、仕事があると言って走り
去っていった。その後ろ姿をじっと見続けている異邦の魔術師。

「ひよつとして、ガレスの鎧を欲しいとか思ってる？」

「……欲しいっちゃ欲しいけどなあ……。あれは他の誰かの手に渡った
ら、価値が無くなりそうだから……」

コバヤシにはコバヤシの価値観があるらしく、ガレスの鎧は価値が
あるけど手に入れたくないらしい。頭を掻きながら中に入るコバヤ
シと、後に続くアルトリア。

「……また、二人で一緒の部屋かあ」

「間借りしている身だ、贅沢は言えん」

「別に不満は無いけど……。コバヤシって魔王なのに、野営とかも嫌が
らないよね」

「大勢のプリニーと雑魚寝してた時もあったからな。……大量の爆弾
と同じ部屋で寝てた時と比べれば、十分贅沢だろうよ」

「うわあ……」

自分よりも酷い環境で寝てたんだあ……。と同情するアルトリア。

コバヤシが聞いていれば即座に否定しただろう。お前より酷い環境はそうそう無いと。

「あの人がパーシヴァル……メリユジーヌの血の繋がってない弟さんかあ」

「よくもまあ、あんな呪われた装備を担いで戦えるもんだ。……また呪いかよ」

「ねえコバヤシ、あの人ならブリテンの王様になれると思う？」

「無理だろ。というか街の長としても怪しいぞ」

人物評を訊かれて即答するコバヤシ。アルトリアも予想はしていたのか、「そっかー」と気の抜けた返事を返すだけだった。

「心根が真っ直ぐなのは良いんだが、どうにも人を疑う心が足りてない。まだ若いつていうのもあるんだろうが」

「まさしく騎士の鑑みたいな人なんだけどね……」

「騎士としてなら、あれ程の傑物もいないんだろうが、王としてだと……」

何というか、めでたい席で酒に毒入れられて殺されそうな奴なんだよな」

「……なんでそう嫌に具体的な例なのさ……」

げんなりしたアルトリアは、気分を変えようと立ち上がる。

「ずっとこのまま何もしていないのも居心地悪いし、誰かのお手伝いに行つてこようかな」

「そうだな……情報収集も兼ねて動くか」

ロンディニウムに鍛冶場があると知って、すっ飛んで行った予言の子。異邦の魔術師はロンディニウムを適当に見て回り、短い雑談を交わしながら情報を集めていた。

「……何？反乱軍と合流？」

そして、残っていた第三小隊の兵士から、聞き捨てならない話を聞き出した。

「ええ。明日の早朝に、我等と志を同じにする仲間が増えるのです」

「反女王を掲げた軍隊は、こことエディンバラ、シエフィールドぐらいだと思っていたが……」

「そうですね。主に動いているのは、その三つで間違いないかと。」

しかし、エディンバラの動きは消極的なもので、シエフィールドも似たようなもの。救出活動を行っているのは、現状我々だけなのです。

女王の圧政に耐えかねて立ち上がる人々もまた増えております。ここに来る予定の彼等は人間のみで構成されているようなのですが、自分達だけでは立ち行かなくなったようで、我々に助けを求めてきたのです」

「……………ほお」

「御覧の通り、我々の動かせる戦力は少ない。パーシヴァル団長を含めた主力部隊が居ない時は、守りが非常に不安なのです」

「ですが、明日にはそれも解決します!」

「それは良いが、会った事はあるのか？」

「いえ。我々はまだ会った事はありません。他の部隊が作戦から帰ってくる途中での話だと存じております」

「そうか……………」

「？」

どうにもきな臭さを感じ、無言になる異邦の魔術師。その態度に疑問を浮かべる兵士達だが、屯所に漂ってきた匂いに思考を奪われた。

「お、良い匂いがしてきたな。そろそろ夕食の時間だ。お二人の分も用意致しますので、宜しければご一緒にいかがですか？」

「……そうさせてもらうか。何から何まで悪いな」

鍛冶場に入り浸っていた予言の子の首根っこを引つ掴み、配膳された食事を貰いに行く異邦の魔術師。

ガレスもやってきて三人での夕食。決して豪勢とは言えないが、集まった人達の心根のような温かさを味わっていた。

「このスープ、美味しい」

「いつもはもつと具が入ってるんですけどねー。今は作戦中の部隊に多めに割り振られているので、節約中なんです」

「(カレールーぶち込みてえ)」

「(美味しそうだけど止めとけコバヤシイ)」

約一名、身も蓋も無い事を考えていたが、料理はしつかり堪能していた。

「このパン、そのまま食べるにはちよつと固いんですけど、スープにつけると柔らかくなって美味しいんですよー！」

「へー……」

「……細かく切って入れても良さそうだ」

「おお、お洒落な食べ方！」

「……お洒落か？」

「どうなんだろう……？」

パンをスープに浸して食べたり、小さくちぎってスープに入れたり、好きなように食べている。

そんなとりとめのない話をしながらの食事が楽しくて、アルトリアの顔がだらしなく緩んでいった。

「なんか、良いよね。こういうの」

「?よく分かりませんが、アルトリアさんが楽しいなら良かったですよ！」

「……衛生兵の連中に聞いたんだが、明日の朝に他の軍隊が来るんだってな」

「あ……それ私も聞いた。鍛冶場にいた子供達が嬉しそうに話してたよ」

「ご存知でしたか!私もお出迎えに行きますので、明日は早起きしないといけないんです」

嬉しそうな様子のガレスに対し、他の二人の表情は優れない。

「……その人達、信用できるの?」

「……へ?」

「……ごめん、何でもない。ごちそうさま」

「アルトリアさん……?」

「……」

食べ終えた食器を戻しに席を立つアルトリアを、不思議そうに見つめるガレス。

「お前さん、出迎えの時に鎧は着ていくのか?」

「ええと、はい。一応、仕事の時はずっと着ていきますけれど……」

「そうか。それならいい」

「……?」

異邦の魔術師もまた、意味深な言葉を投げかけた後に席を立った。与えられた寢床へ戻った二人。備え付けの毛布に包まった所で、不

意にアルトリアが話し出す。

「……明日、私もガレスと一緒にいってもいい？」

「好きにしな。俺達はここへ来たばかりの余所者だ。円卓軍も反乱軍も上辺しか知らん。この目で見て確かめる方が早い」

「そうだね……」

ロンディニウムは生きる気力に満ち溢れていた。人間も妖精も、みんな善良で温かかった。

だからこそ、考えてしまう。

過去にこの地で起きた惨劇を知る二人は、その可能性が頭から離れない。

「鍛冶場にいた、顔に傷のある男の子。セムって名前なんだけど、あの子がガレスの鎧を作ろうって言い出したんだって」

「そうか……」

「ふふつ、本人は違うって認めなかったけど、妖精眼が無くたって分かるよ。照れ隠しだった」

「子供をいじめてやるなよ……」

異邦の魔術師は大人げないと思ったが、予言の子もまだ子供だった事を思い出し、一言だけで済ませておいた。

「一緒にいたお婆ちゃんも、元は土の氏族の鍛冶師だったんだって。あの鎧を作ったのもお婆ちゃんなんだよ」

「そりや凄いな……」

「これまでいっぱい、ガレスは人を助けてきたんだよ」

「俺達と会った時も、モースと戦ってたからなあ」

「違うよ」

「……？」

「戦いだけじゃない。果物を籠から落として泣いていた子。食べ物を

探しに行つて迷つた子。ガレスはそういう子も助けてきたんだよ」
「……。そうか」

「……………明日、何事も無いといいよね」

「……………そう願おう」

早起きは得意では無いけれど、妙な胸騒ぎを感じながら眠りについたらせいか、コバヤシよりも早く起きる事が出来た。少しだけ重い瞼を擦りながら、杖を持って寢床から抜け出す私。

分けてもらった水で簡単に顔を洗つて、逸る気持ちを抑えられずに早足でロンディニウムの入口へ向かっていると、鎧が擦れる独特の音が耳に入ってきた。

「あれ？アルトリアさん？」

ガレスだ。…………良かった。ちゃんと装備を着て来ている。

「おはよう、ガレス。私も一緒に行つていいかな？」

「え？その為にわざわざ？朝食の時に改めて紹介しますから、寝ていてもよかつたのに」

「早めに目が覚めちやつたから」

「そうですか……………では一緒に行きましょう！」

嬉しそうに笑うガレスに、私も微笑みを返して入口へと向かう。

出迎えの兵士達だけでなく、ロンディニウムの住民の皆もほとんどが起きていた。

……どうか、私の心配が杞憂に終わりますように。
心の中で祈っていると、第三小隊の兵士の人私達を見つけて声をかけてくる。

「お、ガレスに……アルトリアさん？おはようございます」

「おはようございます」

「はい、おはようございます！……ひよつとして、遅れちゃいましたか？」

「いや、そんな事はないぞ。今はマガレさんが彼等と話をしているところだ」

「……彼等は、もう砦の中に入っていますか？」

「ええ。しかし、一目見ましたが、彼等は全員良い装備を身に付けていましたね。剣、槍、弓、盾と充実していましたよ。」

あれで我々の助けがいるというのだから、さぞや苦勞してきたのでしょう」

「」

心臓が早鐘を打ち始めた。

集まっている人達の中をかき分けて進む。兵士の人やガレスが慌てたように呼び止めてくるけれど、それに答えられる余裕は無かった。

人の輪を抜けて、マガレさんと反乱軍の人達が話している光景が目に入る。

完全武装の兵士達と、中に運び込まれている樽。

「ア、アルトリアさん！いきなりどうしたんですか!？」

「……ねえ、ガレス。あの樽の中身って……何？」

「はい？樽？……本当だ。お酒……な訳無いですよね。うーん……水でしょうか？」

——丸い砦は燃え尽きる。

予言の一文が頭をよぎった。そして、最悪の選択肢が頭に浮かんだ。

「ここまで大勢の行軍とは、さぞお疲れでしょう。どうか体を休めてください」

マガレさんが握手をしようと手を差し出した。

「これから共に戦う仲間として、力を合わせて戦いましょう！」
誰が仲間だ、馬鹿馬鹿しい
「そうだな、頑張ろう」

——妖精眼が反応した。

「駄目ツ、その人達に近づいたら駄目エーーーーー!!!」

「え、アルトリアさ——」

「クソツ、勘の良いガキがっ!!」

思わず声を張り上げたけれど、それに対する反応は敵の方が早かった。

マガレさんがこっちを振り向いたと同時に、相手が抜いた剣が彼の体を切り裂いた。

「ぐ、はっ!? な、なぜ……!?」

「マガレさん!? お前達、何を——!!」

「勘付かれた!! 予定変更だ、全員殺せ——!」

異変に気付いた兵士達が、戸惑いながら剣を抜く。でも、ここにいる第三小隊は衛生兵しかない。それに引き換え、相手は数も上回っていて完全武装している大軍だ。

普通に戦えば勝ち目は無い。

「入り口を塞げ！ここにいる奴等は女子供も含めて、一人も逃がすな！我らのブリテンに傷物など不要だ!!」

「皆殺しだ！落ちこぼれ共に故郷など不要だ！」

「生意気なパーシヴァルに思い知らせろ！これは報いだ!!」

——。

いま、なんて、言った？

「——、あ」

このあつたかい人たちを、不要と言ったのか。
差別をしない人たちを、傷物と罵ったのか。

「ああ、あああ——」

血を流して倒れた彼を見て、目の前が真っ赤に染まっていく。
こちらに武器を向ける人間達が、醜い化け物へと姿を変えていく。
体の奥底から、煮えたぎったマグマのように怒り狂う感情がせり上がってくる。

「あああああ——」

——オークニーで見た、寂しそうに笑う救世主。
トネリコ

——それを見守っていた、最後の騎士。
ウーサー

——私をこの旅に送り出した、平和な國を目指して裏切られ続けた
モルガン女王。

ふざけるな、ふざけるな——！

みんな、がんばってきたんだぞ——!!

この場所で、みんなが仲良く、助け合える國を目指して——!!

「あああああああああ!!
おまえたち、おまえたちはあああああ!!」

許さない許さない許さないゆるさないゆるさないゆるさないゆる
さない——!!

報いをつ、こいつらに報いを受けさせてやるっ!!

「うあああああああああ!!!」

まずは、アイツをつ!!

手を差し出したあの人を斬った、アイツを!!

地面を割る勢いで足を踏み抜いて、殴り倒してやろうと跳んだ。

「撃て——!!」

極限の速さの中で、スローモーションに聞こえる誰かの声。ほんの
僅かに意識を向ければ、反乱軍の弓兵が矢を放つのが見えた。

「」

させない。

打撃から魔法へ思考を切り替える。

皆を巻き込まない威力の魔法を拡散させて、全部撃ち落とす!

そう、全部——

「——、あ」

頭に上った熱い血が冷めていく。

一度跳んだ勢いは止められない。

最適の場所で、魔法が撃てない事に気が付いた——。

「——う、うそ、嘘っ——」

矢が皆に到達する前に、他の打開策を考えないと——！
——魔弾では数が足りない。魔術を準備する時間が無い。
魔法の威力を上げたら巻き添えが出る。

……え？なにも、無いの？

「——い、嫌っ、駄目——」

今の自分が出来る事で、皆を助けられない。
そうなつてから気が付いた。
初動を間違えた——！
皆を守るために動くべきだったのに！！

「——嘘っ、嘘おっ!?——」

これだけ考えられる余裕があるのに。
矢なんて止まって見えるのに。
自分自身のミスで、取り返しがつかなくなってしまう。
……。
全員を救えないなら。
選ばなければならぬ。
誰を助けて、誰を見捨てるか。

「——」

……。

そんなの。

どうやって決めればいいの？

戦えるか戦えないか？——兵士以外は皆戦えない。

後どれだけ生きられるか？——人間は大人も子供も寿命は同じ。私には分からない。

優しい人を優先？——みんな優しいひとたち。

.....

分からない。

どう動けば良いのか、分からない。

どうにもならない現実を目の前にして、思考が止まってしまふ。

視界の端でガレスが動いたのが見えたけど、一人を守るので精一杯だろう。

ごめんなさい。

ごめんなさい、ごめんなさい——！

撃ち落とせる矢に狙いを定め、そうでない矢の標的の人が見えた。

頑張つて壁を直してた妖精。

私にクツキーをくれた女の子。

親切な兵士の人。

子供達を庇うお婆ちゃん。

ごめんなさい、役に立たなくてごめんなさい。

期待はずれでごめんなさい。

守れなくて、ごめんなさい——！

「——メガス——」

——風を切る音が聞こえた
矢の軌道を追っていた私の視界に、矢の進行方向の反対から何か
飛んでくる。

「——あ、ああ——!!」

遠くに見えた人影。

弓を構えた異邦の魔術師。

矢を番えて一瞬で放つ、神速の射撃。

私が撃ち落とそうとしていた矢も、撃ち落とせなかった矢も、彼は
等しく狙い撃って落としていった。

「——!!」

攻撃の体勢を解き、マガレさんの近くに着地して、彼を抱えて円卓
軍の皆の元に戻る。

「メガヒール!!」

覚えていた回復魔法を彼にかけて、兵士の人に預けた。彼等は衛生
兵だ。もし回復しきってなくても、適切な処置を施してくれるだろ
う。

「ぐああっ!?!」

「ぎゃああっ!?!」

悲鳴の上がった方向を見てみれば、敵の弓兵が倒れ伏しているのが
見えた。

コバヤシだ。コバヤシがやってくれたんだ。

「ちいつ、小癩な真似を……!」

こちらに殺意を向けて襲い掛かってくる兵士達。

——その前に立ちふさがるように、異邦の魔術師が現れた。

「その異様な風貌……異邦の魔術師か!? ならばあの小娘は予言の子か! おのれ、尊き方の温情を無視した愚か者——」

台詞が途切れ、後ろに吹き飛んでいく兵士。壁に激突したその体には、剣が深々と突き刺さっていた。

「ご、あ——」

「よりにもよって、かよ。厄介な連中を引き込んだモンだ」

懐から新しい剣を取り出したコバヤシは、私達を守るように前に出る。

「っ、魔術師さん! 私も一緒に戦います!!」

「怯むな!! 騎士の真似事をしている半端者、パーシヴァルの兵士風情が一人増えた所で——」

■■■■■■■■■■——!!!

雷が大地に落ちたような、耳をつんざく戦場の雄叫びが私達の聴覚を奪う。

たった一度の咆哮で、戦場を支配してしまう強大な力の波動。

聞くに堪えない雑音をかき消して、世界を自分の物へと塗り替える支配者の怒り。

大気が震え、大地が揺れ、敵も味方も一様に耳を塞いでしやがみ込んだ。

まるで嵐が過ぎ去るのを待つように。

まるで許しを乞うように。

体の震えが治まって、皆が恐る恐る顔を上げる。

だが、その嵐は佇んだままだった。

だが、許しは与えられなかった。

見開かれた目は憤怒に燃え盛り、不気味なほどに冷静に相手を捉えていた。

「……………う、うああ……………」

「ひ、ひっ……………」

「うう……………ううう……………」

聴覚が戻ってきて聞こえてきたのは、威勢を失った敵対者達の怯えた声音。怒りをぶつける対象だというのに、いつそ哀れに思えてしまった。

コバヤシは顔を傾けて、後ろのガレスに視線を送る。

「ガレス。お前が騎士になった理由ルーツはなんだ」

あんなに怒っているのに。怒りの色で目は満ちているのに。

その声は水面のように静かで、その瞳には強い光が宿っていた。

「——みんなを、みんなを守る事です！みんなの居場所を守るために、私は騎士になったんです!!」

ガレスは目を逸らさずに応えた。

よく言った、と彼の心は呟いた。

「——なら、頼んだ」

「——はい!!」

交わされた短い言葉に、絶対の信頼を感じる。ガレスの言葉に我を

取り戻した皆が、反乱軍を警戒しながら下がっていった。

「アルトリア。やる事は分かるか」

心臓が跳ねた。さっきは途中で考えられなくなっていた。

深呼吸をして、冷静な思考を取り戻そうとする。そして、今の状況でやるべき事を整理する。

あの樽の中身は多分、油。もしくは他の燃える物。

弓兵はコバヤシが潰したけれど、まだ他にもいる。

「火災の対処と、弓兵の始末……！」

「——上出来だ」

……良かった、間違ってたなかった。

「……半端者にもなれない、狂信者の屑共が。どの面下げて、ロンディニウムに踏み込んでやがる。

他人にだって手を差し伸べられる連中を、斬りやがって。戦う力の無い連中まで、狙いやがって。それで、誰かの騎士を、名乗るんじゃないやねえ。

——敵の前で敵である事を名乗らない、薄汚い卑怯者共がア!!」

片手に槍を担ぎ、片手に剣を構え、魔王コバヤシは敵を見据えた。

「ここには子供がいる。殺しは避けるが、死ぬ寸前までは覚悟しろ……!!」

冥府の門の入り口で、自分達のやろうとした事を死ぬまで後悔しやがれ——!!」

「あ、あああ……殺せっ、殺せええええ?!?!」

「剣でも槍でも弓でも、矢でも大砲でも毒でも爆弾でも持ってこい!! 全員纏めて叩き潰してやる!!!」

コバヤシは敵陣に突っ込んで、全滅させるまで暴れまわった。防衛網を食い破り、逃げる相手を一人たりとも逃がさなかった。パーシヴアル達が戻って来るまでに、反乱軍は全て鎮圧された。そして全てが終わった後に、私の胸に残ったのは安堵でも達成感でもなく。

——思い上がっていた自分への、激しい自己嫌悪だった。

ロンディニウムを襲った反乱軍の凶行。その場に居合わせた予言の子と、異邦の魔術師の活躍で奇跡的に被害者は皆無であった。

反乱軍の相手を一手に引き受けた異邦の魔術師と、遠くから住民達を狙う弓兵の対処、ロンディニウムに広がろうとしていた火を、氷の魔法で消し止めた予言の子が居なければ、この結果は無かつただろう。

一人残らず虫の息の反乱軍は一ヶ所に集められ、最低限死なない程度の治療をして延命させていた。それを痛ましい目で見つめる団長パーシヴアル。

「……私が迂闊でした。我々に賛同する者ばかりではないと、分かっていたのに」

「志だけじゃどうにもならない時もある。……まあ実際問題、円卓軍も人手を増やさなきゃやっていけなかったんだらう？ 手段は間違つてなかったが、引き込む相手を選ぶべきだったな」

後悔の念を滲ませる偉丈夫の騎士は、自分が長の器ではない事は分かっていた。

それでも、一度その立場を背負ったからには、最後まで責務をやり

遂げなければと心を改める。

「……彼等をどうすべきでしょうか」

「ん？ そうだな、俺の所なら敗者に人権なんて無いし、身ぐるみ剥いで殺すなり追放するなりするだろうな。」

「ここは妖精國だし、手に余るなら女王軍にでも引き渡しておけ」

「女王軍は受け入れてくれるでしょうか……？」

「反女王軍とは言え、円卓が戦う理由は女王だって理解してるだろう。本気で潰そうとはしてないし」

「……」

目の前の男のいつそ信頼すら感じられる物言いに、パーシヴァルは目を丸くした。

魔界から帰ってくる前も、後も、女王の圧政には皆が苦しめられてきた。

女王軍やキャメロットに住む上級妖精以外で、そのような言葉が出てくるなど思ってもみなかったのだ。

「……その、意外でした。いえ、貴方達は女王と敵対している訳ではないのでしょうが……」

「予言の子はともかく、俺は別に楽園から遣わされた使者でも何でもない。死を踏みつけにして成り立ってる國なんか、美しいとも尊いとも感じない」

「それは……」

パーシヴァルは返す言葉も無く言い淀む。このブリテン島の歴史は、古くから厄災との戦争や氏族間の争い、虐殺など、多くの血を流して続いてきたのだから。

「勘違いするなよ。死骸で出来た國だからじゃない。それを自覚してる連中が、余りにも少なすぎる」

「！」

「國は生き物が作る最大級のコミュニティだ。作る場所がどこであれ、住んでる奴さえまともなら良い國はできる。その逆も然りだ」

年がら年中、地獄のような暑さの灼熱魔界の連中は、それに負けな
い暑苦しい魔王に引っ張られ、立て直されている。

王と王妃が殺され、ロスト軍に散々荒らされた兎々魔界は、復讐を
乗り越えた魔王の優しさによって豊かさを取り戻している。

復興までの道のりは過酷だったろうに、それを笑い飛ばして生きて
いた。

「魔術師殿……」

「お前達の女王は、その最前線で戦ってきた。2000年……あるい
は、もっと長く。」

俺には到底無理な話だ。さっさと見捨てて別の場所に行ってるだ
ろうよ。

その功績。その覚悟。今までのモルガンの道程は、決して軽んじて
いいモンじゃない。

その結果が圧政であっても、洗脳であっても。それが間違いだなん
て、誰が言えるよ?」

「……」

パーシヴァルにはもう、何も言えなかった。

モルガンさえ倒せば、メリユジーヌは妖精騎士から解放され、自由
になれる。己が円卓軍を組織した真の理由。

人間や妖精を救いたい気持ちに嘘は無い。だが、槍を振るい続ける
この理由だけは心の奥底に伏せてきた。

魔術師の言葉は、そんな一人の騎士の根底にある罪の意識を掘り起
こしてきた。

浅はかだった頃の自分を、いつそぶん殴りたくなる衝動に駆られ
る。

冷酷な魔女もまた、この國を愛していた一人だというのに。

「……まあ、俺も直にこのブリテンを歩いて見つけたものもある。よく目を凝らして見てみれば、まともな所もあるんだとな」

よく探さなければ見つからないのが問題だ、という本音はしまっておいた。

「お前に忠告しておいてやる。お前のその呪われた槍はもう使うなよ。お前の姉のメリュジーヌが、そのうちに代わりの逸品を持ってやってくるだろうから」

「!?な、何故それを、その名前を……!?!」

ま、まさか、貴方は——!?!」

うろたえる騎士に対し、立てた人差し指を口に当てる事で答えを示した。

去っていく異邦の魔術師の後ろ姿に、白光の騎士は深く頭を下げた。

無事だった住民達が、残っていた衛生兵達が、帰ってきた騎士達が予言の子にお礼を言って去っていく。

彼等彼女等からの心からの感謝の気持ちを伝えられる度に、予言の子の心は軋んで悲鳴を上げていた。

——だって、自分は、あの時——

守ろうなんて考えずに踏み出して、失敗していたのに。

そんな感情を表に出せる筈もなく、我慢して受け答えしていた予言の子。

そして、あの時怪我をしたマガレからお礼を言われて、罪悪感に耐え切れずに泣き出してしまった。

「うっ、ひぐっ、ち、違うんです、わたし、わたしは、あの時……」

「あれはあなたの責任では……あ、魔術師殿！

す、すみません。いきなり泣き出してしまわれて……」

「……少し休ませてやろう。連れて行くぞ」

予言の子を抱えた異邦の魔術師は、遙か高くの砦の上に飛び立った。

座らせて背中を撫でる手から、嗚咽の震えが伝わってくる。

「わたし、全然だめだったのにつ。あの時、コバヤシが助けてくれただけなのにつ……！」

「……ああ」

「みんな、みんながありがとうって。みんながやさしくて、つらくて、なにもいえなくて……！」

拭っても拭っても、止まらない涙はアルトリアの手を濡らしている。

あの時のアルトリアの失敗を指摘できるのは、同じ世界が見えるコバヤシだけだった。

それに、きつと。

包み隠さず話したとしても、彼等はきつとアルトリアを許すだろう。

「ひっく、ひっく……ごめんなさい。ごめんなさい。役に立たなくてごめんなさい。

足手まといでごめんなさい。期待外れで、ごめんなさい——」

いつそ、石でも投げられて罵られた方が、彼女にとって気が楽だっ

たかもしれない。

虐待される事には慣れていても、優しさを向けられる事には慣れていないのだ。

行き場の無い気持ちは小さな心の器から溢れ出して、アルトリアの青い瞳から零れ落ちていくばかりだった。

傍らのコバヤシも責める気など無かった。

巡礼の旅を共にこなしてきた仲間として、彼女が冷静さを失う程の怒りを覚えるのも理解できるからだ。

「怒りも憎しみも、人に力を与える感情だ。抑えなくていい。ただ、呑まれるな」

「ひ、ひぐつ、ぐすつ……」

「最初は出来なくて当然だ。……俺の仲間もそうだった。強い怒りや復讐心を抱えて戦う奴も多かった。

俺にはそんな、決定的な出来事は無かったが」

「……グス……そう、なの？」

「そうだ。お前はもう一人じゃない。ヤバい時にはフォローしてやるから。」

出来ない事に引け目を感じるな。少しずつ、慣れていけばいいんだ。

……今は思い切り泣いておけ。今までそれが許されなかった分、泣いていい」

——その言葉が最後の一押しとなった。

自分は予言の子だから。皆に期待されているから。より良いものを目指すように躡けられ、駄目な所なんて見せられなかったから。

泣いている時はいつだって一人だった。誰にも見せられなくて、見せたくなくて。

「う……うああ……うわああああああああん!! わあああああ
あああああん!!」

だから、こんな大声で泣いたのだって初めてだった。
誰かにぎゅつと抱き着いて、悲しい気持ちをぶつけたのなんて初めてだった。

あらん限りの感情を外に吐き出した。喉が枯れようが、顔が涙と鼻水でぐちゃぐちゃになろうが、構わずに泣き続けた。

「うわああああああああああああん……!!」

泣いて喚いて、これ以上無いという位に泣き尽くして。

空っぽになった心の底に、あたたかい感情が生まれたのをアルトリアは感じた。

【幕間】 バーゲストのたわわ

楽園の妖精二人と妖精騎士三人が魔界の住人に追加され、少しだけ騒がしくなったミニ魔界。元より多種族が一人の魔王の元に集い、配下として働いている現状で五人増えた程度で秩序が崩れるような心配は無い。

古参の女悪魔もコバヤシを慕ってはいるが、それは恋慕とは別の感情。時折、自分が立てた手柄に対する報酬として体の関係を求めたりするものの、快樂目的の遊戯としか思っていないのだ。

——私達のボスが拾ってきた女達が急に妻とか恋人とか自称し始めた件（笑）

——何それウケるwww

代わり映えない日常に突然投げ込まれた、毎日の話の種になる存在に悪魔達は草を生やした。応援したり、からかったり、蚊帳の外から観察したりと、程度の違いはあれど彼女等は悪魔達からは歓迎されていると言っつていいだろう。

「ご主人さまー。バーゲスト様のメイド服、胸だけ可変式になりませんかー？」

「……………なんて？」

細々とした執務を片付けていたコバヤシの元にやってきたメイド長とバーゲスト。届けられた願いの意味不明さに、思わず聞き返してしまった。

「ですから、バーゲスト様のメイド服ですよ。バーゲスト様のおっぱいが育っているせいで、もう何度も新しいの用意してるんですよー？」

——このゾンビのメイド長、もっと言葉をぼかして言ってくれないでしょうか。

バーゲストは恥ずかしさに顔を紅潮させるが、そもそも自分で言えなかったから彼女に頼んだ身なので文句も言えない。

コバヤシはバーゲストの巨大な胸を凝視した。バーゲストの顔が耳まで真っ赤に染まる。

「……………えっ、育つの、それ？」

「だから、育ってるって言ってるじゃないですかぁー！初めに見た時からたぶたぶなのに、暫く経ったらたぶたぶん、更に経ったらどたぶんどたぶんですよー！」

ほらほらとバーゲストの巨乳をボールのように弾ませるメイド長。

やめてあげなさい、ボールの持ち主が小声で「おやめになつて……」とか言ってるでしょうが。

このバーゲストの成長は、魔王にとっても理解の範疇を超えていた。女性悪魔や女の魔物の中には豊満な体の持ち主もいるのだが、バーゲストはそれすら凌駕する凶悪な体つきを誇っている。

それが現在も成長途中などと言われて、即座に納得できるだろうか？少なくとも魔界にいる豊満ではない肉体の持ち主は、『ふざけるな!!』と羨望と嫉妬の感情をぶつけてくるだろう。

ではどれくらい凶悪なのかと言えば、肩がこるなんて朝飯前で、なんと物理的に胸部から下の視界が塞がれてしまうというのだ。小さい者は見えづらいと彼女はよく口にするが、嫌みでも何でもない現在進行形で直面している問題だったのだ。

コバヤシも初めて聞いた時は笑い話なのかどうか判断に迷った。横目で様子を見たアルトリアの顔から感情が抜け落ちていたのを確認して、コレ笑ったらアカンやつや、とバーゲストの苦労話に同情しておいた。プリニーは遠慮なくゲラゲラ笑って爆発した。仲間殺しは重罪だが、今回だけは見逃した。

「……………さらしても巻いたらどうだ？」

目の前の問題に対し、コバヤシは取り敢えずの対処法を考えてみた。確か、さらしなら魔界にいる侍が使っていた。

しかし、メイド長は首を横に振る。

「駄目でしたー」

「試したのね……」

「立ってるだけなら問題ないんですけど、ちよつと力が入っちゃうと千切れちゃうんですよねー」

「マジかあ……」

胸ばかりに注目しがちだが、バーゲストは恵まれた体格に相応しい筋肉の持ち主でもある。腕や足の露出が多い魔界のメイド服を着ている彼女は、その強靱な肉体を余すことなく披露していた。

なにせ汎用人型悪魔の全てより大きく、魔物でも彼女の大きさを上回るのは龍とか熊とかくらいしかない。コバヤシが面識のある魔王の中から比べて見ても、比肩しうるのは灼熱魔界のレッドマグナスか伝説の大魔拳ゴルディオンくらいだろうか。もしかしたら、筋肉量だけなら彼等をも上回るかもしれない。

彼女の鍛え抜かれた大胸筋や広背筋が、さらしという胸の拘束具を簡単に破ってしまった。バーゲストはミス・アンチエインの称号を贈られ、丁寧に辞退した。

そしてメイド長がその辺の説明をしていないので、単に胸がデカすぎて大変だという話に誤解されていた。

「バーゲスト様は大きいから、メイド服を特注で作らないといけないのにキリがありませんよー！」

「も、申し訳ありません。ですがその、成長は自分でも止められなくて……」

「止めるなんて無茶は言わねえよ。……でもどうするかなあ……」

「この人、獣の厄災じゃなくておっぱいの厄災ですよー！」

「本人が一番気にしてるんだから止めてさしあげろ」

おっぱいおっぱい言いたい放題であるものの、これでもメイド長はバーゲストを重用しているからこそ相談に来ていたりする。いずれ伴侶を迎える身として、家事全般を完璧にこなせるように努力を続けてきたバーゲストは、そのスキルをメイド達から高く評価されていた。

既にメイド仲間として認めている以上、彼女の働く環境を出来るだけ良くしようという気遣いの表れでもあった。

それを理解している上司の魔王は頭を悩ませた。

「……何か考えておくから、それまではどうにかやりくりしてくれ」

「はい、お願いしまーす！」

「あの、私の体の問題ですので無理にとは言いませんから……」

「これくらい気にするな。お前の仕事は評判良いし、それへの対価としちゃ安いくらいだ」

「……ありがとうございます」

一礼して去っていくメイド長とバーゲストを見送り、コバヤシは椅子の背もたれに深く体重をかける。

ああは言ったものの、自分に何か妙案が浮かんでいる訳でも無い。

「……どうすっかなあ」

仕事を片付けながら考えたものの、碌なアイデアは浮かばない。気分転換に席を立ったコバヤシは、部屋の外に出てバーゲストに声をかけた。

「バーゲスト。ちよつと小腹を満たせる物を用意してくれ」
「はいっ、すぐにお作り致しますわ。お待ちくださいませ」

凝り固まった体を解して食堂の席に着いたコバヤシは、食事の配膳用のカートがガラガラと立てる音を聞いて嫌な予感を感じた。

「お待ちせいたしました!!」

「……………おおう」

デカイ。そして多い。

おかしいな。俺、小腹って言ったよね？小腹を満たす物って言うって、山盛りの焼き飯とか海産物のバーベキューとか出てくる、普通？そんな困惑を顔に出すコバヤシに対し、ニコニコしながら料理を目の前に並べるバーゲスト。自分の出した量に一片の疑問も抱いていないようだ。

「さあ、どうぞ召し上がってくださいな♪」

「……………いただきます」

でも食べてしまう。

だって全部美味いんだもの。一口食べたら止まらないんだもの。味の好みを把握されてる上に、体調や気分に合わせて食事を出されて屈しない男がいる筈がない。これきつと、裏でメイド達が口添えしてるな。でなければ、こんなドンピシャな料理出てこないだろう。

「……………うめえ」

毎度思うが美味すぎる。もうバーゲストの料理でしか満足できない舌に改造されていそうで、コバヤシはちよつと恐くなった。

「パイ、うま……………なにこれやっべ、うま……………」

だって全く関係ないアルトリアがこの有様だもの。ご飯の匂いに誘われてやってきて、ミートパイを一切れ口に運んで即効で陥落して
るもの。

「……アルトリア。食べるのは構いませんが立ったままなのはおよし
なさい。田舎妖精に教養など期待していませんが、まさか常識までは
欠如していないでしょう?」

「はい、ごめんなさい。あと田舎妖精云々のくだりは忘れないか
らなバゲ子。

「……それで、このご飯どうしたの?コバヤシだけ皆より早めのご飯
なの?」

「小腹空いたから用意させて、出てきたのがこれだよ」

「……バゲ子って小腹っていう言葉の意味分かってるの?」

「な……分かってるに決まってるでしょう!」

「……た、確かに少し多く作り過ぎたのは認めますけれど……」

「少し……?」

「少しねえ……」

バスケットボール程はある焼き飯の山。食材を丸ごと串で刺し貫
いて焼いたバーベキューの山。自動車のタイヤのように鎮座する巨
大なミートパイ。

どれか一つで一食分として通用するだろう料理を三品同時に出し
て、少しという表現をするのは無理があった。

「毎回たくさん作っちゃうバゲ子もバゲ子だけど、それを毎回完食す
るコバヤシも相当だよね……」

「料理に拘る上に特盛級の量を作るやつがいたからな。よく食う奴も
いたし。俺も最初はそうでもなかったんだが、釣られてたんまり食う
ようになっちゃった。」

まあ食った分はアイテム界にでも暴れに行けば消費できるし、特に

「気にする必要も無いだろう」

そう言っただけで焼き飯の山を崩しているのだが、未だ三合目すら見えていない有様だ。「減らねえ……」とぼやきながら食べ進めていくコバヤシに、アルトリアも呆れながらも一切れミートパイをかじった。

「変な所で律儀だね。食べきるには多分分りきってるんだし、残したって文句も言われないでしょ」

それはアルトリアの言う通りなのだが。

文句は言われないが、少し落ち込んで「……そうですか」とか言われるのが心にくるのだ。普段は勇敢な大型犬の癖に、この時だけ捨てられた子犬のような雰囲気を出すんだ、この女。

キツチンから顔を出したメイド達が、「え、残すんですか？」って目でこちらを見てくるから残し辛いのだ。

そんな自分特有の悩みを妖精眼で悟られないよう、無言で食し続けるコバヤシだった。

「そんな訳で困ってるんだけど、なんとかできそうなヤツ妖精國にいる？いないだろ。どーせないよね。うん分かった」

「答える前に結論出すの止めて頂けますか我が夫」

結局、自分だけでは限界があると感じたコバヤシは、恐らく今一番頼りになるであろうブリテンの女王に助けを求めてみた。妖精國の評価はぶっちぎりで最低値だったので、大して期待もしていなかったのだが。

コバヤシの予想に反して、モルガンはどこかしたり顔であった。

「……え？何とかできるの？」

「無論です。私の数少ない信頼できる妖精に頼んでみましょう」

「言ってみるモンだな……」

「では我が夫。早速行つて参ります」

間を置かずにモルガンは水鏡で消えた。

——何だか、普段に比べてワクワクしてたような？

残された魔王は女王の態度に首を傾げるのであった。

「はー！ー！忙しい忙しい！なんでドレス職人のボクが、ドレス仕立てないで他の物ばかり作つてるのかなー！？」

打つて変わつて、ここは領地シェフィールド。

桃色の小さな糸紡ぎの妖精が、多忙さに目を回してる真つ最中であった。

「ボガードの奴！次から次へと仕事を持ってきやがって！

いや、仕事持つてくるのはいいけど内容がオカシイ!!槍だの鎧だの鞆だの……そんなものばかり仕立てたら腕が鈍るっつーの！」

「忙しそうですねトトロット……いえ、今はハベトロットでしたね。シェフィールドでの待遇に不満があるのなら、すぐにでもキャメロットに招待しましょう」

「いやーそれは遠慮しておくぜ……なんだかんだでここなら花嫁衣装も作れる時あるからな——つてうわビックリしたあ!？」

彼女の工房にひょっこり現れた女王モルガンに、忙しく動いてい

たハベトロットと呼ばれた妖精は、驚きのあまりその場でひっくり返った。

「怪我はありませんか、ハベトロット?」

「う、うん大丈夫……ていうかいきなり現れるなよ!」

「そこまで驚く事ですか?」

「国一番のお偉いさんが自分の工房でアポなしで座ってたら、そりや驚くさー!」

「それは申し訳ない。しかし、打倒私を掲げている街にアポイントメントなどを求めては、要らぬ誤解が生じてしまうでしょう?」

「あっはっはーそりやボガードのしかめっ面が更に酷くなるね!黙って来るのもどうかと思うけどさー!」

モルガンがまだトネリコだった頃、巡礼の旅を共に成し遂げたかけがえのない仲間の一人である妖精騎士トトロット。

今はハベトロットと名前を変えて、花嫁の為にドレスを仕立てる職人として生きていた。

「まあ、こうしてボクの所に来てくれて、ちょっぴり安心したけどさ?」

「いやキミ、魔界って言う場所に連れ去られたり、その人と再婚したりしたんだらう?これでも心配してたんだぜ」

「……そうですか」

「でもその様子なら平気そうだな!前に見た時より、花嫁力も”2”上がってるし!」

「そうですか、2も………2?え?2?に!?たったの2!?!」

モルガンは愕然とした。そんな、料理だけでなく家事全てを履修しているのに、それっぽっちしか上がってないなんて。シヨックを受けるモルガンを見て、ハベトロットは朗らかに笑う。

「そんなにガツカリするなよな。ボクとしては、ほんのちよつぷり
ずつでも君が自分の幸せを求め始めたのが嬉しいんだからさー」

「ハベトロット……」

「それで？何かボクにお願いがあつて来たんじゃないのかい？花嫁の
味方のボクにさー」

「……そうでしたね」

不敵な笑みを浮かべるハベトロットに、モルガンもそれに応えるよ
うに立ち上がった。

長年の戦友たる二人の視線が交差する。何も言わなくとも通じ合
う、確固たる信頼の形がそこにあつた。

「私の知る限り、最高の腕を持つ糸紡ぎの妖精ハベトロット。花嫁の
味方たる貴女に仕事を依頼したい。」

——我が臣下が成長し続ける巨乳が原因で給仕服が着られな
くなっている。どうにかしてほしい」

「そこはウソでも花嫁衣装の制作の依頼であつて欲しかったよ」

訂正、二人は全く通じ合っていないかつた。

尚、仕事はしつかり受けて完遂したハベトロット。後日、モルガン
に連れられて魔界へ給士服を届けに来た。

「という訳ではじめましてー！ご依頼の品をプレゼントしに来たハベ
にやんだぜー！」

「我が盟友のハベトロットです。妖精騎士バーゲスト、お前の働きに
対する正当な報酬だ。受け取るがいい」

「陛下のご友人からの贈答品、ありがたく頂戴致しますわ」

跪いてなお見上げる程大きなバーゲストに、ハベトロットは特注の
メイド服を受け渡した。

「ありがとうございますございますハベトロット様ー！これでバーゲスト様のおっぱいがまたビッグになっても安心できますー！」

「これくらいお安い御用さねー！これでバーゲストも自分の巨乳に後ろめたさも無くなるだろー？あ、もし入りきらないくらいに成長したら、モルガンに言っつてボクを呼んでくれよ？すぐに直してやるさー！」

「……は……はいい……！」

——だから、言葉をばかして言っつてくださいますし！！

ミニ魔界のど真ん中で、大きな声で自分の巨乳の事について話すのは止めて欲しい。「そのおっぱいで騎士は無理でしょ」「乳の厄災やべえ」「バゲぱいご馳走様です」とか色々聞こえてきて、バーゲストは跪いた姿勢のまま顔を真っ赤にしてプルプル悶えていた。

「どうです我が夫、妖精國も捨てたものではないでしょう？」

「まあね。それはそれとして公開処刑は止めてやれ。バーゲスト、行っつていいぞ」

「はい……！」

メイド服を胸に抱えて走り去っつていくバーゲストを見て、ハベトロットが思わず声を漏らす。

「アイツがバーゲスト……凄いな、内に秘めたお嫁さん力が相当高いぜ」

「お嫁さん力っつて何だよ」

「そのままの意味さ。あー……ただ、負のお嫁さん力だから、結婚は遠いかなー……」

「……」

そりゃあ、愛が深まった相手をもぐもぐしちゃう女だからな。コバヤシは心の中で納得した。

赤っ恥はかいたものの、メイド服は最高の出来だったのでバーゲストは喜んだ。

「心機一転ご奉仕致しますわ！本日のご飯です！」
「……………うわお」

飯の量は倍になった。

魔界は今日も平和である。

【幕間】 はたらくモルガン（前）

妖精國の女王モルガン・ル・フェは、これ以上無い充実感を味わいながら毎日を過ごしていた。

朝起きれば、目に入れても痛くない程に愛しい娘が横にいる。その幸せを噛み締めて、すやすやと眠る穏やかな寝顔にそつとキスをして、ネグリジエから女王の服装に着替えたモルガン。母から女王へと切り替わった彼女は、その聡明な頭脳を働かせて本日の仕事の予定を確かめる。

不備の無いように完璧に。王都での執務と魔界の仕事を掛け持つ彼女は今日も忙しい。

「……楽しいな。こんな気持ちになったのは、果たして何時ぶりだっただろうか」

転機は間違いなく、ブリテンに魔王が来たあの日だろう。

第一印象は最悪だった。汎人類史の歴史のように、ブリテンを奪うためにピクト人やサクソン人のような侵略者が攻めてきたと不快な感情で一杯だった。妖精騎士を招集し、一人残さず叩き潰すと心に決めていた。

だが実際は全く歯が立たず、たった一人の人間に自分を含めたキャメロットの戦力が叩き潰される結果となった。武器まで奪われ、モルガンでさえ手の届かない領域の力を行使されて敗北した。

次に目を覚ました時は捕虜どころか所有物扱い。相手は侵略者というより単なるコレクターであり、お目当てがブリテンではなく自分の武器だと知ってモルガンは愕然とした。

しかも、自分の國の国民達にその身を売り渡され、それで相手は律儀に侵攻を止めたのだ。自分の國を守れたと思えばいいのか、敗北を喫した自分を情けなく思えばいいのかよく分からなかった。

それでいて、自分で望んだ事とはいえ自分や妖精騎士に力を授けた魔王。自分の方が上の立場だと疑っておらず、所有物扱いしている癖

に妙に親切で気に入らなかつた。

——まあ、バーヴァン・シーを救ってくれたのは感謝してはいますが。それはそれ、これはこれ。チカラを手に入れた後は、あの男を倒してブリテンへと戻る。そう、密かな野望を抱いていたのだが。

『なんなら全員で俺の首でも獲りに来るか？ 《殺せたんなら全部くれてやる。無理だろうけどな》』

この一言に、あの男の生き様が集約されていた。大胆不敵な言い方だが、それが許される力の持ち主。モルガン達を侮っているのではない、自分の力に絶対の自信を持ち続けている。全力でぶつかって敗れたならば、己の財を全て相手に渡す潔さも持ち合わせていた。

——私の知る王とは、男とは違う。なんなのだ、この男は？

汎人類史のウーサー王は、彼女にしてみれば母親を己の妻にする為に侵攻してきた侵略者だった。モルガンの生活は破壊され、人を滅ぼす魔女としてブリテンを追い出される羽目になる。そして、やがて生まれた自分と同じ顔の女は、父王の愛を受けて育ちブリテンの王となった。

——男など、王など、私にとっては唾棄すべき存在だ……！

汎人類史のモルガンはそう叫ぶ。身勝手な欲望で人生をかき乱され、愛しい故郷に帰る事すら許されない。父親は自分を辺境の地へ追いやった。後から生まれたアルトリアは王に相応しい存在で、自分はそうでないから見捨てられた。ブリテンの王には、自分こそが相応しいのに。

激しい憎悪に取りつかれ、ブリテンを崩壊に導く滅びの魔女として呪いを振りまく存在だと疎まれた。

だから男など嫌いだ。女を政治には関わらせない癖に、道具としては利用するのだから。女だというだけで自分達の上に立つのを嫌う連中ばかりだった。諸侯の王たちも権力にしがみつくと醜い生き物としか思えなかつた。

アルトリア・ペンドラゴンは性別を偽ってまで王の座に就いたとい

うのに、どうしてモルガン・ル・フェでは駄目なんだ。その差が彼女の憎しみを膨れ上がらせていた。

だが、この小さな魔界の王はモルガンの知る王と何もかもが違っていた。

自分が王であると自負しているが、自分以外にも王に相応しい者がいると認めていた。

何者も寄せ付けない力を持ち、更なる力を欲するが、力そのものにしてはみついてはいなかった。

自分が反旗を翻せば、あの男はそれを迎え撃つだろう。しかしそれは、不相応な真似を仕出かした女としてではなく、災いを招いた魔女を疎んででもなく、ただ一人のモルガン・ル・フェという敵と見据えて戦うだろう。そんな確信があった。

自分でも変だと思いつながら、モルガンにはそれが少し嬉しく思えた。ありのままの自分を見て受け止めてくれる。たとえそれが戦意であろうとも。

悪にまみれ、周囲に理解者など居なかった汎人類史のモルガンは、たとえ敵だとしても自分をしっかりと見てくれる相手を好ましく思えたのだ。

今にして思えば、自分の野心は見透かされていたのかもしれない。それでも己の庇護下に置いて育てた魔王に、モルガンは興味を引かれた。

そして力を蓄えているうちに、魔界暮らしが楽しくなっていた。極めたと思いつ込んでいた技術にもまだまだ上があると知り、貪欲に頭に知識を叩き込んでいった。そして己が手を出せる領域が広がってきた。それに達成感を覚えた。

力を増していくと、悪魔達もモルガンを慕うようになっていった。出自がどうであれ関係ない。成果を出せばモルガンは認められた。

(すげえ成長してるなコイツ……どうせなら、もっと色々やらせてみるか)

そう思ったコバヤシは、モルガンに自分の仕事の何%かを分けてみた。それをモルガンは想定していた以上にやり遂げてみせた。議長達まとめ役からの評判も悪くない。

「魔界で運用してる部隊のいくつか、お前が担当してみるか？」

「……よろしいのですか？」

「お前なら問題ない。任せよう」

「……ふふっ、分かりました」

モルガンの夢は、自分の思い通りになる国を持つ事だった。

だがそれは、周りに誰もいなかった事からくる妄執だったのかもしれない。誰かから褒められ、認められ、一緒になって働く仲間を得た彼女は、もう以前のように憎しみに囚われていなかった。

——この人とブリテンを統治できたら、楽しいだろうなあ。

いつしかモルガンは、こんな無垢な少女のような夢を抱いていた。

異聞帯のウーサーの悲劇は今でも忘れない。

でも、コバヤシはウーサーと違って規模は違えど一つの世界の統治者だ。経験があるというのは、それだけで大きなアドバンテージとなる。コバヤシとなら、ブリテンをもっと楽しい國にできるかもしれない。

いや、出来る。

そう信じて疑わなかったモルガンの行動は早かった。

「魔王コバヤシ。私と共にブリテンを治めましょう」

「嫌ですけど」

「……………」

モルガンは不機嫌になった。

一瞬の迷いも無く即答。妖精眼も嘘は無いと訴えている。何故だ、

私はあなたと一緒に王になりたいのに。そんな子供のように不貞腐れたモルガンだが、すぐに気を取り直した。

コバヤシはブリテンを詳しく知らない。自分が売り込んでブリテンに興味を持ってもらえばいいのだ。問答無用に呪いをかけようと思わない辺り、自分は成長しているのだ。フリップボードを用意したモルガンは、書面を用いてブリテンの歴史を詳しく解説していった。自分が楽園から派遣される前の事は曖昧な部分もあるが、概ね正しいと思われる推測を根拠含めて述べていった。

そしてブリテン講習会の途中で、夢に現を抜かしていたモルガンは現実を知る。

——あれ……？ひよつとして私のブリテン、他の人から見ると魅力無いんじゃない……？

國のあちこちに湧き出るモース。街一つを呑み込む厄災。それに加えて1000年に一度、ブリテンの全てを更地にする規模の大厄災が必ず起こる。

モースは牙の氏族でしか対応できず、しかも絶対有利でもない。人間を使えばある程度なら対応できるが、元が弱い上に数も限られており、十分に対処できるとは言い難い。厄災はモルガンが対応しているとはいえ、その方法は水鏡を使つての過去への押し付け。何の憂いも無いかと問われれば、自信が無かった。

住んでいる妖精達はそのほとんどが社交性が無く、モルガンが全土平定する前までは氏族間の争いが絶えなかった。というか女王として君臨した後も、一つの氏族が滅びる虐殺が何度か起こっていた。しかもそれに至る理由も大したものではない。氏族間で諍いがあるのは仕方ないにしても、それで相手を皆殺しなどやり過ぎだ。

敵対する魔界の住人同士でなら相手の皆殺しもあり得るが、これは妖精國內の話であり、大きなくくりで言えば仲間なのだ。内ゲバで一族滅亡とか笑えない。

そもそも味方殺しは魔界でもタブーなのだ。味方を殺せばその所

業が魂に刻まれ、転生するまで残り続ける。それを享樂やら不満やら突然の思い付きやらで実行する妖精など、懐に入れる価値など皆無であつた。

妖精國の文化はそのほとんどが人間の模倣でしかなく、妖精國特有の物は存在しないと云つていい。よしんばあつたとしても、これまでのマイナスイメージを覆す程の魅力がある物など生まれるのだろうか。

笑うことを許し、楽しむことを許した。祭事の重要性は理解しており、年に一度はモルガン祭を催していた。

だがそれは、一時滞在の観光客にとつては美しく思えても、長年腰を据えて國を営む統治者にとつては魅力でも何でもなかった。

だつて散々裏切られてるんだもの。

どんなに救つても、どんなに尽くしても奴等はすぐにひっくり返すんだもの。

そしてそれを、他ならないモルガン自身がその身で証明してしまつているんだもの。

モルガンがブリテンに固執しているのは、自らがブリテン島の神秘を色濃く受け継いでいるブリテン島の化身だからに過ぎない。

つまりブリテン島に一切関わりの無い相手に、ブリテンの魅力を説く事など無理難題であつた。

元よりコミュニケーションの取り方に問題があり、統治者として國についてとことん語る相手など殆どいなかったが故に起きた悲劇。意見を交わさなければ問題など見つかるはずも無い。改めて浮き彫りになった問題点に、モルガンは打ちのめされた。

統治したつて旨味の一つも無い、どころかひたすら負債が増えるだけの面倒な國ブリテン。こんな場所を一緒に治めようと誘つても、相手からすれば只々寄生されているとしか思えないのが実情だつた。

バーゲストが説得に加勢してくれたものの、實際何の役にも立っていない。

「善悪が無いのが妖精の在り方？お前ら今まで守ってきた連中に売り

飛ばされてるんだけど、その自覚無いんかい」

「ぐうっ……!?!」

「キヤメロットだったっけ。あそこにいた連中、うまい汁を啜ってた癖にお前ら妖精騎士や女王陛下まで見捨ててたよね。強者は弱者を守るっていうのが当たり前なら、あの連中が強者側に立つたらお前と同じことすると思うか?」

「う、それは……」

「生命の在り方なんてそれぞれだけどさあ、社会を形成してるのに社会に必要なモン持ってないのが問題なんだよ。女王無しで放っておけばそう時間が経たないうちに、ブリテンなんて国は自滅するぞ? そんな連中を尊重して何か意味有るの? 無いだろ? 無いよね? 全員傀儡にした方がよっぽど上手く回るだろ」

「ううう……」

民度というか、忠誠心というか。妖精を民として見ればそういうものも欠けていた。

下手をすれば、仮にブリテンに侵攻してきた敵対勢力がいたとして、自分達が良い思いをするならそっくり鞍替えする事もあり得るとコバヤシは指摘した。

救世主のトネリコさえ排斥してきた連中だ。モルガンやバーゲストに反論など出来る筈もなかった。

——戦力として使えないならまだしも、力だけはあるから敵になれば厄介って……これ、汎人類史のブリテンより酷いんじゃない? ……?

元々は崩壊へ一直線の異聞帯をどうにか存続させてきたモルガン。ここに来て、自分がどれだけ綱渡りの状態だったかを否が応でも自覚させられた。

コバヤシにブリテンの面倒を見るメリットは無い。もつと言えばデメリットしかない。となれば、モルガン自身がコバヤシに統治の対価を差し出さなければ、彼は首を縦に振らないだろう。

自分と妖精騎士三人では到底釣り合いそうにない。他の何かが必要だ。珍しいものに興味を示す、コバヤシの気を引けるものが……。

——そうだ、予言にあつた救世の妖精ならば、あるいは。

ブリテン救済の使命を持ってやって来る、二人目の楽園の妖精。間違ひなくレア物だ。モルガンは魔術を用いて、自分と同じ反応を持つ妖精を探した。

ほどなくして目当ての妖精の場所に当たりが付いたのだが、モルガンの心中は複雑な気持ちで渦巻いていた。

自分の代わりに遣わされる相手に心当たりがあつたのだ。

——恐らく、アルトリア・ペンドラゴンなのだろうな……。

汎人類史のモルガンの腹違いの妹。自分と同じ顔で自分の欲しかったものを与えられた女。モルガンの憎しみの記憶が蘇る。

憎き仇敵を魔界に呼び込みたくは無かつたが、背に腹は代えられない。

——どうせ、こちらでも愛されているのだろう。汎人類史と同じようにな。

自分が圧政者として嫌われている事など分かっている。その自分を打倒する為に遣わされたのだ、歓迎されているに違ひない。

鬱屈した感情で、監視魔術の座標をティンタジェルへと向けた。しばらく魔界で暮らしていたモルガンは忘れていた。

妖精は常に自分の予想を下回っていく行動を起こすのだと。

——…おかしい。反応はこの村から出ているのに、どこの家の中にもいない。

監視魔術で家探ししていたモルガンは、予言の子らしき人物が見当たらずに首を傾げた。村の家屋は全部調べた。あと探していないのは、馬小屋くらい——。

悍ましい考えに至ったモルガンは、慌てて馬小屋の中を覗いてみた。

………いた。

全身が薄汚れた小さな妖精が、鉄の首輪に繋がれた状態で転がっていた。

着ていた質素な服はボロボロで、美しかったであろう金色の髪は土と埃で黒ずんでいた。

自分と同じ顔にある瞳は光を映しておらず、ただ暗い闇が広がっていた。

……この子が、あのアルトリア？

モルガンは理解を拒んだ。何故こうなっている、アルトリアは、もつと煌びやかな女だったはずだと。

汎人類史の記憶の姿と、ボロ雑巾のような今の姿が重ならず、モルガンは軽いパニックを起こした。

もつと注意深く観察してみれば、その身に宿った神秘は弱々しく、与えられて然るべき食事が与えられていないのを暗示していた。

もそもそと動いたアルトリアは、近くの野草の山から草を一握り口に入れ、帽子に溜められていた水を飲んで胃に流し込んでいる。

食事を与えなくても自分で何とか凌いでいるから、村の者は誰もアルトリアに食べ物を与えていない。

その事実気付いたモルガンは、思わず口を手で覆った。

——なんで。なんで、こんな……？

その疑問に対する答えはすぐに出た。自分がコバヤシに負けていなくなったから、彼女はもう予言にある救世の妖精ではなくなったのだ。

だからこうなった。

だからこうなった……？

それではまるで、予言の子ではないアルトリアに価値が無いと言わんばかりではないか。

モルガンはアルトリアを憎んでいる。彼女自身に罪は無くても、彼女に対する憎悪の念は抑えられない。

だが、モルガンは遅まきながら気が付いた。

アルトリアも自分と同じく、生まれながらに生き方を決められていた人間なんだという事を。

アルトリアは首輪の鎖を引っ張られ、村のあちこちで見世物になっていた。散歩と評した醜悪なそれを見て、モルガンは知らずの内に唇を噛んでいた。

体に付いていた生傷はこの時のもの。碌に手足を動かせないまま引き摺られているアルトリアは笑いものになっていた。

心も体も痛めつけられながら、必死に作り笑いを浮かべるアルトリアを見て、モルガンの心は何かに強く締め付けられた。

夜になり、馬小屋に小さな明かりが灯る。誰かに気付かれないうちに、最低限の魔術で小屋を温かくしたアルトリアは服を脱いで体を拭き始めた。

弱々しい光に照らされ、アルトリアの四肢に浮かぶ黒いアザを見つけたモルガンは呻き声を漏らした。

アルトリアは薬を調合していたが、もうそれで済む段階の怪我ではなかった。

——ひどい、こんなの、酷過ぎる。いくらなんでも、あんまりだ。

自分だってお世辞にも行儀が良いとは言えない。ウーサー王やアルトリアなど、出来る限り苦しんで死ねば良いと思っていたのは確か

だ。

だがそれは、あいつらが自分にした仕打ちの報復としてである。

このアルトリアはまだ何も成していない。将来は女王の敵になるのだろうか、今は違う。

誰かの元で、誰かの愛を受けて育つ。予言の子ではあるが、同時にただの普通の女の子のほずだ。

予言の子でなくなったのなら、ただの女の子になるのではないのか。

村ぐるみで虐待されるような謂れは無い。

汎人類史のモルガンが、アルトリアを救えと叫んでいた。

過去を憎む気持ちなど、声を押し殺して泣いているあの子を見て彼方に吹き飛んでいた。

運命に翻弄された妹を、楽園の同胞を助けなければ。

モルガンは楽園の妖精を売り込むと共に、アルトリアの現状をコバヤシと共に見た。途中で不快感が振り切れた彼がブリテンへ飛んでいき、アルトリアを連れて戻ってきたのを見て安心した。

怪我が治った彼女に自分の立場を分からせた上で、ここで一緒に暮らしていこう。

また仕事が増えたモルガンだったが、その心中は晴れ晴れとしていた。

【幕間】はたらくモルガン（後）

「おはようございます、我が夫。本日の予定ですが——」

朝の挨拶を交わし、すっかり秘書っぷりが板に付いた銀髪の色白美人を見て、魔王は報告の内容を頭に入れながら感慨に浸る。いきなり我が夫呼びされた時は突っ込む空気でも無かったので放置していたが、こうも慕われていると持ち主としてより男としての喜びが勝るものだ。

最初は野心の塊のような女だったので、発破をかける意味でも軽く煽ってみたのだが、どうやら想像以上に効き目があったらしい。

その熱意がブリテンとかいう不良物件に向いているのが惜しかったが、あれが彼女の故郷であり夢だというならば、そのひたむきな思いを否定するのも気が引ける。少し手を貸してやるくらいなら良いかと考える程度には、モルガン・ル・フェは働いていたのだから。

妖精國では毎日のように公務をこなし、バーヴァン・シーの教育や氏族長達との会議も行っている。あの呪いとトラブルが溢れる國を治めているだけあって、仕事量も半端なく多い。

ミニ魔界ではブリテン異間帯を汎人類史から切り離すための研究を進めているが、成果はまだ出ていない。焦らずにやれと言いつつ聞かせているが、自分の故郷の存亡がかかっているので必死になるのも分かる。

それと扱う魔術の研磨といった自己を高める修行。次から次へと新しい魔術を生み出しており、優れた魔術師に相応しい成果だと言えるだろう。

更に通常業務としてアイテム強化、アイテム収集、部隊運用 e t c ……。

「……………ん？」

「？ 何か不備がありましたか？」

報告を遮られたモルガンが、首を傾げてコバヤシを見つめる。
深い青色の瞳が、どこか柔らかい光を宿していた。

——やっぱりコイツ綺麗な顔してるな……いやいやそうじゃなくて……。

類まれている美貌に意識を奪われそうになるが、どうにか堪えた。考え事をしていた最中、不意に胸がつかえる感覚に襲われた。何か重要な事を見落としている気がする。

コバヤシは頭をフル回転させて原因を探り、ある重大な問題に思い至る。

——……あれ。俺、モルガンを休ませてたっけ。

急いで彼女のスケジュールを今日から先月まで遡って思い出してみろ。……なんだ、ちゃんとオフの日はあるな。

取り越し苦労だったと安堵しかけたが、よくよく記憶を掘り起こしてみると、オフの日でも仕事の日と変わらないモルガンの姿が映し出された。

「なあ、お前……休みの日は休んでるか？」

「ええ、勿論です。丸一日を研究に費やせるなど、ここにお世話になる前は考えられませんでした。」

休日の間も分身を使つて雑務をやらせています。我が夫、どうかご安心を」

「……………」

——これはアカン。安心できねえ。

そりゃ、ブリテンの女王一辺倒だった時に比べて余裕はあるんだろうけれども。

単なる仕事でなくて趣味の範疇でもあるんだろうけれども。

分身は殆ど負担が無いんだろうけれども。

もしかして、何もせずにゆっくり体を休めるって事を知らないんじゃない？

精神が摩耗しきっていて、何か手に付けてないと駄目な体になってるんじゃないだろうか？

何百年、何千年とブリテンを救うために酷使され続けてきた彼女を休ませなければ、その内壊れてしまうかもしれない。

危機感が募ったコバヤシは迷いなく行動に移した。

「それでは、今日の私の職務は——」

「いや、今日は仕事は無しにしよう」

モルガンの手からバインダーを奪い取り、控えていたメイドが持っていたトレイの上に置いた。一礼して去っていくメイドと、それをポカンとした表情で見送るモルガン。

魔王の強権はこういう時に便利だ。コバヤシは心からそう思う。

「研究もしなくていい。お前は根を詰め過ぎだ。たまには何もせず

に、ただゆったり過ごす時間があっても良いだろう」

「我が夫……しかし、いきなりそう言われても、何をすればいいのか……」

だから何もするな、と言いかけて、モルガンの瞳が迷いで揺れているのに気が付いた。

恐らくはこういった時間の使い方は苦手、ないし久々でどう過ごせばいいのか分からないのだろう。

そんな悶々とした気持ちのまま休ませても効果は薄い。彼女がリラックスできる環境に置かなければ休養の意味が無いだろう。

……休みを切り出したのは自分だ。今日の業務は優先度の低い案件ばかり。後でどうとでも挽回できる内容だった。

ならば。形だけとはいえ、自己申告で片方は了承した覚えはないとはいえ、妻の為に一肌脱ぐのが夫の務めだろう。多分。きつと。maybe.

「なら、今日は夫婦水入らずで過ごす日にしよう」

「……………え？」

「お前と婚約した覚えはないが、はっきり否定しなかったのも事実だからな……………」

「こういう時に役に立つなら、仮初の夫婦関係も悪くはないか」

「……………我が夫」

この際、細かい部分には目を瞑ってモルガンに付き合ってやろう。そう決めた夫の心遣いに、妻の女心がキュンときた。

「……………貴方からそう言ってもらえて、とても嬉しいです。

今日一日は二人で夫婦らしく過ごすとしましょう。

——ではベッドで男女の営みと参りましょうか我が夫
「何でだ」

白魚のような手が男の腕に絡みつき、獲物を海中に引きずり込む鯨のような力が襲う。女の細腕から生まれる怪力に慄きつつ、どうにか拮抗して相手を落ち着かせようと話しかける。

「今は朝だし、さつき起きてきたばかりだろうが。何でベッドにとんぼ返りさせようとしてやがるんだ。お前、夫婦らしい事で真っ先に思いつくのがそれなの？」

「何を言うのです、仲睦まじい夫婦の休日の営みといえは一つしかな

いでしょう?」

「夫婦らしい事で思いつくのそれだけなの?」

なんて爛れた思考回路なのだろうか。

コバヤシとて夫婦の経験など無いが、それでも一番初めに思いつく選択肢にそれはないだろう。朝っぱらからおっばじめようというのか。夜魔族だつて夜までは待つのに。

脳内ピンクの魔女様の頭をはたきつつ、休日をどう過ごすかを考える魔王様。

自分がたまにしている気分転換の方法を、モルガンにも試してみるかと思案する。

「何するか分からないなら、俺に付いてきてもらおうか。外出の準備しな。ピクニックにでも洒落込むとしようか」

「存外、可愛い趣味をお持ちなのですね」

「二言目にセックスとか言い出すよりマシだろうが」

くすりと口元に手を添えて笑いをこぼす上機嫌な妻に、抗議の意味を込めた視線を送る夫。どちらがマシな考えなのかは人によるだろう。

時空ゲートを通ってやってきた世界は、魔界という名に反した穏やかな場所であった。晴れた空の眩しい光がモルガンを照らす。

「我が夫……ここは一体……?」

「ここは絶花魔界。魔界の中でも辺境にある田舎の魔界だな」

「絶花魔界……」

殺伐とした魔界しか知らないモルガンが見る、平和で穏やかな魔界。吹き付ける風には生命の息吹を感じられ、彼方まで広がる空は湖のようにどこまでも澄んだ青色に染まっている。

風にあおられた草木が二人を歓迎するように音を立てた。風になびく自分の髪を押さえるのも忘れ、ただただ目の前の景色に釘づけになるモルガン。

呪いも争いも彼女の妖精眼には映らない。冬の女王は春の世界を前にして、言葉も忘れて立ち尽くしていた。

「すごく、きれい——」

放心した彼女の口から零れ落ちる心からの誉め言葉。傍らに立つ男は、それに気を良くして満足気に口角を上げた。

「だろう。遠くの空には竜巻も見えるが、破壊をもたらす災害って程でもない。心身を休ませるには良い場所だろうか？」

「……ええ、とても良い場所ですね」

見上げれば視界一杯に青空が広がっている。ブリテンの夕焼けの空でも、魔界の夜のような暗い空とも違う。雲が流れ、暖かな日差しが地上に降り注ぐ、自然の優しい祝福がこの魔界を包み込んでいた。

遠い記憶の中にしかない、モルガン・ル・フェが見る事の叶わなかった故郷の風景を思い出し、瞼を閉じて感傷に浸る。魔王は彼女の頬に涙の一筋が伝う姿を幻視した。

「少し、歩きたい気分です。どこか案内してもらえますか？」

「案内するような名所は無いぞ。田舎だからな。」

代わりに俺のお気に入り場所があるから、そこに行くか」

先導する夫の後ろに妻が付き従う。あちこちに建てられた風車の

羽が勢いよく回り、足を踏み入れた森の木々がざわざわと騒ぎ出す。風が強い魔界だとモルガンは感じた。

「我が夫。どういった経緯でこの魔界と関りを持ったのです？」

「ああ、それは反乱軍のリーダー……：自分じや認めていないが、キリアって奴の故郷なんだよ。生まれはまた違うらしいが、ずっとここで暮らしてみたいだから。」

「ここもロスト軍の標的にされたから、それを阻止する為に来たんだよ」

「こんな穏やかな世界をも食い物にせんとしたロスト軍に、モルガンは憤った。終わった事とはいえ、自分が気に入った場所が荒らされるのは良い気持ちがないものだ。」

「それで、その時にここにぶっ刺さったのが、この槍だ」

コバヤシの手には赤と黒が混じった色の、魔力で作られた槍が握られていた。差し出されたそれを、モルガンは両手で受け取って観察する。

「見た目こそ恐ろしさを感じますが、既に力は失われているようですね……」

「ロスト軍の総大将、魔帝ヴォイドダークはこの槍をあちこちの魔界に刺して、魔力を根こそぎ奪っていった。言うなれば、コレは世界そのものにぶっ刺さる槍だ」

モルガンが槍を解析してみると、確かに特定の何者かへと魔力を送る機能が搭載されていた。これ一本で世界を終わらせる武器。汎人類史にこの槍と肩を並べる逸品が、果たしてどれほどあるだろうか。

かつて自分が使っていた選定の槍を彼女は思い出していった。トネリコの失意と絶望によって、使用者の命を代償にして力を振るう呪い

の武器となった槍を。

「で、これは単なる思い付きだが……それを改造してブリテンにぶっ刺して、魔界と併合出来ないモンかね？」

「……へ？これを、ブリテンに……？」

「そうそう。ブリテンが滅ぶ道を避けるにはどうすればいいのか考えてみたんだが……住民共は洗脳してるから良いとして、一番の問題は妖精國が汎人類史と同じ座標にある事だと思う訳よ」

「そう、ですね……一つの惑星に歴史が異なる二つの世界は成り立ちません。」

そもそも、妖精國は人類史が存在しない世界です。異聞帯のブリテンが存在し続ける以上、抑止力や人理継続保障機関との衝突は避けられないでしょう」

もつとも、ぶつかつた所で此方が負ける可能性は無いだろうが。宇宙の彼方からやってきた、地球上ではあり得ない規模の戦争を生き抜いてきた魔王の軍勢相手に、抑止力やカルデアがどんな手を打てるだろうか？

他の魔界の探索を任せた悪魔が、「ついうっかり魔界壊しちゃいました、てへ☆」とか言ってくる世界だぞ。報告を聞いたモルガンが遠い目になったのは言うまでもない。

「だからさあ、魔界を通じてこの槍をブリテンに刺して、あのブリテンが元々魔界の一部だつたつて事に出来ないモンかね？」

「一時的にでもいいから、そう騙くらかしてブリテンを汎人類史から引きはがしてしまえば、もう同じ座標ではなくなるだろうし。」

向こうからしても、異聞帯は元々あり得ない歴史なんだから、それが遠い場所に消えた所で問題なんて無いだろう？」

モルガンは一瞬、何を言われているのかが理解できなかつた。

それでも一秒足らずで覚醒し、彼の思い付きを脳内で整理してみる。

——世界に刺さる槍を通じてブリテンをハッキングし、汎人類史のIFでなく魔界の一部だと書き換える。

——ブリテンを汎人類史に縫い付けている厄災が消えれば、書き換えによって汎人類史との繋がりが一時的に無くなり、その隙にブリテンを遠い世界へ引きはがしてしまえばいい。

——魔界にはエクスカリバーやゲイ・ボルグなど、起源は違えど汎人類史と同じ名前の武器があった。誤認、というきっかけにはなり得る。

——汎人類史側からすれば、あり得ない歴史を歩んだ世界が無くなっただけ。それで不利益が生じる訳でもない。

前代未聞で荒唐無稽な企みだった。歴史の守護者である抑止力を鼻で笑うような所業だ。

「——できる、かもしれない」

だが、全く可能性が無いかと問われれば、否である。

魔力で編まれた槍ならば、今のモルガンが手を加えるのは容易い事だ。

本来、滅んでいたブリテンを存続させたのも彼女の手によるもの。このブリテンの歴史に手を加えられるのはモルガンしかいなかった。

現実離れした案が現実味を帯びてきて、女王の顔は高揚感で歪んでいた。まさしく今まで誰も試みた者がいない、力と策謀による自分達の國の奪取。

「ふ、ふふふふ、ふはは、あはっ、あはは、あははははははははは!!」

冬の女王は嗤った。堪えきれずにモルガンは笑った。今すぐに実行は出来ないが、その糸口は見えた。

己の支配欲を曝け出して笑い続けるモルガンに、目の前の魔王も釣

られて笑みを見せた。『キレツキレで楽しそうだなコイツ』と微笑ましい気持ちで見守っていた。

腹がよじれる程に大笑いし終わったモルガンは、その様子をずっと見守られていた事に気付いて、目尻に溜まった涙を拭いながらほんのり顔を赤くしていた。

アイデアを出した俺としては、あそこまでガツチリハマるものだとは思ってもみなかった。あれだけ喜ばれれば、思い付き程度だったとはいえ考えた甲斐がある。

心配事も一つ片付いたところで、俺のお気に入りの場所に到着した。

断崖絶壁の下に広がる桃色の花景色。キリアに教えてもらったが、あれはサクラという名前なのだそう。咲く季節が過ぎれば散っていく筈の花が、土地の力強さでも作用したのか、ずっと咲いている。崖に腰掛け、モルガンを隣に座らせる。眼下の光景にモルガンも目を輝かせていた。

この魔界特有の強い風に運ばれてきた花びらのシャワーが、この高い崖の上にも届いた。モルガンの長い髪に花びらがくっついていて、どこことなく可愛らしかったので指摘しないでおいだ。

「さつきはごめんなさい。つい、我を忘れてしまつて」

「そんなに嬉しかったのなら、何よりだよ」

「……はしたない女だと思いましたが？」

「いや、別に」

何の前触れも無しにあんな笑い方されたらドン引きだが、長年の悲願が叶いそうになっているのなら、あの反応も領ける。高笑いなんかセラお嬢で慣れてるしなあ……。

「……貴方が初めてです」

「あん？」

「私に、私の心にずっと寄り添ってくれたのは。私を見て、私を肯定してくれたのは」

「理解者は俺だけじゃないだろう」

「そうかもしれない。でも、一番近くに感じるのは、いつだって貴方でした。」

冷酷な支配者の私を、支えてくれる人はいました。でも、訪れるべき滅びを拒む邪道を、私の手を取って一緒に歩いてくれる人は貴方が初めてです、コバヤシ」

そう言つて、モルガンの手が俺の体へと伸びる。

「手を取つた覚えなんか無いんだがな……」

「それは貴方が自覚していないだけです。でも、それでも構いません。貴方の存在が私を、私の娘を救ってくれた。その事実だけは否定しないてくださいいね？」

「まあ、それはそうだなあ……」

片腕がモルガンにからめとられた。どうにも振り払う気が起きないから、されるがままになっている。

「私は貴方の所有物です。この体、貴方の好きなように扱ってもらつて構いません」

「お前……」

「あの日、心も体も捧げると誓いました。憎悪で穢れた我が身ですが、美しさでは何者にも負けてはいません。」

……私の夢に付き合わせて、貴方に負担を強いているのは分かっています。ですが、ここで私はやめられない。たとえこの願いが間違っているのだとしても、私はブリテンを失いたくない。

貴方に背負わせている負担を僅かでも和らげられるなら、どうか私を抱いてください」

向かい合ったモルガンの笑みは優しかった。妖精眼を持っていない俺にでも、今の言葉に嘘は無いのが伝わってくる。

柔らかい女の体の肉欲に溺れてしまおうか。そう、頭の片隅に浮かんでできてしまうくらい、俺の目はモルガンに釘づけになっていた。

「それに、こうやって触れていないと、少し怖いです。この楽しい毎日が、娘が笑っている日常が、ある日突然、一抹の夢として消えてしまいそうで——」

——『アレ、いらなくない?』

——『役立たず! 役立たず! お前なんかもういらぬ!』

——『同罪だ。同罪だ。娘なんだから同罪だ』

——『適当に刻んで捨てちやおう! バイバイ、モルガンの王女様!』

かつて見た夢の映像が蘇る。妖精というものを詳しく知った今、より鮮明に、より残酷に。

目の前の女が、尊厳を踏みにじられた姿になっていた。積み上げてきたものを無に帰され、絶望の底に一人で沈んだ。

残忍な人格の皮を被った優しい小さな妖精が、ズタズタにされて捨てられていた。

これがこいつらの辿る末路なのだ、今になって確信した。

気づいた時には、モルガンを自分の体で包み込んでいた。

……させるものか。

許すものか。

——何者にも触らせてなるものか。

「——え、あ、わが、おっと……？」

「……違うんだよなあ」

こうして抱きしめてやれば分かる。冬の女王なんてのには程遠い、温かい女なのに。誰もがこぞって遠ざけるから誰も知らない。

華奢な体は少し力を込めれば折れてしまいそうで、誰かが傍で守つてやらないといけないのになあ。

なあ、一人でオークニーへ嫁がせた汎人類史のウーサー王よ。

一人でこのブリテン島へ使命を背負わせて流した、楽園のシステムよ。

どうしてこの女を一人にした???

目的が達成されるのなら、この女が至る末路などどうでもいいというのか???

「故郷へ帰りたたって願いが、故郷を救いたたって願いが、間違ってるワケないだろ……」

「……我が夫……」

「間違つてねえよ。もっと上手いやり方はあつたかもしれないが、お前が戦う理由は絶対に間違つてなんか……」

世界はモルガンに優しくなかった。大事な物をどこまでもモルガンから奪っていった。

ならば、それに反抗するのは悪なのか。憎むのは悪なのか。

いいや。絶対に違うね。それにもう正義か悪かの問題じゃない。

勝つか負けるかの問題だ。

「お前は、お前達は俺の物だ。消耗品じゃない。俺の……手放したくない宝物だ」

「……だから、もの？」

「そうだ、宝物だ。宝物なら大事にして、近くに置いて、綺麗にピカピカにしてやらないとな……そうだろう、モルガン」

「……わたしのこと、本当に、そんな風に……？」

「思ってるとも。バーヴアン・シーも、他の奴等も、みんな一人残らず」

所詮、こいつらを使い潰すしか出来ないのなら。全員纏めて俺が貰う。俺が大切にする。

何が邪魔してこようが関係ない。全てなぎ倒して進むまでだ。

——永劫の時の中で力を蓄え続けたのは、世界の理をひっくり返すこの時の為にあっただらうよ!!

「………宝物なんて。そんな事を言われたのは初めてです……」

……貴方はわるいひと。私のような魔女を、宝だなんて……」

「魔王だからなあ。魔女一人、配下に増やしたから何だって話だ」

「……嬉しいです。とても、うれしい……」

私の事、みんなの事。ずっと離さないで下さいね……」

静かに涙を流したモルガンは、俺の腕の中にすっぽりと収まった。彼女の小さな泣き声が聞こえないように、絶花魔界の風が強くなつた気がした。

アルトリア・キャスターの冒険（IX）

ロンディニウム襲撃の翌日。捕虜となった反乱軍はパーシヴァルの命令の元、一人残さず女王軍へ引き渡された。女王軍が円卓軍という反乱分子を前にして何もなかったのは、モルガンが厳命していたからに他ならない。そうでなければ一緒に連行していた、とは隊長を務めていた妖精騎士の談。

一夜経って元気を取り戻したアルトリアは、ロンディニウムの住民達を励ましながら復興作業を手伝っていた。人的被害は殆ど無いが、城壁等是一部が崩れてしまっていたので、魔術で修復して回っていた。

それも一段落ついた頃、彼女の元にガレスがやってきた。

「お疲れ様です、アルトリアさん」

「ありがとうございます。ガレスも後始末ご苦労様」

そう言い合ったものの、ガレスの浮かべる表情はどこか固かった。

「……えっと、どうしたの？」

「——アルトリアさん、お話があります。鐘つき堂へ一緒に来てもらえませんか？」

「……分かった」

並々ならぬ覚悟を決めた騎士の言葉に、予言の子は話の内容をなんとなく察した。

普段なら誰かしらがいる鐘つき堂を改造した司令部には誰もいない。前もって人払いを済ませておいたのだろう。

最上部の鐘楼に二人は並ぶ。そこからは、ガレスが堰を切ったように話し出した。

「私、全部思い出しちゃいました。自分が何者だったのか」

「ガレス……」

「その名前良いでしょう？私も気に入ってました！」

でも、私の本当の名前はエインセル。もう誰もいなくなった、鏡の氏族の長です」

アルトリアは僅かな間だけ一緒に旅をした、呑気な亡霊の姿を頭に浮かべた。

「ミラー……」

「会っていましたか。私の代わりにあの地に残ってくれていた、優しい子でした。」

……本当は、みんな守ってあげたかったです。皆が死んじやう未来を変えたかったけれど、何もできなかった」

「……………」

「次代で騎士になったのも、それが理由です。」

アルトリアさんはエインセルの最期の予言は受け取ってますよね？」

「うん……それで、ロンディニウムに？」

「はい。私が見た未来では、この場所は燃え尽きる筈でした。あの場に残っていたみんな、何もかもが。」

——でも、見てください!!」

ガレスは嬉しそうに鐘楼からロンディニウムを一望する。人が生きていた。人と妖精の営みが生きていた。

自分が守りたかったものが、取りこぼす事無く残っていた。

「アルトリアさんとコバヤシさんが守ってくれました！貴女達は見事、私の予言を覆してくれたのです！」

「……ちよつと待って!?!なんでコバヤシの名前を知ってるの!?!」

「えへへ、実は教えてもらっちゃったんです。アルトリアさんとお話する前に、みんなにお別れを言ってきたので」

「……お別れって、やっぱり……」

「——はい。最後の巡礼の鐘は、私自身です」

アルトリアの表情が落ち込んだ。

「そんな顔をしないでください。アルトリアさんは笑った顔の方が可愛いですよ」

「……無理だよ。だって、友達がいなくなっちゃうのに」

「……そうですね、すみません。でも、そんなに悲しまないで欲しいんです。」

私は本当ならとっくに死んじやっている身ですから。ミラーがメツセンジャーになってくれたから、少しだけ自分の目標の為に生きられたんです」

「ガレス……」

「それに私、とっても嬉しいんです！アルトリアさんとコバヤシさんが、私の予言とは違う未来を見せてくれた事！もつと良い未来を掴みとれるんだって、貴女達が証明してくれたんです！」

ガレスは心の底から笑っていた。もう思い残す事がないと言っているように。アルトリアの妖精眼にも、その喜びは痛いほどに伝わってきた。

「本音を言えば、最後までお供したかったですけど。きっとそれは私の役目ではないのでしょうか。」

アルトリアさん。どうかお元気で！

もし次代のガレスが現れる事があれば、仲良くして頂けると嬉しいです！」

「……喜んで！ありがとう、ロンディニウムの誇り高き騎士ガレス。貴女の想いは私が引き継ぎます」

ガレスの体が光の粒子となり、別の形に再構成されてゆく。

光が消えたそこには、釣り下がる巡礼の鐘と、主を失った鎧が静かに置かれていた。

僅かな間、顔を伏せていたアルトリアは意を決して巡礼の鐘を鳴らし始める。

「……もう少し一緒にいたかったなあ……」

お互いを知るには短い時間だった。友達だと思っていたけれど、もつと良い友達になれるかもしれないなかった。

好きな人がいなくなるのは嫌だ。

たとえそれが運命に定められた道であっても、アルトリアはどうしても割り切れなかった。

「パーシヴァルさん。ガレスの鎧、預かっていてもらえますか？」

巡礼の儀を終えたアルトリアが、ガレスの遺した鎧を受け渡す。

パーシヴァルは戸惑いながらも、それをしっかりと受け取った。

「……よろしいのですか？」

「この鎧はガレスに贈られたものです。もしも、この鎧を着るに相応しい騎士が現れたのなら、その子に贈ってあげてください。

そのほうが、きっとガレスも喜びます」

「大役ですね。ですが、承りました」

約束を交わし終わったところで、異邦の魔術師が合流した。

「ガレスは逝ったか……」

「はい、これで巡礼の旅は終わりました。私達もここを去ります。パーシヴァル団長、ロンディニウムの皆さんも、どうかお元気で」
「ええ、そちらも。このような情勢ですが、ロンディニウムはお二人をいつでも歓迎致します」

「……いずれ、また会おう。ここを見られて良かったよ」

ロンディニウムの住民達に見送られながら、予言の子一行は砦を後にする。

「そういえば、ガレスに本当の名前教えたんだってね」

「そうしても良いと思える相手だから、そうしたまでだ」

『魔術師さん、少しの間でしたがご一緒出来て光栄でした！アルトリアさんの事をお願いしますー！』

『急に何を……いや、待て。まさかお前……』

『……ご想像の通りです。私はこれから、アルトリアさんにお力添えをして参ります』

『いいのか、お前、アルトリアの友人だろう……』

『良いんです。貴方達は私が見た未来より、良い未来を勝ち取りました。』

これは、この後に勝つためにきつと必要になります。分かるんです、何となくですけど……』

『……そうか。それなら、最後に俺の名を教えよう』

『え、宜しいんですか!?実はずっと気になっていました!!』

正体を教えた時は良いリアクションをしていたと、コバヤシは笑いを噛み殺した。アルトリアも嬉しそうに、微かに寂しそうに笑った。酸いも甘いも飲み込んだ巡礼の旅は終わりを告げた。アルトリアの成長限界は最大まで解放されている。

さて、魔界に帰ろうとコバヤシが連絡を取ろうとすると、アルトリアがそれに待ったをかけた。

「待つて。まだ終わってないよ」

「はあ?」

「私が遣わされた場所、^{アヴァロン}楽園への道が開かれました。私の使命、その根源を見に行きましょう」

「いや、お前のレベルキャップは解放されたんだし、もう良いだろう」
「良くないよ」

いつになく強気なアルトリアは、矢継ぎ早に言葉を紡ぐ。

「このブリテンを救うためには、創成期からの正確な情報が必要な筈です」

「それは、まあそうだが」

「モルガン陛下もブリテンに残された情報から、限りなく正解に近い答えを導いていると思います。」

でも、実物に勝る情報はありません。99%であつても100%ではないんです」

「……言ってるけどさあ」

「コバヤシだつて、不安要素は出来る限り消しておきたいでしょう? 最後までキツチリ詰めておかないと」

アルトリアの言い分は正論だつた。

今後の為にも、把握している情報を確実なものにしたいのは確かだ。

「湖水地方の龍骸の沼へ飛びましょう。そこがアヴァロンへの入り口になります」

「お前、そんな知識どこから……?」

「巡礼の鐘を鳴らす度に、ちよつとずつ頭の中に入ってきたの。思い出してきたって表現の方がしっくりくるけどね」

「ふうん……」

「コバヤシ、お願いできますか？」

「……………ここまで来たら、行くところまで行ってみるか」

「そうでないと！」

アルトリアは笑顔で体に飛びついた。

巡礼の鐘を全部鳴らした影響か、敬語が混じる話し方にやり辛さを感じながら、コバヤシはアルトリアを抱えてアルビオンの骸へと飛んで行った。

湖水地方の龍骸の沼に着いた二人は、冠位の肩書を持つ魔術師と出会った。

『やあ、こんにちは。想像以上に巡礼の旅が手早く終わってしまって、慌てて出てきた案内人のマーリンお兄さんだ』

「……………あなたが、魔術師マーリン？」

『その声の君は予言の子かな？ごめんね、ここにある私は単なる幻で、声しか聞こえないのさ』

「——そうですか。私は予言の子、アルトリア・キャスター。もう一人の異邦の魔術師、コバヤシと共にアヴァロンへ向かうためにやってきました」

『いやはや、妖精國大統領と一緒に……。私はてっきり、カルデアの彼等と来ると思っていたんだけどなあ』

「カルデアでなくて悪かったな。……………というか、お前カルデアと面識があるのか？」

『まあね。中々美しいものを見させてもらっているよ』

白い服装に身を包む夢魔の魔術師は、アヴァロンへの入り口を開い

た。

『巡礼の旅を終わらせた楽園の妖精は星の内海へと還る。これはそこへの道になる霊洞の入り口さ』

「マーリン。俺達はこのブリテンの創成期の話を聞きたいんだが……」

『そうなのかい？なら安心したまえ、星の内海に到着するまでに全てを話そう』

「罪なき者のみ通るがいい……これが、楽園への通り道……」

「……………それ、俺は通れないんじゃないのか？」

「うー……平気じゃないかな。」

だつてほら、今のコバヤシは転生して罪はリセットされてるし。巡礼の旅の合間でも殺しはしてないからオツケーだよ」

「そんなんでいいのか……」

『なんだか凄い会話が聞こえたなあ』

二人が入り口に足を踏み入れると、モルガンの水鏡とは異なる感覚の転移が行われた。

何も見えない、立っている感触も無い、暗黒の世界に放り出された二人。繋いでいた手の感触が、これが現実だというのを訴えていた。

マーリンが魔術で明かりを点けると、水晶のように光る鉱石でできた洞窟が顔を覗かせた。

「どうだい？これなら洞窟って感じがするだろう？私の凄さに感謝してくれても構わないよ！」

「……………どうもありがとう」

なんかマーリンが小さな四足歩行の動物に変化していたが、二人は黙っておいた。

霊洞の中を進んで行くと、二人はロンディニウムで見かけた壁画を見つけた。

マーリンによると、それは巫女の記憶が映し出されたものらしい。

「これが、始まりの記憶なのか……嫌な予感しかしないな……」

「マーリン、聞かせてくれますか。全ての始まりの話を」

「ああ、勿論だとも。星の内海までは一時間ほどかかる。この異聞帯の出来た経緯と、楽園の妖精の具体的な使命が何なのかを、ね」

それいじょうむかしはないほどの、それはむかしのお話です。

ろくにんの妖精がそとにでると、せかいは海になっていました。

“かわいそうなことを”

“こんなせかいになってしまって”

海のなかから、おおきなかげがたちあがりました。

ふわふわ、ふさふさの大きなからだ。

その肩には、いなくなつたはずの動物ひとり。

ろくにんは神さまともだちになりました。

なにもない海はつまらなくて、すみずらくて、たいへんなものですが、

神さまが波をせきとめてくれるので、ろくにんはらくちんです。

“波の無い海も良いけど”

“ぼくたちやっぱり大地が恋しい！”

ろくにんは神さまによろこびをささげました。

ろくにんは神さまにおねがいをささげました。

ろくにんは 神さま をささげました。

ねがいはかなえられました。
おまつりはおわりました。

だまされて どの お酒 を のんだので 神さま は しに
ました。

ろくにんは 神さまのしたい をてにいれました。
あたらしいだいちにするのです。

のこされてなきさけぶ動物もたいせつにつかいました。
たったひとりのにんげんなので。たったひとつではたりないので。
ばらばらに。ばらばらに。

しないようにばらばらに。

なにをしてもぜったいにしないように。まほうをかけてたいせ
つにります。

こうしてブリテンはできたのです。
こうしてあやまちはじまったのです。

はじまりのろくにんにすくいあれ。
はじまりのろくにんにのろいあれ。

「あ、ああ」

アルトリアの呼吸がおぼつかなくなっていた。始祖たる六人の妖精が犯した、余りにも罪深いあやまち。

創成期から現代まで続いている、神の巫女への筆舌に尽くしがたい残酷な仕打ち。

妖精眼で見えていた嵐の正体が、どうしようもなく救い難いものと知って、彼女の宝石のような瞳から輝きが失われていった。

「……………あの大穴にあるのは、その神の死体か」

「その通り。あの場所はケルヌンノスの墓所であり、このブリテン島に溢れている呪いはケルヌンノスの怒りだ。

巨大な神の遺体を浮かべれば、海の上の小さな島くらいにはなると考えたんだろうね。今あるブリテン島は、ケルヌンノスの骸を土台にして生まれた土地なのさ」

「……………モルガンが言っていた。あの大穴の底には、ブリテンの妖精が近づきたがらない何かがあると。

自分一人では底まで調べに行けなかったから現実ではなかったが、残された文献などからケルヌンノスだとはおおよそ把握していたらしい。

……………正直、外れていて欲しかったけどな畜生め……………」

心構えはあった。最悪な予想は立てられていたからだ。それでも、僅かでも救いの有る過去が欲しかった。

こんな大きく膨れ上がった罪を清算する為の使命が、モルガンやアルトリアの背に乗せられているとは考えたくもなかったのだ。

しかし、現実是非情であった。この世界の妖精なんてこんなものだと理解していたコバヤシでも辟易としていた。

——死ぬ。始まりのろくにんマジで死ぬ。救いじゃなくて報いを受ける。

こんなありきたりな悪態を心の中で呟くくらい、苛立ちが募ってい

た。

「14000年前、地表に降りてきた巨人セファールを倒すための武器を造る筈だった六人は、”今回くらいはサボっても良いんじゃない?”と仕事をサボってしまった。」

その結果、セファールに対抗する手段が存在しなくなり、地上の文明は滅んでしまったんだ」

「何だってそんな連中に武器の製造を任せた!？」

「そりゃ、彼等以外に造れる者がいなかったからね。彼等は亜鈴と呼ばれていて、星の内海で生まれた特別に強大な存在なんだ。星に対する脅威に対抗できる神造兵器は、星の内海でしか造られない。地上でポンポン造られても大変だろう?。」

「ぐ……」

確かにそうだ。そんな物が量産されれば、セファールが来る以前に地上が火の海になっていただろう。天使も悪魔も人間も、一度タガが外れてしまえば妖精と変わらないのだから。

「獣神ケルヌンノスとその巫女は、海しかなかった地上に出てきた六人に罰を与える為に、楽園から遣わされたのさ。」

彼等も最初はケルヌンノスに感謝を捧げていたが、いくら経っても海は海のまま、恋しい大地は現れない。

彼等はそれをケルヌンノスの力不足のせいだと思い込んだ。一緒に付いてきた巫女も、自分達に一々小言ばかり言ってきて気に入らなかつたんだらうね」

「何でだ」

分かっていてもついで言及せずにはいられなかった。自分勝手にも程がある。

「相手は神様だから容易には殺せない。そこで妖精達は、ケルヌンノ

スを自分達の祭神にすると行って祭りを開いた」

「……ああうん、分かるわ。そこで毒酒を飲ませたんだろう」

「そう。祭神として奉られるのは喜ばしい事だし、妖精達もやっと反省したと思っただらうね。巫女は止めたけど、ケルヌノスは宴を受け入れて殺された」

「……………最悪じゃねえか」

「……………その、残った巫女はどうなったんですか」

「彼女はのちの人間の基礎……いや、素として分割して妖精達が使用した。不老不死の魔法をかけられてね。ブリテン異聞帯の人間は、そこから生み出された劣化コピーなのさ」

「最悪じゃねえか!!!」

信心深さとは無縁の魔王ですら叫ぶ所業であった。それはつまり、永遠に死ねない生き地獄を今も味わっているという事だ。

なんでこんなモン放置しやがったとモルガンに問いただしたい所だったが、トネリコが派遣されたのはこの始まりから8000年後である。既に人間がいるのが妖精達の生活で当たり前となっていて、それを取り上げるのはいくらトネリコでも不可能だったのだろう。

それに巫女に魔法をかけたのは亜鈴と呼ばれる、最上位の精霊に匹敵する権能を持つ種族だ。いかに最高レベルの魔術師だったモルガンでも、この魔法を解くには力不足であった。

「亜鈴である六人は自分の仔を増やしていった。生活は豊かになったが、1000年目を迎えて上手くはいかなくなった。」

生み出した妖精が、何の前触れもなく死んでいったんだ」

「……………それは、どうして?」

「ケルヌノスの怒りさ。魂は既に消滅していたが、その遺体には怒りと呪いの炎が燻っている。」

それに気付いた六人は逃げ出した。妖精の遺体は土や岩や倒木になった。それらは言ってしまう星の素材だ。それが積み重なって広がっていったのが今のブリテン島なんだ」

「……………なら。ならあれは大穴じゃなくて、干上がった海の底……？」

「そういう事になるかな」
「……………」

ケルヌノスの大穴の深さは、これまでに重ねた罪の深さと犯し続けた年月を否応なく突き付けていた。

暗い顔で俯いているアルトリアの背中にコバヤシは触れる。顔を見上げたアルトリアは、引きつった笑顔を浮かべた。自分は平気だと装おうと、無理をしている表情だった。

魔王は何も言わなかった。ただ黙って楽園の妖精の背を撫で続けた。

「全ての始まりは聖剣が造られなかった事だ。この過ちを正すために、星の内海から選ばれた妖精が地上に送られた。

一人目は君達も知っているだろう。ヴィヴィアン……君達にとつてのモルガンだ。

そして二人目は君だ、キャスター。

楽園の妖精の使命とは、六つの氏族に過ちを認めさせて、聖剣を作り出す事だ。六つの鐘を全て鳴らした妖精は、聖剣そのものになる」

霊洞を抜けた先には、絶花魔界に負けない程の穏やかな世界が広がっていた。

大地に敷き詰められた花園が温かい風に揺られていて、澄み切った水が流れる小川のせせらぎの音が、ささくれだった心を癒していく。

穏やかな空気を胸いっぱい吸い込んだアルトリアは、少し持ち直したように思える。

……もう、いいんじゃないのか

「アルトリア。知りたい事も知れたし、見たいモンも見れた。そろそろ帰らないか」

「え、来たばかりだよ？それにほら、まだ行ってない場所があるじゃない」

アルトリアが指差したのは、マーリンが言っていた選定の場。あの場所で聖剣が造られる予定だったという。

「聖剣を鍛えるための鍛冶場なんて、滅多に見れるものじゃないよ！私行ってみたい！ね、良いでしょ？」

「いや、お前な……」

「巡礼の旅を頑張ったご褒美として！おねがい！！」
「ぐ、ぬ……」

上目づかいでおねだりしてくるアルトリアに対して、強く出られない俺がいた。

普段、周りの空気を読んで自分の気持ちを押し殺している傾向のあるアルトリアが、こうも強情に頼み込んでくるのは初めてだ。

無理やりにも連れ帰った方が良いのは分かっている。……分かっているが。

「………見る、ただだぞ。見たらすぐ帰るからな」

「わーい、やったー!!」

結局、押し負けてしまった。こちらの葛藤を知ってか知らずか、無邪気にぴよんぴよん跳ねているアルトリア。

……目を離さないようにしなければ。

「彼女に甘いんだねえ、君」

「うるせえ!!……俺が甘やかさなきや、誰がアイツに……」

柔らかな笑みを浮かべるマーリンに余計な事を口走りそうになった。人ごとみたいに言いやがって。モルガンが毛嫌いするのも分かる気がする。

「とはいえ、見学だけという訳にはいかないね。選定の場に行くまでに、簡単な障害が設置されている。楽園の妖精のこれまでの人生、冷たく厳しい『冬』から始まって、楽しく温かい『春』で終わる、ちよつとした旅さ」

「絶対に碌でもねえじゃねえかよ!!ふぎけやがってやってやるよ!!」

コイツの冬の記憶とか氷河期レベルだろ。ここは楽園のはずなのに、どんな嫌がらせだ。

道を進んだアルトリアの姿が消え、代わりにモースのような化け物が現れた。

「う、げ……!!」

悪意に敏感なればこそ、これを相手にするのは些かキツイ。自分に向けられた感情^もではないというのに、此方の精神を嫌でも汚染してきやがる。

冬の記憶は始まりの記憶。

今よりずっと小さいアルトリアが、アレに晒されていたと思うと――

「――真魔大次元斬――!!!」

一刀両断……では倒せなかった。しぶとく残ったそれが、醜い感情を押し付けてくる。

——『虐待』『嘘』『迫害』『差別』

アルトリアには全て見えていた。逃げ場のない中で生きていた。胸の中で黒い感情が渦巻いているのを感じる。それを吐き出すように、剣に斬撃を乗せて飛ばした。

「——あれ、どこいったの？いきなり消えちゃったから……って何この有様は!？」

「ははは、彼がちよつと張り切ってしまったね」

「……………お前こそ平気なのか。なんならもう止めても——」

「ぜんぜんへつちやら！私は戦わなくてもいいみたいだし！それじゃ、次にレッツゴー!!」

「お、おい…………」

そう言つて、アルトリアはさっさと行つて消えてしまった。

「なに、そう心配しなくても大丈夫さ。一番辛いのは冬の記憶だからね。これから試練は軽くなつていくよ」

そして現れたモースもどきの群れ。

武器を弓に切り替えて、悪感情の群れを撃ち抜いた。

しかし一度では仕留めきれず、消え損なつた連中が攻撃してきた。

——『虐待』『嘘』『偏見』『迫害』『差別』

……………。

「増えてるじゃねえかよ…………」

マーリンの野郎…………いやティンタジュールの連中か。マーリンの表情も心なしか固くなつていた。

力づくで消しても解決しない問題に直面して、思わず無言になってしまう。そもそも、過去など変えられない。これはあくまで、記憶なのだから。

「コバヤシのお蔭でサクサク進めるね！これならすぐに終わりそう！」

「倒すのに時間はかからないけどな……少しは休ませてくれよ」

「ガッツだよコバヤシ！ほら、辛い記憶は早く終わらせて、早く楽しい記憶に行きたいもん！」

「……そうか、そうだな」

ヤケクソになっている訳でもないようだ。確かに、そう考えれば急ぐ理由も分からないでもない。

夏の記憶に出てきたのは、やたらデカイモースもどきだった。

——『虐待』『飼育』『嘘』『偏見』

——『犠牲』『迫害』『嘲笑』『差別』

——『腐敗』『隠蔽』『娯楽』

……………。

「……キツいなあ……」

一番辛い記憶が冬とか嘘だろ。進むほどに悪感情増えていったんだが？

まあ、マーリンのせいではないのだが。

巨大な敵らしく、相応にタフであったが倒せた。

「いよいよ春の記憶！春っていうくらいだから、楽しい記憶がつまっ

ているはず！

「ここも障害が出てくるみたいだけど、もう瞬殺しちゃってね！」

「おう、任せておけ」

それでも。嬉しそうなアルトリアを見ていれば、急いで片づけた甲斐はあっただろう。

少し浮かれているアルトリアが消え、何が出てきてもいいように剣を抜いた。

「なに、そう身構える事もないさ。春の記憶は本人にとって、楽しかった出来事だけで構成されるからね。」

出てくるとしたら……そうだね、綺麗に着飾った彼女自身が、巨大なご馳走に違いない」

「そんなモン出てきたとして、どうしろと……それよりマーリン、ようやく余裕出来たから聞いておくれが」

しんどい敵ばかりで、少し時間が欲しかったのだが。こここの障害は優しいようだし、いいタイミングだった。

「もし仮に聖剣を造ったなら、アルトリアはどうなる？」

「その口ぶりだと、薄々予想はついているのかな？」

なら結論から言おうか。聖剣の概念が確立したなら、それと引き換えに彼女は消える」

やっぱりか。

「君は反対なんだろう。でも、この役目は彼女にしか務まらない。」

誰でも良いというワケではない。彼女の全てを材料にして、聖剣は生まれるんだ。犠牲ではなく、あくまで等価交換だというのを分かっ
て欲しい」

「……」

マーリンの言わんとする事は分かる。
納得なんて出来やしないが、理解だけはできた。
その上で言わせてもらおう。

「マーリン、俺には生贄と何が違うのか、全く分からん」

生まれながらに自分以外の誰かに生き方を決められ、救った國で過
ごす事無く消えていく。

感謝されるだろう。尊敬もされるだろう。

自分にはできないと誰もが諦めるような苦行なのだろう。

だが、楽園の妖精の使命は、結局のところ尻拭いだ。得られて然る
べき幸福すら取り上げられ、誰かの失敗を取り戻す為に人生を捧げ
る。

それが終わればさようなら。こんな役目に意義を見出せという方
がどうかしている。

「君は頑固だね……」

「どうとでも言え。欠陥だらけの救済システムをゴリ押ししやがって
……せめて褒美くらいは用意するべきだろうが」

「耳が痛い話だね……とはいえ、巡礼の旅をここまで続けてきたのな
ら、彼女も覚悟はしてたんじゃないかな。

使命を果たせば命を終える。それだけは、最初から知らされていた
筈だからね」

「そうなのか……」

「今なんて言った？最初から？」

感情が、これ以上なくくらいに大きく振れ動いたのを感じた。
少し呼吸が荒れている。

「おや、キャスターは君に言っていなかったのかい？」

「……聞いて、ない」

視界が揺れる。平静が崩れていく。

何で黙っていた、とか。大事な事は早く言え、とか。

そんなのはどうでもよかった。

ずっと見ていたのに、気づけなかった。

生き物はいずれ死ぬ。怪我であったり、あるいは寿命が尽きて。

それは避けられない定めだ。

だが、自分が死ぬのを普段から頭の中に入れている者などいるものか。

生まれてからずっと死を前提にして生きているなど、そんな残酷な生き方があるものか。

……魔界で転生しても、アルトリアは楽園の妖精である事を変えられない。

魔王や勇者は何度転生しても同じ存在のままであるように、魂が強靱ならば他の種族に変わる事は出来ないのだ。

バーゲストは厄災を抑えこめる程に強くなれたが、厄災そのものを取り除くのは不可能だった。

……ならば、アルトリアは。

「……………あ」

苦しんで、いたのか。

飯を口いっぱい詰めて笑っていた時も。

安物のアクセサリを手にして、笑っていた時も。

辛口のカレーに涙目になっていた時も。

からかわれて騒いでいた時も。

友達が出来た時も。

眠っていた時も。

ずっと。ずっと。ずっと――

「……………え、あれ？みんな？」

アルトリアが戻ってきた。

戻って――

「――」

何も出ないまま試練は終わった。

もう俺の頭は限界だった。

息も止まっていたかもしれない。

あどけない顔で近寄って来るアルトリアから、目が離せなかった。

「今回はあつという間に終わったね。楽勝だった？」

「……………ああ。特に大した事の無い敵だつ……………た……………——あ」

考えが纏まらないうちに返事をしたのが失敗だった。

咄嗟に口から出たでまかせを、アルトリアの妖精眼が見抜いた。

アルトリアの目が丸くなり、そして幼さが残る顔が泣きそうに歪められた。

「……………そっか」

その一言は、どんな罵詈雑言よりも俺の心を抉った。

「うん、私の方もすぐに終わったし！今回は簡単だったね！

もう障害も無いし、早く選定の場を見に行こう！おー！」

ころりと表情を変えたアルトリアは、踵を返して走っていった。

嘘なのは分かっていただろうに、それに触れもせずに笑顔を作ってみせた。

一番辛いのは自分だろうに、他人を気遣う優しさを忘れない子だ。

咄嗟にその背中に手を伸ばしたが、その先が続かず、握り拳を作つて腕を下ろした。

「君の感情は把握できる。でも君の責任では無いよ。彼女にとつても

——」
「マーリン。頼むから。少し黙っててくれ」

「……………先に選定の場へ行っているよ。落ち着いたら来るといい」

マーリンもいなくなり、この場に残されたのは俺一人。

花の絨毯の上に胡坐をかいた。穏やかな空を眺めていても、ちつとも気分は晴れなかった。

「……大間抜けもいい所だ。

すまん、ペペロン。お前の忠告、守れなかったよ……」

少し前に自分達を慮った伯爵の姿を思い出した。期待を裏切ったという重苦しい感情が、俺が立ち上がるのを許さなかった。

アルトリア・キャスターの冒険（X）

いつまでも後悔してはいられない。魔王は再び立ち上がって選定の場へ進んだ。

中へ一步入ると、アヴァロンの空とは違う星空が彼等を見下ろしている。

数えきれないほどの星の光が集まり、選定の場の灯火となっていた。

中央の空間に立ち昇る白い光の柱。

楽園の妖精が還る宙ソラの炉なか。

聖剣を造る鉄火場。

一足先に来て、それを目に焼き付けていたアルトリアの隣にコバヤシはやってきた。

「ここが、私の還るべき場所なんだね」

「本来ならな」

「コバヤシ、連れてきてくれてありがとう。」

生まれてから辛い事ばかりだったけど、自分の生まれ故郷ってやっぱり気になるから」

「俺にはその感覚は分からんがな……」

魔界に来るまでの記憶がゴツソリ抜けているコバヤシにとって、帰郷について思うところは少ない。

それこそ、どこであっても故郷になり得ると考えている男だ。

「ねえ、コバヤシ」

「なんだ？」

「——エクスカリバー、欲しくない？」

アルトリアの碧眼がコバヤシを射抜いた。

真剣な眼差しは、嘘は言わないでと物語っていた。

コバヤシもまた、視線を合わせて答える。
自分の本心を隠すことなく吐き出した。

「そりや欲しいさ。エクスカリバーがあれば、色々とスムーズに事が運べるからな」

「……そっか」

「でも要らん。お前と引き換えにしてまで欲しくも無い」

「……そっかあ……」

アルトリアの引き締められていた相好がふにやりと崩れた。

「じゃあ、帰ろっか！マーリン、ありがとうね！」

そう言つて、アルトリアは選定の場から出ていった。

残されたコバヤシは少しの間あっけに取られ、事態を見守っていた
マーリンに視線を向けた。

マーリンは肩を竦める。

「私はあくまで案内人さ。君達の選択を尊重しよう。ほら、早く追いかけた方がいいんじゃないかな？」

なにか煮え切らない感情を残しながらも、コバヤシはアルトリアを追うために選定の場を後にした。

両手を広げて花園を駆けるアルトリア・キャスターは、追いかけてきた男に振り向いた。

「おい、いつまでもはしゃいでないで帰るぞ」
「あのさ、コバヤシ」

楽園の妖精は花のように笑う。

「最後まで一緒に来てくれてありがとうね」

「どうした、改まって」

「そういえば、言っけなかったなって」

「そうかい。……気は済んだだろ？魔界へ帰ろう」

「うん」

アルトリアは手を差し伸べ、「あっ」という声と一緒に引つ込めた。

「おい……」

「えへへ、ごめん。もういつこ言っけなかった事があったから」

「今かよ……分かったから早く言え」

「うん」

アルトリアは両手を後ろに組んで、コバヤシを見上げた。

「あの時、私なんかを拾ってくれてありがとう。」

春の記憶には無かったけど、魔界の暮らしが楽しかったのは本当だからね。

今の私があるのは貴方のおかげ。

ありがとうございます、私の魔王様。

——私。コバヤシの事、大好きっ!!」

大きな声でアルトリアは叫んだ。

風に舞い散る花吹雪の中で、アルトリアの屈託ない笑顔が輝いた。

コバヤシは目を見開き、硬直した。

——二人の間に流れる一陣の風。

——花びらの波の中に、アルトリア・キャスターの姿が掻き消えた。

(げん、じゅつ)

一拍置いて花園が爆ぜた。

幻の景色を振り払い、彼が跳んだ先は選定の場。

先程よりも強い光が漏れだしているその中に、コバヤシは一秒にも満たない間に飛び込んだ。

新たな入り口と化した破壊痕に立つ男。

気の毒そうな表情のマーリンと、炉の前に横たわるヤドリギの杖が視界に入った。

葛藤は無い。

躊躇いも無い。

己の取るべき行動など決まっている。

一片の迷いすら切り捨てた魔界の魔王は、星影の川の中へ飛び込んだ。

『マーリン、コバヤシに幻術をかけてください。普段なら見破られるだろうけど、心が弱っている今なら少しは効くでしょう』

『それは構わないけれど……いいのかい？』

『いいんです。こうしないと、何が何でも阻止されるでしょうから』

ごめんなさい。大恩ある貴方を裏切るような真似をして。

でも、最後で最後のわがままなんだし、許してくれるよね？
使命に殉ずるなんて私にはできません。

人間も妖精も、ブリテンも使命も全部イヤでした。

……それでも。

それでも、こうして旅をしてみると。

好きになれる人や、好きになれる場所があつて。

もつたいなあ、と思つてしまうのです。

かつて、優しい國を作ろうとしていた救世主トネリコ。

今は女王になったその人が残した優しさがどこかに残つていて、無くしたくないと願つてしまいました。

コバヤシ達が汎人類史からブリテンを奪おうとしている企みは、初めはチンプンカンプンでしたが、巡礼の鐘を鳴らしていくにつれて分かつてきました。

異聞帯ブリテンを魔界の一部へ書き換えてしまおうという、途方もないスケールの泥棒です。

ぶつ飛んでいるにも程があります。ドン引きです。

……まあでも、二人が笑つていられるなら、それでもいいかと思つてしまうのです。

でも、その企みには穴がありました。

聖剣エクスカリバーが、この異聞帯ブリテンには存在しません。

魔界の一部だつたと誤認させるには、同名の魔界の武器とブリテン異聞帯の武器が必要です。

そして、異聞帯ブリテンが生まれる歴史のターニングポイントであるエクスカリバーは、名実ともに最も影響力のある武器なのです。

他の影響力のある異聞帯の武器と汎人類史の武器は、名前は同じだけれど別物です。バゲ子のガラティーンは角だし、メリュジーヌのアロンドイトは龍の牙です。

これでは、繋がりがちよつと弱いのです。

汎人類史と異聞帯と魔界の同名武器。

この条件を満たすのはエクスカリバーが一番でした。

私も気づけたのは偶然です。この身が聖剣に近づいていくにつれて、分かつてきたのです。

モルガン陛下は既に使命を放棄しているから、この違和感に気付かなかつたのかもしれませんが。

勿論、エクスカリバーが生まれればこの異聞帯は消滅してしまうけれど、14000年も続いた歴史はすぐには無くなりません。

魔界っていう外の世界からの勢力も干渉してるから、すぐに無かったことにはならない！……と、思います。

コバヤシに言わなかったのは、この事を話して折角のアイデアを駄目にしたくなかったし、私の頭の出来だと代案も出なかったから。

……それに、もし万が一にでもモルガン陛下が、自分がエクスカリバーになる！なんて言い出すのが嫌だったから。

だって、あの人はずっと頑張ってきたんだもん。

それなのに、まだ働けなんていうのは、ちよつとどうかと思うのです。

『……………ああ。特に大した事の無い敵だつ……………た……………あ』

——実はこの時、悲しかったけどちよつぱり嬉しかったのです。

コバヤシは割とハツキリ物を言うけれど。

誰かの為に優しい嘘を吐ける人だって知れたから。

『そりゃ欲しいさ。エクスカリバーがあれば、色々とスムーズに事が運べるからな』

『でも要らん。お前と引き換えにしてまで欲しくも無い』

——幻の私に答えていたコバヤシの言葉、とっても嬉しかった。

コバヤシは誰にでも優しい人ではないけれど。

誰かに優しく出来る人だってハツキリ分かったから。

「——それにほら、聖剣を振るう魔王って最高にカッコいいじゃん！」

私という聖剣を、彼はきつと大事にしてくれる。

そんな確信があったから、私はこの身を差し出せました。

本来の役目とは違う理由でここまで来たけれど、別に良いよね？

だって、私の人生なんだし！

——光の中で、私の指先が溶けていく。
一際強い輝きに近づいていくにつれて、私の輪郭が無くなり、次に記憶が消える。

最後にはじぶんが無くなっていくのだろう。

……いいよ。

わたしのぜんぶをあげる。

だから、あの人達に。

最高の剣を——

「——間に合ったア!!!!」
「ぐええっ!?!?」

両手を広げて自分を差し出そうとしていたアルトリア。

その首根つこを掴んで強引に引き戻したコバヤシ。
潰れたカエルのような声を出した彼女は、一瞬抗議の視線を向け
て、それどころではないのに気が付いた。

「コ、コバヤシ!?なんで!?!」

「おま、ゲホツ、アル、何でも、何も、ゴホツ……勝手に、事、しやがっ
て……!?!」

「コバヤシ!!体が!体が燃えてるから!?!」

星の炉心の中は、それに相応しい熱流が渦巻く場所であった。

如何に魔王といえども、レベル1まで弱体化した状態で惑星のエネ
ルギーをその身で受ければ、ただでは済まない。

膨大に蓄えたHPが削られているのを肌で感じる。長居はできな
い。

「いい、から、戻れっ……!?!」

「む、無理だよもう!?!それに、ブリテンをどうにかするには、エクスカ
リバーがいるの!?!」

「……ああ、クソ……それでお前……!?!」

「私はいいから!?!コバヤシは、モルガンを助けてあげてよ!?!」

身を焼き尽くす光の中、二人は向かい合う。

自分の為に炎に包まれている男を見て、少女は笑顔を作った。

「私は、大丈夫だからっ。コバヤシなら、聖剣わたしを大事にしてくれるって
思ってるから!?!」

「……」

「だから、戻って??!私の本当に最後のわがまま、聞いてくれるよね??!」
「……………」

男はそれに答えなかった。

指先から光になり始めている少女を見つめる。
自分よりも小さくてか弱い少女の肩に手を置いた。

「そうじゃ、ないだろ……」

「え……？」

「わがままっていうのはよ……もっと、自分本位で考えろ！」

お前、まだやりたい事あるだろ!!」

「……そんな事」

アルトリアは俯いた。

コバヤシは構わず続けた。

今までの旅の中、アルトリアが見せた本心を並びたてた。

「鍛冶場があれば、そこに出ずっぱりだったじゃねえか」

「あ……」

「好きなんだろう、鍛冶屋？」

「……うん」

「俺の知らない、お前の根底に願いがあるだろう。蓋をしている大切な思い出が。」

楽園の妖精の記憶なんてくれてやれ。

だが、アルトリア・キャスターは俺が貰う」

「……コバヤシ」

「何がしたい？言ってみな」

「私、は——」

閉じていた記憶の箱を開いた。

つらいつらい村での記憶の奥底に、輝き続ける星があった。

届け物を渡しに行った岬の小屋。

そこで出会った厳つい鍛冶師のおじいさん。

おっかない妖精だったけれど、少しだけ自分を守ってくれた。

何度も鍛冶場にやってきた自分を、手伝いに来いと言って受け入れ

てくれた。

そうしておじいさんの助手をやっていて、ある日に色とりどりの星を見た。

「——私ね、髪飾りが欲しいんだ」

お祭りの為に沢山作っていた宝飾具^{かみかざり}。

知らず知らずのうちに手を止めて、それを眺めていた自分。

見かねたおじいさんが、お手本に一つくれると言ってくれて。

誤差の範囲、なんて言ってたけど、おじいさんは失敗作なんて作らないから。

とつても嬉しかったけれど、選定の杖みたいに取り上げられたくないから。

おじいさんの優しさに感謝して、諦めた。

「前に言ったでしょ？村の近くの鍛冶場にお手伝いに行ってたって」

「その時のか」

「うん。鍛冶師のおじいさんは安物だ、なんて言ってたけどさ。」

カラフルで、お星さまみたいに輝いてたんだ。

その時は断っちゃったんだけど。いつか旅に出て、お金を貯めて、お客さんとして、買いたいなあ……って……！」

口に出して初めて自覚した自分の願い。

それはきつと、なんら特別でもない普通の事だったけど。

私はそんな普通が欲しかったんだ。

「……………やだあ…………」

一度堰を切って、零れだした思いが止まらない。

口は悪いけど私を気にかけてくれていたバーヴァン・シーと、もつと仲良くなりたいたい。

苦手なバゲ子とだって、もつと良い関係になれるかもしれない。もつと、もつと……生きていたい。

「やだ、やだあ……私、まだ消えたくないよ……!」
死にたくない……ここで、終わりたくない……!!」

しがみついた手の先が、光になっていく。
零れた涙が、光になっていく。

自分から飛び込んだのに、今更恐くなって。必死になって抱き着いた。

じぶんがじぶんでなくなっていくのが、とても、こわい。

「やだあ、やだよお……!もつと、みんなと一緒にいたいよお……!!
助けて……助けてコバヤシい……!!」

泣き言を言う私を、コバヤシはしっかり抱き寄せてくれて。
彼は片方の腕を高く掲げた。

「俺は、お前らに魔界の色んな事を教えたな」

「コバヤシ……?」

「なら、その逆もアリだよな?」

私のぼやけた視界に入ったのは、彼が掲げた手の甲に浮かんできた赤い紋章。

……どこかで見た事がある。

あれは……そう、モルガン陛下が国民に刻んでいるアレに似ていた。

あれは、確か――

「――令呪を持って命ずる!出番だ、来い村正ア!!」

——時は予言の子一行がソールズベリーにいた頃まで遡る。

モルガンに呼び出されたコバヤシは、キャメロットの城に水鏡で現れた。

魔王を出迎えるモルガンと妖精騎士二人。

そして、魔術で拘束されている赤毛の男だった。

「襲撃者が出たと聞かされて、来てみれば……なんだコイツは」

「異星の神の使徒です。私の首を狙いに来たようで」

「魔界で強化されていない妖精騎士では手も足も出ず、私が迎撃致しました」

「一応聞いておく。怪我はあるか？」

「一撃で昏倒させたので、怪我は最小限で済みました。情報を聞き出さねばなりませんから」

「違う。お前らの怪我だ」

「……へ、平気です」

「ならいい」

よくやった、とバーゲストの顎をコバヤシは撫でた。こうするとやけに喜ぶのだ。

赤面しながらうつとりするバーゲストに、女二人が嫉妬の視線を送った。

「しっかし、國の要の王都にたった一人で攻め込むとはな。覚悟決まってるな、この兄……ちゃん……？」

……あれ……兄ちゃんかコイツ……？肉体の若さの割に、雰囲気はやたら爺臭いような……」

「おう、爺で悪かったな！……というか、一目見ただけで分かるのかい、アンタ」

「肉体と年齢は比例しねえよ。なんせこの瑞々しい女王だって数千歳だからな」

「我が夫」

「事実だろうが」

いかに感情が擦り切れたとはいえ、触れてほしくない部分はある。憤りから少し悲しい目をしたモルガンを見て、コバヤシは自分の非を認めて詫びを入れた。

「ああ、もう。悪かったよ。そんな顔しないでくれ」

「許します。さて、異星の神の使徒よ。貴様の名と目的を話してもらおう」

「テメーに先に言っておくぞ、素直に話した方が身のためだから。私、口を割らせるいろいろな方法、知ってるんだから☆」

バーヴァン・シーの脅しに屈した訳ではないのだろうが、赤毛の男は観念して溜息を吐いた。

「ハア、こんな化け物揃いの場所だなんて聞いてねえぞ……」

儂^{オレ}は千子村正だ。異星の神サマからの命令でな、ブリテン異聞帯の王を始末しに来たワケよ」

「……名前からしてブリテンの関係者じゃないよな？」

「時代どころか国すら異なるかと」

「アンタ、見た目は人間のようなだが、人類史を知らねえのかい？」

「事情があつてな、汎人類史の事はそこまで詳しく分らん。」

使徒つて事は、サーヴァントみたいなモンか。ここに送り込まれたなら、正体は暗殺者か何かか？」

「違エ。儂^{オレ}は単なる鍛冶師だよ。まあ、異星の神にちよいと霊基をいじられてはいるがな」

それを聞いたコバヤシは、何か残念な者を見る目で千子村正を見た。

正確には、村正を送り込んだ者に対しての落胆の目だった。

「……異星の神って阿保なのか？魔改造されてるからって、ただの鍛冶師を一人で王城に攻め込ませるって、戦法としてどうなのよ……」
「仕方ねエだろ。他の連中は手が離せねえ。一人は連絡が取れねえしな」

「異星の神って人望無いのか？」

千子村正は沈黙して視線を逸らした。それが答えだった。

「ブリテンは予定にない成長をしているんだとき。それで急遽、オレに呼びがかかったんだろうよ。

……実際にや、成長なんて生温いもんじゃなかったけどな!!」

「俺に当たるんじゃねえよ。……異星の神か、モルガン——」

「既にこの男と異星の神とのパスを利用し、逆探知を仕掛けています。

メリユジーヌに先行させて、魔界調査団を派遣済みです。異星の神の居所を把握するのも時間の問題でしょう」

「流石、仕事が早いな」

「……お、おい。今なんて……」

「俺の女王に手を出して、タダで済ませる訳ねエだろうが。お前の派遣は宣戦布告と受け取った。

——虎の子の戦闘部隊も出撃させる。準備が整い次第、異星の神を殺しに行くぞ」

殺気駄々洩れの魔王を見て、女王と妖精騎士も戦意満々でニヤリと笑う。傍にいた千子村正は顔を引きつらせた。

測り知れない魔力を保有した化け物が、大挙して異星の神の根城へ押し寄せようとしていた。

「で、コバヤシ。こいつどうすんの?」

「……うーん……」

「こうなったからにや、逃げも隠れもしねエよ。一思いに殺せ」

村正は抵抗を諦めた。実力差が違い過ぎて、一か八かの勝負すらも狙えない。

「鍛冶師、鍛冶師かあ……ウチの魔界に鍛冶師なんていないからなあ……お前、ウチ来ない?」

「……………ああ?」

コバヤシは悩んでいた。

バーヴァン・シーが自分の為にヒールをプレゼントしてくれてから、自作のアイテムというのに興味があつた。

魔界にあるのはローゼンクイーン商会のみ。鍛冶場なんてものは無い。

一から作れる自分の武器とか、憧れるじゃん?

でも鍛冶師なんて育成出来ないじゃん?

なら、どこかから連れてくればいいじゃん?

目の前に良いのがあるじゃん!!

「待て、コバヤシ!この男は陛下のお命を狙った輩なのだぞ?!いくら貴方とはいえ、このような者を魔界に入れるなど……!」

「うん。お前の気持ちはよーく分かる」

反対意見を口に出すバーゲストの肩を、コバヤシは優しく叩いた。

「俺達反乱軍が戦っていた、ロスト軍の事は話したよな?」

「ええ。あらゆる魔界を自分達の食い物にしてきた、卑劣極まりない連中です」

「そう。そしてそのロスト軍のトップと幹部二人が、今は反乱軍にいるワケだ。

それに比べりゃ、たかが暗殺に失敗した鍛冶師一人を仲間にするくらい、大した事ないだろう?」

「それ言われると何も言えませんが!!でもコバヤシ、それは感覚が麻痺しているのでは!」

バーゲストは頭を抱えた。個人の事情とか、修羅悪魔の襲来とかで、なんやかんやで生き残っていたロスト軍のトップ達を仲間に引き入れたとは聞いていたが。

おかしいだろ反乱軍。どれだけ懐が深いんだ反乱軍。

コバヤシだって、最大の被害者であるキリアやウサリアが認めなければ、反乱軍への参加など認めなかっただろう。

「異星の神とかいう奴の所にいるより、こっちの方が楽しいぜ。働其次第だが、給料はこんな感じで」

「おい、働はまだ何も言ってねえぞ……」

「地球にいたんじや触れない鉄も武器もあるぞ。お前、触ってみたくない?」

「……………ほ、ほう…………?」

ピクリと反応を示した村正を見逃さず、コバヤシは畳みかけた。相手の弱い部分につけこむ、悪魔的手腕で村正を懐柔していく。

元より異星の神とは仕事関係でしかなく、忠誠を誓ってはいない村正。無茶振りされて取っ捕まった挙句に、相手側から好条件で雇うと言われれば揺らぐのも無理はない。

「お前さんが本気なのは分かった。だが、既にこのカラダは異星の神と契約した身だ。こっちが一方的に切れるもんじゃねえ」

「モルガン、契約奪えるか?」

「当然です」

ふんす、と得意げに胸を張るモルガン。ガチガチに警備が固められているであろう玉座に、鍛冶師一人を暗殺に送るような間抜けに遅れを取る要因など一つも無い。

即答してみせたモルガンを見て、降参だと村正は両手を挙げた。

「こりや負けだな。異星の神サンには悪いが、儂オレアこつちに付くぜ」
「心配するな、異星の神とお前は二度と会わねえからな」

「では契約させましょう。異星の神との契約は、居場所が判明してから消しておきます」

「頼んだ」

「……んな事まで出来んのか……おつかねえ……」

令呪の一面が宙ソラへ放たれる。魔力の道を辿って星の炉心に現れたのは、着物を羽織った赤毛の男。

「ようやく出番かい……って熱いな!?!どこに呼び出してんでえ!?!」

「星の内海の鍛冶場だよ」

「なんだそりゃ!?!」

びっくり仰天。目を丸くした鍛冶師は、自分呼び出したマスターにしがみつく少女を見て目を細めた。

そして、悪くない、と笑みを浮かべる。

「——へえ。ベソかいた童女の為に竈に飛び込むたあ、良い根性してるじゃねえか。」

ちつとばかり見直したぜ、マスター!」

「御託は良い！お前、聖剣打てるか!？」

「あたぼうよ。定めを切り業を切り、刀に捧げた我が人生。千子村正、ここにあり、つてな！」

魔界鍛冶師の初仕事、しかとその目に収めておきな!!」

槌を片手に炉心へ歩く赤毛の鍛冶師。

普通なら近づくだけで灰になる熱流に晒されながらも、男の不敵な笑みは崩れない。

光の中心部へ槌を振り下ろす。

光の粒子が火花のように散った。

「成程な、星の炉心なだけはあらア。元の霊基のままだったら、この手を何度か振るえば丸ごと燃え尽きてただろうさ。

あのよく分かんねエ特訓にも意味があつたな！確かに熱いが、こんぐれえなら耐えられる!!」

魔界で強化された霊基は、炉心の熱量をも耐え抜く頑強さを持ち合わせていた。

景気よく、力強い音が星の炉へ響く。

「マスター！令呪をもう一画寄越しな！ちよいと鉄が足りてねえ！」

「オーケー、いくらでも持っていけ」

もう一画の令呪の魔力が村正へ注ぎ込まれる。

ありったけの魔力を槌に込め、聖剣へ叩き込んだ。

「——おし、いけるいける！大きあびすだ、がつつり鍛えてやろうじやねえか!!」

やる気も増した村正が、一心不乱に槌を振るう。

鉄と鉄がぶつかり合う鍛錬の場で、一人の鍛冶師の仕事を見守る男

と少女。

「———すげえ」

感嘆として、男は呟いた。

無数の武器は持っていて、武器を造るのを見るのは初めてだった。

「見ろよ、アルトリア。凄いぞ、これ」

「——うん。すごいね——」

子供のように夢中になっている男の瞳に映る、鍛冶の光の無数の火花。

まるでキラキラの星空のようで、少女の瞳は引き込まれていた。

三人だけの空間に響き渡る奇跡の音。

それはやがて、終わりを迎える。

「——出来たぜ、持っついていきな」

村正から差し出された、光の長剣。

神造兵装エクスカリバー。

受け取った時のずっしりとした重量感に、コバヤシは満足そうに頷いた。

「お疲れさん。いい仕事だったぜ」

「そりや良かった。んじゃ、儂オレは一足先に戻ってるぜ」

「あ、あの！ありがとう、村正さん！」

「礼はいらねえよ。儂オレは仕事をしただけだ」

「じゃ、じゃあ！報酬！私からも、ちゃんと報酬は払うからね！」

「………そうかい。まあ、期待しないで待っとくぜ」

最後の令呪を使用して、村正は魔界へと帰っていった。
アルトリアは、右手で聖剣を持って眺めているコバヤシの左手を握った。

コバヤシは視線を向けなかったが、その手を握り返す。
たったそれだけで、アルトリアは嬉しさで胸がいっぱいになった。

アルトリア・キャスターの冒険（終）

「光が止まって出てきたと思ったら……どうなっているんだい？」

聖剣は君の手にある。そしてキャスターも君の手にある。

……いやいや、おかしいだろう。等価交換だつて言つたじゃないか!?なんで両方持つて帰つてこれたんだい!?

星の炉心の中で何が起きたのか、私に教えてくれ……ぐはっ!?

「うるせえ」

「マーリン……」

聖剣を懐にしまったコバヤシは、置いてあつたヤドリギの杖で詰め寄つてきたマーリンを殴つて黙らせた。

幻覚を見せたのは自分で頼んだ事なので罪悪感が湧いたアルトリアは、コバヤシの手をくいつと引いた。

「あんまり怒らないであげて。あれは私が頼んだの。マーリンは私のお願いを聞いてくれただけだから」

「いや、別にそれはいい。俺はモルガンと違ってコイツに恨みは無い。

ただうるさかつたから殴つた」

「扱いが酷くないかい!？」

「黙れロクデナシ。……モルガンがお前の事を嫌うワケだよ。

昔、アルトリアに魔術を教えたのはお前だろうに。どうしてそれを炉にくべる選択が出来るかね……」

じろり、心底理解できないという目をする男に対し、花の魔術師の態度は不自然だった。

「……魔術?……はて?」

とぼけた様子も無く、本気で覚えが無さそうに首を傾げたマーリンに、コバヤシは彼に向けた目を逸らして伏せた。

「——いや、何でもない。」

さつきも言ったが、俺はお前に恨みとかは無いんだ。俺にはな」

彼の言葉に含まれたニュアンスから、嫌な予感を感じる。

アルトリアの手を引くコバヤシは、選定の場の外へ出る直前でマーリンを手招きした。

「老婆心ながら言っておく。その性格直さないと、この先ロクな目に遭わんぞ」

「……………えっ、なにあれ」

アヴァロンの宙^{ソラ}の彼方から飛んでくる魔力をアルトリアは感じた。煌めく黄金と白銀の光が、螺旋を描いた矛先を楽園へ向けている。天を見上げて落ちてくる星を見たマーリンの表情は引きつっていた。

「あ、あれは君か!?!君がやったのか!?!」

あれは最果て^{ロンゴミニアド}の槍じゃないか!?!どうして楽園に撃てるんだ……と
いうか、なんでそんなに離れてるんだい!?!」

コバヤシはアルトリアを連れてマーリンから距離を取っていた。
コバヤシは呆れた表情で語りだす。

「キヤメロットの城壁に装備されてるアレ。ロンゴミニアドな。他の
異聞帯の攻撃にも使えるらしいんだわ。」

「ただそれには、砲撃する場所の正確な座標がいるんだ。適当に空に撃つたところで、宇宙の彼方に消えるだけだしな」

「いや、アヴァロンはそもそも星の中にあるんだけどね？地上の砲台が地下を攻撃できるっておかしくないかい？」

「まあな。ただそれらを可能にする術がある。」

「誘導させるのさ。ビーコンを持った奴を狙いたい場所に送り込めば、ロンゴミニアドはその信号が発信されている場所に向かって落ちる。」

「位置が分かっていたら、水鏡を通して余計な被害を出さずに狙えるんだよ」

「アルトリアもマーリンも、コバヤシの言っている理屈は理解できた。」

「しかし、それには誰かがそのビーコンを持っていなければならぬ。」

「魔術によって仕掛けられた誘導装置など、誰かが持っていれば分かるだろう。」

「いや、ずっと疑問だったんだよねえ」

「え？」

「旅に出る前に、どうしてアイツがいきなりあんな事をしたのか」

「な、何を言っているんだい？」

「マーリン。お前、本つつつ当にモルガンから嫌われてんのな」

コバヤシは口を開けて、思いっきり舌を出して見せびらかした。

その場所には、青く光る紋章が刻まれていた。

「そ、それはモルガンの魔術刻印!?!よりもよってそんなところに!」

「驚き慌てふためくマーリンの叫びによって、アルトリアの脳裏に電撃が走る。」

「——あつ」

アルトリアの記憶が呼び起された。あの時は突然の衝撃で固まっていたけれど、見たものはしつかりと記憶に残っている。

『……んっ……』

『……おまじないをかけました。我が夫が無事に帰って来られるように』

「あの時か————?!?!?!」

旅に出る前の二人の接吻の時に仕込んでいたらしい。

体内に仕込まれた魔術の刻印は、本人の魔力量の高さに加え、モルガンの隠蔽工作により他者から発見されないように徹底されていたのだ。

アルトリアは戦慄した。あの短い時間のキスで、舌まで突っ込んでいたモルガンのキステクやベえ、と。

「ここにいるのは本物のお前じゃないんだろうが……あのモルガンの事だ。それも織り込み済みの砲弾でも詰めてるんだろうよ」

「ひゃあ……!?!」

繋いでいた手を引っ張り上げられ、抱き抱えられたアルトリアは思わず声を上げた。

「じゃあな。せいぜい惨たらしく苦しんでくれ。そうすりやアイツの溜飲も数十年分は下がるだろうよ」

そう言つて二人はアヴァロンから飛び去った。後には強張った表情のマーリンだけが残される。

彼は諦めたように深々と息を吐いた。

「……ま、仕方がないか。なに、これくらいの罰なら受けるとも」

そう独り言を呟いたマーリンは空を見上げた。

——楽園を狙う流星が群れを成していた。

「……………え、ちよ、こんなに来るの!? いやこれは流石に想定がぎやあああああああああああああ!??!?!」

着弾したお仕置きロンゴミニアドの爆風に、マーリンは断末魔と共に飲み込まれる。暫くの間、アヴァロンには光の槍が情け容赦なく叩きこまれるのであった。

霊洞を超高速で上がるアルトリアは、しがみついたコバヤシの背の後ろから迫りくる炎に目を見開いた。

「コッ、コバヤシ……!!爆炎が!爆炎がこっちに来るよ!」

「どんだけハッスルしてんだあの女……」

今の俺、レベル1で出力下がってるの忘れてるんじゃないだろうな……。アルトリア、補助かけてくれ。このままだと巻き込まれそうだ」

「ふざけるなよあの年増!!」

折角助かったのに、味方の誤爆で死にたくはない。思わず罵倒したアルトリアはコバヤシの身体能力を上げる魔術をかけた。

加速が増して炎を引きはがしていく。目に入る風景が全て線にな

る世界で、アルトリアは自分の故郷に別れを告げた。

「……さようなら。楽園は綺麗な場所だったけれど……それでも私は、みんなと一緒に生きていきます。」

——だって、そつちのが楽しいもん！食べ物も美味しいし！旅だつてもつと行きたい！」

「どうした急に……」

「決意表明！コバヤシ、これからもよろしくね！」

「はいはい……」

霊洞を抜け、ブリテンの空へ帰ってきた予言の子一行。

巡礼の旅は、今ここに終わりを告げた。

「そういえば、さ」

「ん？」

「幻の私、外で何て言ってたの？」

地面へ降りたアルトリアは、疑問に思っていた事を訊いてみた。選定の場での話は聞こえていたが、外に出てからは自分は聞いていなかったのだ。

少しワクワクしながら聞いてきたアルトリアに、コバヤシはなんてことない事のように告げる。

「俺の事が好きだったさ」

アルトリアは石になった。

思いを告げられた彼からすれば、あれは幻だった為に今更揺さぶられはしないが、とんでもない台詞を偽物に吐かれた本物は話が別だ。妖精眼判定シロを確認。そしてフリーズ。使命を終えて高性能になった頭脳が情報の整理を始め、しかし感情は処理が追い付いていなかった。

次第に熱暴走が起り始め、全身が燃え出したように熱くなる。

「ノ、ノーカウント!!」

「え」

「あれは幻影だから！マーリンだからノーカン!!いいね?!」

「アツハイ」

うがー!!と爆発したアルトリアは目の端に涙を浮かべながら叫んだ。

おのれマーリン。この恨み晴らさないでおけようか。あの夢魔を殺す魔術を編み出すと密かに決めたアルトリアだった。

「それじゃあ、旅も終わった事だし……いい加減帰るか」

「あ……ちよつと待って。最後に行きたい場所があるの」

ようやく帰れると思った矢先、アルトリアに引き止められコバヤシは流石にうんざりした顔をした。

それに苦笑を返すアルトリア。少し申し訳ないとは思ったが、彼女も最後のケジメをつけたかったのだ。

「——ティンタジェル。潮騒のティンタジェルへ連れて行って。会いたい人がいるの」

かつて、アルトリアを拾った村ティンタジェル。

お世辞にも裕福とは言えなかったその村は、アルトリアと共に流れ着いた財宝を売って生計を立てていた。

だからだろうか。

「……村が」

「こりゃあ……」

転移した二人が目にしたものは、村だった場所の成れの果て。

焼け落ちた家屋が野ざらしにされており、妖精一人残っていない有様だ。

良い思い出が無い場所とはいえ、育った村の変わりようにアルトリアは言葉を失っていた。

「……エクター!!」

我に返ったアルトリアは、友人の名前を叫んで走り出した。目指した先は、村からそう離れていない岬に建つ一軒家。

一目散へ玄関にたどり着いた少女は、友の名前を呼びながら激しくドアを叩き続けた。

「エクター、エクター居る!?居るよね!?居るなら開けてよ!!」

ドアを壊しかねない力でノックするアルトリアを止めるべきか悩んだコバヤシだったが、耐久力が限界を迎える前にドアが開いた。

「ええいやかましい!!どこの妖精だ、こんな辺鄙な場所に——」

「エクター!!」

顔を出したのは、煤で黒く汚れた髪と立派な髭を蓄えた土の氏族。

怒りの形相はアルトリアを目にして驚きに変わり、髪の毛で隠れていない片側の目が見開かれた。

友人の無事を確認したアルトリアは、ほっと息を吐いて碧眼を潤ませた。

「……エクター、ただいま。私——」

少女が言い切る前に、ドアが勢いよく閉められる。

「……ワシは、お前のことなど知らん！人違いだ、帰れ!!」

ドアで隔たれた向こう側でそう言われ、物音が家の奥へ遠ざかっていく。

予想外の事態に固まったアルトリアは、言い放たれた言葉にトドメを刺されて失意に暮れる。

——なんてことはなく。

「……ちよつ、どういうつもりだコラー!!人が心配して来てあげたのに!!私のこと知らないとか、すぐバレる嘘吐くなよエクター!もう一度、私の前で言ってみろよコラー!!」

扉を力任せに引き千切る暴挙に出たアルトリア。コバヤシが驚いたのを後目にして屋内に突撃していく。

家の奥から野太い声の悲鳴が上がったのが聞こえて、コバヤシも遠慮がちに家の中へあがりこんだのであった。

「……………なんか、悪かったな爺さん。ウチのアルトリアが……………」

「ふん、あの子は昔から猪だ。もう慣れた。それより、ウチのと言ったが、村の連中からあの子を買い取ったのはお前さんか？」

「ああ、そうだよ」

「……………そうか」

簡素ながら頑丈な作りの机と椅子に、男二人が顔を突き合わせて座っていた。

扉を壊した魔猪の氏族は、工具を持たされて直してこいと尻を蹴られた。自業自得である。

「あの村の連中はどうしたんだよ。……………まさかと思うが、自滅した？」
「……………分かっていたのか？」

「マジかよ当たり前かよ……………。まあ、もしかしたらそうなるかも、くらいには考えていたが」

エクターによれば、アルトリアを売った代金を取り合って殺し合いに発展したようだった。初めは平等に取り分けていたようであったが、生活に困窮していた妖精達は、自分はアルトリアの面倒をよく見ていたのだから、その分自分の取り分を増やせとトラブルになったらしい。

コバヤシも最悪のパターンとして予測はしていたが、金を払う立場の自分が村の財政事情まで知るかと考えるのを止めていた。それでしつかり自滅しているのだから、流石の彼も失笑するしかなかった。

「結局、滅びるべくして滅んだだけだ。そんな連中の話はいい。それより爺さん、アンタどうしてアルトリアを遠ざけようとした？」

「……………ふん。ようやく静かになったというのに、更に面倒事なぞ抱えたくもなかったただけだ。今も昔も、あの子には迷惑ばかりかけられるんだ」

そう言い捨てたエクターであったが、コバヤシにはその言葉が嘘くさく思えて、思わず鼻で笑った。

「ハッ……嘘を見抜くのは楽園の妖精の特権じゃないんだぜ。爺さん、嘘吐くの慣れてないだろう」

「……………」

「アンタの言葉から悪意を感じない。……言ってみろ。アンタはアルトリアの恩人で、友人だ」

「……恩人、か」

エクターの厳つい顔の眉尻が下がる。

「……………今更、あの子と合わせる顔も無いと思っただけだ」

ぽつり、ぽつりとエクターの口から零れる後悔の言葉。

「アルトリアにはここの鍛冶を手伝わせていた。二日に一度、ここに来ていたあの子がバツタリ来なくなっただけ。村の者には、体調を崩したからだと言われた」

加工した鉄は妖精に悪い影響を与える。楽園の妖精は鉄には強かったが、気分が悪くなるくらいはあるだろうと休ませているつもりでいた。

……ひと月、ふた月と経つにつれて、流石におかしいと隠れて村の様子を見に行ったのだ」

エクターは片手で顔を覆った。コバヤシもまた、同じ光景を見た者としてその気持ちは分かる。

「……ああ、あれが夢ならばどれ程良かったか。年端もいかぬ童女が、鉄の首輪を付けられて作り笑いを浮かべながら、村の中を引き回されていた」

「……………あれを、見たのか」

「お前さんも知っていたか……。本当は、すぐにも連れ出してやりたかった。だが、村の連中はあの子の存在を必死で隠し通そうとしておった。あの子は予言の子ではない、自分達が飼っている単なる馬なのだ。」

だから、あの子を自分達の目の届く場所に置いておこうとしていた。村ぐるみで匿われては、ワシ一人ではどうにもできなかった。

そうして手をこまねいていたら、お前さんがあの子を買い取った。

……あの地獄から、あの子を連れ出してくれたのだ」

俯いたエクターの声は震えていた。机の上で組みなおしていた両手も同じように震えていた。

「あの時、何もしてやれなかったワシが、今更なに言えようか。あの子が心の底で助けを求めていたであろう時に、何もしてやれなかったワシが、何を……」

状況からすれば、安易に手を出してはいけないとエクターも理解していた。

それでも、無理にでも助けに行くべきではなかったかとエクターは後悔の念に蝕まれていた。

……もしも、コバヤシがあの場合に現れなかったら、アルトリアは今頃……。

「——アルトリアは楽園の使命を終わらせた」

「!!」

その言葉に、エクターは弾かれたように顔を上げた。

「アイツはその身を糧に聖剣を造ろうとしていた。俺は、それを止めようとして……アイツの願いを聞いたんだ。」

その時、真つ先に出てきたのがアンタの事だ」

「——な」

「あの時、アルトリア・キャスターを引き止められたのは、間違いなくアンタのお蔭だ、エクター。」

——ありがとうよ、アルトリアをずっと助けてくれて。アンタがいなかったら、きつと止められなかった」

エクターを見る彼の目が、真剣な声音がアルトリアの恩人の心根に染み入った。

何もしてやれなかったのではない。

何も無い、二人で過ごしたありきたりな日常こそが、彼女をアルトリア・キャスターとして留めていたのだと。

「……………そうか」

エクターはやがて、小刻みに体を震わせて背を丸めた。ゴツゴツした大きな手の平を、自分の顔に押し付ける。

「……………そう、か……………!!」

くぐもった声で万感の思いを吐き出した。

コバヤシは席を立ち、海の見える窓を開けた。彼の耳には、寄せては返す波の音しか聞こえなかった。

扉を直して戻ってきたアルトリアは、工房に置かれていた一つの宝飾具かみかざりに目を留めた。

「エクター、あれ……」

彼女が指さした先を見たエクターは、「ああ」と目を細めてそれを手に取った。

「これは、誤差の範囲だったからな。売り物にはならん。欲しければ持っていけ」

——もしかして。あの時からずっと、取っておいてくれたの？

友人が優しい嘘を吐いているのが分かっていたから、アルトリアはその言葉を飲み込んだ。

代わりにポケットから金貨を取り出して、エクターへと差し出した。

「ううん、買うよ。これ、お仕事して貰ったお給料なんだ」

エクターは眉をひそめた。彼としては、彼女にあげるつもりだった物なので、金を取る気は無かったのだろう。

まだ、遠慮しているのだろうか。そんな考えが頭をよぎる。

「売ってやれよ。当たり前のことを、させてやれ」

そう背中を押されてハツとして、改めてアルトリアの顔を見てみれば。

欲しい物を目の前にして、ワクワクして待っている子供がそこにいた。

お金を受け取り、差し出された両手の上に宝飾かみかざり具を置いてやると、アルトリアは飛び跳ねて喜んだ。

そのまま魔王の元へ駆け寄って、「コバヤシ、つけてつけてー」と催促を始める。

彼女の宝物を手にした彼は、金色の髪の一束を手にすくい、星のよ
うな飾りに絡めた。

「ど、どう？ 似合ってる……かな？」

「……良いねえ。似合ってるじゃないか」

「え、えへへ、えへへへ……」

少し頬を朱色に染めて、ふにやりとアルトリアは笑った。幸せそう
な彼女に釣られて、魔王の相好も優し気に緩む。彼が頭や頬を撫でて
やると、彼女はされるがままに身を委ねた。

満足したアルトリアはエクターに礼を言っ、家の外に駆け出して
いった。

「コバヤシ、といったか」

「あん？」

エクターがその名を口にすると、コバヤシは立ち止まった。

「陛下の新たな夫となった男の名だ。妖精國大統領、魔王コバヤシ
……お前さんが、そうなのだな」

「ああ、そうだとも。それが何か？」

「……かつて、ワシとモルガン陛下は同じ道を歩いていた。救世主で
なくなった日から、道は違えてしまったがな」

「……………」

「あの方は、あの日から本当の孤独になってしまった。婚約者と円卓
は殺され、ワシもトトロットもあの方の進む覇道には、最早ついてゆ
けぬ」

「仕方ねえよ。モルガンの願いはそれこそ、自分の生の全てを捧げて
ようやく達成できるかどうか、だからな」

「お前さんは、それを知っていて尚、行くのか」

「ブリテンをくれてやると契約したからな」

「そうか」

エクターの厳つい顔が破顔した。

「安心したよ、陛下の傍に居るのがお前さんで良かった。

あの方にそっくりのあの子が、あんなにも懐いている。きっと陛下も、お前さんに甘えたい筈だ」

「モルガンがねえ……」

「どうか、受け止めてやってくれ。妖精達に疎まれ、嫌われてばかりのあの方とあの子が、心から笑える世界を作ってやってくれ」

「——まあ、出来る限りはやってみよう」

エクターは笑顔のまま頷き、コバヤシはそれを見て立ち去った。

一瞬、魔力が膨らみ消えたのを感じ取り、エクターは椅子に深く腰掛けた。

「我が夫。巡礼の旅、ご苦労様でした」

「おう……」

久しぶりの自室のベッドに倒れ込むコバヤシ。なにやら女の甘い匂いを感じるが、考えない事にした。

アルトリアは外で仲間達に揉みくちやにされている。「コイツ自分から身投げしかけたんだよな」という魔王の告発により、妖精騎士を筆頭にお説教の嵐に晒されている。赤毛の鍛冶師は呆れたように、それを遠目で眺めていた。

それが終われば、彼女の頭についている髪飾りに話題が移ることだろう。

エクターと会った事は話していない。モルガンの優しい笑みが、全て分かっていると語っていたように思えたからだ。

「ストレス発散はできたか？」

「ええ、それはもう」

一番のイイ笑顔である。火力が強すぎるのを注意しようと思っていたが、この顔を見てどうでもよくなったコバヤシであった。

「それにしても、これがエクスカリバーですか……」

机に置かれた剣を見て、モルガンがその刀身を撫でる。

神造兵装エクスカリバー。

アルトリアにもまた、聖剣作成の魔術理論が組み込まれており、魔界の戦力は一段とパワーアップを果たした。

「……さて、モルガン」

「はい、我が夫」

つかの間の休息を経て、コバヤシはモルガンの対面にエクスカリバーを挟んで座る。

「ブリテンに潜んでいる悪意。何者かまでは判断しかなかったが……
確かにいる」

「……やはり」

妖精達は悪行を成せど悪意はない。

だが、コバヤシは時々妖精國に何者かの悪意が混じっているのを感じ取っていた。

——例えば、バーゲストの記憶改竄。

——例えば、やたら攻撃的だったソールズベリーの兵士。
——例えば、アルトリアに接近したマーリンを騙る何者か。

全てが悪意からの行動でないにしろ、何者かの介入を疑っていた。そしてそれは巡礼の旅の中で確信へと至る。

魔界大戦争を生き残った男は、裏工作に関してもそれなりに心得がある。この國を崩そうと企む、裏で蠢く刺客を炙り出す為に旅へ出たのだ。

「情けない話だ、尻尾の一つも掴めないとはな。相手は相当の手練れらしい」

「貴方に責任はありません。全ては監視を怠った我が身にあります」

「……なら、お互い様か。責任云々はいいい。それよりも、汎人類史のブリテンの話を、もっと詳しく教えてもらおうか」

「ブリテンの脅威全てに対策を施すと？」

「正体が絞れない以上、そうするしかない。幸いにも、それに相応しい武器がここにあるからな」

エクスカリバーを眼前に掲げるコバヤシ。モルガンは持ち手に己の手を重ねた。

「間違いから始まり、厄災だらけになった國だが、旅を通じて少しでも好きになれたし、好ましい妖精もいた。

このブリテンが、正史から外れた消えるべき運命にあつたとしても。そこで生まれた以上、滅びに抗う権利は誰にだってある。

……手を貸してやる、なんてもう言わん。共に行くぞ、モルガン」
「——はい。我が身、我が心は、我が夫と共に在ります。いつまでも、どこまでもついていきます」

「阻むものが滅びの運命だろうと、他の世界だろうと……なぎ倒して進んで行くぞ。仮にとはいえ、俺の妻を名乗り上げたんだ。それくらいはやってもらおうぞ」

「覚悟など、とうの昔に決めています。——行きましよう、魔王コバヤシ」

初めてのキスはカレー味

ブリテン異聞帯を我が物にする為の道筋を再確認し、障害を取り除くための奸計を頭の中で構築し始めた魔界の王。アルトリア・キャスターもようやく胸を張って自分の配下だと言えるようになり、切り札たるエクスカリバーも手中に収めた。流れはこちらに向いていると言っただろう。

しかし、大局にばかり目を向けて、目下の問題を見過ごすワケにはいかない。如何に強固に積み重ねようとも、始まりの土台は小さいものだ。小さな虫のひと噛みであっけなく崩れ去ってしまうものなのだから。

「お前、俺がいない間にベッドに入り浸ったりした？」
「え？」

コバヤシが気になったのは、自分の寝具にほんのり染みつけていた女の香り。

不快ではないから別に良いのだが、誰の香りなのかは分からずに気になっていたので。

コバヤシが声をかけたのは、第一容疑者のメリユージュ。変温動物ドラゴの彼女はよく人肌を求めてくっついてきたり、寝床に潜り込む（恋人限定の）癖がある。前科があるので疑ってみたのだが、当の本人は心底不思議そうに首を傾げた。

「君がいないベッドにいてもしようがないじゃないか。僕が愛しいのは君の温もりなんだから」

「ああ、そう……」

気障ったらしい台詞を返されたが、コバヤシはむしろ納得した。最強生物のアルビオン、妖精の國の中で唯一の龍種の彼女は、本質的に寂しがり屋なのだ。温めてもらいたがるのも、寂しさからくる欲求の

表れだ。

「そ・れ・よ・り！コバヤシ、僕との約束忘れてないよね？」

「ああん？」

彼が目を向ければ、少し頬を膨らませたメリユジーヌが前のめりになって訴えかけていた。はて、何の事かと彼女とのやり取りを思い出し始め、思い当たる節を口にした。

「アルトリアと冒険に出る前のアレか？」

「——良かった、覚えていてくれたんだね。まあ、恋人なんだし当然だよね！」

一体いつから恋人になったのか。モルガンは何となく分かるが、メリユジーヌとのやり取りで恋人呼ばわりされるきっかけになる絡みが無く、コバヤシは本気で困惑していた。

だからといって、可憐な顔つきで無邪気に笑う彼女を突き放す気も起きずに、ズルズルと引きずってしまっている現状なのだが。見せかけの愛を無くしたくなくて、その手を血で汚してきたメリユジーヌを振り払う事は、彼にはどうしてもできなかった。

そのうち彼女に背中から刺されるかもしれないが、まあ刺されたくらいじゃ死なないし甘んじて受けてやろうと諦観したところで、メリユジーヌが本題に入る。

「じゃあ、約束通り僕とちゅーしようね！」

——言い方可愛いなコイツ。

それはさておき、接吻である。人間にしては長い年月を生きてきた中で、女性と体を重ねた経験も幾度となくある彼にとって、接吻一つで慌てふためく道理は無かった。

改めてメリユジーヌを見る。期待感が体から溢れ出していて、なぜ

だかキラキラしていた。これもアルビオンの成せる技なのだろうか。

「まあ、約束したしな。じゃ——」

手の甲にでもしてやろうか、という彼の思惑は吹っ飛んだ。

ついでに体も吹っ飛んだ。

制止状態からお互いの体に負荷がかからない程度まで加速したメリュジーヌは、その欲求のままにコバヤシに襲い掛かった。

はしたないと心の片隅で自覚しながらも、両手両足を体に回してガツチリと固定して、自分の唇を相手の唇に押し付けた。

恋人の瑞々しい唇を味わうように、自分の舌を這わせるメリュジーヌは捕食者のそれだった。

最強種たるドラゴンの激しい求愛行動に晒される、か弱い人間。しかし、相手も人間の超越者たる魔王の肩書を冠する者だ。

拘束される前に両腕を引き抜いていた彼は、キスを貪る小さな騎士の背に腕を回し、安心させるようにそつと摩りだした。

やがて、興奮が治まった彼女はバツの悪い表情で離れた。やり過ぎた自覚はあるようだった。

謝罪の言葉を口にしようとしたが、それより早く彼女の頬に手が添えられる。気にしていない、と言外に示されたメリュジーヌは、触れられている手を自分の手で包み込み、自分の頬に押し付けた。

「君の優しさはとても温かいね。ずっと、このままでもいいと望んでしまうよ」

心地良さそうに頬ずりをするメリュジーヌ。十分体温を感じた所で手を放し、可憐な女の顔から凜々しい騎士の顔へと戻った。最後に彼の手を取り、感謝を示すキスをしてその場から離れていった。

さて、メリュジーヌが違うとなると誰だろうか。他の心当たりを探そうと立ち上がると、大きな影が彼の足元に浮かぶ。

そこには夜会のドレス姿のバーゲストが立っていた。何かを期待

しているような、それでいて続けるような視線を魔王へ向けていた。

「……ああ、お前ともするって約束してたもんな」

「っ、はい……。その、してもよろしいでしょうか……？」

「お前が良いなら俺は構わんが……」

メリュジーヌとしたばかりなんだが……と言おうとして、バーゲストはナプキンを取り出してコバヤシの口を拭い始めた。

丁寧。丁寧。

あの女の残痕など僅かにも残しておかないとばかりに、それはもう執拗に丁寧に拭いた。

拭い終わったそれを握りつぶして燃やして処分して、自分の獲物へと狙いを定めるバーゲスト。

「フーツ、フーツ……!!……フウウウウ……!!」

——怖え……。

なんとというか、相手から余裕が消え失せていた。顔を紅潮させ、鼻息荒く迫って来るバーゲストにコバヤシは久方ぶりに危機感を覚える。

それでも、自制心は人一番強い彼女は襲い掛かるような真似はせず、距離を詰めた所で止まった。

前屈みになって彼の顔を両手で掬うように持ち上げ、たまらず相手の唇にむしゃぶりついた。

捕食欲求を誤魔化すためか、甘噛みするように口を動かしてキスを続けるバーゲスト。気品ある女性の香りが魔王の鼻孔をくすぐるが、彼女の匂いもベッドの匂いとは違っていた。

「……………おい、しい……………おいひいつ……………」

恋多き女と揶揄されど、愛しき相手と温もりを分かち合うなどした

ことも無い。そうなる前に、自分が一方的に食べてしまっていた。そんな自分がこうして口付けを交わすなど、少し前までは考えられもしなかった。

口の中に微かに残る男の味が、バーゲストの欲求を満たしていく。知らず知らずのうちに流していた女の涙を、眼前の男はそつと拭いた。

やがて欲求が治まり、口付けを終わらせたバーゲスト。相手の口周りが唾液まみれになっているのに気付き、赤面しながら慌てて拭きだした。

「……満足したか？」

「え、ええ。それはもう……大変おいしゅうございました」

「……なんか恐いんだけど」

「……本当に食べたりは致しませんわ」

「食おうとしたら本気でぶっ飛ばしてやるからな」

脅すように握りこぶしを掲げるコバヤシを見て、バーゲストは逆に安心した。この人なら自分を力づくで止められる。止めてくれる。その容赦の無さが、バーゲストにとっては信頼を寄せる証となっていた。

ひと月にも満たない短い期間だったとはいえ、会えない時間が増えて寂しさを覚えていたのは認めよう。

——なぜだ。

ああ、そうだ。警戒は緩めていた。僅かな残り香を求めて、それで

寂しさを埋めようとしていたのだから。そこに余計な感情を紛れ込ませたくなかったのだ。

——なぜなのだ。

やましい事をしていた自覚は無い。言ってしまうば、ただ匂いを嗅ぎに行っただけだ。私なら、あのベッドで寝た瞬間に彼が私を求めたくなるように、部屋に細工を仕込んでおくなど造作もないが、しなかった。

そう、妻として夫を求めるのは当然の摂理なのだから——

「え？コバヤシのベッドから女の匂いがする？それお母様よ」

——なぜお前はいつもそうなのだ、バーヴァン・シー!!

モルガンは、そう叫び出したい衝動を必死で抑えた。

「へえ、モルガンがねえ……」

「そうそう！あの時のお母様、可愛かったんだから！

コバヤシの名前を呼びながら、足をパタパタさせてさあ！もー、ここ最近のお母様の可愛さがヤバいのよ！他にも……」

「やめろ……やめてくれ……我が娘……!!」

やましい事はしていないが、恥ずかしい事はしていた。

そしてそれを人前で語られるのは羞恥心を酷く煽るのだと、よりもよって愛娘の告白によって知る羽目になるモルガンへいかるくせんさい。

彼女としては、上書きした自分の匂いにコバヤシが気付き、二人きりの時間を過ごせるようにしてくれないかなーという願望もあるに

はあった。

が、特に精密に練られていない作戦は当然のように失敗し、こうして恥を晒してしまっていた。

バーヴァン・シーにモルガンを晒す気持ちなど無い。ただ女のアピールポイントの一つになるであろう可愛さを、モルガンの夫に伝えているだけだ。だからこそ、モルガンもバーヴァン・シーに怒りは抱かない。

ただ、余人が見て可愛いと思える行動が、本人にしてみれば大つぴらにされるのを避ける行動だと理解できていないのだ。

「存外、可愛らしい趣味をお持ちのようで」

かつて自分が言った台詞をニヤつきながら返され、女王はその場に崩れ落ちた。それを見てオロオロするバーヴァン・シーに何でもないと返しながら、目を少し潤ませ、朱色を増した顔色で、下唇を噛みながら魔王を睨む可愛らしい女王がそこにいた。

「ま、ベッドに潜り込むくらい寂しかったんなら、少しは埋め合わせしてやろうかね」

そう言つて、驚きで目をぱちくりさせているモルガンの腰に手を回して、速やかに自室へ連れ込んだ。

ベッドに座り、膝の上にモルガンの頭を乗せる。誰がどう見ても立派な膝枕の体勢だった。

「今日は存分に甘えさせてやろう。サービスで子守歌でも付けてやろうか?」

「私は子供か!?!」

「氷棲族のサブクラスも取ってるから、愛ラブリーソングの歌とか幸せハッピーソングの歌とか歌えるぞ」

「ギャップ……!!」

大の男がそんな可愛らしい歌の提案しないで欲しい。膝枕は素直に嬉しかったモルガンだが、夫婦サービスにしては妻を幼く扱い過ぎではないだろうか。

実の所、コバヤシがモルガンの甘えさせ方を知らないがために、こうして強引になっているのだが。

「(何か違うような……)モルガン。お前、ブリテン以外で欲しい物とかないのか？」

そう問いかけられて、若干夢心地のモルガンは自分の欲求を見つめなおす。この男に何かを求めるとして、自分は何を願うのだろうか？

「……………そういえば。ソールズベリーでアルトリアに手料理を振舞ったそうですね」

「ん？ああ、そうだったな」

宿として借りた酒場でのカレー布教。あれで少しでもカレーの素晴らしさが広まればいいなあ、と口元を緩ませるカレー大好き魔王。

「……………ずるいです」

「え」

「私にも……いえ、私とバーヴァン・シーにも作ってください。夫として、妻と娘に手料理を振舞うのは当然です」

「……………そんなんでいいのか？」

別に一食程度、作ってやるのは構わない。しかし、普段から料理していない自分の手料理で満足するのだろうか。カレー作りにこだわりはあれど、メイド達やバーゲストが作る料理の方が美味いだろうに。

そんなコバヤシの内心を察して、モルガンは枕になっている膝に頭を擦り付けた。

「貴方が作ってくれた料理が食べたい。理由がそれだけでは、いけませんか？」

「いや、いけなくはないが……分かった。じゃあ今夜にでも用意しておこう」

「……ふふ、楽しみにしていますよ」

「喜べ、我が娘よ。今夜、コバヤシが私とお前に手料理を振舞ってくれるぞ」

「え、ホント!?!」

先程そう教えられ、バーヴァン・シーの機嫌は最高潮だった。鼻歌混じりにスキップして、ヒールの音を魔界に響かせている。何か良い事でもあったのかと、悪魔達は彼女に訊いてみた。

「聞いて驚けよザコ共。今夜、コバヤシが私達に料理を作ってくれるってよ!」

「マジツスか!?!」

「凄いツス!」

「まあ、それはそれは」

得意げに語るバーヴァン・シー。悪魔達の驚く顔を見て、更に優越感に浸る彼女は上機嫌のままに立ち去った。

そして、ここから勘違いが始まった。

バーヴァン・シーは私達と言ったが、それは彼女にとって自分とお

母様という意味を示している。しかし、話を聞いた周囲の悪魔からすれば、私達というのは自分達も含めていると思いだんだのだ。

「今日の夕飯は我等が魔王様が作るみたいツス！」

「献立はなんだろうな。きつとカレーだろうなあ」

「寧ろそれ以外ないよね」

「ボクは魔王様のカレー好きだよ！」

「えっ！今夜は好きだけカレー食べて良いんですか!?!」

魔王手ずから夕食を作るといふ話は、狭いミニ魔界の中であつという間に広がった。

厨房で準備していたコバヤシに、彼の配下の悪魔達が次々に声をかける。

「コバヤシ様！今夜の夕食期待してるツスよ！」

「……ん？」

「私の舌に合うものを頼むぞ、我が主君よ」

「魔王様の料理、久しぶりー！」

「プリンも付けてくれると嬉しいなー♪」

「……………んん……………？」

おかしい、いつの間にか魔界全員の分を作る話になっている。コバヤシは訝しんだ。

「お前ら、その話を誰から聞いた？」

「バーヴァン・シー様ツス！」

コバヤシはそれで全てを察した。言葉足らずの母親に悪い所が似たらしい。

「魔王様自らが腕を振るうとは。晩御飯、楽しみにしていますからね」

「いや、それはだな」

「楽しみにしていますから」

「(あつ、これ分かってて言ってるわ)」

院長が薄笑いを浮かべながら、言葉を遮ってくる。配下とはいえ、相手は悪魔。弱みを見せるとしつかりそこを突いてきた。

厄介な事になっていると頭が痛くなったコバヤシであったが。

「まつ、いいか」

あつさり現状を受け入れた。

反乱軍で料理当番を担当する時もあった彼からすれば、ミニ魔界の全員分の食事を用意するなど訳が無い。必要な量と時間を計算しなおし、追加の材料を発注するのであった。

浮ついた空気が広がるミニ魔界に、厨房からスパイスの香りが漂ってくる。カレー専用の調理台には、巨大な寸動鍋がいくつも火にかけてられている。

鍋の中には魔王仕込みのカレーが煮立って湯気を出していた。ぐつぐつという音とスパイシーな香りが食欲を刺激する。

メイドがかき混ぜる鍋の中を覗いたアルトリアが、思わず喉を鳴らした。

「こんなに作ったんだ……気合入ってるね。どういう風の吹き回し？」

「んー……色々あつたんだよ」

「……………あつ(察し)」

妖精眼で事の成り行きを見通したアルトリア。苦勞の絶えない魔王に、聖母のような慈愛の微笑みを向けた。そしてこんもりとご飯を盛られたカレー皿を差し出す。

「鍋ごとに辛さは変えてるんだ。ここは辛口。甘口はあつち」

指さすコバヤシにたいしてアルトリアは少しふくれっ面になる。彼にカレーを注いで欲しかったのだが、そのささやかな企みは崩れてしまったようだ。

カレーの配膳はメイド達に任せているので、どのみち駄目だっただろうが。

「……我が夫」

食事風景を見守っていた魔王の元にモルガンが現れた。背中にはバーヴァン・シーが隠れながら、様子を窺っている。

半眼で彼を見る彼女は、少し憤っているようだ。

「貴方の手料理を堪能できるのは、てっきり私達だけだと思っていました。私の勘違いですか？」

責めるような口調と視線に、コバヤシは嘆息した。

「そうだよ、お前の勘違いだ。俺は最初から全員に振舞うつもりでいたよ（話を合わせろ死ぬ気で話を合わせろお前の娘が伝言ゲーム失敗したんだよごめんなさいお母様されたくないなら言う通りにしろ）」

「そうでしたそういう話でしたねすまないバーヴァン・シー私の勘違いだったさあ我が夫の料理を楽しもう」

「えっ？えっ？」

必殺の妖精眼テレパシーで情報を共有した二人。焦る内心を悟られないよう、努めて冷静に、しかし早口でまくし立てるモルガンに連れられるバーヴァン・シー。

最初はどこかオドオドしていた彼女も、魔王特製のカレーを前にして無邪気に喜んだ。カレーって凄いい。モルガンは改めてそう思った。既に食べ始めている周囲に倣い、手を合わせてからカレーに手をつけ始める。いただきます、と食前の言葉を発したのちに、綺麗に盛りられたカレーライスにスプーンを差し込んだ。

バランス良く掬われたご飯とカレールーはまだ湯気を立てていた。ふー、ふー、と程よく冷ましてから口に運ぶ。舌を刺激する旨味と辛味はブリテンでも妖精國でも馴染みの無いもので、モルガンの瞳は輝きを増していた。

煮込まれて柔らかくなったジャガイモやニンジン、少し力を入れるだけで簡単にほぐれた。固い筈の根菜をこんなにもほくほくに仕上げるとは。小さく分けたそれを食べた彼女の驚きは大きかった。

一口サイズに切り分けられた鶏肉も美味しい。上品さを忘れずに食べ進め、もぐもぐと味を楽しみ続けるモルガン。隣のバーヴァン・シーも、モルガンと同じように綺麗に食べている。親の躰が行き届いている証拠だった。

そうしてカレーが半分ほど消えた皿の上に、魔王からとあるサプリメントが届けられた。

「お前達だけに特別だ」

モルガンの皿に、ジュージューと音を立てて焼けているドラゴンステークが乗せられる。

バーヴァン・シーの皿に、旗を立てられた大きなハンバーグステーキが乗せられる。

コバヤシが自ら焼き上げた、豪勢な肉料理だった。

「上手く焼き上がってりや良いがな……」

食べやすいように切り分けられた一切れのステーキをモルガンは口に運んだ。

肉汁溢れるハンバーグをバーヴァン・シーは頬張った。

二人の顔のほころびが、料理の出来を物語っていた。

「美味しい！美味しいわ！ありがとうコバヤシ！」

「ええ。とても、美味しい……貴方の愛を感じます、我が夫」

「そうかい。そりゃ良かった」

彼の配下や妖精騎士や予言の子の羨望の眼差しに優越感に浸り、モルガンは晚餐を楽しむのであった。

ブリテン対策会議

暗黒議会の会議室を使って行われる、今後の方針及びブリテンを襲う脅威への対処法の確認。

魔王コバヤシと議長を中心に、錚々たる面々が顔を突き合わせる。

妖精國女王モルガン・ル・フェ。

妖精騎士バーゲスト、バーヴァン・シー、メリユジーヌの3名。

楽園の妖精アルトリア・キャスター。

モルガンの子飼いの妖精騎士達。

メイド長などの配下のまとめ役。

屈指の戦闘力を持つ魔界の戦闘部隊。

皆が真剣な空気を纏い、宙に浮くディスプレイの情報を読み込んでいた。

「今後の異聞帯ブリテンの処遇について、改めて確認させて頂きます。

我々の最終的な目的はブリテン島の魔界への併合。太古の神、ケルヌノスの死骸を除去した後に、ミニ魔界から魔槍を撃ち込んで異聞帯ブリテンの成り立ちを改竄し、我々の領土として奪い取ります。間違いはありませんね？」

議長の言葉に妖精國代表のモルガンが深く頷いた。

「獣神ケルヌノスの対処法ですが、コバヤシ様が有識者様と相談するとの事ですので、この場での討論は割愛します」

「アルトリアが楽園の使命を終わらせてエクスカリバーを造ったから、聖剣が造られないという前提で存在していたブリテン異聞帯は緩やかに消滅していくだろう。悠長にはしてられないが、焦る必要も無い。

だが、最初に言っておく。あの獣神の後始末は俺達でも一筋縄ではいかないだろう。どうにも、ただ吹き飛ばせば解決するような障害

じゃないようだ。呪いに詳しい奴等と話し合って、有効な手立てを探しておく。ケルヌノスの対処は最後に回して、総力戦に持ち込みたい。それまでに、他の問題はなるべく解決しておこう」

妖精國側に動揺が広がった。魔界に住む彼らの力を借りて、女王や妖精騎士である自分達も大きく成長した今ならば、さしたる障害も無いだろうと考えていた。悪く言えば、楽観視していたともとれるだろう。

確かに魔界住民の力は異閨帯と比べても圧倒的な高みにあるが、それでも出来ないものは出来ない。一万年以上もの間に積もり積もったケルヌノスの呪詛は、彼等でも容易に触れてはいけない悍ましいモノへと成長してしまっていた。

「二応、それっぽいプランも考えてあるんだが……こればっかりは一度相談してみないと確信が持てないからなあ……」

「魔王コバヤシ。それは妻である私にも教えられませんか？」

「相談相手はお前よりも神様に近い関係にあるからな。まずは上手くいくかどうかを確かめてからだ」

「……分かりました」

不承不承にモルガンが頷いたのを見て、議題は他の脅威についてに移る。

「まずは異星の神についてですね。これに関しては、既にモルガンさんの殺害を企てて刺客をブリテンに送り込まれているので、コバヤシ様の命令により抹殺が決まっています」

「メリユジーヌが潜伏先を見つけて、魔界調査団が敵側の戦力を暴いた。」

「どうも、まともに動ける戦力は異星の神一人だけのようだ。何してるかは知らんが、妙な動きをされる前に始末するぞ」

「異星の神の討伐隊はメリユジーヌさんを尖兵として、彼女に敵の居

城への侵入通路を切り開いてもらいます。そしてコバヤシ様、バーゲストさん、アルトリアさんと戦闘部隊の皆さんによる本隊で殴り込み、異星の神を討伐します」

「僕……ううん、私が一番槍なのね。任せて」

「奴は自分だけの領域を作り出して。そこに潜んでやがるからな。アルビオンの力で通り道を作るのが一番簡単だ」

「久々の本格的な戦闘だ……腕が鳴るぜ」

「今回の敵は神か？我に相応しい相手ではないか」

「ガオーoooooooooo!! (腹いっぱい食ってやる!!)」

「神様のお城……お宝一杯あるかなあ？」

「力いっぱい戦うわよ！おー!!」

魔王コバヤシが自ら育て上げた、戦闘部隊の悪魔や魔物達が昂っている。彼が培った育成のノウハウを叩きこまれ、魔王級の力を手に入れた戦闘部隊はミニ魔界にとっての虎の子だ。

魔王にも匹敵する戦闘力が集まった部隊は、余程の事態でない限りは全員で動かない。それが今回、部隊全員の出撃を命じられている。この問題に対する魔王コバヤシの本気度具合が感じられ、悪魔達もやる気に満ちていた。

「次に、人理継続保障機関カルデアについてです。クリプター、スカンジナビア・ペロンチーノからの情報提供により、彼等の実態が明らかになっていきます。」

現在のカルデアは非戦闘員含めて十数名で構成されており、極めて少人数な状態で運用されています。ですが、彼等の有する守護英霊召喚システム・フェイトにより数多のサーヴァント……使い魔のような存在が認められており、実際の戦力は数値以上だと想定されます。

彼等が剪定した異聞帯の数は計5つ。また、いずれの異聞帯でもカルデアはクリプター、異聞帯の王を戦闘で打ち破っています」

「カルデアは近いうちにこの異聞帯に乗り込んでくるだろう。その時の対処はモルガンに任せる」

「待つて。どうしてカルデアがここに来るの？もうエクスカリバーが製造されたんだから、ブリテン異聞帯は剪定済みなんじゃないの？」

アルトリアが手を挙げて発言する。その指摘に頷く者も何人かいた。

「このブリテン異聞帯は次元断層で覆われていてな、中と外とじゃ時間の流れが違うんだよ。ここの数日が、外にとっては一時間程度らしい。カルデアには未来予測できるシステムもあるらしいが、こつちに起きた変化が外に伝わるまではズレがあるんだ」

「加えて、モルガンさんがギリシャ異聞帯へ放ったロンゴミニアドが、カルデアに目を付けられた可能性があります」

「それは、どうして？」

「彼等もまた異星の神と対立している勢力です。しかし、現在のカルデアに異星の神を倒す手段はありません。故にロンゴミニアドの譲渡をこちらに求める可能性は否定できません」

「異聞帯の王とか倒してる連中だが、相手はその異聞帯を作り出した地球外から来た大将だからな。カルデアが勝てた一因に、人理修復の旅の中で様々な時代や国の英霊と縁を結んだのもあるんだろうが、それが通用しない異星の神相手に出来る事があるとは思えない」

「そっか……ありがとう」

納得したアルトリアは神妙な顔つきで頷いた。

「それで、カルデアへの対処についてだがな。情報元のペペロンとの約束で、まずは対話を試みる。とは言っても、カルデアにブリテンを自由に歩き回らせたくはないから、ブリテンに入ってきたらその瞬間に捕まえてくれ」

「捕獲ですか」

「そう。次元断層に脆い場所があったらどう？カルデアは巨大な航空母艦を保有してるらしいから、そこにそれごと突っ込んでくると思

う。そこで一網打尽にして欲しい。出来るか？」

「当然です。ですが侵入されるタイミングが分からない以上、ロンゴミニアド一基に捕獲用の砲弾を装填した上で、常に起動状態で待機させる必要があります。よろしいですね？」

「ああ、そうしてくれ。バーヴァン・シーはモルガンのフォローを頼む」

「それはいいんだけどさ、そこまで警戒する必要あるの？」

「……というと？」

「だって、カルデアって異星の神以下のザコなんだろ？わざわざお母様が出向く必要、無いんじゃないの？」

「いんや、連中を甘く見るべきじゃないね」

あまり納得のいつていない采配に意見を出したバーヴァン・シーに對して、コバヤシは腕組みをしながら首を横に振った。思ってもみなかった反応に、バーヴァン・シーの興味が向いた。

「へえ、魔王サマがバリバリ警戒してるの？」

「考えてもみるよ。ごく少数で敵地に乗り込んで、敵の大將をきっちり討伐して生き残ってきた奴等だぞ？一度や二度なら運が良かっただけでも受け取れるが、もう既に発生した異聞帯の半分以上を剪定済みときてる。油断できる要素なんて無いだろう」

「……それはそうね」

「いくらサーヴァント召喚システムがあるといったって、カルデアの戦力で異聞帯を相手に正面から戦えるとはとても思えない。十中八九、奴等が得意としてきたのはゲリラ戦だろう」

「そんなに上手くいくものなの？」

「異聞帯だって一枚岩で成り立ってる訳じゃない。この妖精國にだって、モルガンに對抗する勢力がいくつもあつただろう？他の異聞帯にもきつと、異聞帯の王に反抗する勢力が誰かしらいたはずだ。」

カルデアはそいつらを仲間に取り入れるなり、利用するなりして戦力を増強していたに違いない。俺も反乱軍にいたからな。巨大な敵

組織相手にどう立ち回るかはよく知ってる」

100億の軍勢相手に反乱軍の一員として戦っていた彼の経験が、異聞帯でのカルデアの戦い方を推測していた。ロスト軍と敵対していた魔界を助けて回り、戦力として取り込んできたのだ。経験に基づいた推測ならば、説得力も増すというものだ。それに疑問を抱く者はいなかった。

「それに付け加えると、汎人類史の抑止力が異聞帯へ英霊を派遣しています。土地に呼応して関係者が召喚されるのなら、カルデアに協力する為に現地でなにかしらの準備を行っていたとしても不思議ではありません」

「ブリテン異聞帯では人類史が存在しないから、その可能性は無い。と、思いたいがな……。」

なににせよ、カルデアが最も弱いタイミングは現地での縁が何も無い突入直後だ。そこで連中を全員捕まえて、このブリテン異聞帯の成り立ちから現在までの情報を余すことなく与えてやれ。

くれぐれもブリテンに降ろすなよ。元々が移ろいやすい妖精相手に、連中がどんな影響を与えるか想像できん。面倒だろうが、頼んだぞ」

「……コバヤシがそこまで言うなら、やるわよ」

「よし。じゃあ次はこの、奈落の虫だな」

ディスプレイに映し出される、ロンディニウムの壁画。巨大な獣と六人の妖精、その真下に口を開けて吸い込もうとしているような竜のような何か。

「真ん中のデカいのはケルヌノスで、周りのは亜鈴の妖精。そしてそれを丸ごと食おうとしてる下の奴。牙生えてるっぽいし、汎人類史の情報から見て、ブリテンの脅威になるドラゴンという特徴から、こいつは魔竜ヴォーティガンだと予想している」

「位置関係から見ると、ケルヌノスの排除が終わった後に、更に下からこのヴォーティガンが現れると予測されます」

「モルガンが何度か、ブリテンに滅びをもたらすモースの王とかいうのを打ち払ったんだが、ひよつとしたらコイツの関係者かもしれないな」

「だとするならば、地下深くにいる元凶と、ブリテンで飛び回る端末がいるのですね。端末を滅ぼしたとしても、元凶が健在ならば復活は可能なのでしょう」

「問題は、ケルヌノスを対処した後にコイツと戦う元気が残ってるかだな……。ま、どうにかするさ」

「それでは最後に、風の氏族長オーロラについてですね」

その名を聞いて、分かりやすく体を跳ねさせた彼女の騎士メリュジーヌ。どんな裁定を下されるのか、不安になってコバヤシの方を見続けている。

「というか、オーロラもブリテンの脅威扱いなのか……」

「ノクナレアとかボガードとか円卓は、あくまでモルガンを倒そうっただけで、妖精國を滅ぼそうとはしてねえしな。」

「だけどアレは駄目だ。自分が一番になる為なら何でもするぞ。たとえブリテンを滅ぼす一手だろうともな」

「だ、そうだけゼメリュジーヌ？オーロラの騎士なら何とか言ってみるよ？」

「……………否定できない」

「マジかお前…………」

趣味悪く話を振ったバーヴァン・シーだが、メリュジーヌに苦虫を噛みつぶしたような表情で返されて唾然とした。

——コイツにまで愛想尽かされるとか、どんだけだよ。

「オーロラは過去にメリュジーヌを教唆して鏡の氏族を虐殺し、また

ソールズベリーの人間で編成された軍隊が、ロンディニウムの非戦闘員含めた者達を皆殺しにしようとしています。後者は未遂で終わりましたけどね」

悪魔達が揃ってドン引きしていた。自分より目立っているから皆殺しなど、エゴの極みのような理由でこれだけの暴挙を行っているのだ。彼等が把握していないだけで、余罪はもつとあるのだろう。

『え、こんなの騎士とかやってるの?』と、悪魔達から信じられないものを見るような目で見られて、肩身が狭くなるメリュジーヌ。

「……問題は、どちらもオーロラが明確に指示をしていない点です。法に基づいて彼女を罰するのは難しいですね」

モルガンが悩まし気に声を発した。メリュジーヌが妖精騎士として活動しているのも、オーロラの行動に対するお目こぼしを頼んでいるからなのだ。曖昧な罪状でオーロラの処刑は実行できなかつた。

が、そんな彼女の長年の懸念を、コバヤシは一言で吹き飛ばした。

「んなモン監督不行き届きでいいじゃん。どっちもアレの私兵みたいなモンだろう。それが勝手に動いて虐殺なんてしててるんだぞ。アレに全く責任が無いなんて言えるか?」

「それは、そうですね……」

コバヤシは視線をメリュジーヌに向けた。愛想は尽きかけているとはいえ、オーロラが彼女にとって特別な存在なのに変わりはない。少し悲しそうな目をしているメリュジーヌを見て、コバヤシは思わず溜息を吐いた。

「とは言え、だ。仲間の悲しい顔を見るのも本望じゃない。アレは俺達にとってどうしようもない存在だが、未だに慕っている奴が大勢いるのも確かだ。それを殺すのは要らんリスクを生む。」

……………と、いう訳で折衷案として、アレをモルガンの棺に閉じ込めてソールズベリーに飾っておこう」

「『異議なし』」

メリュジーヌはガツクリと項垂れた。現状、それがもつとも温情の有る裁定だと分かっていたからだ。

「(すまない、オーロラ。でも、うん、流石に庇えない)」

どちらかと言えば、自分も裁かれる側なのだ。ここでごねた所で無意味である。

こうして会議は終わり、各々が今後に向けて動いていく事になる。決戦は近い。

苦勞の道を選ぶ理由（ワケ）

自分の魔界をセラお嬢から贈られてから、反乱軍のメンバーへの連絡は最低限にしていた。一人の魔王として、あまり人に頼り過ぎるのは情けないという私情から出た結果だ。今にして思えば、連絡を取るのと頼るのはイコールでないと気付いていない辺り、俺も未熟者だったのだろう。必死に背伸びをしようとしていて、他の仲間達に微笑ましく見守られていたのだろうか。

だとすると、顔から火が出てしまいそうな程に恥ずかしいのだが……。

そんな自分のポリシーを曲げてまで助けを求めた相手は、反乱軍の軍師担当のクリスト。ロスト軍との戦争でも、千里眼による状況把握と優れた知性で作戦立案をこなしており、彼がいなければ反乱軍は途中で瓦解していたかもしれない。

自室のモニター越しの仲間の顔は、前に会った時と変わらず穏やかなものだ。俺が言うのもなんだが、俺が知らないうちに変なトラブルでも起こしていないか少し心配だったのだ。

「心遣いは嬉しいですよ。でも一言言わせてください。どの口が言ってるんですか？」

「ごもつとも……」

そんな旨を彼に伝えれば、眉間を押しさえながらそう返された。

うん、ブリテン異聞帯なんてのに手を出してる俺が言えた義理じゃないよね。

「はあ。貴方からの連絡を受けて、言われた座標を千里眼で覗いてみました。ええ、しっかり確認できましたよ。ブリテン異聞帯でしたっけ？まず最初に訊いてもいいですか？」

……一体全体、何をやらかしたらあれだけ膨大な量の神の呪いを溜めこめるんですか?!?!」

信じられない、とクリストは叫んだ。ここまで激情を見せたのは初めてかもしれない。

俺はクリストに異聞帯の始まりから現在までの出来事を全て説明した。途中で休みたいと弱音を吐いていたが、休んだところで楽にはならんぞ、と教えてやった。

すまん。だがこれもブリテンを手に入れる為だ。仲間のよしみで我慢してくれ。

説明が終わった後、クリストが眼鏡を片手でくいつと掛けなおした。昔から良くやっている癖だ。

「……ええと、間違っている部分があるかもしれない、というか寧ろ間違っていて欲しいのでおさらいしますね」

「ああ」

「ブリテン異聞帯の始まりは、本来の歴史では聖剣を作る役目の亜鈴妖精がサボタージユを起こし、地上がセファールによつて蹂躪されたこと。」

そして現在のブリテン島は、亜鈴妖精に反省を促す役割で派遣された獣神ケルヌンノスが、亜鈴妖精に騙し打ちで毒殺され、その死体の上に成り立っている」

「そう」

「そしてそれから14000年以上が経過し、未だに呪いは発生し続けている、と」

「うん」

「どうしてよりもよつて、こんな國に手を出したんですか」

「出来心だったんです」

いやね、呪われているのは分かってただけだね。珍しい武器を持ってたから手を出しちやっただよね。

元々、あの場所に長居する気は無かつただよ。モルガンが異様にこだわるから、今の状況になったワケでして。全部調べて見たら、想

像の百倍くらい救いよしの無い歴史だったってだけで。

「神を殺害しただけでは飽き足らず、神の巫女にも手を出したんですよね……?」

「そうだね。不死の魔法をかけた上でバラバラにして、人間を生み出す素体にしたらしい」

「……今でも?」

「……残念ながら」

「ああああああ……なんて真似を……なんてことを……」

クリストが酷く取り乱した様子で頭を抱えて唸りだした。

「ちなみに、そうやって生み出された人間は妖精の玩具になったり、モースの呪いと戦わされたりしてるぞ」

「二言目で底値更新するの止めていただけますか!」

「……やっぱりヤバイよな?」

「当たり前ですよ!!神の巫女から生み出された人間を彼女が仕えていた神の呪いと戦わせて、無事で済むと思えますか!」

……だよなあ。呪いが消えない理由の一因に、これも入ってるよな。出荷された人間を大事にしてるならまだしも、扱いがおざなりだからなあ……。そう考えると、現在進行形で妖精達は罪を上塗りしていると言えなくもない。

「クリスト、お前の口利きでどうにかならない?ほら、お前天使だし」

「天使じゃありませんけどね。」

……仮に、僕が天使だったとしてですよ?」

「うん」

「獣神ケルヌノスは僕とは住む世界が違うとはいえ、天使の上の存在、神です。」

そうですね、分かりやすく例えるならば、自分の部署とは全く関係

の無い、別の部署の上司に対して嘆願しに行くようなものです。……受け入れられると思いますか？」

「アスヨネー」

駄目で元々だったが、天界へのコネクションを持っているクリストに相談してもどうにもならなかった。何とも世知辛い例え話だったが、クリストもクリストで俺が理解できるように言葉を選んでいるだろう。

「真面目な話さ……ブリテン島を俺のミニ魔界に併合させようと動いてるんだよ」

「正気を疑いますね……」

「そう言うな。その為にも、あの獣神をどうにかしてどかす必要があるんだ。何か良い方法思いつかないか？」

「うーん……」

少しの間だけ考え込んだクリストが、指を立てて自論を展開する。

「まずですね、獣神の亡骸を呪いごと力づくで排除した場合ですけれど」

「うん、どうなるんだ？」

「二万年以上の呪いの塊ですから、当然加減などできません。で、それを消滅させる熱量で攻撃すると、獣神の亡骸はブリテン島を支える一番深い場所にあるわけですから、攻撃の余波でブリテン島が消し飛びますね」

「……そうかあ」

やはりクリストも同じ結論に至るらしい。パワーで解決できなくも無いのだが、埋もれている場所が問題なんだ。

「だったら、どうにかして大穴から引きずり出せないものか……」

「動きだしたら一巻の終わりじゃないですか？見た所、呪いで燻っているあの体は復活の兆候が見え始めています」

「……それマジ？」

「ええ。僕もあれだけ長い期間、放置された神の遺体を見たことが無いのですが……それが怒りと呪いだけで動こうとしているなんて、前代未聞ですよ」

眼鏡に手を当てるクリストの顔色は悪い。なまじ神に近い身分なだけ、ケルヌンノスの異質さを俺達よりも理解しているのだろう。

「僕もあれを放置して欲しくはありませんね……。あのレベルの呪詛は惑星の一つや二つ、簡単に飲み込んでしまいますよ」

「……お前、どうにかして祓えないか？マジヨリタの呪いだって解呪できただろ？」

かつてマジヨリタが敵だった頃に、ウサリアやレッドマグナスに掛けられた毒の呪いをクリストが治した出来事があった。ケルヌンノス相手にそれが出来ないか聞いてみたが、クリストが静かに首を横に振る。

「あれとは格が違います。何せマジヨリタのは悪魔の呪いですが、此方は神の呪いです。神の使徒である天使が神の呪いを解くのは流石に無茶です。まあ僕は天使じゃありませんけど」

「お前でも無理か……」

「恐らくケルヌンノスの呪いの対象は、自らを毒殺した亜鈴の妖精とその子孫たちでしょう。本来は妖精達を反省させる目的でやってきた神ですから、目的が達成されれば許しを乞えるとは思いますが……」

「……………」

——沈痛な面持ちのクリストが絞り出した言葉が、俺が大雑把に考

えていたプランの一つのピースを埋めた。

「……付け入る隙はそこにある、か」

「はい？」

「なあ、ケルヌンノスはどうやれば復活するんだ？」

「……はあ!?ど、どうやればって言われても……」

流石に予想外だったのか、クリストの眼鏡がずり落ちた。それでも即座に冷静さを取り戻せるのは、ロスト軍との戦いで成長した証だろう。

「ええと、まあ、そうですね。今のケルヌンノスは人間で言う所の心臓部を失っている状態ですから、何か代わりになる物があれば蘇りますよ。」

「……いえ、自分で言ってるアレなんですけど、普通はそれだけで動きだしたりしないんですよ?もう何もかも腐り果てている体なのに、呪いが強すぎてそれを可能にしてしまっている」

既に破壊された神核の代わり。

ぼんやり描いていたブリテン救済の道筋が、ハッキリ見えるようになってきた。

「それなら、俺が心臓になればケルヌンノスは復活するんだな」

「……いきなり何言い出してるんですか?!?」

「どうなんだ、クリスト」

目を見開いて叫ぶクリストに確かめる。言いたい事をすんでのところで飲み込んだクリストが、荒くなった呼吸を整えてから答えてくれた。

「ああ、もう……コバヤシさんの霊基の強さなら、神核の代替品として

申し分ないでしょうね！」

「そうか……………できちゃうかあ……………」

「貴方が言い出したんでしようが!」

うん、我ながらおかしい反応だとは思ってるよ。

でも、無理だったらやらなくて済んだのになあ……………。

可能だっというなら、その先を考えずにはいられないんだよ。

「そもそも、復活させてどうしようというんですか!?動きでしたら一巻の終わりだっって言っただでしょうに!」

「復活させて、取引を持ちかけるんだよ。俺がケルヌノスの体の中でな」

「契約って……………」

「ケルヌノスの積もり積もった14000年分の呪いを、モルガン達に祓わせる」

「――」

クリストは絶句して固まった。

「異聞帯の最大のあやまちは、エクスカリバーが作られなかった事。それはアルトリアによって既に覆されている。俺達の陣営のアルトリアに、な。」

ケルヌノスの呪い全てを吹き飛ばす試練を乗り越えたなら、ブリテンを貰うっという話を持ち掛ける材料にはなるだろう」

「ち、ちよっと待ってください……………頭が追い付かない……………」

力づくで吹き飛ばせるなら、どうにかなる。ケルヌノスを地上に出して、その呪いを全部残さずモルガン達に処理させる。

偏見かもしれないが、神様っていうのは試練を出すのが好きだからな……………。

「まあ、つまりだな。ケルヌンノスの目的は妖精に反省を促す事だったんだろう？それを俺達が肩代わりしてやるって話だ。」

もつとも、こんな話を普通に持ち掛けた所で返事なんて返ってこないのは目に見えてる。だから、俺達……厳密にはモルガン達だが、アイツらにケルヌンノスの呪いを吹き飛ばさせて証明してやるんだ。自分達はケルヌンノスの代わりになれるってな」

簡単に纏めた俺の言葉を聞いて、黙り込んだクリストが熟考を始めた。

傍から聞いて無茶苦茶な話ではあるものの、俺達には道理を蹴飛ばす力がある。モルガンとて、望んでいるのはブリテン島の支配と存続であつたが、支配者として妖精を守っていた側面もあつた。

最後に現れるであろう、卑王ヴォーティガンはブリテン島の滅びの意思だという。

ならば、同じくブリテン島の神秘を色濃く受け継ぐモルガンは、ブリテン島の繁栄の意思ではないのだろうか。

「……反乱軍にいた頃は知りませんでしたよ。貴方がこんなぶっ飛んだ企みを考える人だったとは……」

「独り立ちすりや成長もするさ。俺はお前達を見上げてばかりだったからな」

「さりげなくセラフィーヌさん達のせいにしてませんか？」

「どうだか。それよりもどうなんだ、上手くいくと思うか？」

「ええ、まあ。話くらいは可能ではないでしょうかね。ただ……」

クリストの眼鏡が光を反射して怪しく光る。

「獣神ケルヌンノスが取引に応じる可能性は無いでしょうね」

「……理由、訊いてもいいか？」

「ええ。現在のブリテン島の統治方法は貴方達の魔法による洗脳ですよ。妖精達の自主的な反省を求めていたケルヌンノスにとって、こ

の支配体制は受け入れられないものです」

「あくまでも、妖精達が自ら悔い改めるのを自覚していないといけないとっ…」

「その通りです」

どうあがいても、その問題にぶつかるか。

妖精達の自我を奪った統治では、ケルヌノスはお気に召さないよ
うだ。死んでもなお、そこに拘り続けるのはどうかと思わなくもない
が、それがかの神の使命なのならば無視するのは難しい。

ブリテンに關係する奴は、どいつもこいつも頑固者なのだろうか。

……さて。

気の遠くなるような過去に大罪を犯し、それを知らぬ妖精。

今なお罪を重ね続け、それを自覚しない妖精。

はじまりのろくにんの悪性を受け継いだ、救いようの無い妖精。

こんな奴等、今でも大嫌いではあるのだが、巡礼の旅でまともな妖
精も僅かだが生まれると知った。

ロンディニウムを見て、人間と妖精の共存は必ずしも不可能ではな
いと見せつけられた。

そして。なによりも。

——そんな優しい世界を望んだ救世主^{トネリコ}／女王^{モルガン}がいた。

「……………有るとしたらっ？」

「……………え？」

「妖精達が反省する方法があるとしたら、どうだ？」

そう言っつて、クリストに語る途方もない計画。上手くいくかは分か
らない。可能性も未知数だ。

だが、少なくともただ反省しろと叱り続けるよりはマシだろう。

ケルヌノスは失敗した。あんな連中を信用なんてするからだ。

ウーサーとトネリコも失敗した。下準備が不十分だったからだ。

俺は妖精を信じない。希望など抱かない。油断なく、最後の詰めま

で怠らずに取り組んでやる。

「……コバヤシさん、貴方がそこまでする必要ありますか？」

全てを語り終えて、クリストが最初に発した言葉がそれだった。

「確かに、その方法ならケルヌンノスも納得するかもしれませんが。ですが、こう言うと気を悪くするでしょうけど、僕にはあのブリテン異聞帯にそこまで肩入れする価値があるように思えません」

「ああ……言いたい事は分かるよ」

「話を聞く限り、一番ブリテン島に執着している女王モルガンも、貴方が説得すれば折れてくれるんじゃないやありませんか？」

「……………」

そうだろうと薄々感づいてはいる。俺がモルガンを諭し続ければ、モルガンはブリテン島を諦めるだろう。自惚れかもしれないが、それくらいの信頼関係は築き上げていると思っっている。でも俺はそれをしなかった。やりたくなかった。

「……………折れちゃ、駄目なんだよ」

ぼつりと零した言葉にクリストが眉をひそめた。

「アイツは、生まれてから奪われてばかりなんだ。夢も、未来も、愛も、幸福も。今のモルガンは、人が与えられるべき幸せを殆ど諦めてここにいる。」

生まれ故郷を失いたくない。今のあいつを支えているのは、そんなありきたりな願いだ。

そんな小さな願いまで摘み取るなんて、そんなの……あんまりじゃないか」

秘めた力に反して、モルガンの望みはある意味でささやかなものだった。あれ程の力を持つてすれば、もつと強欲に生きられるというのに。それが長い年月の旅の果ての諦観から出てきた望みなら、それを踏み躪る真似はどうしても出来なかった。

「それにさ、俺はトネリコと約束したんだ。お前達の旅路を俺達が引き継ぐってな」

「コバヤシさん、それは……」

「たとえばそれが、遙か遠い昔に遺された誰かの残滓だったとしてもだ。俺が、間違いなく、この口で誓ったんだ。

勝手に約束しただけだから、向こうの返事なんて聞いてないがな」

——ヴァイヴァイア楽園の妖精の使命。

——トネリコ救世主の願い。

——モルガン女王の夢。

それが一挙に叶えられる機会が目の前にある。

こつちの犠牲は誰一人出さないという条件はあるが、上等だ。道のが険しい程、手に入れる価値があるし、それに挑める力も蓄えてきた。

「……はあ……。貴方の考えは分かりました。僕はもう止めたりしませんよ」

「助かるよ」

「でも、これだけは言っておきますよ」
「なんだ？」

「僕も含めて、反乱軍の皆さんにとってはブリテンよりも貴方の身が大事です。

もし、ブリテン異聞帯が貴方の犠牲の上に成り立ったとしたら、僕達はそれを許容しないでしょう。それを肝に銘じておいてください
ね」

「……………この上なく物騒な応援をありがとうよ」

「それでは、幸運を祈ります」

久しぶりの仲間との通信が切れて、俺は椅子の背もたれにゆっくりと体重を預けた。

ブリテン救済の光明が見えた。残る課題は、このプランをどうやってモルガン達に伝えるかだ。

「……ま、全部言うしかないか……気が進まねえなあ……」

俺が核になってケルヌノスを復活させるのを聞けば間違いなくモルガンは荒れそうだが、下手な誤魔化しは通じないだろう。

彼女達の反応を想像して、思わず気が滅入ってしまった。

……それでも、やるしかないのだ。

既に足を止める選択肢など残されてはいないのだから。

魔女の輝き

私がかつて、トネリコを名乗っていた頃。瞳の中にはずっと星が輝いていた。

空を見上げても、地を見下ろしても、消える事の無い星が見えていた。

耳の奥では鐘の音が鳴っていた。己の使命を忘れるなど告げるかのように。

汎人類史のモルガンの記憶を受け取って、私は自分の辿る未来を知った。

——そして、私は運命に抗った。

私だけのブリテン。私が愛するブリテン。

汎人類史の私が成し遂げられなかった悲願を、異聞帯の私が受け継いだ。

前途多難なのは目に見えているけれど、不思議と気持ちは軽かった。

——だって、今の私は救世主。みんなに疎まれる魔女じゃないもの。

きっと上手くいく。そう信じて疑わなかった。

そんな希望も徐々に薄れていく。

いくら争いを鎮めても、沸き起こる問題は尽きなかった。

人助けは気に入っていた。みんなに感謝されるのは悪い気分じゃなかった。

でも、いくら助けても私が皆に心の底から救世主だと讃えられる事は無かった。

何度も妖精達から排斥されているうちに、私は疲れてしまった。どうせ何をしても迫害されるのなら、いつそ災厄の時だけ活動してしまえばいい。

そうしてからは心が幾分か楽になって、それと同時に虚しさも覚えた。

それでも救世主を続けて、仲間も増えて立ち回り方を覚えた頃に出会った、一人の人間。

妖精と人間の幸福を願う、優しい人間。

ウーサーという名前は私にとっては気に入らなかったけれど、一緒に過ごしていくうちに惹かれていった。

彼ならば、きつとブリテンを良い國にしてくれる。

そう信じて、彼に全てを託す決意をした。

ウーサーが私を妃にする、なんて言い出した時は混乱したけれど、他の皆はそれを止めるどころか祝いで、私一人が嵌められたみたいだった。

……それでも、悪い気はしなかったので、楽園に帰る予定を急遽返上して戴冠式と結婚式を兼ねよう、なんて考えてしまうくらいには私

も浮かれていたのだ。

『ああ——あああああ……!!なんで、なんで……?!?ウーサー……みんな……!!』

ブリテンで一番めでたい日になる筈だった。

ウーサーや円卓のみんなが毒の盃を飲み干して、私達の思い描いたブリテンは始まる前に終わってしまった。

妖精達に対する憎悪と憤怒が限界を超え、私は救世主の道を捨てた。

——私を蝕んでいた星の光と鐘の音は、トネリコ モルガン私から私になったその時から消え失せていた。

女王としてブリテンに君臨し続けていた私を襲った、未曾有の侵略者。魔界から来襲した人間の魔王は、空想樹をも解析した私の理解を遥かに超えた存在だった。

敗北した私と妖精騎士は彼の配下に加わり、魔界で力を蓄えて成長していった。

当初抱いた恐怖と怒りは困惑と驚愕に変わり、魔界での生活と彼の人となりを知るにつれて少しずつ好意へと変わっていった。

彼と一緒にブリテンで暮らす。そんな淡い夢を見ってしまう程に、私は彼に惹かれていったのだろう。

……ああ、でも。

夢は所詮、夢でしかない。

どんなに願っても、どんなに努力しても、私の夢は決して叶わない。これまでもずっと、そうであったように。

「……………なぜだ」

魔界の皆を集めたコバヤシが語る、ケルヌンノスへの対処法。
その全容を聞き終えた後の静寂を破る、私の震えた声。

「コバヤシ、それは、おかしいでしょう……？」

何故、貴方がその身を危険に晒す必要がある!!」

激情に身を任せて叫ぶ私を見て、愛娘が怯える姿が目に入る。それでも、落ち着く余裕すら今の私には無かった。

「ケルヌンノスの呪いはブリテンの負債だ!!ならば、ブリテンに住まう者が背負うのが道理でしょう!？」

「お前達だと耐えられないから言ってるんだよ……」

私に比べて、彼の態度は落ち着いていた。私の発する言葉に冷静に返してくる。

「私では、駄目だというのですか……?？」

「無理だね。お前やアルトリア、バーヴァン・シーは妖精共を少なからず憎んでるから、ケルヌンノスの呪いと同調して飲まれてしまう可能性が高い」

「……………では、私なら」

妖精騎士バーゲストが名乗りをあげたが、コバヤシは即座に却下した。

「駄目。お前、腹の中に何を飼ってるか忘れたのか? 厄災なんて今のケルヌンノスに押し込んだら、どんな呪いになるか分かったもんじや

ない。同じ理由でメリュジーヌも無理だ」

その指摘に反論の余地も無く、二人の妖精騎士は歯噛みして引き下がる。

「じゃ、じゃあ適当な妖精でも攫ってきて、そいつを核にすればいいじゃない!!」

バーヴァン・シーが必死になって代案を持ち出したが、隣のアルトリアが首を振った。

「無理なんだよ……」

「ハア!?なんでだよ!!」

「ブリテンの大陸の大穴の中にケルヌンノスの亡骸がある理由、分かる?あの穴はケルヌンノスは死んでもなお、妖精を憎み続けている証なの。妖精達の死骸すら拒否し続けているから、妖精だと核として認められないと思う……」

コバヤシは、妖精を嫌ってはいるけど憎んではないから、呪いに飲まれる心配は無いし……」

「それは、でも……でも!」

沈んだ表情の彼女の言葉に、バーヴァン・シーも返答に詰まった。

「騒がれるとは思ってたよ。でも、あえてこう言わせてもらおう。……お前ら、他に良い考えあるの?」

それが全ての反論を封じた。

必死になって知恵を振り絞ってみても、これ以上に良い案など浮かばない。それだけ、これが彼が考えに考え抜いた最良の案だという証だ。

核になる彼の死が決定した訳ではない。コバヤシも、危険ではある

が耐える気ではないと言っていた。

「……………認めない、そんなの、認めてなるものか」

「モルガン、あのな——」

「やめろ!!聞きたくない!!」

だから、こうして童女のように喚くのはただの感情論だ。

現実を拒否するように耳を塞ぎ、髪を振り乱して部屋から駆け出してしまうた。

——結局はどの世界でも、私は魔女だった。大事な人を不幸にする、災厄の魔女。

——世界に、運命に、そう突き付けられてしまえば、もう私は耐えられなかった。

「……………そりゃあなるよなあ……………あーもう、どういえば良かったんだか……………」

モルガンが飛び出していった後、沈黙の中で声を発したコバヤシに視線が集中する。やるせない表情で頭を掻いていた。

「貴方を疑う訳ではありませんが……………本当にその手しかないのでしょうか?」

「これ以上無いってくらい、頭使って考えた案だよ。他に良い方法あ

るなら、是非とも教えて欲しいくらいだ」

遠慮がちに声をかけたバーゲストが、返答を聞いて沈痛な面持ちで唇を噛む。悔しきで握りしめた拳が音を鳴らした。

「……生きて帰れる保証はあるの?」

アルトリア・キャスターが問いかけた。

「あるに決まってるだろ。ブリテンの為に死んでやる理由は無い。ただ……もしかしたら死ぬ可能性もあるけど」

一度、視線を下に落としたアルトリア。そして魔王を見つめ直して、何かの決意を固めた顔で一步踏み出した。

「なら——」

「俺以外の誰かが行けばいいって話でもないんだ」

アルトリアの口に人差し指が添えられる。自分の言葉を止められた彼女は、戸惑いながら真意を探る。

「極端な話、どっかの誰かをケルヌンノスに突っ込んで復活させて、俺達がフルパワーで吹っ飛ばしてもブリテンの存続は叶うんだ」

「え、じゃあ、どうして……?」

「これ以上、犠牲は出せないんだよ」

コバヤシはアルトリアの透き通るように青い瞳を見つめた。

「ブリテンを成り立たせる為に誰かを犠牲にすれば、きっとアイツは心の底から喜ばなくなる。」

自分がどんな目に遭ってようと、強がって平気な顔してるクセに、

誰かの為ならば本気で怒りだすような奴だからな……」

コバヤシはアルトリアのほっぺたに手を当てて、ぐに、と優しく抓った。

「ホント、お前にそっくりだわ」

「うにゅ……」

呆気にとられたアルトリアから手を放し、コバヤシはゆつくりと立ち上がる。そして話を聞いていた者達をぐるりと見回した。

「それで、お前らはどうなんだ？俺の案に乗るか、乗らないか、答えてくれ」

再び沈黙が部屋を支配する。各々が答えを探している中で、ガチャリという鎧の音が入る。

最初に動いたのはバーゲストだった。魔王の目の前まで歩き、跪いて頭を下げた。

「他ならぬ貴方が考え抜いた策ならば、私はそれを信じて剣を預けます。どうかこの身を、如何様にもお使いください」

「……ん、そうか」

騎士の頭に手を置いて、魔王はその覚悟を受け取った。

その後ろに、小さな龍が本来の姿を現した。

「私も協力するわ。全力を出して最高の結果を掴みとる……フフツ、良いわね。シンプルでやりがいがあるじゃない。そういうの、好きよ」

「おう、期待してるぜ」

親愛の証のハグをして離れると、妖精二人が意を決して話し出す。

「コバヤシが、一生懸命考えたっていうのは伝わったわ。でも……お母様が嫌がってるなら、私は……それに手を貸したくない」

「一応、私の同郷だし……モルガンには、幸せになつて欲しいって思ってるんだ。だから、モルガンの事を蔑ろにしないなら……私も協力する」

「そうか……よく言った」

二人の頭を軽く撫で、最後に彼の配下の者達へ視線を送る。

「私達は主の貴方について行くだけです」

「……よろしい」

皆の答えを聞き終えたコバヤシは、会議室を後にする。

目指す先はモルガンの自室だった。

「じゃあ、アイツと話し合ってくるわ」

部屋に入る前に礼儀としてノックをして名前を呼んでみたもの、思った通り彼女からの返事は無い。待っていても埒が明かないので、コバヤシはモルガンの部屋へ入る。

薄暗い部屋の照明を付けければ、彼女は部屋の隅で膝を抱えて座り込

んでいた。

「モルガン」

いつもならば返ってくる言葉が無い。顔を背け、意地でも彼を視界に入れないようにしていた。

「モルガン。聞いてくれ」

隣へ座り、そつぽを向いたままの女の顔に手を添える。コバヤシが自分の方へ顔を向けさせようと力を込めると、意外にも彼女は殆ど抵抗しなかった。

今にも泣きだしてしまいそうな悲壮な表情を間近で見て、コバヤシは一瞬言葉に詰まる。

それでも、言うべきことを口にした。

「お前が本気で嫌がるなら、さっきの話は無しにする。だから、話そう」

その言葉を聞いたモルガンは俯き、そして弱々しい足取りで立ち上がった。コバヤシはモルガンに手を貸して、彼女をベッドに座らせて自身も腰掛ける。

「あの作戦はお前がいないと成り立たない。俺が力尽きる前に事を終えるには、お前の力が必要だ」

モルガンのみが扱える神造兵装ロンゴミニアドの砲台。ケルヌンノスの呪肉を焼き払うには、あの大穴を取り囲む1200基のロンゴミニアドによる波状攻撃しかない。コバヤシは語る。

「……コバヤシ」

「うん？」

「例え貴方が妖精に憎悪を抱いていないとしても、呪いによる浸食は貴方の精神を蝕む」

「……ああ」

「わたしにはそれが、たえられない」

隣に座る男に継るように、モルガンはしがみ付いた。

「消えていく。私の大事なものがみんな、私の前から消えていくんだ。

汎人類史の父は突然、私を見なくなつた。ブリテンの王になる筈だった私を、ブリテンから追い出して、私は愛しい故郷に帰る事すら許されなくなつたんだ。

異聞帯のウーサーが殺された時の光景は、今でも目の裏側にこびりついている。

ウーサーくんは、優しいひとだったのに。きっと、今のブリテンを良い國にしてくれるおうさまだったのに。私みたいな除け者なんて、いない世界になるはずだったのに。

みんな、みんな、いなくなつた。私の手には、もう、何も、残つてやしない」

震える手で男を揺らす。目からは堪えきれなくなつた悲しみの涙が溢れていた。

「私には、どこにも居場所なんて無かつた。どこに行つても疎まれて、大事なものができても、この手から零れ落ちていくだけの、魔女だった。

……なにが、楽園の使命だ。何が救世主だ!!こんな目なんて欲しくなかつた!!世界は、私を、この身が果てるまで使い潰されるためだけに産み落としたのか!!」

モルガンの慟哭は彼女自身をも貫いた。心の奥底に隠していた、直

視したくないものを曝け出したからだ。

「……お前は私の欲しいものをくれた。心地の良い居場所に、バーヴァン・シーの命。そして、ブリテンも。」

そんなお前を、ブリテンと天秤にかけるなど、私にはできない。

……おねがい、おねがいだから、私の前から、いなくならないで……私の愛しい人……!」

抱き着いて泣き続けるモルガンの手を取り、そつと引きはがす。それを拒絶だと受け取ったモルガンは、絶望の表情を浮かべた。

「酷い顔しやがって……何を勘違いしたか知らないが、安心しろ。俺は消えないから」

ただ一言かけただけでモルガンの不安は吹き飛んだ。

……思えば、コバヤシはこうして相手に姿をはつきり見させることで、妖精眼で真意を見せていた。

手玉に取られているな、とモルガンは感じつつも、それに悪い気はしていなかった。

「そういや、お前に話した事は無かったな」

「……?」

「俺が魔王に至るキツカケだ。丁度いいから今話しておくよ。これを聞けばケルヌンノスの核の代わりを名乗り出た理由も分かるだろ」

それは、反乱軍とロスト軍の戦争の最中の出来事でした。

ヴォイドダークの放った魔力を吸い取る魔槍が、コバヤシの主人である魔王セラフィーンの故郷、絢爛魔界へと突き刺さったのです。

絢爛魔界は魔界でも随一の財力を誇る、超リッチな魔界です。

反乱軍はセラフィーンの故郷を救うため、絢爛魔界へと向かいました。

ですが、絢爛魔界の実情は話とは違っていました。

セラフィーンの父親が、ヴォイドダークを恐れるあまりに地下シエルターを造り、そのせいで絢爛魔界は財政破綻を起こしてしまっていたのでした。

父親と再会したセラフィーンは、その事実を知って絶望します。

財力を誇りにして生きてきた彼女にとって、貧乏になるという事実はとても受け入れがたいものだったのです。

周囲に貧乏人と見下されるのは、彼女のプライドが許しません。

それに加えて彼女の父親は、セラフィーンとの結婚を狙っていた魔王や魔神達を罫にかけ、財宝を奪い取っていました。そしてあるうごとか、今度は助けに来た反乱軍を捕まえて売ろうと言い出したのです。

既に彼等と仲間としての絆が芽生えていたセラフィーンは、自身のプライドと板挟みになり苦しみます。

どうせ嘘を吐いてもいつかはバレてしまう。しかし、自分から言い出すことなど出来ない。

これに痺れを切らしたコバヤシは、セラフィーンを説得します。

“彼等はかけがえのない仲間であり、例え貧乏になっても見下す事などあり得ない”

“素直に言っただけを求めよう”

そう言われても決心がつかず、ズルズルと対応を後回しにしてしま
うセラフィーヌ。

煮え切らない態度の彼女に、コバヤシはならば自分が打ち明けると
言い放ちました。

それを聞いたセラフィーヌはコバヤシを引き止めて、思わず魔眼を
発動させました。

彼女の持つ「魔眼のバロール」は、男性を自分の意のままに操る能
力です。

そうしてコバヤシは意識を乗っ取られ、彼女の言いなりになる人形
となったのでした。

結果としては、彼女は仲間の言葉で呪縛を断ち切りました。

魔帝にビビる父親にキレ散らかし、自分はもう貧乏など恐くないと
宣言したのです。

魔界に突き刺さる槍を破壊したセラフィーヌは、気持ちを新たに歩
みを進めます。

そして、自分が洗脳したままの男の存在を思い出し、大慌てで魅了
を解除するのでした。

意識を取り戻したコバヤシは、失意のどん底に落とされました。

セラフィーヌが立ち直ったのは喜ばしい事です。

しかし、一番近くにいた自分が何も出来なかった事は、彼の心に大
きな傷を残しました。

セラフィーヌは自らの行いを恥じて、素直に謝っていました。

コバヤシはセラフィーヌを責めてはいません。

大事な家族の一大事に、あろうことか魅了されただけで手出しでき
ない無力な自分に、はらわたが煮えくり返る程の怒りを覚えたので
す。

彼は自分の心に誓いを立てました。

己の弱さを忘れぬように。

同じ過ちを繰り返さぬように。

セラファイヌの庇護下で甘えていた自分を許さぬように。

その日から、彼から遠慮というものが消え去りました。

セラファイヌに対する賞賛が三割増え、罵倒が七割増えました。

他の仲間達にも臆する事無く、発言していくようになりました。

突然の変化に仲間達は戸惑いましたが、彼の中の決心を察して、徐々に受け入れていきました。

彼の固有魔ビリティ『絢爛の誓い』は、ありとあらゆる精神干渉を跳ね除けて、自我を保護するというもの。

これまで自分に正直に生きてきたのは、動くべき時に何もできず、何も言えない事態を引き起こさないためのものだった。

心を溶かす魅了も、心を凍らせる恐怖も、彼には通用しない。

何故ならば、あの時以上の絶望など彼にとっては存在しないのだから。

「妖精眼はお前に苦しみばかりを与えたモンなんだろう。でも、俺にはその目が酷く輝いて見えるんだ」

そつと髪に触れて瞳が良く見えるように覗きこむ。涙で濡れたそれは、残酷なまでに美しい。掛け値なしにコバヤシはそう思う。

「きつとその目は、見るべきものを間違えない。メツキの中に隠された本音を、お前なら見つけ出せる。」

——お前は他の誰よりも、救世主に向いているのさ」

モルガンはそれを聞いて驚いて、涙を流しながら笑った。悲しみが占める心の奥底で、確かな温かみが生まれたのを感じた。

「それにお前は、俺の持っていないモンを持っていた」

「……？」

コバヤシの手がモルガンの手を強く握る。

今までにない情熱的な対応に、モルガンの心臓の鼓動が強まった。

「たった一つの夢に向かって一目散に駆けていくその姿は、俺にとつて衝撃だった。自分の全てを投げ出しても、ブリテンを手に入れようとするお前に俺はどこか焦がれていたんだろう。

欲しいものは山ほどあったが、自分の命を賭してまで欲しいモンなんて無かったからな」

コバヤシもまた、自身の想いを口に出して自覚した。目の前の女は、誰にも渡したくない程に魅力溢れる女なのだ。

そして男は、最後の覚悟を口にした。

「——お前の手から取りこぼしたものを、取り戻すチャンスを俺にくれ」

男は女の返事を待った。

永遠にも思える時間の中で、ふと、自分の手が握り返された。

「……あなたは本当にわるいひと。そんな言い方されたら、断れないじゃないですか……」

「それ以外に俺がああに国に関わる理由、無いんだよ」

「……………絶対に生きて帰りましょう。誰一人、欠けることなく、みんな

なで……」

「当然だ。その為に頑張ってきたんだからな」

「ふふ……」

少女のように微笑んだモルガンは、愛する夫の胸に頬ずりをする。しばらく甘えさせていたコバヤシが、おもむろに立ち上がった。

「あ……」

名残惜しむように服の袖を掴まむモルガンだが、コバヤシはそれ以上付き合う気は無いようだった。連れない態度にモルガンは少しふくれっ面になる。

「我が夫……ここは最後まで致す場面でしょう。ほら、戦士が戦場に発つ前には女を抱くというのはよくある話です」

「お前さ、情事にかまけて俺が死んだら今度こそ立ち直れなくなるだろうけど、それで良いワケ？」

「それはイヤです！我が夫死んじゃイヤです！」

「だろろう？だから話も纏まったし、久々に鍛え直してこようかなーと」
「うう……そうですか……」

確かにただでさえタイムリミットが迫る中で、一夜とはいえ作戦の要の彼を拘束してしまうのは良くないとモルガンも理解して、渋々引き下がった。

そして彼の言葉を反復し、内容を理解して恐る恐る口を開いた。

「あの……我が夫？鍛え直すと言いましたか？」

「うん」

「つかぬことを聞きますが……これ以上強くなれるのですか？」

「なれるよ」

「……………そうですか、いつてらっしゃい」

「おう」

コバヤシが出て行った後、モルガンはぼけーっと天井を見上げ続けていた。

現時点でも惑星をぶっ壊すような夫に、未だ成長の余地がある。

「……………え？本当にあの人って死ぬの??？」

現時点でのモルガンには、ちよつと理解できない範疇の話だった。

「あ、コバヤシおかえヒエツ」

アイテム界から戻ってきた魔王を甲斐甲斐しく迎えに来たアルトリアは、慕っている男の変貌に変な声を出した。

敵の体液に塗れた体から、魔力が赤い稲妻となって流れ出ている。体内の魔力が高まっているせいで、目と口が赤く発光していた。バーヴァン・シーが霞んで見えるくらい真っ赤の化身になっていた。

アイテム界から帰ってくるたびに、ちよつとだけ強くなっている。凶蝕の力という魔ビリティの効果らしいが、どこまで行けば限界になるのだろうか。

「なんだ、わざわざ来たのか」

「う、うん……カレー、向こうに用意出来てるよ」

「そうか、ありがとうな」

「……えっと、どうしたらそんなに強くなれるの?」

「敵を片っ端からぶっ殺しまくってる」

「ヒエツ」

最低限の体の汚れを落として、カレーにがつつくコバヤシ。エリクシルをベースに大量のメガネを入れたカレーは、食べたものにHPMP上限アップとクリティカル率アップの恩恵を与えてくれる。

そうして食べ終えて、再びアイテム界へと潜つていこうとしたコバヤシを呼び止める者がいた。

「コバヤシ、結界に反応がありました」

「お、来たか」

「ええ。既に出撃準備は済ませています」

声の主のモルガンの後ろに、妖精騎士達が控えている。横に並んで
跪き、魔王の号令を待っていた。

「——よし、手筈通りに出陣だ。カルデアの連中を迎えてやるとしよ
うか」

「「「了解!!」」」」

カルデア来る（きたる）

漂白された世界を泳ぐように飛ぶ一隻の船。障害も国境も関係なく目標に向けて一直線に向かうその姿は雄大で、広い空にたった一つの影は寂寥な旅路を思わせる。

第五の異聞帯を攻略したカルデアは、手に入れた神の遺産を用いてパワーアップを果たし、第六の異聞帯へと船首を向けていた。

彼等の目的はシバの予測したブリテン異聞帯から広がる崩落を食い止める事。そして異星の神に対抗する手段の一つであるロンゴミアードの譲渡を求めての交渉だ。

「各員、用意は良いね？——準備完了。ストーム・ボーダー発進！これより、第六異聞帯に突入する！」

行く手を阻む光の壁を見据えて、巨大な船の舵を握るネモ・キャプテンが叫んだ。

「……いよいよですね、先輩」

「……うん、そうだね」

隣り合わせに座る一組の男女、藤丸立香とマッシュ・キリエライト。

ゲーティアによる人理焼却から人理を取り戻し、異星の神からの人理漂白からも生き残って戦い続けている歴戦のマスターとデミ・サーヴァントのペアは、緊張に身を固めていた。

こちらの戦力も増しているとはいえ、今回の異聞帯突入はこれまで以上に彼等に負担をかけるだろうと、事前に作戦説明があつたからだ。

それ以外にも、何度も命懸けの戦いを潜り抜けてきた経験からか、彼等の中での嫌な予感が増していた。それが余計に不安を煽っている。

それでも、不安なのは自分達だけでは無いと己を奮い立たせ、決意

を胸に秘めて新たな世界へ突入した。

——この時の彼等には知る由もないが、胸の内に隠した不安の種は、既に芽吹いていた。

——漠然とした嫌な予感、正しい意味での中する事態になる。

玉座に座る美しき女王が、ゆっくりと目を開いた。

「——来たか。ロンゴミニアド、一基起動」

モルガンの魔力が玉座を通して、数ある砲台の一基に送り込まれる。起動した聖槍の砲台は、ブリテンの中心から壁を越えてやって来た来訪者へと砲口を向けた。

「数々の逆境を乗り越え、よくぞブリテンまでたどり着いた。本来であれば、もつと丁重にもてなしたかったが、此方にも都合がある。ア

ポイントメントも取らずに我が国へ入国した浅はかさを恨むがよい」
こう言っているが本気ではないのだろう。少し緩んだ口元からは強者の余裕が見て取れる。

「——我が聖槍の一撃、受けてみよ」

星々に負けぬ輝きの光の柱が、轟音と共にブリテンの空を切り裂いた。

光の壁を突破して間も無く、ストーム・ボーダーでは危険を告げかけたたましい音のアラームが鳴り響いていた。

「な、なんだ!?!何が起きたのだ、報告したまえ!」

「ダ・ヴィンチ!?!」

ノウム・カルデア司令官のゴルドルフ・ムジークが血相を変え、ネモ・キャプテンが電算室の仲間に説明を要求する。間髪いれずに返ってきたのは、いつも朗らかな彼女の焦った声。

『マズイマズイマズイ!!オリュンポスで撃ってきたのと同じ魔力反応……ロンゴミニアドがこの船に向けて撃たれた!!』

「な……!?!」

『着弾まで時間が無い!!至急回避行動を!!』

大陸間弾道ミサイルにも匹敵する、戦略級超魔術が行使されたと聞き、ブリッジの搭乗員全員が青ざめる。

聞いてすぐに船長が声を上げた。

「緊急回避!!取り舵いっぱい!!」

「アイアイサー!!」

『なんとしてでも直撃は避けてくれ!掠ったくらいなら装甲と魔術障壁でなんとかか……!』

急旋回を試みる船体のGに息が詰まり、生身の体を持つ者達は幸運を祈りながら必死に耐え忍ぶ。艦橋から見える風景の彼方から、黄金の光の砲撃が見えて身を強張らせた。

そして、直撃を避ける意味では彼等の祈りは届いたようだ。

『——なんだ!?砲撃の向かう先が急に変わった!?直撃コースから外れたみたいだ!』

「……ぐっ……も、もしやいつぞやの魔術チャフかね!?でかしたぞ、技術顧問!」

「いえ、ゴルドルフ所長……残念ですが、そうではないようです……!」

ダ・ヴィンチの困惑した声に、Gの影響でシートベルトを体に食い込ませながらも言葉を捻り出すゴルドルフ。僅かに希望が見えた筈だったが、経営顧問のシャーロック・ホームズの一言でそれは否定される。

『これは、違う!キャプテン、急加速してこの空域から離脱して!!砲撃が分裂して、この艦を取り囲むように飛んできた!!』

「船長!相手の目的は我々の捕獲だ!!急ぎ脱出を!」

「僕達を網にかける気か!!エンジン、聞こえたね!?トリトン・ホイールを全力でブン回して!!」

『チツキショー!!毎回毎回無茶させやがって!!』

通信越しのネモ・エンジンの怒号に共鳴するように、ストーム・ボ―ダーのエンジンが唸りをあげた。

加速を始めた船体に乗員の体が後方に押し潰され――急制動がかかり前へと押し出される。

「ぐっ……!?!」

「ううっ……!?!」

強い力で内臓をシイクされ、猛烈な吐き気に襲われる。シートベルトのお蔭で体が投げ出される事故は避けられたものの、彼等を取り巻く状況が最悪なものに変わりはない。

「うぐう……お、おい!なぜ急ブレーキをかけたのだね?!」

「エンジン!!?」

『アタシじゃねえ!!機関室はぶっ壊れる勢いで稼働させてる!』

『プロフェッサーより報告ですー。現在、この艦を囲むように魔術による結界が展開中ー。全方位からの圧力で動きを止められましたー』
「結界だつて!?!」

外を見れば、ネモ・プロフェッサーの言った通り、ストーム・ボ―ダーを丸ごと覆う球状の魔法陣が展開されていた。

だが、正体さえ分かれば対処法にも辿り着く。

『飛んできた砲弾が起点となって展開されているようだ!場所を探して急いで破壊して!』

電算室からの指示通りに、モニターやブリッジの窓から結界を生み出している元凶を探し始めるカルデアの面々。やがて、一人のスタッフが大声をあげた。

「見つけたぞー!この場所の魔力濃度が高くなってる!」

「この船の前方、斜め上！ここからでも見えるよ！」

「マッシュ!!」

「はい、先輩！」

角度からして、この艦の魚雷発射管では狙えない位置にある。小回りの利く自分達が行くしかないと結論付け、シートベルトを外したマスターとサーヴァントが立ち上がった。

事態は一刻を争う。それが分かっている司令官は素早く判断を下した。

「外から圧力が加えられているとの話だが、彼等が外に出た際の影響はどうかね？」

『それは大丈夫！どうやら船にのみ作用しているようだから、二人が外に出ても影響はない筈だよ！』

「よし！では船外へ出てあのトラップをぶっ壊して戻ってこい！そして速やかにここから離脱する！」

「はい！」

「了解しました！」

任務が発令され、破壊する目標を勇ましく睨みつける人々。

抱いている感情は人によって違えど、自分達を窮地に追い込んだ原因を見ってしまうのは、ある意味で当然の行動であった。

カルデアの人員の殆どの視線を集めた瞬間、悪魔の罫が牙を剥く。

—————
カッ
!!!!

攻撃とは、何も大出力の魔力をぶっ放すだけではない。

物理的な威力を伴わなくとも、相手の力を削げるならばそれは攻撃と呼べるのだろう。

太陽の如き激しい光源と化した魔力の塊は、彼等の視界を白く埋め尽くした。

「うわあああああ!!目がああああ!?!?」

「あああああああつ!!」

「ぬわあああああつ!?!な、何も、何も見えない!!」

「ク、クソツ!!目つぶしだ!!」

窓の外と内部のモニターが同時に白光に焼かれ、それを見ていた者の視界を燃やし尽くした。咄嗟に目を庇うもすでに遅く、激しい痛みを襲われて視界の確保もままならない状態であった。

蹲り、涙を流しながら必死に視力の回復に努める中、無事だった電算室の少女から再び窮地を知らせる一報が入る。

『悪いお知らせばかりで申し訳ないけど、閃フラッシュバン光はあくまで副次効果に過ぎないみたいだ!』

「ど……どういう……事……?」

「結界のあちこちからさつきツキの光線が当てられてる!た、多分……この船を解析してるんだ!!」

「……!!」

動揺を隠しきれないダ・ヴィンチの言葉に、その場にいた全員の血の気が引いた。まるで詰将棋のように、一手を指されるたびに自分達の逃げ場がどんどん潰されていく。

アトランティスで虚数潜航からの浮上を待ち伏せされた経験から、奇襲の対策は練っている筈だった。だというのに、目まぐるしく変わる状況は彼等に適切な対応を許さなかった。

「急いで艦にプロテクトをかけて!内部情報が敵に知られたら、弱点だって丸わかりになってしまう!!」

『すでに実行しています。……でも、どうやら無意味のようですー』

『くっそー、どうなってるんだ!? こちらの防壁がすり抜けられる!! まるで、私達とは法則の違う魔術が使われているようだ!』

改良を重ねてきた自慢のシステム群が通用せず、通信室からは苛立ちの声を送られてくる。

——とにかく、後手に回っている状況を変えなくては。

ホームズが対応策を口に出そうとしたが、反撃を許すような相手ではなかった。

『……うわ、これまでで一番の厄介なお知らせだ』

「今度はなんだね!」

『海の彼方の島から何かが飛んでくる。さっきのロンゴミニアドよりも、魔力量が大きくて、速度も速い。……オマケに生き物みたいだ』

信じられない報告に、ブリッジから一切の音が消え去った。一体何を言っているんだと、映像のダ・ヴィンチを見るも彼女自身も放心しかかっている。

「なんだよ、聖槍より強くて速い生き物って!」

「あ、相手の正体はなんだ!? 魔獣か!? ドラゴンか!? まさか、出てきていきなり神とエンカウトなんてするんじゃないだろうね!」

全員が次の報告を食い入るように待っている中、少女のか細い声が疑問に答えた。

『……え? ……にん、げん……?』

それは、今も必死に頭を回しているキャプテンやホームズでさえ、頭の中が真っ白になる情報だった。

特異点や異聞帯で常識外れな経験を積んできた彼等でさえ、人間という個体が神の如き力を得ているなど、想像の域外だったのだ。

「……ぐ、ぬ……この際、それについての考察は後回しだ！」

「——そうですね。今はここからの脱出に専念しましょう」

「電算室！目標の飛行ルートを予想して！効くかは分からないが、魚雷での攻撃を試みる!!」

いち早く復活したゴルドルフの一声で思考が切り替わる。考えても分からない事よりも、目の前の危険をどうにかする為に頭を回すのは正しい判断だと言える。

「駄目だよキャプテン！魚雷発射管が開かない!!攻撃できないよ！」

「下部ハッチも駄目だ！シャドウ・ボーダーが下ろせなくなってる!!」

「外に繋がる扉も開かなくなってる！なんてこった、脱出する手段が無くなった!!」

「——馬鹿、な……」

船が鳥籠となった事実にもネモ船長が呆然と呟く。外敵を想定して造られた頑丈な外殻が、自分達を閉じ込める壁と化している。内側から破壊しようにも一筋縄ではいかないだろう。

「飛行生物なおも接近中!!接触まで残り5、4、3——!」

「——この船に降りるつもりか!!プロフェッサー！魔術障壁を集中展開！絶対に取りつかせるな——」

最悪の事態を避けるため、船長として指示を飛ばす。神霊カイニス

が甲板まで取りついてきた経験から、敵が船体に触れるのを防ぐ物理
防御策を施していた。

これでどうにか耐えてくれと、継る思いで最後の切り札を切った――

――何かがぶつかった大きな衝突音と、船が大きく揺れた衝撃
がカルデアを襲う。

思わず目を瞑った彼等は、目の前の現実を受け入れるべく、しかし
受け入れがたい現実を見るのを拒否するかのようになり、恐る恐る閉じた
瞼を開いていく。

こちらを見ていた人間と目が合い、全身が金縛りにかかったかのよ
うに動けなくなった。

やや？せた体形に黒髪の見た目で、黒を基調にした服を身に纏い、
漆黒のマントの裏地に血のような赤い色が映えていた。練り上げら
れた魔力が赤黒いスパークとなって彼等の視界に映る。真っ赤に光

る目と口が、人の姿としての異様さを際立たせていた。

それは笑っていた。

あるいは嗤っていた。

まるで、悪魔のようだという感想が頭をよぎり、そんな言葉では足りないとい心叫ぶ。

——魔王。

そう、魔王という表現が、あれの呼称に一番しつくりときた。

「……………ぷろ、ふえっさー。障壁、は、張れた、のか……………」

海岸に打ち上げられて干からびたイルカのように、口の中の水分が乾ききったキャプテンがたどたどしく言葉を紡ぐ。

『衝突一秒前に魔術障壁10枚を多重展開できましたー。1枚突破されるのに消費した時間は、およそ0.01秒以下……………ええ、はい、有り体に言ってしまったえば、まったく役に立ちませんでしたー……………』

障壁の展開は成功していた。その事実が導き出す答えは、あの人間が単なる力技で艦船の魔術障壁を突破してきたという、信じ難い結果だった。

「……………キャプテン!!俺達を外へ!」

「な——」

「ブリッジに入れるわけにはいきません!どこまで戦えるか分かりませんが、それでも……………」

立香が叫び、マシユもそれに続く。壁ではなくブリッジの窓ならば、マシユの力で割る事は出来るだろう。オルテナウスを装備したマ

シユを見て腹を括ったキャプテンが、命令を下そうとした時。

「……………え？」

それは一体、誰の声だったのだろうか。

誰一人として、対応も反応もできなかった。

外にいる男の姿が黒い雲に隠れたかと思えば、ブリッジの中に黒い雲が出現し、その中から男が悠々と歩いて出てきた。

壁一枚隔てた場所から、ダイレクトに魔王の魔力に当てられて震えだすクルー達。呼吸が止まったかのように錯覚する息苦しき。足が震え、汗が吹き出し、耐え切れなくなった誰かが床に倒れた。

そして、船内のあちこちから通信越しに悲鳴が流れ出す。

『な、なんだテメェら!?どこからここに……………う、うわああああ!?』

『や、やめて……………近づかないで……………いやああああ!?』

『わああああ!?敵に侵入されてる!!キャプテン、誰か、助け——』

『あ、ああ……………船内の重要箇所、敵が、侵にゆ——あ』

ネモ・シリーズの助けを乞う声と、ダ・ヴィンチの絶望しきった声を最後に通信が途切れる。

誰も、何も言えなかった。

何もできなかった。

「——さてと、カルデアの皆様」

片手を胸に当て、片手でマントを翻し、わざとらしく礼をした。

それは彼にとつての勝利宣言であった。

それは彼等にとつての敗北の証であった。

それは人類の未来において——完全敗北の結末であった。

「——ブリテンへようこそ」

カルデア、落ちる

「さて、挨拶も済んだところでここからが本題だ……カルデアの最高責任者を出してもらおうか」

魔力迸る双眼がブリッジをぐるりと見回す。カルデアの必至の抵抗を挨拶程度にしか認識していない目の前の生命体に言葉も出ない人間達を観察し、その中で立ち上がる一人の人間に気がついた。

「……わわ、わ、私だ……こ、このノウム・カルデアの最高司令官は私だ……ななっ、なま、名前はゴールドルフ・ムジーク……です……」

「——ほう？」

「ヒッ」

ガタガタ震えながら前に出たふくよかな男に目を向ければ、小さく悲鳴をあげて青ざめた。

この男に意識を向けて、ゆっくりと歩み寄ったコバヤシの進路は、この男を庇うように横から入り込んだ影に遮られる。

コートを着た紳士然とした男性に、魔術礼装を着込んだ人間と強化外骨格を装備した少女。

口角を釣り上げたコバヤシは、彼らの間合いギリギリで足を止めた。

「初めまして、ゴールドルフ・ムジーク。我が名はコバヤシ。魔王コバヤシ。このブリテン異聞帯にて、女王モルガンと共にこの地を治めている。」

——故に問おうか。お前達はこの地に何をしにやってきた。返答次第ではこの場で死んでもらう」

威圧的、高圧的な切り口で始まったファースト・コンタクト。既に複数の異聞帯を切除しているカルデア側は、あからさまに殺害を仄め

かしてきた相手側が、自分達がどういう存在かを理解している事に慄いた。

ガチガチと歯を鳴らしている所長を見かねてマシユが代わりに話そうとするが、ホームズが目線と手ぶりでそれを制した。

彼が名前を呼んだのはゴールドルフのみで、側を固めている自分達に興味を向けてはいない。魔王自ら交渉役と認めたのは彼一人だけなのだ。

カルデアのトップを問いただしに来た目的は、カルデアの意向を最初にハッキリさせておく為だ。彼の立場が本当かどうかは今のカルデアには判断材料が無いのだが、単独でここまでやってきた実力が説得力を持たせている。

「ご、誤解しないで欲しいのだが、わ、我々は貴殿らと争う気は、な、無いのだ……」

「……………」

「た、確かにこの国への入国方法は多少……いや、かなり強引な手段を用いた自覚はあるが……だ、だがね！あんな次元を隔てる虹色の壁を突破できる方法は限られているのだよ！

貴殿は知らぬだろうが、我々は今や孤立無援の状態で——」

「お前らの苦労話なんて、どうでもいい」

「アツ……ハイ……」

堰を切るように話し出したゴールドルフの言葉を遮り、ひと睨みで勢いを殺す。コバヤシが聞きたい内容は、そうではないのだ。

不安げなクルー達の視線を受けて、咳払いをしつつ話を元に戻す。

「……ゴホン。此度の来訪の目的は二つある。一つはこの異聞帯から広がっている崩落の原因を突き止め、それを食い止める事。

もう一つは貴殿らとの交渉だ」

「交渉か」

「そうだ。先程、我々に向けて放たれた砲撃……聖槍ロンゴミアド

の譲渡か、その解析図が欲しいのだよ」

「ふうん、成程ねえ……」

コバヤシは自分の顎に手を当て、品定めをするようにカルデアの所長を眺める。

血の気が引いた様子で小刻みに揺れ、今にも倒れそうな様子ながらも退く気は見られない。

話す価値はありそうだと認め、手を鳴らしたあとに両手を広げた。歓迎する、という意味のジェスチャーだ。

「いやはや、話せるような奴で助かった。なにせこちらもトラブルをいくつも抱え込んでいてなあ。あまり手間取らせるようなら、実力行使も考えたが……その必要は無さそうだ」

「は、ははは……助かったのは我々の命なのでは……?」

「賢いねえ、ちゃんと分かっているようだなによりだ」

飛行船に空から侵入するのは実力行使には入らないのだろうか、という疑問をゴルドルフは封殺した。余計な一言で皮一枚で繋がった自分達の首を飛ばしたくはない。

緊張感が少しだけ和らいだところで、ブリッジの扉の一つが開く。

「――ダ・ヴィンチちゃん・マリオンさん達も!」

妖精騎士に囲まれて、ストーム・ボーダーのあちこちに配置されていたネモ・シリーズとダヴィンチが腕を拘束された状態で連れ込まれる。思わず駆け寄ったマシユを妖精騎士が阻もうとするが、それをコバヤシが手を振って止めた。

「やあ、マシユ。とりあえずはお互い、怪我が無くて良かった。……不甲斐ない結果に終わってしまったって、本当にごめん」

「そんな、ダ・ヴィンチちゃんが謝る必要なんてありませんっ……!」

「そう言って貰えると、少し気が楽になるよ……。それとキャプテン。クルーの安全を考慮して、私の独断でマリオン達には即時降伏するよう指示を出した。越権行為になっちゃったけど……。いいよね？」

「……うん。この状況だと他に選択肢も無かったからね、構わないよ」

暗い面持ちで話すダ・ヴィンチとネモを見て、同じく暗い顔になるカルデアのクルー達。全員が無事だったのは喜ばしいことだが、結果としてカルデアは異聞帯の王の手中に落ちたも同然の状態になってしまった。

自分の思い通りに事が進み、沈んだ空気の中で一人だけ心の中でほくそ笑む異聞帯の魔王は、一仕事を締めくくる。

「改めて歓迎しよう、汎人類史の生き残り達よ。まずはこのブリテン異聞帯の情報について教えてやろう。成り立ちから今に至るまで、嫌になるまで知ってもらおうぞ。なに、崩落までには時間がある。それまでには終わるだろうよ」

カルデアの連中を捕まえてから一週間が経過した。一度、完全に困ってしまった奴らの抵抗など可愛いもので、せいぜい食堂を自由に使える時間を確保してほしいとかそんなんだだけだ。

……バーゲストとメイドの連中が、あの小太りな司令官の料理に興味津々だったのが予想外だったがな。極限状態だった割には調理場の機材は良い物を使っていた。飯についてのこだわりはあるらしい。

しようがないので自炊くらいは許してやった。

調理のためにサーバントを数人呼び出したなどの要望もあったが、聞くまでもなく却下。過去のデータログを漁ったが、調理やってたサーバントも普通に戦える奴ばかりだったからな。そもそも呼び出せるとも思えないが……。

カルデアとの交渉もすぐに済んだ。異聞帯崩落の原因はこちらで対処するし、ロンゴミニアドのデータはカルデアの持つ全データと引き換えにくれてやった。虚数潜航に英霊召喚システム、使い道はすぐには思いつかないが持っていて損はないだろう。

「しかしまあ、こんなごつい大砲を盾に仕込んでおくとは……ちよいと驚いた」

「ギリシヤ異聞帯の神を葬ったのは、このブラックバレルという特殊な装備のおかげのようですね」

目の前でモルガンが解析を進めている巨大な大砲は、オルテナウスとかいう強化装備に隠されていた。

「てつきりサーバントの力で討ち滅ぼしたのかと思ってたが、これまたえげつない武器を造り出したモンだ……」

「……貴方の目から見ても、ブラックバレルは異質に映りますか」

「そりゃあなあ……。端的に言えば、只人のままで上位存在をぶち殺せる大砲だからな。寿命に対するダイレクトアタックなんて常識破りもいいとこだ。条件さえ揃えられれば俺でも死ぬかもな」

「なるほど。すぐにカルデアを処刑しましょう」

「せんでいいわ。言っただろう、条件さえ揃えばって。こんなのに黙って撃たれる俺じゃねえよ」

「……………」

片手間で解析しながら、モルガンは頭をぐりぐり押し付けてきた。なんか急にかまってちゃんになってないかコイツ。

「たしか、直接撃ち込んで神を三体倒してるんだったか。……………な
んで人の形を保ってられるんだあの二人」

「藤丸立香とマシユ・キリエライトでしたね。……人の形、とは？」

「お前にも分かるだろう。この大砲の弾丸は魔力だけでは賄えない」

「……………ええ。ただ魔力を弾にして撃つだけならば、己よりも膨大な魔
力量を持つ相手には通用しない」

「そうだ。だからカテゴリー違いのあらゆる力をごちやませにして、特
殊な弾丸にして撃ち出している。しかも、ただの人間のままで、だ」
「……………」

「奴らの戦果は本来ならば絶対でありえない、上位存在に対しての下
剋上だ。神に真正面から打ち勝った人間。それを偉業と呼ぶか大罪
と呼ぶかは人によるんだろうが……………どのみち、そんな事をやり遂げた
奴が単なる魔術師とデミ・サーヴァントのままなんて俺には信じられ
ん」

「レベルアップによる人間としての器の昇華。貴方のように人間であ
りながら妖精をも圧倒する力を手に入れていないのがおかしい、と
？」

「もしくは、既に何らかの力を手に入れていているが気づいていない
か……………まあ、ここでおとなしくしているならどうだっていいがな」

ただの人間のままでここまで戦い抜いてきたカルデアのマスター
に僅かばかりの敬意と同情心を抱きつつ、手元の資料に目を落とす。

「設計上、ただなのでかい魔力砲としても使えるみたいだな。モルガン、
それ複製しておいてくれ」

「それは構いませんが、オリジナルは必要ないのですか？」

「ないね。そいつは逆立ちしても手の届かない相手を撃ち落とす為の
武器だ。俺達はまあ……………頑張れば大抵の相手に手が届くからな」

「それは神相手でも、ですか？」

「……………できればやりあいたくはないがな。覚悟を決めれば殴り合いは

できる」

「それは頼もしい」

誇らしげにしているモルガンに苦笑したのち、端末をいじってモニターに食堂の映像を表示させる。椅子に座っている俺の後ろから、モルガンが両手を回して寄りかかってきた。

「カルデアへの情報開示はもうすぐ終わりますね」

「そのようだ」

「今更ですが、アルトリアに任せてよかったのですか？その役目、我が娘に任せてくれても構いませんでしたのに」

「アイツ一番ヒマそうだったからな」

「……くっ、ふふ……そうですか……日々無意味に時を過ごす穀潰しであるなら仕方ありませんね」

「そこまで言つとらんわい」

汎人類史でのコンプレックスが無くなったかと思っただらこれよ。この前、アルトリアから年増呼ばわりされたの根に持つてるのかねえ……。

「え、ええと、これでブリテン異聞帯についての勉強会は終わりです。

……あのー、大丈夫？生きてます？」

アルトリア・キャスターの呼びかけに答えられる者はいなかった。

体は生きていても心は死んでいる、そんな状態だ。

無理もない。ブリテン異聞帯が発生した理由が始祖の妖精のサボタージユだという信じられない情報開示から始まり、祭神ケルヌノスの毒殺、妖精の遺体で広がったブリテン島の大地、楽園の巫女バラバラ事件、救世主トネリコの歩み、女王歴の始まり、魔王来訪、聖剣の製造……どれか一つだけでも胸やけが起きる出来事を、一週間で詰め込まれたのだ。無事な者などいない。あのホームズでさえ、眉間を抑えて唸っている。

「……………あの、私達よりもアルトリアさんは平気だったのでしょうか……。聞いているのも辛い、壮絶な体験談を口にしていらっしやいましたか……？」

「え？ああ、はい。もう終わった事ですから、特には」

「……………そ、そうですか……」

苦悶の表情を浮かべたマシユがアルトリアを気遣うが、本人はてんで堪えていなかった。彼女が『ほんと困っちゃいますよねー、えへー』みたいな軽いノリで口にした予言の子虐待事件の詳細は、善性ばかりのカルデアメンバーの胃をズタボロにした。スタッフの中には当時のアルトリアの惨状を想像してしまい、トイレに駆け込んで吐いた者もいる。

「皆さん、今日まで本当にお疲れ様でした。こっちのゴタゴタが終わるまではストーム・ボーダー内で拘束したままにはなりません、ブリテン島に降りなければ殆ど自由行動みたいなものなので、なにか要望があれば見張りの妖精騎士の誰かに言ってみてください」

「……………う、うむ……………何かあれば頼らせてもらおう……………」

それでは、とペこりと頭を下げて退室したアルトリア。心が疲労困憊のカルデアメンバーは、思い思いに姿勢を崩した。

「やれやれ、仮にも敵対した相手だというのにこころも親切にされちゃ、

かえってやりにくいよ」

「まったくだ……だが、ボヤいても始まらない。経営顧問、今まで教えられた情報が嘘だという可能性はあるかね？」

「まず無いでしょう。単独で我々の全戦力を圧倒しておきながら、わざわざ偽情報を掴ませる為だけに拘束する意味は無い」

「……つまり、ペペさんからの忠告は本場で、あの人はペペさんとの約束を守っているだけ、ですか」

「先輩……」

クリプターの生き残り、スカンジナビア・ペペロンチーノ。彼が妖精國にいるという事実はカルデアに衝撃を与え、彼からの忠告はカルデアの反抗を封じる一手となった。

「驚いたねえ。異聞帯でカリスマデザイナーなんてやってた上に、私たちに『絶対に動かないで』ときたもんだ。彼に対しては一定の信頼はあるけれど……」

「動きたくても動けない現状では、それを守るしかありませんね……」
「………というか、こうやって話し合ってるのも、あの人間爆撃機に聞かれてるんじゃないの？平気なのかね？」

「妖精騎士の話では、監視、盗聴はしていても余程の内容ではない限りはこちらには干渉してこないそうですよ」

「それ聞かれてるってコトでしょ!?!情報収集したなら私達にも共有しなさいよ!」

「申し訳ない」

悠々とパイプをふかす名探偵はどこか疲れているようにも見えた。

「あらあら、そうカッコいさならずともよいではありませんか。ここは一息入れて気を落ち着かせてはいかがですか？」

「……うむう、一理あるな」

「そうでしょうともそうでしょうとも!お茶をお持ちしましたから、

どうか英気を養ってくださいな♪」

「ほう、良い心遣いではないか。どれ一杯……」

聞き覚えのある声を耳にして、顔を上げて絶句するカルデアの面々。そんな中、一人だけ我関せずと運ばれてきたお茶に舌鼓を打つゴルドルフに視線が集中する。

「ふう、疲れ切った精神に温かいお茶が染み渡るようだ……結構な腕前だよ、キミィ」

「……あの、所長？」

「まあ、閣下直々に誉め言葉を贈られるとは感激です♪明日は大嵐でも吹き荒れそうですね♪」

「ゴルドルフくん？」

「美味しいものを美味しいと言っただけだということなのに、少々大げさではないかね？」

「おい、おっさん。現実逃避してる場合かよ」

「……………ええい、うるさいわ!!見なかったことにしたいだけだというのに!!」

「まあ、久々の再会だということなのに、冷たいんじやありませんこと？」

「だまらっしやい!!大体、なぜ貴様がここにいるのだ、コヤンスカヤ!!」

彼が指をさした先にいたのは、カルデアの因縁深い宿敵であるタマモヴィツチ・コヤンスカヤ。ビジネススーツを?ぎ取られ、給仕服に身を包んだ彼女は、「よよよ……」とワザとらしい?泣きを始める。

「私がここで人間相手に無料奉仕などという反吐が出そうな活動をしている訳……それは聞くも涙、語るも涙の深い事情がございまして――」

『こいつら相手に適当な話を吹き込んだら、尻尾の代わりに別のナニカを突っ込むぞ』

「……………」

「わあ…………ああ…………」

「……………かける言葉も無い」

哀れコヤンスカヤ。大事に育ててきた尻尾を二束三文で売られるという、商人として最もされたくない悪魔の所業をその身に受けた。キャリアアウーマンの化けの皮を被る余裕もなく、ただひたすらに獣の本性剥き出しで泣き叫ぶその姿に、さしものカルデアメンバーも憐れみの感情を向けた。

「…………コヤンスカヤの件は一旦忘れよう。ここで確認しておきたい。我々は今後、どう動いていくべきか」

燃えカスになったコヤンスカヤが回収され、会議へと移るカルデア。ゴルドルフの出した議題にいち早く答えたのは、経営顧問たるシャーロック・ホームズであった。

「私は静観を選択します」

「つまり何もせず、この異聞帯の推移を見届ける、と?」

「その通りです。今回ばかりは、我々の手に余る案件です。無暗に首を突っ込むべきではないでしょう」

言うべき事は言い終えたとばかりに椅子に背を預け、再びパイプを

ふかし始めたホームズにダ・ヴィンチが口を挟んだ。

「らしくないじゃないか、名探偵。いつもは答えを出し渋るくせに、今日に限ってさっさと結論を出してしまうなんて、君にしては珍しい」「出し渋るのではなく、証拠が揃っていないだけだよ、ダ・ヴィンチ。相手側に隠す意思がなく、むしろ見つけてくれとばかりに情報をバラまかれては探偵の出る幕などないのだよ」

「……………発言、よろしいでしょうか」

手を挙げて声を発したマシユ・キリエライトに視線が集中する。

「わ、私は……………このまま黙って見ていたくはありません。ブリテン異聞帯の歴史から顧みても、妖精達の洗脳で平和が保たれているのは事実です。

……………ですが、これは彼らによる国の私物化に他なりません。たとえば妖精たちが許されざる罪を背負っているのだとしても、ここまでしていい理由にはなりません……………!」

「マシユ……………」

彼女の言葉に心動かされた者が数人、目に力を入れる。同じような意見を持っていたのだろう。彼女のマスター、藤丸立香も拳を握り、ダ・ヴィンチは「気持ちちは分かるよ」と苦笑した。

「う、うむ、キリエライトの熱意は十分伝わったが……………どう思う、経営顧問?」

「……………そうですね」

ただ一人、共有された情報からコバヤシのブリテン救済の企みに気付いたホームズは、淡々と語りだす。

「ミス・キリエライト。君は魔王一派が妖精を洗脳して国を治めてい

るのに憤慨している。そうだね?」

「は、はい、ミスター・ホームズ。こんなやり方は、あまりにも……!」

「——では、洗脳が国を救う過程でしかないとしたら、どうかかな?」

「……あ、え……? 過程……?」

「……どういう事?」

「初歩的な事……ですらないな、これは。彼らが開示した情報の中のいくつかを組み合わせれば、おのずと答えは導かれるでしょう」

「ええい、勿体ぶつとらんで説明しなさいよ!」

「では、僭越ながら」

紙とペンを取り出して、推理の過程を書き出していく。

「注目すべき情報の一つは、善性の妖精は数は少なくとも自然に生み出される”。しかし、そういった妖精は排斥されてしまう傾向にある。そうだね?」

「……はい」

「それを踏まえた上で、大多数の妖精の洗脳という事象を見ると、別の側面に気付くことができる」

「別の……? それは、どういう……」

「——善性を持つ妖精の保護、だよ」

「あ……!」

「そして二つ目。円卓軍の活動場所であるロンディニウムでは、人間と妖精が共に生活できているという点。この場所では女王の洗脳が行われておらず、ほぼ野放しの状態だ。言い換えれば、彼らの介入が無くとも共生に不都合がないということ」

「そうだね……」

「最後に注目すべきは、妖精についての生態だ。感情は周囲の環境に影響されやすい。祭神ケルヌノスの呪いで100年の周期で死んでしまうが、もし呪いを祓えると仮定したならば、神秘が尽きない限り存在し続ける妖精にとって、その寿命は膨大なものとなる」

「……………」

「……………ま、まさか……………」

答えを察した誰かが思わず声を出した。

「——そう、魔王コバヤシはロンディニウムを拠点として善性を持つ妖精の個体数を増やし続け、最終的には洗脳を必要としない国家の運営を狙っているのでしょうか」

『(せいかーい。頭が切れる奴が一人いると、話を進めやすくして良いねえ)』

心の中で賛辞を贈ったコバヤシは、上機嫌に指を鳴らした。

一方でホームズ以外のカルデアメンバーは、黙りこくったままで言葉の意味をゆっくりと理解していく。

つまり、善性を持つ妖精をロンディニウムに住まわせ、悪性を持つ妖精は少しづつロンディニウムに送り、周囲の環境を利用して悪性を善性へ上書きしようというのだ。

そうして少しずつ善性持ちの妖精の数を増やしていき、簡単に排斥できないようにする。そしてブリテンが善性持ちの妖精で溢れたら折を見て、洗脳を解除して普通の暮らしをさせるつもりなのだ。

「……む、無茶苦茶だ！簡単に増やすというが、一つの国にいったい何百万人の妖精が住んでいると思ってるのだ!?!し、しかも少しづつで……10年や20年で終わる問題ではないぞ!?!下手すれば100年……いや、もっと長い時間がかかってしまうだろう!」

「そうですね、魔王コバヤシの寿命については我々も知り得ません。ですが所長、この方法は一度土台を整えてしまえば、例えば彼でなくても進められる改革なのですよ」

「……た、確かにそうだが……」

勢いよく立ち上がったゴルドルフは、続くホームズの答弁を聞いて大人しく座り直した。コバヤシが何らかの原因で統治を離れたとしても、モルガンか他の妖精が王の座にいるならば、この計画に支障はない。

数百年、数千年、或いは数万年。この計画は、この妖精国に腰を据えて最後まで取り組もうという彼の覚悟の表れでもあった。

「そして、彼らがこの情報をすんなり明け渡したのは、我々に対する問いかけだという理由もあった」

「……問いかけ、とは?」

「方法は強引ではあるが、彼らはこの國をより良い方向へ導こうとしている。果たして我々に、それを邪魔する権利などあるのだろうか?」

」

芽生えつつあった義憤の感情に冷や水が浴びせられ、悪辣な魔王の心理トラップがカルデアメンバーの心を締め付ける。

「彼らの野望が成就したならば、このブリテン異聞帯は汎人類史から切り離された全く別の世界の一部となる。ならば我々が剪定する理由も無くなる。それでも彼らの統治に口出したのなら、彼らはこう返すでしょう。『だったら、これよりも優れたプランを提出しろ』とね」

「そ、それは……」

「……っ……」

「……ま、向こうからすれば当然の話だね。私たちが想像し得ないずっと先まで見据えた改善案を、ただの感情論で引っ掻き回されたら堪らないだろうし」

ホームズの台詞に返す言葉を持たないマシユと藤丸。ダ・ヴィンチも異聞帯側の主張は筋が通っていると判断したようだ。

簡潔に纏めれば、こちらのプランを否定するなら否定したお前たちが最後まで面倒を見ろ、といったところだろう。

どちらかが滅びるまで戦う理由が無い以上、別世界になる予定の世界の方針に口出しするのは、カルデア側の無責任なエゴの押し付けしかない。

そしてカルデアがブリテン異聞帯の面倒を見る事は、どう足掻いても不可能であった。

「我々はここで終わる訳にはいかない。彼らの不興を買ってカルデアそのものが消滅してしまっただけでは本末転倒だ」

「……ホームズ、さん」

「ぐ、ぬぬ……初めから蚊帳の外に置かれたままとは……いや、被害らしい被害を出さずに脅威が一つ消えるのだから、司令官としては歓迎

すべきなのだが……煮え切らんなあ……」

「時には諦めも肝心ですよ、所長。……残念ながら、異聞帯に突入した時点で我々の負けだったのですよ」

そう締めくくり、カルデアの経営顧問は食堂から去っていく。

後に残された彼らや彼女らに残されたのは、空虚な無力感と敗北感だけなのだった。

【幕間】妖精たちの短編集

【起き抜けメリユジーヌ】

朝、目覚ましの音で目を覚ました俺は、夢うつつの状態で洗面所へと向かう。良い睡眠がとれたおかげか、心地良いまどろみに浸っている頭を現実に戻すために冷たい水で顔を洗う。

タオルで顔を拭きながら部屋に戻ると、俺の部屋の壁に人型の穴が開いていた。

「またか……」

穴の中に手を突っ込み、柔らかい感触のそれを掴んで引きずり出した。

それは、生地の薄い寝巻に身を包んだメリユジーヌだった。

「……お、おはようコバヤシ」

「お前も懲りない奴だな。何度も言ってるだろう、寝込みを襲いに来るんじゃねえってよ」

「そんなはしたない真似はしていないよ。ただ、添い寝しようと潜り込んだだけさー」

「似たようなモンだろうが……」

この惨状をやらかしたのはメリユジーヌであり、俺でもある。

常在戦場の環境である魔界に適応した俺は、寝ている時でも警戒心を発揮してしまうようになり、近づいてきた相手を問答無用でぶっ飛ばしてしまっているらしい。

らしい、というの俺に全く自覚がないからだ。寝ているんだから当たり前だけだな……。

メリユジーヌの馬鹿が俺に黙ってベッドに潜り込むという暴挙をやらかし、返り討ちにあったのをきっかけにこの悪癖について話して

こいつ真正のアホなんだろうか。ぶっ飛ばされると分かっても奇行を繰り返す理由が分からずに聞き返すと、メリュジーヌは目を細めて笑って返した。

「だって、見えただもの。私と貴方が一緒のベッドで寝ている姿を……ね」

「……………幻覚？」

「違うから。まあ、それに……貴方が暴れなくなったら、貴方が私を受け入れてくれた何よりの証になるじゃない？」

「……………」

「恋人の初めては何であれ、欲しくなっちゃうの。私、欲張りだから」
♪

「……………」

美しい笑顔で言い放たれた台詞の後、沈黙が続く。

俺の内心の葛藤を知ってか知らずか、メリュジーヌが可愛らしく小首を傾げた。

「……………コバヤシ？どうかした？」

「……………いや……何でもない。俺は着替えるから、お前も一旦自分の部屋に戻って着替えてこい」

「うん。じゃ、また後でね！」

ウインクと投げキッスという置き土産を残して、メリュジーヌはワイプゲートを開いて自室に戻る。

……俺はといえば、椅子に座り込んでゆっくりと息を吐きだして気持ちいを落ち着けていた。

「……………やっべえなア……………」

もしかしたら、ここまで巨大な支配欲や征服欲を女に抱いたのは初

「えー!!うつそー!!足は私もされたことあるよ!」

「マジで?!一緒じゃん!」

聞かなきゃよかった。

和気あいあいとおしゃべりをしている可憐な少女の口から飛び出す、食欲が消え失せる言葉のオンパレード。どうしてこの子たちは自分たちがされた虐待の過去を、放課後に喫茶店で駄弁る女子学生のように話せるのでしょうか……?

ああ、流石は悪の華バーヴァン・シーさん。流石は魔猪の氏族のアルトリアさん。野次馬根性丸出しで集まってきた悪魔たちを、こんな方法で撃退するとは考えもありませんでした。皆の箸が進む速度は遅くなり、プリニーなんかは白目をむいています。

天使兵の皆さんが「おお……神よ、あの哀れな子羊達に救いを……」なんて祈ってますが、あの子達の世界の神様、もうとっくに死んでますよ。救いも何もあつたもんじゃない。

淫魔幹部さんが「どんなプレイも両方が楽しんでないとダメなのよ!ブリテンの妖精どもは何にも分かっちゃいないわ!!」と熱弁しています。あの人は末期なので放っておきましょう。関わりとエロい目に遭わされます。

「お前らちよつとこつち来い」

「ふわあつ!?!」

おお、ここで我らが魔王様のご登場です。首根っこを掴まれて魔王様の執務室へ連行されていく二人を見て、皆がほっと息を吐くのが見えました。

果たして上手く諫める事ができるのでしょうか?楽しみですね。

「まあ、お前ら今までロクな友達もいなかったんだろうし、俺だって話すのが楽しいっていうお前らの気持ちは大事にしたいよ？でもさあ、話す場所……というか、内容に問題アリなんだわ」

執務室で二人を椅子に座らせ、頭をかきながら話し始める魔王コバヤシ。彼としても、女の子二人の会話程度で目くじらを立てたくはないのだが、状況が状況なので口を挟む他ないのだった。

「始めに訊いておきたいんだけど、お前らは自分が過去にされた仕打ちがいけない事だっつのは分かってるよね？少なくとも、虐待だっつたっつて認識はしてるだろ？」

「う、うん……」

「はい……」

躊躇いがちに頷くアルトリアと、急にしおらしくなったバーヴァン・シー。どうして本来悪党サイドの魔王の自分が、善性持ちのこいつらに一般常識を説かねばならないのだろうか。くたばれ妖精ども。ブリテン滅べ。滅べブリテン。怨嗟の念を心中でまき散らし、コバヤシは話を続けた。

「ここにはいるのは殆ど悪魔だけど、悪魔だからって悪い事何でもオツケーな訳じゃないからな？みんながみんな、拷問大好きパラダイスな頭してるんじゃないんだよ。」

飯食ってる最中に指が取れたただの潰されただの、そんな話をされたら飯が進まなくなるのは当然だろう」

「というか、なんだってこいつらは悲惨な過去をおかずに飯食ってんだ。もつと美味しい思い出をおかずにしろよ。あ、無いのか。春の記憶無かったもんな。滅ベティンタジェル。滅ベダーリントン。なに、もう滅んでる？当然の結果だザマア!!心の中でせせら笑い、コバヤシは話を続けた。」

「と、いうワケで話す内容には気を付けてほしいってただけだ。話は終わり。出て行っていいぞ」

「うん……ごめんねコバヤシ。食堂の皆にも謝ってくるよ」

「そこまでやらんでもいいと思うが……その方が蟠りもないか。好きにしな、任せるよ」

「分かった。じゃ、行こうよバーヴァン・シー……あれ？おーい……？」

説教というよりは、本当に簡単な口頭注意だけで済ませたコバヤシに、アルトリアは頭を下げた。元々たいした問題ではないから軽い注意だけだったので、アルトリアもすんなり自分の非を受け入れて反省していた。

さて、出ていこうとした時にバーヴァン・シーの異変に気が付いた。なぜだか、顔が真っ青になっている。

「ち、ちが、ちがうの、コバヤシ。はなしをはじめたのは、わたしで、アルトリアは、わるくないの」

「……お、おう。いや、それはどっちでもいいんだが……」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい、ちゃんとできなくてごめんなさい」

「俺は別に怒ってないから。だから話聞いて？な？」

「わたし、つぎはもつとじょうずにおはなしするから！だから、おねがいだからすてないで!!」

「俺、ひとつこともそんな話してないよね??？」

酷く取り乱したバーヴァン・シーを抱いてあやししながら、遠い目を

してコバヤシは天井を見上げた。どうも、叱られる事に強いトラウマが根付いてしまっているようだ。

「(やりづれえ……)」

強く叱った憶えは無いのだが、こうも泣かれてしまうと自分のやり方に問題があるのかと思ってしまう。バーヴァン・シーを抱きしめて暖めてあげると、彼女は落ち着きを取り戻して優しく抱きしめ返した。

「……ご、ごめん。私、また……」

「いつもの調子に戻ったならいいよ。それより、話は覚えてるな？」

「うん……いつもアリガト。拾ってくれたのがコバヤシで、本当に感謝してる」

「おう……」

離れる寸前でバーヴァン・シーは、抱きしめた男の耳元でそつと囁いた。

「——私、ここでいっぱい頑張るから。頑張つて、コバヤシが自慢できるようないい女になるから。だから私の事、ずっと見ててね、私の王様♪」

ぴよんつと飛びのいて、カーテシーを決めたバーヴァン・シーは鼻歌を歌いながら部屋から出て行った。思わぬ不意打ちを受けて硬直したコバヤシは、しっとりした視線を受けて我に返る。

「おお、すげえ破壊力だった……で、お前は何してるんだ」

「……………むー」

ぷくー、と頬を膨らませ、両手を開いてスタンバっているアルトリ

アの姿がそこにあった。

「ん！」

「お前まで何だっただ……」

「……んっ!!」

「……………分かったよもう……」

唸るおねだりに負け、今度はアルトリアを抱きしめる。なでなで、ぎゅー、と優しいスキンシップをされたアルトリアの表情は、見る見るうちに緩んでいく。

「(あったかい……私これ、好きかも……)」

人前では絶対にできないけれど、二人だけの今なら好きなだけ甘えられる。ここぞとばかりに堪能したアルトリアは、元氣100倍で飛び出していった。

「お見事です、我らが魔王様。あの二人をああも簡単に手懐けてしま
うとは、感嘆の意が絶えません」

「つまりらん世辞はやめろよ」

「いえ、割と本気で感心しているのですよ。人の不幸を楽しめるのが
我々悪魔なのですが、あの子達はその、そんな次元にいないというか
……………」

「今でも疑問に思うわ、星の内海にいたのって本当に妖精か？実は七つの大罪を司る悪魔だったりしない？仲間割れで一人死んで六人だったってオチじゃないの？」

本日の締め業務を行いながら軽口を叩く魔王と議長。ミニ魔界を受け取った時からの長い付きあいである二人は、割と気安い関係を築いていたりする。

——仕事も終わったし二人で飲みにも行くか

——もちろん奢りですよね？

——そうじゃないと来ないだろお前……

ちやつかりしてる部下に苦笑いしつつ席を立った魔王。しかし扉をノックする音に足を止めた。入室を許可して入ってきたのは、妖精國女王モルガンであった。

「おや、モルガンさん」

「どうした、何かトラブルでもあったか？」

「……昼間、我が娘が問題を起こしたと聞きました」

そう言われ、顔を見合わせる二人。所詮は些事なので気にも留めていなかったが、この母親は律儀にも謝りに来たようだ。

そういう事なら、謝罪を受け取って彼女も誘って飲みに行こう。そう考えてモルガンに視線を戻した二人は度肝を抜かれた。

「——娘の失態は母である私の責任です。どのような重い罰であつても受け入れます。……ですので、どうか温情を」

杖を置き、床に正座して手をついた姿勢のモルガン。平たく言えば、土下座の一步手前であった。

「魔王コバヤシ……どうか、バ!! ヴァン・シーを捨てないで——」

「捨てねえつつつてんだらうが!!!」

「本当にもう……愉快な方々を拾ってきましたね、コバヤシ様」
「ごめんなさいねえ!!!」

【愉快な妖精達】

「失礼致します、魔王陛下。妖精騎士バーゲスト、参りました」
「おう、入れ」

トップ直々の招集命令に従い、鎧を着たバーゲストが少し緊張しながら入室する。執務室の大きな机には部下からの報告書が積み重ねられており、傍に用意されたもう一つの机でアルトリアが書類の束とにらめっこをしていた。

ただでさえ小さい妖精が紙の山に隠れてしまつて更に見えなくなつたな、とバーゲストは頭の片隅で呟いた。

がばつと頭を上げた小さな妖精が小動物のような威嚇行動を始めたが、巨大な妖精の興味は既に他に移っている。自分呼び出した主人が一枚の書類をひらひらと振っていた。

「お前を呼び出したのはこれについて聞きたいからだ」
「何か不備がありましたか……?」

仕事は人一倍真面目に取り組んでいる自負のある彼女は、困惑した様子で聞き返す。

「いんや、不備はない。たかが床のへこみ傷一個を処置して、それで報告まで上げてくるお前のマメさには感心してるよ。これからもその調子で頼むぞ。お前みたいのがないと、現場が締まらんからな」

「は、はい。ありがとうございます」

「はーい！それ直したの私！私だからね！」

「それもすっかり書いてあるから知ってる」

自分が必要だと褒めてもらえたのは嬉しいが、呼ばれた理由は何なのかと疑問が残る。

「で、えー……床を傷つけた原因が、お前が履いていたヒールが砕けたからだって書いてあるんだけど、文章だけじゃちよつと分からんから、直接お前の口から聞こうと思ってなあ。説明してくれる？」

「ハッ、了解しました」

なるほど。多くの猛者の頂点に君臨するお方だが、このような些事であっても見逃さない注意力もまた、強さの秘訣なのだな。

主君に惚れ直し、女の部分がキunksンキunksンしているバーゲストだが、今は女ではなく騎士の時間だ。いつものように真面目な口調で説明を始める。

「当日ですが、私は別魔界探査の当番でしたので、戦闘準備を整えた状態で自室から探査船へ徒歩で向かっていました」

「うん」

「ですが、歩いている途中で私の靴が負荷に耐え切れなくなり砕けました」

「……うん」

「幸い、床は軽くへこんだ程度の損傷でしたので、アルトリア・キャスターに事情を説明して修復作業を頼みました。

私も確認済みですが、床は完全に直っていましたので問題ありませんでした。今後はこのような事態が起きないように、靴の材質にも気を配ります」

「そうか……」

話が終わり、コバヤシは机に肘を立てて指を組み、大きく息を吐いて俯いた。

「いや直接聞いてもぜんっぜん理解できねえんだけど。」

歩いてて靴砕けるってなんだよ。いくらバーゲストがデカくて重いからってそんなハプニングある???

こいつ、ヒール履いたまま四股でも踏んでたんじゃないだろうな……)」

「——ブフオツ!!!」

まわしを絞めて、どすこーいと四股を踏むバーゲストの姿がつい、頭をよぎる。そんなアホな妄想を妖精眼が映し出し、アルトリアが噴き出した。

「——アルトリア。いくら気心が知れた仲とはいえ、魔王様の御前で悪ふざけは控えろ」

「ブフツ……!……だ、誰のせいだと……!」

「なに?」

「いやこれに関しては俺が悪いわ。ごめんなアルトリア。ごめんなバーゲスト」

「は?いや、何故私に……?」

「用事は済んだから、もう仕事に戻っていいぞ」

「……そうですか。では、これより通常業務に戻ります」

釈然としないが、もういいというならば無理に留まる理由はない。バーゲストが部屋を出ていくと、ニヤケ顔のアルトリアがコバヤシに視線を向けた。

「仕事中になに変なこと考えてるんだよう、コバヤシいゝ?」

「一瞬だけ頭の中に出てきただけじゃん……これは不可抗力だろ……」

「そういうのも見えちゃうんだからなく? 気をつけろよコバヤシゝ?」

「どうしろってんだ……」

「議長、この荷物はなんだ？」

「アルトリアさん宛の宅配便です。何かお買いになられましたか？」

「あ！もう来たんだ！はーい！」

魔界ゲートの近くに積まれた段ボールの山。箱の一つにアルトリアが飛びつき、ワクワクを抑えきれない顔で箱を開けだした。

「そんなモン頼んでたのか」

「うん。自分のお金で買い物できるのが楽しくてさ、通信販売っていうのをやってみたんだ」

「それはそれは。で、何買ったんだよ」

「ごはん!!」

「飯か〜」

とても楽しそうなアルトリアの様子を、箱の開け方が汚いと思いつながらも見守るコバヤシ。妖精眼で彼の考えている事は筒抜けだろうが、今のアルトリアには目に入らなかつた。

「前から食べてみたいって思ってたんだ。あの、ほら、朝に牛乳かけてスプーンで食べるやつ……なんだっけ」

「……シリアル？」

「確かそれ！なんとこれには、野菜やお魚も入ってるんだって！」

「へえ……」

「可愛いワンちゃんマークも入ってたし、一目で気に入っちゃって……開いた！ほらこれ！」

箱の中から大きな袋を取り出し、自慢気に見せつけ始めるアルトリア。
ア。

「ひよつとして、この箱全部……」

「はい！たくさん買おうと安くなつたので！」

「思い切りましたね……」

「これから毎日食べるからだいじょーぶです！」

「美味しいのか、これ……？」

コバヤシがおもむろに手を伸ばしてアルトリアと同じく商品を取り出して眺める。

——そして、硬直した。

「……アルトリアよお。これ、本当に全部食う気か……？」

「え、なに……もしかして、コバヤシも食べたくなっちゃった？ま、まあ一緒に食べてあげても、いいけど？」

少しだけ、もじもじしながら答えるアルトリア。

そんな彼女に、コバヤシは取り出した商品を見せつけた。

「いや、お前、コレ……ペットフードって書いてあるんだけど」

「……………えっ」

——そう言われ、手にしていた袋を穴が開くくらいに睨みつけるアルトリア。

——何度も、何度も、説明文を読み返し、内容を理解するアルトリア。
ア。

「うめーツス」

「悪くないツス」

「金欠なんで助かったツス」

「……そ、そーですか……」

アルトリアはドン引きした。それと同時にここまで地獄に落ちないような良い子でいようと心に決めた。